

佐久穂町

OKUHIKAGE

KOYAMATERAKUBO

奥日影遺跡・小山寺窪遺跡

UENOTSUKIYOHARA

MARIKUBO

上野月夜原遺跡・満り久保遺跡

MAGOESHITA

馬越下遺跡

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10
—佐久穂町内—

2020. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター





満り久保遺跡 旧石器時代の石器



小山寺窪遺跡 木製品



例 言

- 1 本書は、長野県佐久穂町に所在する下記5遺跡の発掘調査報告書である。
奥日影遺跡 長野県佐久穂町高野町 1869-1 ほか
小山寺窟遺跡 長野県佐久穂町高野町 2064-1 ほか
上野月夜原遺跡 長野県佐久穂町大字畑 4049 ほか
満り久保遺跡 長野県佐久穂町大字畑 1664-1 ほか
馬越下遺跡 長野県佐久穂町大字千代里 3922 ほか
- 2 発掘調査は、中部横断自動車道建設工事に伴う記録保存調査として、一般財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託契約等については第1章を参照願いたい。
- 3 調査の概要は、長野県埋蔵文化財センター刊行の「長野県埋蔵文化財センター年報」25～31 ほかで紹介しているが、本書の記述をもって本報告とする。
- 4 本書で使用した地図は、国土地理院発行の地形図（1：25,000、1：50,000）、佐久市基本図（1：2,500）をもとに作成した。
- 5 本書で扱っている国土座標は、国土地理院の定める平面直角座標系第Ⅱ系の原点を基準点としている。座標値は日本測地系を用いている。
- 6 発掘調査・整理作業にあたっては、以下の機関・諸氏に業務委託もしくはご指導を得た。（敬称略）
○業務委託
火山灰分析：バリノ・サーヴェイ（株）（平成24～26年度：満り久保遺跡）
残留磁化測定：（株）パレオ・ラボ（平成23年度：奥日影遺跡）
黒曜石産地推定：望月明彦（平成24年度：奥日影遺跡、小山寺窟遺跡、満り久保遺跡）
樹種同定：バリノ・サーヴェイ（株）（平成24年度：奥日影遺跡、小山寺窟遺跡）
年代測定：（株）加速器分析研究所（平成22年度：奥日影遺跡、馬越下遺跡、平成24年度：小山寺窟遺跡）
珪藻・花粉・植物珪酸体分析：バリノ・サーヴェイ（株）（平成20年度：小山寺窟遺跡）
石器展開写真：（株）アルカ（平成24年度：満り久保遺跡）
遺物写真撮影：信毎書籍印刷（株）（平成31年度：奥日影遺跡、小山寺窟遺跡、馬越下遺跡）
○調査指導（所属・役職は当時）
動物骨調査指導・鑑定：茂原信生 京都大学名誉教授
本郷一美 総合研究大学院大学准教授
櫻井秀雄 獨協医科大学技術職員
（平成24年度：小山寺窟遺跡）
石材鑑定： 原山 智 信州大学理学部教授
（平成24年度：奥日影遺跡、小山寺窟遺跡）

- 7 発掘調査および報告書刊行にあたり、下記の方々・機関にご指導、ご協力いただいた。お名前を記して感謝の意を表する。(敬称略)

富沢一明、山田真一、山田昌久、佐久市教育委員会、佐久考古学会、長野県立歴史館
長野県遺跡調査指導委員会

(戸沢光剛・会田 進・小野 昭・桐原 健・工業普通・笹澤 浩・高橋龍三郎・丸山敏一郎)

長野県文化財保護審議会 史跡・考古資料部会

(会田 進・市澤美利・小野 昭・笹澤 浩・高橋龍三郎)

- 8 発掘作業・整理作業の担当者等は第1章第1節4に記載した。

- 9 本書全体の編集は賛田明が行い、平林彰が校閲・総括した。

執筆分担は下記のとおりである。

平林 彰：第1章、第2章

上田 真：第4章第2節3(1)、第5章第3節1・5、およびDVD収録の土器観察表

鶴田典昭：第7章第2節1・2

綿田弘実：第9章

賛田 明：上記以外

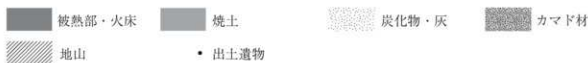
- 10 本書に添付したDVDには、以下の内容を取録した。

本文PDF(写真はカラーデータ)、自然科学分析報告書、遺物観察表、その他。

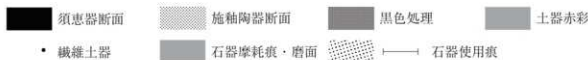
凡 例

- 1 遺構番号は、遺構種ごとに付番してある。発掘調査で欠番にしたもの、整理作業において遺構と認定しなかったため欠番としたものがある。
- 2 遺物番号は、主に材質に基づく分類による遺物種ごと、図版ごとに付番してある。遺物番号は、本報告の本文・図表・写真に共通する。
- 3 本書に掲載した実測図および遺物写真の縮尺は、原則として下記のとおりである。
 - (1) 遺構実測図
竪穴建物跡、掘立柱建物跡 1 : 80 土坑、被熱部 1 : 40、1 : 60
溝跡 1 : 40、1 : 80 遺構内部施設・遺物微細 1 : 40
 - (2) 遺物実測図
土器・土器拓影・陶磁器 1 : 3、1 : 4、1 : 6 土製品 2 : 3、1 : 4
石鏃など小形石器・装身具 2 : 3、3 : 4 石斧・磨石・敲石・凹石・砥石など 1 : 3
石皿 1 : 4 金属製品 2 : 3、1 : 2 木製品 1 : 4
 - (3) 遺物写真
原則として遺物実測図とおおよそ共通であるが、任意縮尺にしているものがある。
- 4 遺物の器種名については細分せず、過去の埋文センター報告書などを参考にして一般的と思われる名称を用いた。
- 5 遺物観察表の法量は、() が残存値、〈 〉 が復元値、括弧なしが完存値を示している。
- 6 基本層序および遺構埋土の色調は「新版 標準土色帖 2007 年度版（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）」による。
- 7 実測図中のトーン等の凡例は以下のとおりである。これら以外の場合は図中に例示した。

(1) 遺構図



(2) 遺物図



目次

口 絵	
例 言	i
凡 例	iii
本文目次	iv
挿図目次	vii
挿表目次	viii
写真目次	ix
第1章 発掘調査の経過	1~18
第1節 発掘調査に至る経過	1
1 事業計画の概要	1
2 分布・試掘調査と保護措置の調整	1
3 行政手続の経過	8
4 発掘作業と整理等作業の体制	12
第2節 発掘調査の経過	14
1 発掘作業	14
2 整理等作業	15
3 普及啓発活動	15
4 作業日誌抄録	16
第2章 遺跡の位置と環境	19~24
第1節 地理的環境	19
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	19
第3章 発掘調査の方法	25~29
第1節 発掘作業	25
第2節 整理等作業	28
1 遺物の整理	28
2 記録類の整理	29
3 報告書作成と資料取納	29
第4章 奥日影遺跡	30~58
第1節 遺跡の概観と調査の概要	30
1 遺跡の概観	30
2 調査の概要と経過	30
3 基本層序	30
第2節 遺構と遺物	33
1 概 観	33
2 遺 構	33

	3 遺物	52
第3節	自然科学分析	57
	1 放射性炭素年代測定分析 (AMS 測定)	57
	2 残留磁化測定による年代推定	57
	3 樹種同定	57
	4 黒曜石産地推定分析	57
第4節	小 結	58
第5章	小山寺窪遺跡	59~118
第1節	遺跡の概観と調査の概要	59
	1 遺跡の概観	59
	2 調査の概要と経過	59
	3 基本層序	59
第2節	遺 構	62
	1 竪穴建物跡・竪穴状遺構	62
	2 掘立柱建物跡、杭・横列	66
	3 溝 跡	69
	4 被熱部	71
	5 土 坑	71
	6 水田跡	72
第3節	遺 物	102
	1 平安時代の土器	102
	2 中世の土器・陶磁器	107
	3 金属製品	108
	4 木製品	109
	5 石製品	109
	6 その他の時代の遺物	112
第4節	自然科学分析	115
	1 放射性炭素年代測定分析 (AMS 測定)	115
	2 樹種同定	115
	3 珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析	115
	4 黒曜石産地推定分析	116
第5節	小 結	117
第6章	上野月夜原遺跡	119~123
第1節	遺跡の概観と調査の概要	119
	1 遺跡の概観	119
	2 調査の概要と経過	119
	3 基本層序	119
第2節	遺構と遺物	122
	1 遺 構	122
	2 遺 物	123

第3節 小 結	123
第7章 満り久保遺跡	124~143
第1節 遺跡の概観と調査の概要	124
1 遺跡の概観	124
2 調査の概要と経過	124
3 基本層序	127
第2節 旧石器時代の遺物	128
1 出土状況	128
2 遺 物	128
第3節 その他の時代の遺構と遺物	140
1 遺 構	140
2 遺 物	140
第4節 自然科学分析	142
1 黒曜石産地推定分析	142
2 火山灰分析	143
第5節 小 結	143
第8章 馬越下遺跡	144~161
第1節 遺跡の概観と調査の概要	144
1 遺跡の概観	144
2 調査の概要と経過	144
3 基本層序	144
第2節 遺 構	147
1 竪穴建物跡	147
2 土 坑	148
3 被熱部	149
第3節 遺 物	156
1 平安時代の遺物	156
2 その他の時代の遺物	159
第4節 自然科学分析	160
第5節 小 結	161
第9章 総 括	162

写真図版
抄録

挿図目次

- 第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡
- 第2図 佐久西小学校遺跡西側の試掘トレンチと奥日影遺跡の範囲図
- 第3図 小山寺窪遺跡隣接地の試掘トレンチと遺跡の範囲図
- 第4図 満り久保遺跡隣接地の試掘トレンチと遺跡の範囲図
- 第5図 八千穂高原IC周辺の試掘トレンチと馬越下遺跡の範囲図
- 第6図 中部横断自動車道と本書所収遺跡
- 第7図 周辺遺跡分布図（1）
- 第8図 周辺遺跡分布図（2）
- 第9図 調査グリッドの設定と呼称
- 奥日影遺跡**
- 第10図 遺跡範囲・調査区位置図
- 第11図 土層柱状図
- 第12図 遺構分布全体図
- 第13図 遺構分布部分拡大図（1）
- 第14図 遺構分布部分拡大図（2）
- 第15図 遺構分布部分拡大図（3）
- 第16図 遺構分布部分拡大図（4）
- 第17図 遺構分布部分拡大図（5）
- 第18図 遺構分布部分拡大図（6）
- 第19図 遺構分布部分拡大図（7）
- 第20図 S K 222 遺構図
- 第21図 S T 01 遺構図
- 第22図 S T 02・03 遺構図
- 第23図 奈良時代の須恵器
- 第24図 金属製品、石製品
- 第25図 縄文土器・弥生後期～古墳前期の土器
- 第26図 縄文時代の石器
- 小山寺窪遺跡**
- 第27図 遺跡範囲・調査区位置図
- 第28図 調査区配置図・土層柱状図
- 第29図 遺構分布全体図
- 第30図 遺構分布部分拡大図（1）
- 第31図 遺構分布部分拡大図（2）
- 第32図 遺構分布部分拡大図（3）
- 第33図 遺構分布部分拡大図（4）
- 第34図 遺構分布部分拡大図（5）
- 第35図 遺構分布部分拡大図（6）
- 第36図 遺構分布部分拡大図（7）
- 第37図 遺構分布部分拡大図（8）
- 第38図 遺構分布部分拡大図（9）
- 第39図 遺構分布部分拡大図（10）
- 第40図 遺構分布部分拡大図（11）
- 第41図 遺構分布部分拡大図（12）（13）
- 第42図 遺構分布部分拡大図（14）
- 第43図 遺構分布部分拡大図（15）
- 第44図 S B 01・02・05 遺構図
- 第45図 S B 07・08・12 遺構図
- 第46図 S B 10・17 遺構図
- 第47図 S B 20・21・22 遺構図
- 第48図 S B 23・24・26 遺構図
- 第49図 S B 28 遺構図
- 第50図 S T 02・03、S A 02 遺構図
- 第51図 S T 04・05 遺構図
- 第52図 S T 06・07・08 遺構図
- 第53図 S T 09・10・11 遺構図
- 第54図 S B 14・15 遺構図
- 第55図 S B 16・27、S K 185・565・568・569・570 遺構図
- 第56図 水田跡 平面図
- 第57図 水田跡 断面図
- 第58図 平安時代の土器（1）
- 第59図 平安時代の土器（2）
中世の陶磁器（1）
- 第60図 平安時代の土器（3）
中世の陶磁器（2）
- 第61図 金属製品、木製品
- 第62図 石製品
- 第63図 縄文土器

第64図 旧石器時代・縄文時代の石器（1）

第65図 縄文時代の石器（2）

上野月夜原遺跡

第66図 遺跡範囲・調査区位置図

第67図 トレンチ・調査区配置図、土層柱状図

第68図 S K 04・05 遺構図

第69図 縄文土器・石器

満り久保遺跡

第70図 遺跡範囲・調査区位置図

第71図 トレンチ・調査区配置図

第72図 土層柱状図

第73図 旧石器時代の石器（1）

第74図 旧石器時代の石器（2）

第75図 旧石器時代の石器（3）

第76図 旧石器時代の石器（4）

第77図 旧石器時代の石器（5）

第78図 旧石器時代の石器（6）

第79図 旧石器時代の石器（7）

第80図 旧石器時代の石器（8）

第81図 旧石器時代の石器（9）

第82図 2区・3区 遺構全体図、S D 01、
S K 01・02・03 遺構図

第83図 縄文土器、白土

馬越下遺跡

第84図 遺跡範囲・調査区位置図

第85図 トレンチ・調査区配置図

第86図 土層柱状図

第87図 遺構分布全体図

第88図 遺構分布部分拡大図（1）

第89図 遺構分布部分拡大図（2）

第90図 S B 3004・4001 遺構図

第91図 S B 4003、S F 3001～3003・4001・4002
遺構図

第92図 S K 3001～3008・4001～4007 遺構図

第93図 平安時代の土器（1）

第94図 平安時代の土器（2）

第95図 金属製品

第96図 縄文土器

第97図 縄文時代の石器

挿表目次

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係）

第2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

第3表 埋藏物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

第4表 受委託契約等の経過

第5表 佐久穂町と南北佐久郡の時代・種類別遺跡数

第6表 周辺遺跡一覧

奥日影遺跡

第7表 溝跡一覧表

第8表 土坑一覧表

第9表 銭貨一覧表

小山寺窪遺跡

第10表 溝跡一覧表

第11表 銭貨一覧表

第12表 木製品一覧表

第13表 黒曜石産地推定分析試料

満り久保遺跡

第14表 石器観察表

第15表 黒曜石産地推定結果

馬越下遺跡

第16表 土坑一覧表

第17表 被熱部一覧表

第18表 分析試料と測定年代

写真目次

遺構等写真

- P L 1 奥日影遺跡
S T 01～03、S D 03・06、S K 222
- P L 2 奥日影遺跡
S D 08・11・22～25 a b
- P L 3 奥日影遺跡・小山寺窪遺跡 遠景
- P L 4 小山寺窪遺跡
1・3-3区、5区 全景
- P L 5 小山寺窪遺跡
S B 01・02・05・07・10・12・23
- P L 6 小山寺窪遺跡
S B 20～22・26・28、S T 02～05、
S A 02
- P L 7 小山寺窪遺跡
S T 06～08・10、S B 14・15・27、
水田跡
- P L 8 満り久保遺跡
全景、1区調査区全景
- P L 9 満り久保遺跡・馬越下遺跡

1・3区遺物出土状況 遠景

- P L 10 馬越下遺跡
S B 3004・4001・4003、S K 4001～4003

遺物写真

- P L 11 奥日影遺跡 S K 222 出土須恵器
- P L 12 奥日影遺跡 弥生～古墳時代前期の土器、
中世土器・陶磁器、金属製品、石器
- P L 13 小山寺窪遺跡 古代土器（1）
- P L 14 小山寺窪遺跡 古代土器（2）
- P L 15 小山寺窪遺跡 中世土器・陶磁器（1）
- P L 16 小山寺窪遺跡 中世土器・陶磁器（2）
- P L 17 小山寺窪遺跡 木製品、石製品、
縄文土器、石器
- P L 18 満り久保遺跡 旧石器時代の石器（1）
- P L 19 満り久保遺跡 旧石器時代の石器（2）
- P L 20 満り久保遺跡 馬越下遺跡
旧石器時代の石器（3）、
縄文土器、古代土器、金属製品



第1章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

1 事業計画の概要

中部横断自動車道（以下「中部横断道」という。）は、静岡県清水市の新東名道新清水ジャンクション（以下「JCT」という。）を起点に、山梨県甲斐市の双葉JCTと北杜市の長坂JCTの間で中央自動車道に合流し、長坂JCTより分岐北上したのち小諸市で上信越道佐久小諸JCTに連絡する、総延長約132kmの高規格幹線道路である。

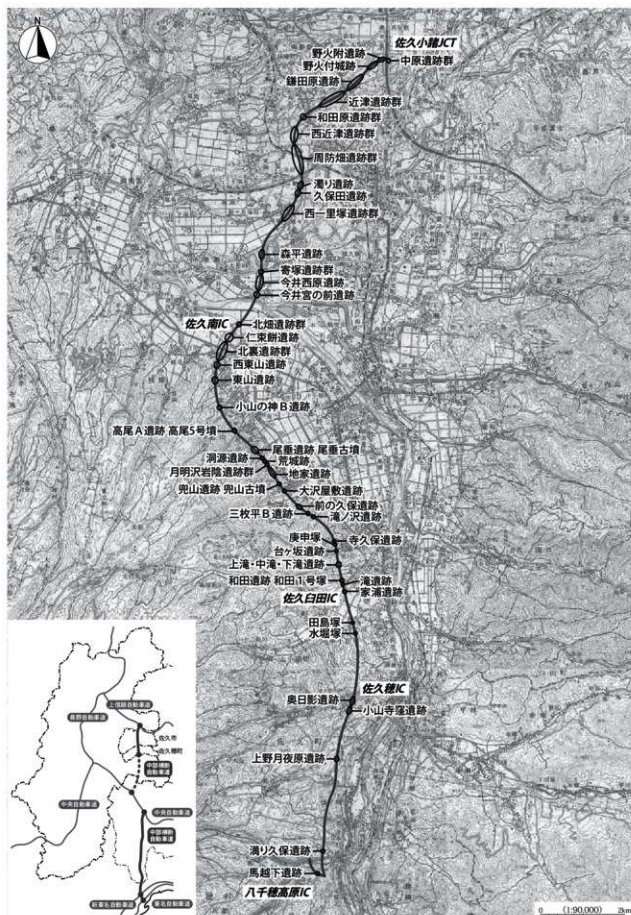
この道路は、太平洋側と日本海側を結ぶ広域的な高速ネットワークを形成するとともに、佐久地域においては国道141号を補完して地域間交流や地域開発を促進させ、救急医療体制への支援や物流の効率化を図る目的で、1991（平成3）年に佐久小諸JCTと八千穂高原インターチェンジ（以下「IC」という。）間を基本計画路線として決定した。1998年4月、日本道路公団に施工命令が下され、佐久小諸JCTと佐久南IC間の工事を進めてきたが、2003年12月には、中部横断道佐久南ICと八千穂高原ICの延長14.6km区間について国土交通省の新直轄方式による事業化が決定し、佐久白田トンネルの掘削を皮切りに本体工事が本格化した。その後、本線脇13か所に調整池の設置、佐久白田ICと佐久穂ICの設置等が追加され、2018年4月28日に供用を開始した。

2 分布・試掘調査と保護措置の調整

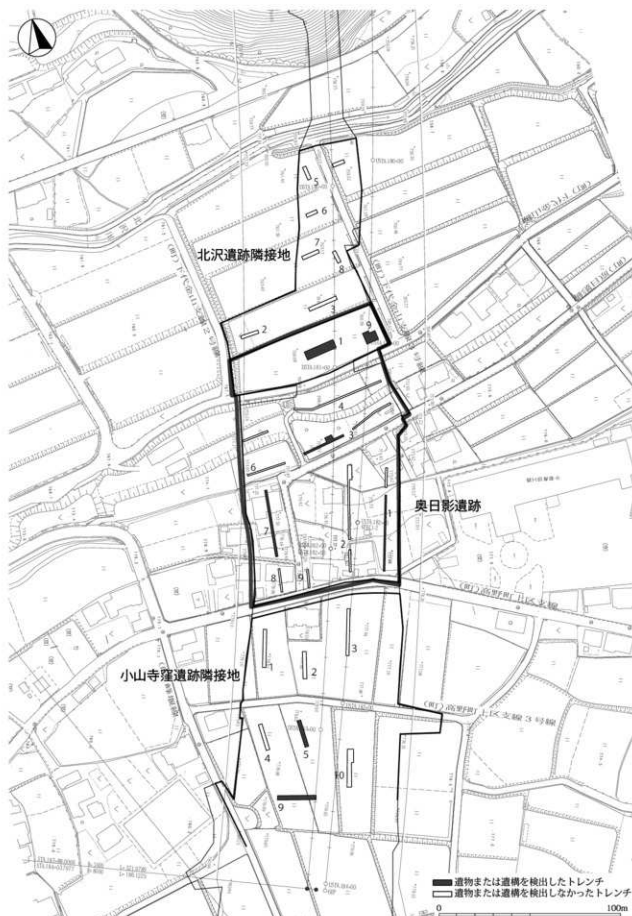
1991（平成3）年の基本計画路線決定を受けて、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）は、当該区間の南北予想ルートの幅1kmに所在する埋蔵文化財包蔵地の存否等を確認するため、1994年度に地元教育委員会の協力を得て踏査を実施した（県教委1997）。その後、事業計画が進行し、佐久南ICと八千穂高原IC間のルートがほぼ確定したことを受けて、1998～2000年度に分布調査を実施し、保護措置を講ずべき埋蔵文化財包蔵地や試掘調査の対象とすべき箇所を選定を行った（県教委2000・2003）。佐久南IC以南については、2004年度に改めて対象地の現況調査を実施するとともに、2012年度にかけて順次試掘調査を実施し、埋蔵文化財包蔵地の範囲と内容の確認を行った（県教委2007・2010・2013）。

本報告書にかかわる佐久穂町地区の本線ルート上では、1999～2000年度の分布調査で、大石棒が出土したといわれる北沢遺跡隣接地、2001年に中世の五輪塔群が出土している小山寺窪遺跡の隣接地（以上旧佐久町）をはじめ、上野月夜原遺跡、中原遺跡、細久保遺跡（旧八千穂村）の隣接地5か所について、試掘調査による遺跡の存否確認が必要となった。

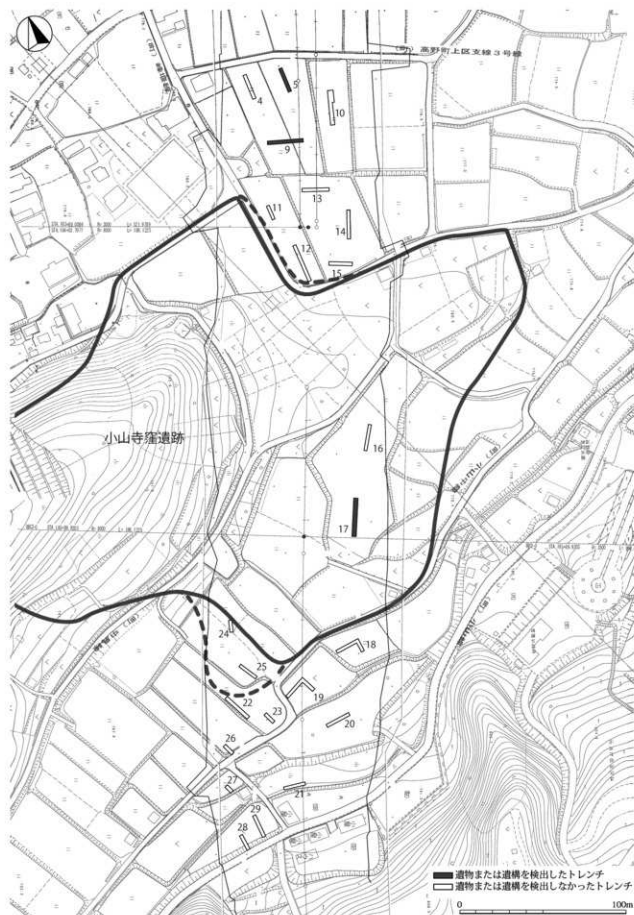
2007年、県教委は佐久西小学校裏遺跡の西側に広がる低地部の試掘で、獨立柱建物跡と想定される土坑群を発見したため奥日影遺跡と命名した。2009年には、奥日影遺跡から小山寺窪遺跡へ向かう北向き斜面でも、平安時代の土器とともに埋土に焼土や炭化材などを多量に含む焼成施設を確認し、遺跡範囲を南へ拡大した。また、小山寺窪遺跡も隣接する東側低地部に遺構が広がることを確認したため範囲を拡大することとなった（第2・3図）。さらに、2008年には上野月夜原遺跡の範囲を確定するとともに、細久保遺跡隣接地から満り久保遺跡を、中原遺跡隣接地から馬越下遺跡をそれぞれ新たに発見した（第4・5図）。



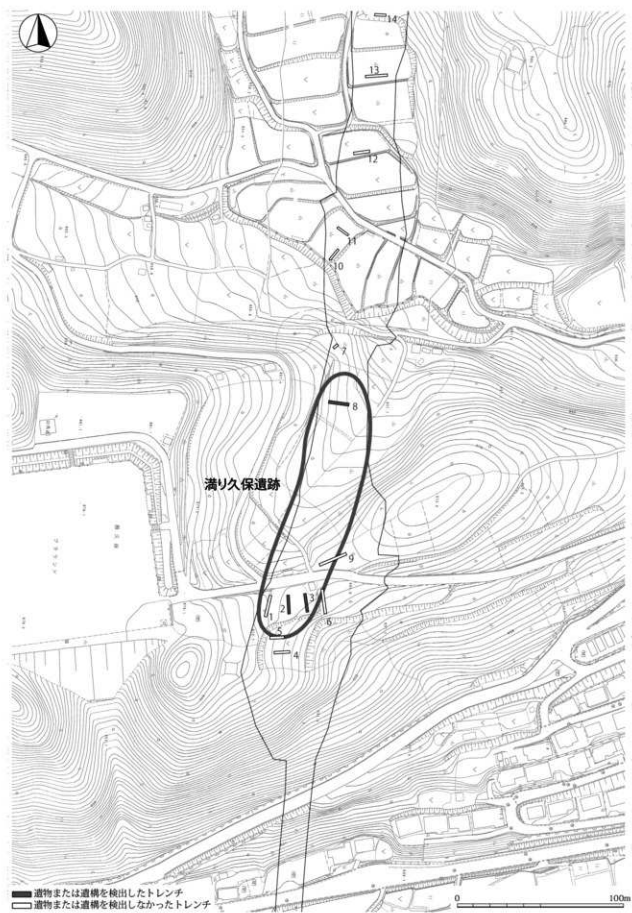
第1図 中部横断自動車道と調査対象遺跡



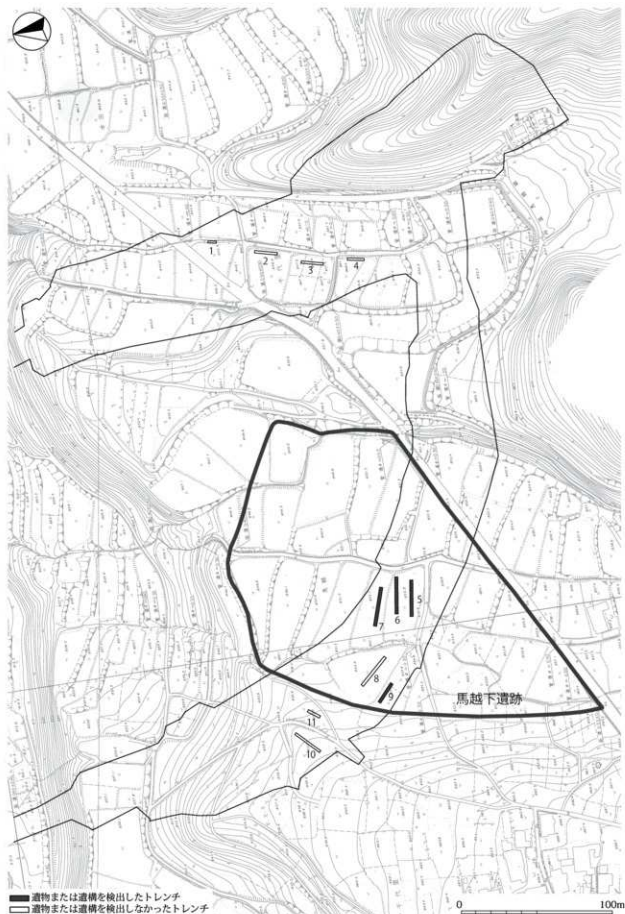
第2図 佐西小学校遺跡西側の試掘トレンチと奥日影遺跡の範囲図



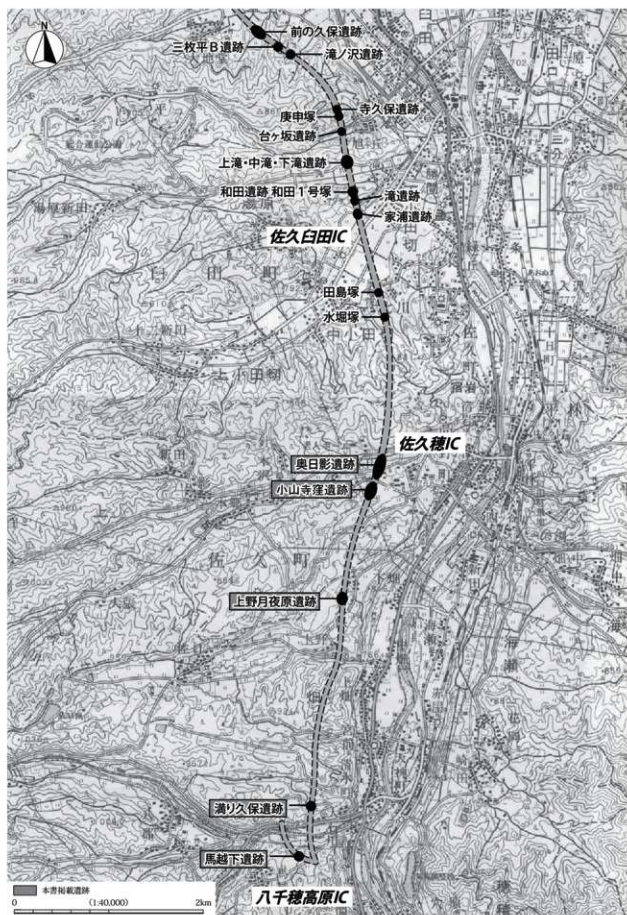
第3図 小山寺窟遺跡隣接地の試掘トレンチと遺跡の範囲図



第4図 満里久保遺跡隣接地の試掘トレンチと遺跡の範囲図



第5図 八千穂高原 IC 周辺の試掘トレンチと馬越下遺跡の範囲図



第6図 中部横断自動車道と本書所収遺跡

第1章 発掘調査の経過

以上の状況を受けて、県教委は、佐久穂町教育委員会（以下「町教委」という。）や事業主体である国土交通省関東地方整備局長野国道事務所（以下「長野国道」という。）と調整会議を重ね、本報告書に掲載した5遺跡について、本線または付帯設備の工事等によって破壊される恐れがあるため、発掘調査による記録保存を図ることを決定した（第6図）。

今回の開発事業は、広域の市町村にまたがりかつ大規模であるため、佐久小諸JCTと佐久南IC間に引き続き、国土交通省関東地方整備局（以下「関東地整」という。）が県教委および長野県文化振興事業団と埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書を締結した上で、関東地整が長野県文化振興事業団に本発掘調査を委託し、長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施する旨の合意を得た。

3 行政手続の経過

本報告書掲載遺跡の発掘調査にかかわる行政手続については第1表から第3表のとおりである。

第1表 土木工事のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第94条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2006.4.5	18長国調第14号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	小山寺窪・上野月夜原遺跡での土木工事を通知
2006.6.8	18教文第18-33号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2008.4.1	20長国調第98号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	奥日影遺跡での土木工事を通知
2008.4.1	21教文第8-279号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2009.4.6	21長国調第2号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	満り久保・馬越下遺跡での土木工事を通知
2009.4.16	21教文第8-6号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012.12.19	24長理第119号	埋文センター	工事立会終了報告	県教委	遺構・遺物なく本調査不要と報告
2013.10.31	25国間整長国工第109号	長野国道	土木工事に伴う埋蔵文化財発掘通知	県教委	満り久保遺跡での土木工事を通知
2014.1.17	25教文第8-268号	県教委	周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について	長野国道 埋文センター	埋文センターが上記遺跡の発掘調査を受託するよう通知
2012.12.19	24長理第118号	埋文センター	工事立会終了報告	県教委	遺物包含層の残りが悪く、かつ、遺構が存在する可能性もないため、本調査不要と報告

第2-1表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008.2.29	19長理第8-12号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	上野月夜原遺跡
2008.3.25	19教文第4-15号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.6.30	20長理第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	上野月夜原遺跡 10,900㎡
2008.6.9	20長理第1-2号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	奥日影遺跡

第2-2表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2008.6.12	20 教文第6-4号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.8.12	20 長理第4-4号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	奥日影遺跡 2,200㎡
2008.8.19	20 長理第1-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山寺窪遺跡
2008.8.22	20 教文第6-7号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2008.12.19	20 長理第4-17号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山寺窪遺跡 4,200㎡
2009.3.2	20 長理第1-16号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山寺窪遺跡
2009.3.5	20 教文第6-21号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.12.11	21 長理第4-10号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山寺窪遺跡 13,610㎡
2009.7.28	21 長理第1-5号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	満り久保遺跡
2009.8.26	21 教文第6-12号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2009.12.10	21 長理第4-11号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	満り久保遺跡 5,847㎡
2010.2.1	21 長理第1-9号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	奥日影遺跡
2010.2.17	21 教文第6-17号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.11.25	22 長理第4-3号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	奥日影遺跡 9,160㎡
2010.2.1	21 長理第1-10号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	馬越下遺跡
2010.2.17	21 教文第6-18号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.8.8	22 長理第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	馬越下遺跡 8,830㎡
2010.4.9	22 長理第1-1号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山寺窪遺跡
2010.5.6	22 教文第6-2号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2010.12.2	22 長理第4-6号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山寺窪遺跡 4,220㎡
2011.3.1	22 長理第1-8号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	小山寺窪遺跡
2011.3.15	22 教文第6-13号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2011.4.28	23 長理第6-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	小山寺窪遺跡 150㎡
2012.2.28	23 長理第3-14号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	馬越下遺跡
2012.4.2	24 教文第6-1号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2012.4.27	24 長理第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	馬越下遺跡 230㎡
2013.3.1	24 長理第1-13号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	満り久保遺跡

第1章 発掘調査の経過

第2-3表 調査のための発掘にかかわる行政手続（文化財保護法第92条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2013.3.27	25教文第6-23号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2013.8.26	25長理第4-2号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	溝り久保遺跡 300㎡
2014.3.10	25長理第3-15号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	溝り久保遺跡
2014.3.24	25教文第6-16号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2014.5.27	26長理第17-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	溝り久保遺跡 103㎡
2015.3.4	26長理第14-14号	埋文センター	埋蔵文化財発掘調査の届出	県教委	奥日影遺跡
2015.3.24	26教文第6-20号	県教委	埋蔵文化財の発掘調査について通知	埋文センター	上記発掘調査の実施および終了報告提出等を指示
2015.6.10	27長理第4-1号	埋文センター	発掘調査終了報告	県教委	奥日影遺跡 260㎡

第3表 埋蔵物の発見にかかわる行政手続（文化財保護法第102・105・108条関係）

年月日	文書番号	施行者	文書名	あて先	備考
2008.6.30	20長理第2-1号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	上野月夜原遺跡 土器・石器1箱
2008.7.14	20教文第26-51号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	上野月夜原遺跡
2008.8.12	20長理第2-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	奥日影遺跡 土器1箱
2008.8.22	20教文第26-69号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	奥日影遺跡
2008.12.19	20長理第2-14号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山寺窪遺跡 土器・石器10箱
2009.1.5	20教文第26-116号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	小山寺窪遺跡
2009.12.10	21長理第2-11号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	溝り久保遺跡 土器1箱、石器3箱
2009.12.21	21教文第20-108号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	溝り久保遺跡
2009.12.11	21長理第2-10号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山寺窪遺跡 土器・石器等20箱
2009.12.21	21教文第20-107号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	小山寺窪遺跡
2010.8.4	22長理第2-1号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	馬越下遺跡 土器・石器12箱ほか
2010.8.17	22教文第20-80号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	馬越下遺跡
2010.11.25	22長理第2-3号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	奥日影遺跡 土器・石器20箱
2010.12.9	22教文第20-111号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	奥日影遺跡
2010.12.2	22長理第2-6号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山寺窪遺跡 土器・石器等10箱
2010.12.20	22教文第20-119号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び出土品の帰属通知	埋文センター	小山寺窪遺跡

年月日	文書番号	施行者	文 書 名	あて先	備 考
2011.4.28	23 長埋第 4-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	小山寺窪遺跡 土器 1 箱
2011.5.18	23 教文第 20-45 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び 出土品の帰属通知	埋文センター	小山寺窪遺跡
2012.4.27	24 長埋第 2-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	馬越下遺跡 陶器 1 点
2012.5.14	24 教文第 20-15 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び 出土品の帰属通知	埋文センター	馬越下遺跡
2013.6.10	25 長埋第 2-2 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	満り久保遺跡 土器・石器 2 箱
2013.6.27	25 教文第 20-31 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び 出土品の帰属通知	埋文センター	満り久保遺跡
2014.5.27	26 長埋第 15-1 号	埋文センター	埋蔵物発見届	県教委	満り久保遺跡 土器・石器 1 箱
2014.6.10	26 教文第 20-28 号	県教委	埋蔵物の文化財認定及び 出土品の帰属通知	埋文センター	満り久保遺跡

中部横断道の建設に伴う発掘調査は、複数の市町村にまたがる大規模な開発事業である。したがって、調査が複数年度にまたがるとともに調査経費も相当要することから、事業を円滑に推進するため、県教委は関東地整および長野県文化振興事業団と協定書を締結することとした。なお、協定書は、発掘調査事業の進捗よくに伴って、2010年3月、2016年2月、2018年4月、2019年1月の都合4回変更を行っている。

長野県文化振興事業団は、協定書の第7条第1項の規定により、年度毎に関東地整と契約を締結し、年度末には第8条第2項の規定により、業務実績報告書を提出してきた。本報告書に掲載した遺跡にかかわる各年度の受委託契約は第4表のとおりである¹。

第4-1表 受委託契約等の経過

年 度	予 算	遺 跡	備 考
2008	346,738,405 円	奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、上野月夜原遺跡 他 11 遺跡	発掘作業 48,410㎡
2009	381,700,120 円	小山寺窪遺跡、満り久保遺跡他 17 遺跡	発掘作業 63,800㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2010	408,924,000 円	奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、満り久保遺跡他 15 遺跡	発掘作業 62,947㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2011	367,330,000 円	小山寺窪遺跡他 17 遺跡	発掘作業 25,688㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2012	327,803,000 円	馬越下遺跡他 17 遺跡	発掘作業 12,022㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2013	233,268,000 円	満り久保遺跡他 20 遺跡	発掘作業 33,870㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2014	175,530,000 円	満り久保遺跡他 21 遺跡	発掘作業 11,751㎡ 整理作業 (佐久南 IC 以北)
2015	112,850,000 円	奥日影遺跡他 13 遺跡	発掘作業 6,565㎡ 整理作業
2017	38,964,000 円	奥日影遺跡他 30 遺跡	整理作業
2018	126,991,800 円 うち 51,977,000 円を 2019 年度に繰越	奥日影遺跡他 30 遺跡	整理作業

1 協定書及び協定締結の経過は埋文センター発掘調査報告 121 第 1 章に掲載した。

4 発掘作業と整理等作業の体制

本報告書に掲載した遺跡の発掘調査にかかわる作業体制（作業員を含む）は以下のとおりである。

2008年度 発掘作業（奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、上野月夜原遺跡）

所長：	仁科松男	副所長：	丑山修一	調査部長：	平林 彰	担当課長：	寺内隆夫
調査担当：	川崎 保	藤松慎一郎	(奥日影遺跡)				
	川崎 保	古賀弘一	(小山寺窪遺跡)				
作業員：	相澤昭二	浅川高義	浅沼君子	井澤政子	井出佐千雄	井上 清	植松和則
	太田寅男	小倉栄子	柏木貞夫	木内一夫	木内節雄	木内伸子	木島はつ子
	熊谷大輔	黒沢俊男	小宮山登志幸	桜井義胤	佐々木愛子	佐々木 正	佐々木久子
	佐々木記代	佐藤 剛	清水末子	鈴木春彦	高橋弓子	西藤富士夫	秦 茂夫
	秦 正信	林 健彦	日向武夫	本田 智	柳沢敏春	山口茂弥	山越常夫
	横山道子	渡辺稔秋	(小山寺窪遺跡)		井澤正子	井上 清	熊谷大輔
	高橋弓子	秦 正信	横山道子	渡辺稔秋	(上野月夜原遺跡)		

2009年度 発掘作業（小山寺窪遺跡、溝り久保遺跡）

所長：	仁科松男	副所長：	阿部精一	調査部長：	平林 彰	担当課長：	大竹憲昭
調査担当：	川崎 保	太田 潤	(小山寺窪遺跡)				
	藤原直人	上田 真	(溝り久保遺跡)				
作業員：	井澤政子	井上 清	上原美千代	植松和則	奥平 潔	柏木貞夫	木内伸子
	熊谷大輔	黒沢俊男	小宮山登志幸	佐々木 正	佐々木久子	佐々木記代	佐藤 剛
	佐藤由美子	佐藤由美子	鈴木佳明	相馬弘隆	高岡清子	高橋弓子	秦 茂夫
	秦 正信	日向武夫	細堂和美	柳沢茂夫	山越常夫	横山道子	吉沢順子
	渡辺稔秋	(小山寺窪遺跡)		青木 昭	赤尾香苗		
	坂本和江	佐々木きよえ	佐々木龍夫	須田杉男	須田政澄	相馬くに子	大工原 明
	高岡義敏	中野浩吉	西藤富士男	本田 智	山口茂弥	(溝り久保遺跡)	

2010年度 発掘作業（奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、馬越下遺跡）

所長：	窪田久雄	副所長：	阿部精一	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	川崎 保	古賀弘一	太田 潤	(奥日影遺跡、小山寺窪遺跡)			
	藤原直人	太田 潤	清水梨代	(馬越下遺跡)			
作業員：	青木 昭	井上 清	木内伸子	熊谷大輔	黒沢俊男	坂本和江	佐々木きよえ
	佐々木 正	佐々木久子	佐々木記代	佐藤 剛	佐藤由美子	須田正澄	相馬弘隆
	高岡清子	高岡義敏	高橋弓子	日向武夫	細堂和美	山越常夫	横山道子
	渡辺稔秋	(奥日影遺跡、小山寺窪遺跡)					
	須田杉男	中野幸吉	本田 智	山口茂弥	吉沢順子	(馬越下遺跡)	

2011年度 発掘作業（小山寺窪遺跡）

所長：	窪田久雄	副所長：	阿部精一	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	黒岩 隆	内堀 団					

2012年度 発掘作業（馬越下遺跡）

所長：	窪田久雄	副所長：	会津敏男	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄
調査担当：	若林 卓	宮村誠二					
作業員：	熊谷大輔	山口茂弥	渡辺稔秋				

2013年度	発掘・整理等作業（満り久保遺跡）								
	所 長：	窪田久雄	副 所 長：	会津敏男	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄	
	調査担当：	若林 卓	伊藤友久	栗林幸治	宮村誠二				
	作 業 員：	植松和則	熊谷大輔	佐藤明美	日向武夫	宮崎未枝子	山口茂弥	渡辺稔秋	
		（満り久保遺跡）		塚田晴美	西島典子	松本眞行	宮下正治	（整理作業）	
2014年度	発掘作業（満り久保遺跡）								
	所 長：	会津敏男	副 所 長：	多城 哲	調査部長：	大竹憲昭	担当課長：	岡村秀雄	
	調査担当：	藤原直人	栗林幸治						
	作 業 員：	熊谷大輔	高岡清子	高岡義敏	宮崎未枝子	山口茂弥	渡辺稔秋		
2015年度	発掘・整理等作業（奥日影遺跡他4遺跡）								
	調査担当：	若林 卓	上田 真	伊藤友久					
	作 業 員：	赤尾香苗	植松和則	小倉栄子	川上淳子	熊谷大輔	佐藤明美	鈴木春彦	
		鈴木佳明	高岡清子	高岡義敏	高橋弓子	日向武夫	緑川うめ子	宮崎未枝子	
		（発掘作業）							
		猪股万里子	柄澤登紀子	窪田 順	窪田 翔	塩野入奈菜美	鳥田由美	清水栄子	
		清水玲子	高橋康子	日向富美子	待井 聖	松本眞行	柳原澄子	（整理作業）	
2017年度	整理等作業（奥日影遺跡、馬越下遺跡）								
	所 長：	会津敏男	副 所 長：	岡崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄	
	調査担当：	若林 卓	水澤教子						
	作 業 員：	赤川雅俊	阿部高子	荒井君江	石田和子	猪俣万里子	岩原英治	大澤正明	
		窪田 順	塩野入奈菜美	祖山克彦	田中富子	中村恵美	西村はるみ	平林昌子	
		堀内慎一	待井 聖	柳原澄子					
2018年度	整理等作業（奥日影遺跡他4遺跡）								
	所 長：	会津敏男	副 所 長：	岡崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄	
	調査担当：	若林 卓	上田 真	藤原直人	贊田 明				
	作 業 員：	赤川雅俊	荒井君江	石田和子	岩原英治	大澤正明	窪田 順	小池美香	
		清水秋子	清水栄子	清水正夫	祖山克彦	田中富子	西村はるみ	平林昌子	
		堀内慎一	吉田 稔						
2019年度	整理等作業（奥日影遺跡他4遺跡）								
	所 長：	原田秀一	副 所 長：	岡崎修二	調査部長：	平林 彰	担当課長：	岡村秀雄	
	調査担当：	綿田弘実	（課長補佐）	若林 卓	上田 真	贊田 明			
	作 業 員：	石田和子	西村はるみ						

第2節 発掘調査の経過

1 発掘作業

(1) 奥日影遺跡

奥日影遺跡は、2007（平成19）年12月に県教委が行った試掘調査によって遺構・遺物が検出され、町教委によって新たに登録された遺物散布地である。

埋文センターは、2008年度に2,200㎡の面調査を実施し、70基程度の土坑と溝跡、調査範囲の東西から総柱の掘立柱建物跡を検出した。遺構からは、時期を決定できるような遺物は出土しなかったが、一応、古代以降のものと推定した。2010年度は、県教委の試掘によって拡張された遺跡範囲の南側台地部分とその北斜面を対象に9,420㎡の調査を行い、南佐久地域では初見となる須恵器窯跡を発見した。また、新たに見つかった掘立柱建物跡の柱方から中世陶磁器や宋銭が出土した。2015年度は残件260㎡を調査したが、遺構・遺物はなかった。

(2) 小山寺窪遺跡

小山寺窪遺跡は、津金寺伝承地が近接し、旧佐久町教育委員会によって古代・中世の集落跡として登録されてきた。2000・01年度に、佐久南部広域営農団地農道整備事業に伴って旧佐久町教育委員会が実施した発掘調査で、古代の竪穴建物跡や中世を中心とする五輪塔群が発見された。また、2007年度に県教委が行った試掘調査で確認された遺構・遺物によって、遺跡範囲が北と東へ広がった。

埋文センターは、2008年度に調査範囲の南側1区4,200㎡について面調査に着手し、低地部で溝や畔を伴う水田跡を検出した。また、台地上では、竪穴建物跡や掘立柱建物跡をはじめ約700基の土坑を確認した。2009年度は調査範囲の中央2・3区13,610㎡の面調査を行い、竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡を調査した。また、当初予定していた調査範囲の北側にも遺構が広がることも判明した。2010年度は、2・3区の西側と遺構の広がりを確認した北側5区を対象に4,220㎡の面調査を行い、前年度と同様に古代から中世に至る建物跡や多数の土坑、杭列とともに、総延長100mに及ぶ古代から中世の溝跡を調査した。2011年度は、2区に残った鉄塔部分150㎡のみの調査となったが、昨年、一昨年の調査区から繋がる溝跡を検出し1本の溝跡としてつながった。

(3) 上野月夜原遺跡

上野月夜原遺跡は、町教委によって、縄文時代および平安時代の遺物散布地として周知されてきた。ただし、発掘調査歴はなく不明な点が多いため、2008年度、埋文センターは遺跡内容を確認する目的で10,900㎡を対象に確認調査を実施した。調査範囲の北側から遺物が出土したため、トレンチを一部拡張して面調査を実施したが、土坑数基を検出しただけで遺構・遺物はほとんどなかった。

(4) 満り久保遺跡

満り久保遺跡は、2007年に県教委の試掘調査によって黒曜石の剥片や砕片がまとまって出土したため、町教委によって新たに登録された。

2009年度は、埋文センターが5,847㎡の調査範囲に41本のトレンチを設定して確認調査を実施し、尾根線部部の平坦面を中心に黒曜石の破片が出土する一方、南北の斜面では時期不明の溝跡を検出するにとどまった。そこで、尾根線部部の平坦面について面調査を実施し、槍先型尖頭器に代表される時期と細石刃・細石核に代表される時期の石器群が出土した。2013・14年度は尾根線部部を東西に縦断する町道知35号線部分403㎡の発掘を行ったが、基盤となる黄褐色ローム層から出土した旧石器はなかった。

(5) 馬越下遺跡

馬越下遺跡は、2008年度に実施した県教委の試掘調査によって古代の土器片とともに土坑が確認されたため、町教委によって新たな埋蔵文化財包蔵地として登録された。埋文センターでは2010年度8,830㎡を対象として発掘に着手し、緩やかな斜面部から古代の堅穴建物跡や土坑などを検出した。2012年度は調査範囲の南西部230㎡を対象にしたが、遺構・遺物はなかった。

(6) 基礎整理作業

基礎整理作業は、発掘作業を行った遺跡を対象にして主として12月から3月の冬期間に実施した。

記録類には、調査時に記述した所見をはじめ、図面、写真等が含まれる。基礎整理作業では、まずこれらの汚染や脱漏点を点検・修正し、次に記録相互の点検と矛盾点の解消を行った。図面については、平面図と断面図や部分図等との照合点検を行い、原図コピーに朱書訂正を行って、第二原図の下図とした。ネガ写真は、撮影順にアルバムへ収納し、撮影記録簿との照合点検を行い、ポジ写真は、撮影内容別に整理して後の本格整理に備えた。また、現場で記載した所見は、図面や写真等と照合しながら、所見整理カードにまとめた。

遺物類は、脆弱遺物を選別したのち、土器・石器類は洗浄・注記を行い遺物台帳を作成した。脆弱遺物は性質ごとに台帳を作成し、金属類はシリカゲルを封入して保管、木質や種実類は水漬けで保管、骨類は土砂を除去して乾燥保管した。応急保存処理が必要な脆弱遺物については保存処理カードを作成している。

その他、必要に応じて、出土品の科学分析や鑑定等を実施した。

2 整理等作業

佐久南ICから八千穂高原IC間の発掘調査遺跡31か所を5地区に区分し、佐久穂地区は、奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、上野月夜原遺跡、満久保遺跡、馬越下遺跡の5遺跡をまとめて報告書1冊に掲載する方針を固めた。

佐久穂地区の本格整理作業は2015(平成27)年度に着手したが、対象となる5遺跡の発掘期間が8年に及び、調査担当者の交代があったため、まずは、記録類と遺物類等の整備と基礎整理作業結果の確認を行った。また、主として遺物の分類・接合を行い、実測遺物の抽出、登録を行った。2016年度は、報告書刊行を2018年度末に設定し、先に刊行を予定している大沢地区および臼田地区の整理作業を優先するため、佐久穂地区の整理作業は一時中断した。ところが、2017年度になって事業予算が減額されたことから、本報告書掲載遺跡に関していえば奥日影遺跡と馬越下遺跡の遺物整理を行えたのみで、本格的な整理は2018年度に延期せざるを得なくなった。2018年度は、編集会議で報告書作成にかかる統一的な方針を固めた上で、遺物について報告書掲載資料の抽出、土器の接合と復元、石器の器種分類と計測、写真撮影、遺構については図面修正とデジタルトレース、版版組を行い、一部、遺物観察表等の作成を行った。2019年度は、遺物図や写真の版組を行い、原稿を仕上げて発掘調査報告書を印刷・製本し、記録類と遺物の取納を行った。

3 普及啓発活動

(1) 遺跡説明会および発掘体験等

2009.10.24	小山寺窪遺跡現地説明会	105名
2009.11.14	満久保遺跡現地説明会	110名
2010.6.26	馬越下遺跡現地説明会	58名
2010.9.11	小山寺窪遺跡、奥日影遺跡現地説明会	123名

第1章 発掘調査の経過

(2) 展示会および講演会等

2010. 3.13～5. 9	満り久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2010」	長野県立歴史館	7,853名
2010. 7. 6～8. 1	小山寺窪遺跡 満り久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2010」	長野県伊那文化会館	1,329名
2011. 3.12～5.15	奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 馬越下遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2011」	長野県立歴史館	10,138名
2011. 7. 7～7.31	奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 馬越下遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2011」	長野県伊那文化会館	872名
2014. 3. 7	小山寺窪遺跡の発掘成果	佐久穂町公民館	
2014. 3.21～6. 1	満り久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2014」	長野県立歴史館	13,547名
2014. 7.19～8.24	満り久保遺跡 速報展「長野県の遺跡発掘 2014」	長野県伊那文化会館	1,602名

(3) 調査情報誌等の発行

2009. 3. 5	「南佐久で初の大規模発掘調査 小山寺窪遺跡」[みすずかる] 通巻 18号
2009. 3.16	「発掘調査の概要 小山寺窪遺跡」[年報] 25
2010. 3.26	「発掘調査の概要 小山寺窪遺跡 満り久保遺跡」[年報] 26
2011. 3.31	「発掘調査の概要 奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 馬越下遺跡」[年報] 27
2012. 3.31	「発掘調査の概要 小山寺窪遺跡」[年報] 28
2013. 3.31	「発掘調査の概要 馬越下遺跡」「整理作業の概要 奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 満り久保遺跡」[年報] 29
2014. 3.31	「発掘調査の概要 満り久保遺跡」[年報] 30
2015. 3.31	「発掘作業の概要 満り久保遺跡」[年報] 31

(4) その他

埋文センター公式ホームページに調査情報を掲載

4 作業日誌抄録

2008（平成20）年度

6月4日	上野月夜原 確認調査開始	9月17日	小山寺窪 表土剥ぎ開始
6月18日	上野月夜原 遺物包含層がある1～3トレンチ拡 張部分を精査	10月27日	小山寺窪 SB 01 調査開始
6月24日	上野月夜原 土坑の精査および記録作成	10月29日	小山寺窪 地形測量開始
	奥日影 表土掘削開始	11月12日	小山寺窪 第1水田面掘下げ
6月26日	奥日影 遺構検出開始	12月17日	小山寺窪 発掘作業終了
6月30日	上野月夜原 確認調査終了	12月18日	上野月夜原 基礎整理作業開始
7月7日	奥日影 地形測量開始	1月5日	奥日影 基礎整理作業開始
7月10日	奥日影 掘立柱建物跡検出	1月9日	上野月夜原 基礎整理作業終了
7月15日	奥日影 掘立柱建物跡をもう1棟検出	1月27日	奥日影 基礎整理作業終了
7月30日	奥日影 遺構測量開始	2月2日	小山寺窪 基礎整理作業開始
8月11日	奥日影 発掘作業終了	3月31日	小山寺窪 基礎整理作業終了

2009年度

4月21日	小山寺	表土掘削、遺構検出開始	10月20日	満り久保	旧石器の石器出土分布測量
4月22日	小山寺	測量委託契約締結	10月24日	小山寺	現地説明会
4月24日	小山寺	総柱の掘立柱建物跡、竪穴建物跡検出	11月12日	小山寺	竪穴建物跡S B 18全景写真撮影
5月28日	小山寺	竪穴建物跡8軒、掘立柱建物跡4棟以上検出	11月14日	満り久保	現地説明会
7月15日	小山寺	竪穴建物跡15軒以上、掘立柱建物跡5棟以上検出	12月8日	小山寺	発掘作業終了
8月6日	小山寺	田口小学校有志による体験発掘	12月9日	奥日影 小山寺	基礎整理作業開始
9月3日	満り久保	表土掘削開始	12月10日	満り久保	発掘作業終了
9月11日	満り久保	遺構検出により旧石器時代の石器出土	12月11日	満り久保	基礎整理作業開始
10月16日	満り久保	測量委託契約締結	3月7日	小山寺	測量委託成果納品
			3月12日	満り久保	測量委託成果納品
			3月31日		基礎整理作業終了

2010年度

4月9日	奥日影	表土掘削開始	9月11日	奥日影 小山寺	現地説明会開催
4月13日	馬越下	表土掘削開始	9月21日	奥日影	発掘作業再開
4月16日	馬越下	竪穴建物跡検出	9月22日	奥日影	熱残留磁気・放射性炭素年代測定委託契約
4月27日	奥日影、馬越下	測量委託契約締結			
5月21日	馬越下	竪穴建物跡精査	10月8日	奥日影	長野県立歴史館考古学講座遺跡見学
6月1日	小山寺	発掘作業開始	10月14日	奥日影	熱残留磁気年代測定試料採取
	馬越下	竪穴建物跡(S B 4001)から鉄製鎌出土	11月15日	奥日影	発掘作業終了
6月3日	奥日影	須恵器窯跡の精査開始	11月30日	小山寺	竪穴建物跡完掘
6月24日	馬越下	空中写真撮影	12月1日	小山寺	発掘作業終了
6月26日	馬越下	現地説明会開催	12月6日	小山寺	奥日影 基礎整理作業開始
7月9日	小山寺	測量委託契約締結	12月17日	馬越下	基礎整理作業開始
7月22日	奥日影	発掘作業中断	1月14日	奥日影	熱残留磁気・放射性炭素年代測定成果納品
	馬越下	発掘作業終了		馬越下	放射性炭素年代測定委託契約
7月26日	小山寺	土坑群検出	3月11日	奥日影、小山寺	馬越下測量委託成果納品
7月30日	小山寺	土坑群精査	3月17日	馬越下	放射性炭素年代測定成果納品
8月24日	小山寺	竪穴建物跡精査	3月31日		基礎整理作業終了
9月10日	小山寺	土坑群完掘			

2011年度

4月14日	小山寺	表土掘削開始 一昨年度から続く溝跡(SD09)の確認、掘削、記録作成	12月22日	小山寺	基礎整理作業開始
4月22日	小山寺	測量委託契約締結	12月16日	小山寺	測量委託成果納品
4月28日	小山寺	発掘作業終了	3月31日	小山寺	基礎整理作業終了

2012年度

4月1日	奥日影 小山寺	満り久保 本格整理作業開始	10月10日	満り久保	石器分類・接合作業に着手
4月9日	馬越下	表土掘削開始	10月17日	満り久保	遺物回収版組に着手
	奥日影 図面点検・修正に着手		10月24日	満り久保	遺物回収版組を完了
	満り久保 遺物の洗浄・注記に着手		11月9日	奥日影	金属製品応急保存処理委託契約締結
4月16日	奥日影 小山寺	龍前遺物監視カード作成	満り久保	黒曜石産地推定・火山灰分析委託成果納品、石器展開写真撮影委託契約締結	
	満り久保	石器の実測・トレースに着手	11月30日	奥日影 小山寺	放射性年代測定委託契約締結
4月24日	満り久保	遺構図面点検・修正に着手	12月3日	馬越下	基礎整理作業開始
4月27日	馬越下	発掘作業終了	12月12日	奥日影 小山寺	年代測定を委託
5月1日	奥日影	土器接合に着手	12月20日	奥日影 小山寺	樹洞同定委託契約締結
5月18日	奥日影	遺構図のトレースに着手	12月28日	馬越下	基礎整理作業終了
6月5日	小山寺	図面点検・修正に着手	1月9日	満り久保	図面点検及びトレース完了
6月6日	満り久保	石器の器種分類・計測・台帳登録に着手	1月28日	満り久保	石器展開写真撮影完了
			2月20日	原山智氏による石材鑑定指導	
6月22日	満り久保	石器の器種分類・計測・台帳登録を完了	2月22日	奥日影、小山寺	樹洞同定委託成果納品
7月10日	満り久保	石器の洗浄・注記を完了	2月28日	奥日影、小山寺	黒曜石産地推定委託成果納品
7月18日	満り久保	黒曜石産地推定委託契約締結	3月8日	奥日影、小山寺	放射性年代測定委託成果納品
8月7日	満り久保	火山灰分析委託契約締結	3月14日	奥日影	金属製品応急保存処理委託成果納品
8月28日	小山寺	遺構図のトレースに着手	3月18日	満り久保	石器分類及び接合作業完了
9月25日	奥日影 小山寺	黒曜石産地推定委託契約締結	3月31日		本格整理作業終了

第1章 発掘調査の経過

2013年度

4月22日	満り久保	発掘作業開始 輪先形尖頭器出土	12月20日	満り久保	基礎整理作業開始
4月26日	満り久保	細石刃出土	1月24日	満り久保	火山灰分析委託契約締結
6月7日	満り久保	ローム層中の石器包含はなし	3月20日	満り久保	火山灰分析委託成果納品
6月10日	満り久保	発掘作業終了	3月31日	満り久保	基礎整理作業終了

2014年度

4月14日	満り久保	発掘作業開始	1月16日	満り久保	火山灰分析委託契約締結
4月24日	満り久保	遺構実測支援システムで測量	3月13日	満り久保	火山灰分析委託成果納品
5月23日	満り久保	発掘作業終了	3月31日		基礎整理作業終了
12月15日		基礎整理作業開始			

2015年度

4月1日	本格整理作業開始	7月23日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験
4月15日	奥日影 表土掘削開始	7月27日	長野高专インターンシップ（8月5日も）
4月16日	長野市立通明小整理作業見学（4月20日も）	9月11日	中部横断関連遺跡分布図作成開始
5月18日	小山寺窪 発掘資料まとめ、台帳整理	9月17日	中部横断関連遺跡分布図作成終了
5月25日	奥日影 遺構・遺物なく発掘作業終了	10月19日	長野市立犀塚中学校職場体験
5月27日	須坂市教育委員会整理作業見学	10月20日	長野市立広代中学校職場体験
6月1日	奥日影、遺物整理開始	10月27日	長野市立川中島中学校職場体験
6月2日	小山寺窪 遺物整理開始	12月17日	奥日影 基礎整理作業開始
	長野市立広徳中学校職場体験	12月24日	奥日影 写真アルバムと台帳整理
6月4日	上野月夜原 遺物整理	12月25日	小山寺窪 写真アルバムと台帳整理
6月10日	小山寺窪 遺物整理終了	1月5日	上野月夜原、満り久保 写真アルバムと台帳整理
6月15日	奥日影 遺物整理終了	1月8日	馬越下 写真アルバムと台帳整理
7月3日	長野市埋蔵文化財センター整理作業見学	3月2日	満り久保 測量データの整理
7月7日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験	3月31日	奥日影 基礎整理作業終了
7月14日	長野市立飯綱中学校職場体験		

2017年度

4月1日	本格整理作業開始	6月9日	奥日影 土器接着・復元終了
4月18日	馬越下 土器接合開始	7月4日	長野市立篠ノ井西中学校職場体験
5月1日	馬越下 土器接着・復元開始	7月5日	奥日影 土器分類
5月12日	馬越下 土器接合終了	7月7日	長野市立三陽中学校職場体験
5月24日	馬越下 土器接着・復元終了	7月10日	奥日影 土器観察（～12日）
5月25日	奥日影 土器接合開始	7月20日	長野市立広徳中学校職場体験
6月1日	奥日影 土器接合終了	7月21日	長野市立篠ノ井東中学校職場体験
6月2日	奥日影 土器接着・復元開始	3月30日	本格整理作業終了

2018年度

4月1日	本格整理作業開始	8月10日	小山寺窪 土器接合終了
7月31日	小山寺窪 土器接合開始	3月31日	本格整理作業終了

2019年度

4月1日	本格整理作業開始	5月30日	奥日影 土器実測・拓本終了
5月15日	小山寺窪 土器実測・拓本開始	6月15日	馬越下 遺物実測終了
5月22日	小山寺窪 土器実測・拓本終了	12月24日	発掘調査報告書印刷・製本契約
5月23日	奥日影 土器実測・拓本開始	3月19日	発掘調査報告書刊行
5月28日	馬越下 遺物実測開始		

参考・引用文献

- 県教委 1997 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書1—」
県教委 2000 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書2—」
県教委 2003 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書3—」
県教委 2007 「大規模開発事業地内遺跡—遺跡詳細分布調査報告書4—」
県教委 2010 「限内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査5—」
県教委 2013 「限内遺跡発掘調査報告書—遺跡詳細分布調査6—」

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久盆地は長野県の東に位置し、東と南を秩父山地、西を八ヶ岳連峰、北を浅間連山に囲まれている。盆地の中央には秩父山地の甲武信ヶ岳を源流とする千曲川が北流し、左（西）岸域は八ヶ岳連峰から下る小河川が開析谷や扇状地を形成し、河岸段丘や氾濫原を分断して千曲川に注ぐ。

本書に掲載した各遺跡が所在する南佐久郡佐久穂町は、佐久盆地の南端部に位置し、東は埼玉県へ通ずる十国峠から、西は八ヶ岳連峰の北横岳まで、約29.4kmと東西に長い。町の中心部を千曲川が縦断している。中部横断道は、八千穂高原ICから佐久南ICまでの間、八ヶ岳連峰から東ないし北東方向に延びる開析谷と尾根とを南北方向に横切り、一部、千曲川の左（西）岸の上位段丘上を通る。そのため、本書掲載遺跡は、尾根の先端部、千曲川支流に沿った傾斜面および千曲川の段丘面に立地している。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

(1) 周辺の遺跡

佐久穂町内には、118か所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。時代別に見ると、旧石器時代が10遺跡、縄文84、弥生10、古墳5、古代62、中世27、近世4である。古墳時代5遺跡のうち2か所は古墳で、千曲川左岸の塚畑古墳と右岸の曾原古墳である。また、中世27遺跡のうち15か所は城館跡である¹。

遺跡の時代別の割合は、縄文時代や古代の遺跡が多く、旧石器時代や弥生時代、中・近世の遺跡が少ない。これは南・北佐久郡域の傾向とおおむね合致している。佐久穂町内では縄文時代の遺跡の割合が高く、古墳時代の集落跡や古墳そのものが極めて少ない点に特徴がある。また、町内の千曲川以西に全体の3分の2の遺跡があり、なかでも旧石器時代や古墳時代の集落跡は、千曲川以西に片寄っている（第5表）²。

以下、千曲川以西の遺跡に絞って時代ごとに紹介する。

第5表 佐久穂町と南北佐久郡の時代・種類別遺跡数

地域	集落跡・散布地								古墳 総数	城館跡 現存	その他 総数	合計
	旧石器	縄文	弥生	古墳	古代	中世	近世	不明				
佐久穂町	10	84	10	3	62	12	4	0	2	15	0	202
	5.0%	41.6%	5.0%	1.5%	31.0%	5.9%	2.0%	0.0%	1.0%	7.5%	0.0%	
千曲川以西	9	54	6	3	41	8	2	0	1	9	0	133
南・北佐久郡 (除佐久穂町)	85	722	62	162	621	45	2	89	321	180	61	2,350
	3.6%	30.7%	2.6%	6.9%	26.4%	1.9%	0.1%	3.8%	13.7%	7.7%	2.6%	

1 1か所の埋蔵文化財包蔵地から複数の時代の遺構・遺物が見つかる場合があるため、時代別の合計数は埋蔵文化財包蔵地の数とは一致しない。

2 南・北佐久郡の遺跡数については、県教委から2016年度に調査したデータの提供を受けた。

旧石器時代 双子池、麦草峠等には、蓼科系の黒曜石原産地がある。これらの原産地から北東方向に流下する大石川や石堂川等に沿って緩やかな傾斜が続く尾根上に、トリデロック (B 31)、大反 (B 44)、塩くれ場 (B 30)、八千穂レイク (B 43)、駒出池 (B 29) の池の平遺跡群や四十町歩平 (B 42)、大石 (B 21) があり、河川の合流地点付近の尾根先端に満り久保 (B 54)、満り久保東 (B 57) が位置する。

縄文時代 縄文時代になると、黒曜石原産地に近い池の平遺跡群でも土器が採集されているが、北東に流下する沢伝いの標高 1,100~1,200 m に黒橋 (B 16)、板沢 (B 25)、中松井 (B 26)、石コツ (B 37) 等が並び、それより下流の 900~1,000 m に源左衛門窪 (A 9)、二又 (A 33)、中尾 (A 8)、農林センター (B 41)、一軒家 (B 20)、大石 (B 21) 等が連なる。また、千曲川西岸上位段丘上には、北沢 (A 3)、宮の本 (A 29)、佐久西小学校裏 (A 10)、上野月夜原 (B 5) 等比較的大きな遺跡があり、低位段丘上にも竹の下 (B 6) や封地 (B 7)、ムジナ沢 (B 8)、千ヶ日向 (B 11) がある。

弥生時代 弥生時代の遺跡は 10 か所、縄文時代にくらべると遺跡数は激減する。標高 1,160 m の横道原 (B 28) 以外は、縄文時代から続く北沢 (A 3)、佐久西小学校裏 (A 10)、宮の本 (A 29)、ムジナ沢 (B 8) 等、千曲川段丘上に位置する。

古墳時代 時代別に見て、古墳時代の遺跡数は最も少ない。遺物は、標高 950 m 付近の中尾 (A 8) や塚原古墳周辺の佐久西小学校裏 (A 10)、宮の本 (A 29) で採集されており、千曲川の支流北沢川の北岸に、佐久地域南限の塚畑古墳がある。信濃史料によると、北沢川南岸段丘上には吹上、油畑、金山、釜塚をはじめ 10 数基からなる釜塚古墳群があったという。

古代 奈良・平安時代は、弥生・古墳時代から一転して遺跡数が増加する。また、弥生時代から古墳時代を通じてほとんど遺跡がなかった標高 900 m 以上の中尾 (A 8)、源左衛門窪 (A 9)、二又 (A 33)、一軒家 (B 20)、大石 (B 21) はいうに及ばず、1,000 m 以上の中尾奥 (A 37)、水棚麻畑 (B 22)、中松井 (B 26)、石コツ (B 37) まで遺跡が分布している。

中世 鎌倉時代から室町時代にかけての集落遺跡は弥生時代並みに激減するが、多量の五輪塔が出土した小山寺窟 (A 30) や、明光寺に保管されている暦応三 (1340) 年銘の板碑など、特徴的な遺跡・遺物がある。城館跡は千曲川に臨む段丘端に、北から高野城跡 (A 49)、下畑城跡 (B 47) と下の城跡 (B 48)、権現山砦跡 (B 46)、大石川烽火台 (B 51) が一定の間隔を空けて並ぶ。また、西から流れ込む北沢川中流域に福田城跡 (A 50)、畑地区佐口谷の佐口城跡 (B 49)、石堂川中流域の通城跡 (B 50)、大石川下流域の馬越城跡 (B 52) が、それぞれ西からの侵入を阻むかのように位置する。

(2) 歴史的環境

旧石器時代から縄文時代は、黒曜石を求めて原産地に続く尾根筋、沢筋のいわゆる「黒曜石の道」(藤森 1966) が利用された。大石川上流の池の平遺跡群は、この黒曜石の道を利用する人々が通過点とした遺跡として理解できる。下流の満り久保は、石堂川、入堂川、大石川の合流地点よりやや下った場所にあり、いわば黒曜石ロードの分岐点にあたる。旧石器時代人たちが離合集散する場所だったのだろう。

縄文時代は、黒曜石の原産地に通ずる尾根や沢筋に遺跡が連なる点は旧石器時代と同様だが、これらの遺跡が標高約 1,150 m のラインと 950 m のラインで散開している様子は、連携した山間の小集落が営まれていたとも考えられる。一方、千曲川段丘上の上野月夜原遺跡は、今回の調査では確認できなかったものの、背後に森林地帯を控え、眼下に千曲川を臨む遺跡立地から考えて、佐久西小学校裏遺跡と同様に大規模な集落跡が残されていると期待したい。

黒曜石の利用が減った弥生・古墳時代は、一部を除いて山間部から遺跡が消え、千曲川に沿って小規模な集落が営まれたにすぎないが、律令時代は再び遺跡数が増加する。佐久穂町は、地名や数少ない考古学上の調査成果、自然条件などから「和名類聚抄」記載の佐久郡余戸郷や刑部郷と想定されている。宮の入

(B9)から出土したという伝承がある巖手刀や直近の勝見沢(B13)出土の八稜鏡、北沢(A3)の緑軸陶器、各所の遺跡から出土する花文様の暗文をもつ坏や灰軸陶器は、周辺地域との交流を物語っている。また、奈良・平安時代には、標高1,000mを越える山間部まで利用されている。律令制や荘園制がもたらした生業の多様化・分化・専化や、制度そのものからの逃避など、さまざまな原因があろうが、888(仁和4)年の大洪水もその一因であろうか。奥日影の須恵器窯は、律令制という時代背景の下で営まれたものであろう。八柱川に面した蓬間(B35)からは多量の上鉢が見つかっている。

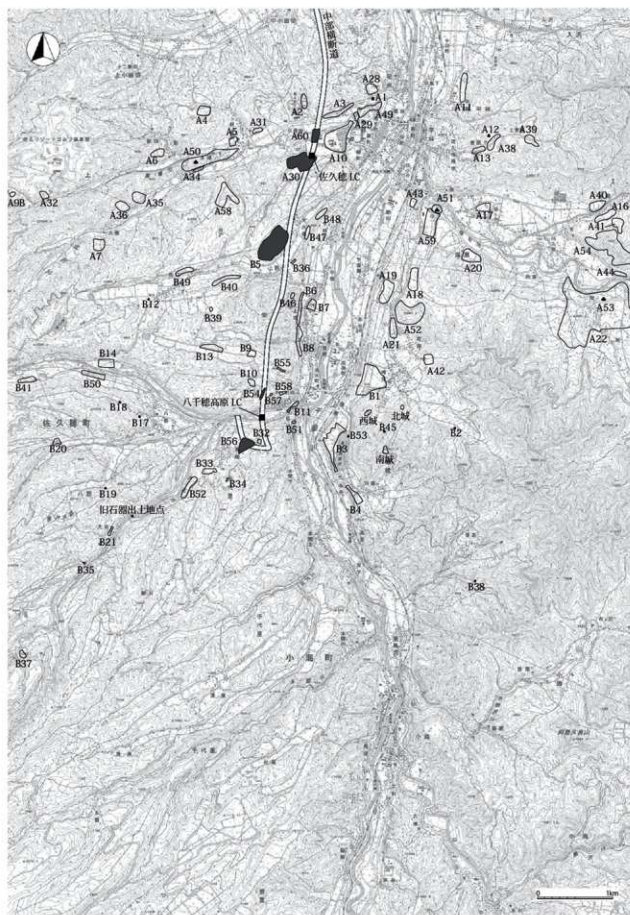
鎌倉時代から南北朝時代を経て室町時代の間は、遺跡数が少なく遺物も限られているため、町内の歴史的環境を探る手掛かりは乏しい。大徳寺文書の1334(建武2)年「伴野庄年貢注文」には、畑物村(畑)、大日向田村(大日向・田村)、余地村(余地)、保間(千代里・本間)、大石(八郡・大石)、岩郡(八郡)、鷹野郷(高野町)といった郷村名が掲載されているため、おそくとも室町時代初期には現代に続く村落の一部が形成されていたことがわかる。小山寺窟の五輪塔群は、津金寺伝承と関連させて鷹野郷やそれを取巻く有力氏族によって構築されたものと推測されているが、いずれにせよ、なぜこの場所なのかという疑問は残る。

14世紀初め頃、伴野庄の領主権を巡って、寺社と国人とが凌ぎを削った様子は、大徳寺文書に詳しい。この時期以降、16世紀後半に徳川氏が北条氏の守る小諸城を攻略するまでのおよそ300年間は、佐久地域全体が大小の戦乱の影響を受けた。佐久穂町内に残る15か所の城館跡は、築造城や廃城の時期が明確なものはないが、この戦乱期に利用されたことは間違いない。千曲川上位段丘面では、奥日影で中世後期にさかのぼる溝跡が見つかっているが、全体的に水田開発は行き届かず、山林と畑が生業の主要な舞台であったと思われる。

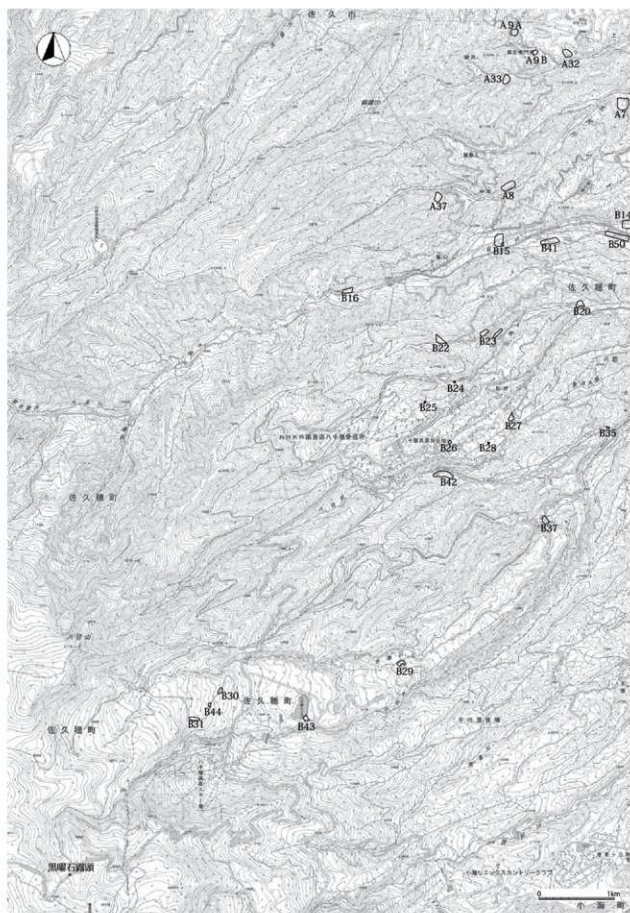
江戸時代の17世紀末から18世紀にかけて、大岳川や大石川を利用した堤や水堰の開削が行われた。これによって千曲川上位段丘面の平坦地が開田され、小山寺窟の周辺や馬越下一帯でも水稲耕作が行なわれるようになったのではないかと推測される。一方、人や物資の往来は佐久甲州街道が中心で、高野町や上畑の宿、市を中心に発達した。近代に入り、県道が整備され佐久鉄道が開通すると、ますます幹線に沿って町は発展した。本書に掲載した5遺跡が位置する上位段丘面一帯は、近世以降現代に至るまで大きな変化が及ぶどころではなく、現況は水田、畑地もしくは原野といった景観を呈していた。近年になり、北沢川流域で新興住宅地や遊休地を利用した公園等が進出し、大石川に沿った通称メルヘン街道は観光用道路として、休日賑わいを見せるようになっていく。

参考・引用文献

- 佐久穂町教育委員会 2011『佐久穂町の文化財』
 佐久町教育委員会 2002『小山寺窟遺跡』佐久町文化財報告書第8集
 佐久町誌発行会 2004『佐久町誌』歴史編一 原始・古代・中世
 信濃史料刊行会 1956『信濃史料』第1巻 上(考古資料編 上)
 藤森栄一 1966『古道』学生社
 八千穂村誌発行会 2003『八千穂村誌』第4巻 歴史編
 八幡一郎 1928『南佐久郡の考古学的調査』



第7図 周辺遺跡分布図(1)



第8図 周辺遺跡分布図(2)

第3章 発掘調査の方法

第1節 発掘作業

当センターでは、県教委の「記録保存を目的とする発掘調査の標準および積算基準」と、当センター作成の「遺跡調査の方針と手順」に即して発掘調査を実施している。

(1) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は下記のとおりである。遺跡記号は調査記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で表した記号である。1文字目は長野県を10分割した地区記号で、北佐久郡・南佐久郡・小諸市・佐久市を示す「D」、2文字目と3文字目は遺跡名のローマ字表記から2文字を選択したものである。各種記録類や遺物注記に遺跡記号を利用している。

奥日影遺跡 (OKUHIKAGE)	: DOH
小山寺窪遺跡 (KOYMATERAKUBO)	: DKM
上野月夜原遺跡 (UENOTSUKIYOHARA)	: DUT
満り久保遺跡 (MARIKUBO)	: DMO
馬越下遺跡 (MAGOESHITA)	: DMT

(2) 遺構名称と遺構記号

遺構についても遺跡記号と同様に、記録の便宜を図るため記号を用いた。遺構名称は調査時に決定するため、遺構の種類・性格に適合しない場合もあるが、主に遺構の形状や特徴で区分した。遺構番号は、時代などに関わらず種類ごと、検出順に付けた。混乱を避けるため、一旦記号・番号を付したものは原則として変更していない。調査の結果、遺構でないことが判明したものについては欠番とした。また、調査段階で遺構番号が付いていなかったものについては、整理段階で新たに付与した。

今回の調査で用いた遺跡記号には、以下の種類がある。

- SB：概ね一辺2mを超える方形、長方形、円形、楕円形の掘込み【堅穴建物跡、堅穴状遺構】
- SK：単独もしくは他の掘込みとの関係がないSBよりも小さな掘込み【土坑、井戸】
- ST：SBよりも小さな掘込みや石が一定間隔で方形、長方形、円形に配置しているもの【掘立柱建物跡、平地式建物跡】
- SD：溝状の掘込み【溝跡、自然流路跡】
- SF：単独で存在し、火を焚いた跡が面的に広がるものおよび炭化物の集中範囲
- SM：方形、円形、もしくはそれらが組み合わさった形の盛上がり【古墳、墳墓、周溝溝、土坑墓、木棺墓もここに含める】
- SQ：遺物が集中する箇所
- SX：その他、性格不明遺構

なお、SB内の柱穴・貯蔵穴などや、STを構成する個々の掘込みにはビット（記述・図を問わず個別に番号を付す場合「P」）を付した。

(3) 調査区(グリッド)の設定と略称

国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点(X = 0.0000, Y = 0.0000)を基準に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これをもとに、調査対象範囲全体をカバーするように調査グリッドを設定し、「大々地区」「大地区」「中地区」「小地区」に区画した(第9図)。

大々地区は、200×200mの区画で、北西から南東へⅠ・Ⅱ・Ⅲ……のローマ数字番号を与えた。

大地区は、大々地区を40×40mの25区画に分割したもので、北西から南東へA～Yのアルファベット番号を与えた。

中地区は、大地区を8×8mの25区画に分割したもので、北西から南東へ1～25のアラビア数字を与えた。遺構測量の基準・単位としたのがこの中地区である。

小地区は、中地区を2×2mの16区画に分割したもので、北西から南東方向へ01～16の算用数字番号を与えた。中地区番号との間にはハイフンを挿入した。

グリッド名の実際の表記においては、誤取りやすさを考え、大々～中地区番号の間にも適宜ハイフンを挿入することがあり、本書の図中でもそうした表記になっている場合がある。グリッド杭の設定は、表土掘削が終了し、遺構検出をほぼ終えた段階で業務委託により実施した。座標値については、発掘調査期間が日本測地系から世界測地系への変換の時期と重なっており、統一性を保つため日本測地系の座標値で統一している。

なお、上記の調査グリッドとは別に、地形や土地区画の状況、調査の進ちょく状況に合わせて調査範囲を任意に分割し、「1区、2区……」等と呼称した遺跡がある。

(4) 表土掘削と遺構の検出

各遺跡では、本格的調査に入る前段階に、遺跡の性格を把握するための確認調査として重機によるトレンチ掘削を実施し、遺構が検出された地点を主体に調査区を拡張した。

トレンチの掘削は重機を使用し、トレンチ調査の所見に基づき、範囲や遺構検出面などを決定した。検出面までの堆積層は重機により掘削し、表土掘削が終了した部分から手作業で掘削面の清掃を行い、遺構を検出した。遺物は上記の地区・グリッド名、出土層位、遺構に関連するものは帰属遺構名をポリ袋に記入して取り上げた。

(5) 遺構の発掘

竪穴建物跡は、埋土観察用のベルトに沿った先行トレンチで床面を確認するとともに、埋土の堆積状況を把握・記録し、層位ごとに埋土を床面まで掘下げ、柱穴、竪、カマド、周溝などの建物内施設の精査・記録を行った。建物内施設を完掘した後は完掘状態を記録し、その後に床面下(掘方)の状況を確認した。

土坑は埋土を半載し、埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。埋土から出土する遺物の状況によっては、埋土上位を段下げ、出土状況を記録してから埋土下位の掘下げへと進んだ。

掘立柱建物跡の柱穴は、掘方全体を掘下げ、柱痕跡を確認し、柱痕跡が断面にかかるように埋土を半載した。埋土の堆積状況を観察・記録した後に完掘した。

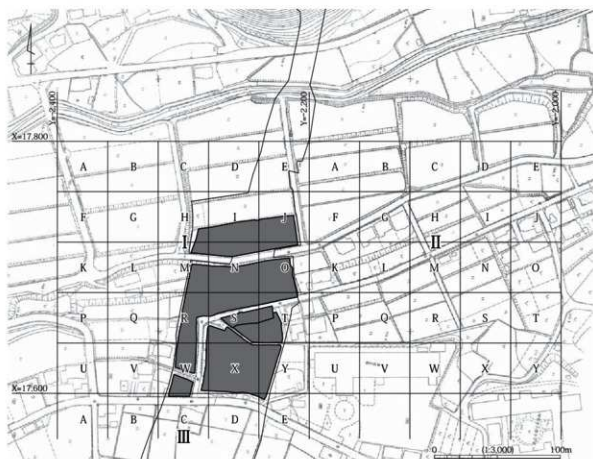
溝跡および自然流路跡は、全体のプランを検出した後、延長方向に直交するベルトを複数か所設定し、それぞれの埋土堆積状況を観察しながら掘下げた。

出土遺物は、出土状況に特徴のあるものは、付番して出土状況図の作成、写真撮影を行い取上げた。

(6) 記録作成

遺構図・土層図は、センター職員およびその指導のもと発掘作業員が作成した。測量基準杭を基準とする簡易遺方測量を基本としたが、遺構実測支援システム(ソフトウェア遺構くんCubic)を用いた測量も一部実施した。遺構図は中地区(8m×8m)単位に区切った割付図や、建物跡などの個別図を作成した。

基準線と地区(グリッド)の設定



大々地区(200×200m グリッド)：Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ ■ 奥門部道路 調査対象地

例：ⅠN18-13グリッドの座標位置

A	B	C	D	E
F	G	H	I	J
K	L	M	N	O
P	Q	R	S	T
U	V	W	X	Y

200m
40m

大地区(40×40m グリッド)：ⅡA…ⅡY

3108-01	3108-02	3108-03	3108-04
3108-05	3108-06	3108-07	3108-08
3108-09	3108-10	3108-11	3108-12
3108-13	3108-14	3108-15	3108-16

8m
2m

小地区(2×2m グリッド)：
ⅡN18-01…ⅡN18-13…ⅡN18-16

01	02	03	04	05
06	07	08	09	10
11	12	13	14	15
16	17	18	19	20
21	22	23	24	25

40m
8m

中地区(8×8m グリッド)：ⅡN01…ⅡN02…ⅡN18…ⅡN25

第9図 調査グリッドの設定と呼称

縮尺は1:20を基本とし、必要に応じて1:10図、1:40図を作成した。調査区・トレンチ配置図、地形図は業務委託を基本とし、一部、遺構実測支援システムを用いてセンター職員および発掘作業員が行った。写真撮影は、6×7フィルムカメラ（マミヤRB/ペンタックス）、35mmフィルムカメラ（ニコンFM2）または35mm相当の一眼レフデジタルカメラ（ペンタックスK-7）を併用して行った。フィルムは、モノクロネガフィルム（フジネオパン100）とカラーリバーサルフィルム（フジクローム100）を使用した。撮影はすべてセンター職員が行い、現像と焼付けは業務委託とした。また、各遺跡では業務委託により遺跡全景の空中撮影を実施した。

(7) 自然科学分析

業務委託により放射性炭素年代測定、熱残留磁化年代測定、樹種同定、黒曜石産地推定、植物珪酸体分析、珪藻分析、花粉分析、火山灰分析を実施した。

放射性炭素年代測定は奥日影遺跡、小山寺窪遺跡、馬越下遺跡において、遺構のより明確な年代推定を行うための資料を得ることを目的として、遺構出土の炭化物・材を対象に実施した。

熱残留磁化年代測定は奥日影遺跡において、須恵器窯跡の年代推定を行う目的で実施した。

樹種同定は奥日影遺跡において、須恵器窯跡から出土した炭化材を対象とし、薪炭材などの種類を同定することを目的に実施した。また、小山寺窪遺跡では埋没過程にある竪穴建物跡と土坑で出土した炭化材の種類を同定するため実施した。

黒曜石産地推定は奥日影遺跡、小山寺窪遺跡から出土した縄文時代の石器および地山に含まれていた黒曜石、満り久保遺跡から出土した旧石器時代の石器を対象に実施した。

植物珪酸体分析・珪藻分析・花粉分析は小山寺窪遺跡において、古環境や土地利用を検討するためのデータを得ることを目的とし実施した。

火山灰分析は満り久保遺跡において、耕作土から出土した旧石器時代の石器群の、本来の出土層層を検討するため、テフラの検出同定と重軽鉱物分析を行うことで堆積層各層のテフラの産状を確認し、堆積層の形成年代について検討した。

第2節 整理等作業

1 遺物の整理

遺物は取上げ単位ごとに台帳登録し、洗浄・クリーニングと注記を行い、材質別に土器・土製品・陶磁器、石器・石製品、金属製品等に大別して整理作業を進めた。

土器・土製品・陶磁器は接合を行いながら、観察と分類、重量の計測等を進め、遺構・遺跡の時期や特徴を示すために報告書への掲載が必要な遺物を抽出し、必要に応じて補強と復元を行った。石器・石製品は観察・分類を行いつつ、大きさや重量の計測を行い、報告書掲載遺物を抽出した。金属製品等は観察・計測を行って、報告書掲載遺物を抽出した。抽出した遺物は遺跡ごと、材質ごとに管理番号を付して遺物管理台帳に登録した。報告書掲載遺物については観察表を作成した。

実測は手実測により、1:1縮尺で埋文センター規格の実測用紙に鉛筆で図化した。縄文土器や須恵器、銭貨は拓本を行った。トレースは、石器・石製品と金属製品等は埋文センターにおいて製図ペンを用いた手トレースを行ったが、土器・土製品・陶磁器については業務委託による描画ソフトIllustratorを用い

たデジタルトレースを実施した。手トレースした遺物図はデジタルスキャンし、デジタルトレースした遺物図と合わせて、Illustratorを用いてデジタル図版データを作成した。

2 記録類の整理

(1) 遺構図類の整理

遺構図面類は原因を台帳に登録するとともに、記載内容を点検・修正しながら整理し、堅穴建物跡など一部の個別図についてはトレースのための2次原因を作成した。修正図や2次原因をもとに、Illustratorを用いてデジタルトレースを行い、個別遺構図、土層図、遺構分布図(全体図)などのデジタル図版データを作成した。

(2) 写真記録の整理

発掘作業で撮影したフィルム写真およびデジタル写真は、遺跡別に写真台帳を作成し、発掘年度、撮影日、撮影方向、内容を記載した。フィルム写真は遺跡別ごと、撮影順にアルバムに収納した。モノクロフィルムはベタ焼きを貼付し、カラーリバーサルフィルムは、35mmはマウントを付け、6×7はマウントを付けずに収納した。デジタル写真はJPEGおよびLAWデータを遺跡ごと、撮影順にハードディスクに記録した。遺物写真撮影は業務委託により実施した。撮影には一眼レフデジタルカメラを使用した。DVD収録の遺物写真は極力カラーデータを用いている。

3 報告書作成と資料収納

(1) 報告書作成

報告書の本格的な編集作業は、2018(平成30)年度に着手した。第1章から第3章に5遺跡全体を通しての調査経緯、地理的・歴史的環境、基本的調査方法についてまとめ、第4章から第8章で各遺跡の報告を行い、第9章に総括を掲載した。第4章から第8章は、遺跡の特徴を理解しやすいよう工夫し、章末に小結を設けた。報告書作成にあたり、2019年3月26日と5月30日の2回、編集会議を行った。会議で指摘を受けた事項について検討を行い、報告書の内容を整備した。

(2) 資料の収納

遺物は遺跡ごと、材質・種別ごとに報告書掲載遺物と非掲載遺物に分けたうえで、出土遺構・グリッド等の地点別にテンバコに収納するとともに、遺物収納台帳に登録した。

実測図類は手実測遺構図・委託測量図、手実測遺物図、委託実測遺物図に通し番号(図面番号)を付けて図面収納台帳に登録し、図面ファイル等に収納した。

写真は発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分け、写真収納台帳に登録し、アルバム(ファイル)に収納した。

デジタルデータについては、センターで作成したデータはハードディスクに記録した。業務委託によるデータは納入時点でCDないしDVDに記録済みである。

第4章 奥日影遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

奥日影遺跡は、南佐久町佐久穂町の旧佐久町高野町地区に所在する（第10図）。この地域は八ヶ岳起源のローム層が厚く堆積した台地で、奥日影遺跡の範囲は台地緩斜面の段丘末端から崖錐、さらに千曲川支流北沢川の最下位段丘におよぶ。調査履歴はなく、2007（平成19）年の中部横断道建設に伴う県教委の試掘調査で遺構・遺物が検出され、町教委が埋蔵文化財包蔵地として登録した。

近隣遺跡の状況は、奥日影遺跡の東側に佐久西小学校裏遺跡があり、佐久町教育委員会の発掘調査で縄文時代後期の土器捨て場や屋外埋蔵、平安時代の堅穴建物跡などが検出された（町教委2001）。また、北沢川の最下位段丘には、国内最大といわれる「北沢の大石棒」が現地に保存されている。奥日影遺跡の南側には小山寺窪遺跡があり、中部横断道建設に伴う埋文センターの発掘調査で、平安時代や中世以降の遺構を検出した（第5章参照）。さらに、埋文センター調査地点の隣接地では佐久町教委が発掘調査を行い、中世の五輪塔群などが検出されている（町教委2002）。

2 調査の概要と経過

奥日影遺跡の発掘調査は2008・2010・2015年度に実施し、調査総面積は11,880㎡を測る（第10図）。

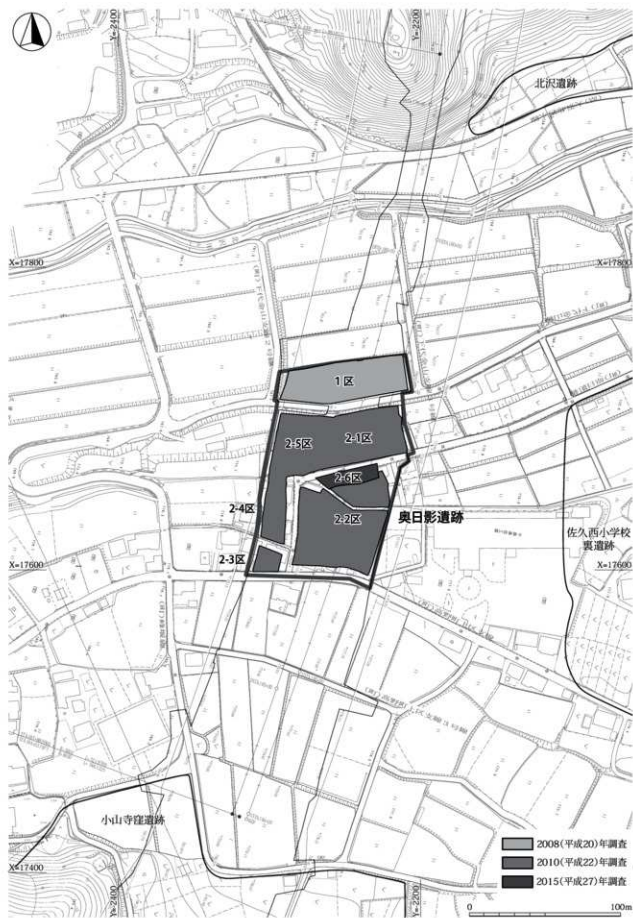
2008年度は、前年度に県教委が試掘調査を実施した再下位段丘部分の1区、面積2,200㎡について本調査を実施し掘立柱建物跡、土坑、溝跡を検出したほか、遺構外からは縄文時代の石器が出土した。2010年度は、2009年度の県教委による試掘調査で被熱した土坑や須恵器の破片が検出された上位段丘およびその崖錐部分の2-1～5区、面積9,420㎡について本調査を実施した。その結果、被熱した土坑は南佐久地域では初見となる奈良時代の須恵器窯跡であることが判明したほか、中世以降の掘立柱建物跡や土坑、溝跡を検出した。2015年度は2-6区、面積260㎡を調査したが、遺構・遺物はなかった。

3 基本層序

基本層序は1区と2-2区で記録したが、両区は距離的に離れているので、1区と2-2区それぞれで説明する（第11図）。

1区の基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる。第Ⅰ層は表土で褐色もしくは暗褐色粘性シルトである。第Ⅱ層は黒色シルト質粘土（Ⅱa層）と、黒褐色シルト質粘土（Ⅱb層）に細分できる。Ⅱa層上面で検出した溝跡が存在する。第Ⅲ層は灰黄褐色砂質粘土で、縄文・弥生時代の土器・石器や中世以降の土器・陶磁器類を含むほか、多くの遺構を本層上面で検出した。第Ⅳ層はにぶい黄褐色～グライ化が進むオリープ黄色粘土である。

2-2区の基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる。第Ⅰ層は表土で、にぶい黄褐色粘性シルトが堆積する。第Ⅱ層は旧耕土の可能性が高いにぶい黄褐色砂混シルトで、調査区西側ではにぶい黄褐色砂混シルト（Ⅱa層）とにぶい黄褐色シルト混砂（Ⅱb層）に細分できる。第Ⅲ層は黒褐色シルト混粘土で、2区は本層



第10図 遺跡範囲・調査区位置図

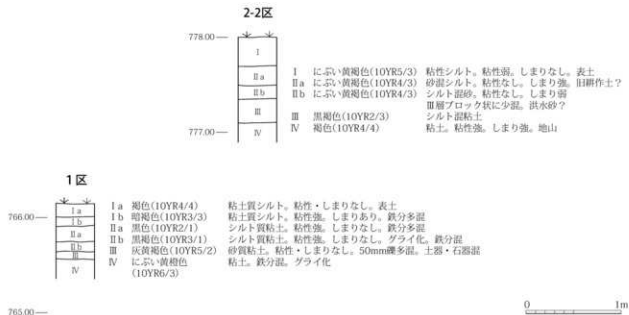
第4章 奥日影遺跡

上面において遺構を検出した。第IV層は褐色粘土である。

参考・引用文献

佐久町教委 2001「佐久西小学校墓遺跡」

佐久町教委 2002「小山寺遺跡」



第11図 土層柱状図

第2節 遺構と遺物

1 概観

本遺跡で検出した遺構は、時期的に奈良時代と平安時代以降に分かれる。奈良時代の遺構は須恵器窯跡で、2-1区のI S 05グリッドに位置し(第12・15図)、標高771~771.8 mの斜面に構築されていた。一方、平安時代以降の遺構は1区と2-2~4区にまとまり掘立柱建物跡、溝跡、土坑、被熱部を検出した(第12・13・14・16~19図)。1区と2-2~4区の間(2-1・5・6区)は、地形的には斜面となり、土坑が散在的に分布する以外に遺構は存在しない。

遺物は奈良時代の窯跡から出土した須恵器、中世以降の土器・陶磁器類、金属製品、石製品のほか、遺構の時期としては存在しない縄文時代中期後葉から後期前葉の土器と石器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が少量出土した。

2 遺構

検出した遺構は須恵器窯跡1基、掘立柱建物跡3棟、溝跡25条、土坑168基、被熱部1基である。以下、遺構ごとに概観する。

(1) 須恵器窯跡

SK 222 (第20図、P L 1)

位置：2-1区。I S 05グリッド。検出：2009(平成21)年度の県教委による試掘調査で確認し、2010年度に本調査を実施した。重複関係：なし。埋土：8層堆積で、黒褐色・暗褐色・褐色シルト混粘土などが堆積する。この内、4層は被熱で硬化・変色した壁や天井の崩落を含み、5・6層は多量の炭・炭化材を含むほか、多くの遺物が出土した。前庭部から燃焼部にかけて採取した炭No 3~8の樹種同定を実施した結果、全てコナラ属コナラ亜属コナラ節であった(第3節参照)。形状・規模等：半地下式天井架構式の構造で全長6.04 m、主軸方向はN47°Eである。焼成部は排煙口方向が削平され、残存部で長さ2.16 m、幅1.2~1.3 mを測り、排煙口方向へ約20度の緩い登り傾斜で立上る。幅は同一幅で移行し、壁から底面にかけてほぼ全面が被熱する(A-B・C-D・G-H断面図のトーン範囲)。燃焼部は長さ1.72 m、幅1.3~2.2 mで、焼成部との境付近から前庭部に向かって広がる。燃焼部奥側の底面から長さ120 cm、幅95 cm、深さ20 cmの楕円形を呈する土坑を検出した。前庭部は端部が削平され、プランが不明確になる。残存部の長さは2.16 m、幅1.64~2.48 mで、燃焼部との境付近の幅が最も広い。燃焼部から前庭部にかけての底面はほぼ平坦に移行し、端部の壁が約12度の角度で立上る。遺物：燃焼部奥側の土坑付近(第23図14)と、前庭部(第23図2・6・17・18)で多くの須恵器が出土した。須恵器は胎土に黒曜石を含む点の特徴であり、歪みや亀裂を生じ、表面が弾け跳ぶ不良品が多い(第2節3(1)参照)。時期：須恵器の時期により、8世紀初頭から第2四半期と推測する。また、炭No 3・6・8を試料とする放射性炭素年代測定(AMS測定)と残留磁化測定を実施しており、放射性炭素年代測定の結果は須恵器よりも古く整合しないが、残留磁化測定では須恵器の年代と整合的な年代が推定された(第3節参照)。

(2) 掘立柱建物跡

ST 01 (第21図、P L 1)

位置：1区。I J 18・19・23・24グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。発掘当初はP 1~12を柱穴としたが、調査途中でP 13~16を追加しSK 64をP 13、SK 65をP 14、SK 66をP 15、SK 67

をP16に振替えた。重複関係：SD06に切られる。埋土：単層でP1～13は黒色粘土が堆積する。土坑から振替えたP14はぶい黄褐色粘土が、P15・P16は黒褐色粘土が堆積する。柱痕が明確なものは存在しない。形状・規模等：平面形は長方形を呈し、等高線と平行に近い東西方向に長軸をもつ。桁行7.8m、梁行4.8mを測る総柱建物で、P10～12列の西側延長部分に柱穴を確認していないが、建物の構造上存在したものと考える。その場合、柱間数は桁行・梁行ともに3間である。しかし、P6～15列とP3～16列およびP9～13列の間隔はほぼ等しいが、P3～16列とP10～12列の間隔はそれよりも狭いので、3間×2間で北側に庇が付くとみることができよう。P14はP15に隣接し、P13～16列の線上にあるため柱穴としたが、東側のP9～12列と柱穴の数が合わず、対応する柱穴もないことから不明確である。P4・5はやや大形の柱穴で、P7～10列とP8～11列の線上からはややずれる。柱穴の形状は円形・不整形円形が多く方形が若干あり、大きさは直径(軸)24～36cmだが、P4・9は40cm、P5は44cm、P16は48cmを測る。柱間の距離は、不明確のP14を除けば0.96～2.0mである。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、SD06に切られるので中世には下らないと推測する。

ST02 (第22図、PL1)

位置：1区。I12・23グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。発掘当初は全ての柱穴をSKで登録したが、調査途中で掘立柱建物跡と判明したことによりSK30をP1、SK38をP2、SK40をP3、SK39をP5、SK55をP6、SK32をP7、SK34をP8、SK36をP9に振替えた。その後、P4を追加した。重複関係：なし。埋土：P1・2は掘方の残存状態が悪く不明。P3～5・7・9は単層で、P3～5・7は黒色粘土が、P9は黒褐色粘土が堆積する。P6・8は2層で、P6は黒色粘土と褐色シルト質粘土が、P8は黒褐色シルト質粘土と性格不明の土層(記録なし)が堆積する。柱痕は、P2の掘方残痕に認められる。形状・規模等：平面形は長方形を呈し、等高線と平行に近い東西方向に長軸をもつ。桁行5.7m、梁行4.0mを測る総柱建物で、柱間数は桁行・梁行ともに2間である。梁行方向の中央にあるP4・6は、P1～7列およびP3～9列の線上からやや外側へずれる。柱穴の形状は円形が多く方形が若干あり、大きさは直径(軸)24～40cmを測る。柱間の距離は1.76～3.36mだが、桁行方向ではP2～3、P5～6、P8～9が1.88～2.32m、P1～2、P4～5、P7～8が3.12～3.36mと前者の方が狭い。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

ST03 (第22図、PL1)

位置：2～2区。IX11・12グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出。発掘当初は全ての柱穴をSKで登録したが、調査途中で掘立柱建物跡と判明したことによりSK84をP14、SK85をP8、SK87をP4、SK88をP2、SK89をP6、SK90をP11、SK91をP12、SK92をP7、SK93をP10、SK94をP1、SK116をP3、SK117をP5、SK124をP13、SK125をP9に振替えた。重複関係：なし。埋土：黒褐色・暗褐色・褐色粘土が堆積する単層のものが多く、P1の2層、P5の6層、P13の16層は柱痕の可能性が高く、P7は2重の掘方であることから2本柱と考える。形状・規模：平面形は長方形を呈し、等高線に対して直交に近い北東から南西方向に長軸をもつ。桁行4.08m、梁行3.36mを測る総柱建物で柱間数は桁行4間、梁行2間である。P6～8列は、P1～5列・P9～14列よりも柱穴が1基少ない。P13はP14に近接し、P5～14列の線上付近に位置することから本建物跡の柱穴としたが、対応する柱穴がなく、P13を柱穴に含めるとP1～9列よりも数が多くなるので不明確である。柱穴は、全体的に柱列の線上に揃わない傾向が認められる。柱穴の形状は円形が多く方形が若干あり、大きさは直径(軸)16～52cmを測るが、25cm前後のものが多く、柱間の距離は、不明確なP13を除き0.48～1.92mである。遺物：P1から鉢1点(第24図15)が出土した。時期：時期決定の根拠がなく不明確であるが、周辺に中世と推測する土坑が分布するので中世となろうか。

(3) 溝跡

溝跡個別の詳細は第7表に示したので、ここでは調査区ごとに溝跡を概観する。

1区ではSD 01～07を検出した(第13・14図)。SD 01～03は第Ⅱ層上面で検出した一帯の溝跡で、IM 04・05、IN 01・04・06～09グリッドに位置する。等高線に対して平行に近い方向へ伸び、平面形は緩やかな弧状を呈する。時期は不明だが、検出面の違いとSD 03がSD 05を切る点から、SD 04～06よりも新しい。SD 04～07は第Ⅲ層上面で検出した溝跡で、SD 04・05はIN 01・02・06・07グリッド、SD 06はIJ 13・14・18・23グリッド、SD 07はIJ 17・18グリッドに位置する。SD 04・05・07は等高線に対して平行に近い方向もしくは平行し、SD 06は直交してIJ 18グリッドで平行に近い方向へ曲がる。各溝跡の時期は不明だが、SD 06は土師器甕の破片が出土したので平安時代の可能性があり、同一面で検出したSD 04・05にもその可能性がある。また、同一面ではST 01・02および多数の土坑を検出しており、SD 04～06と同時期の遺構が存在するものと考えられる。SD 07は、埋土の性質がほかの溝跡とは異なり、近世の陶磁器破片が出土したので近世以降であろう。

2区では第Ⅳ層上面において、2-2区でSD 14・17・18を、2-2・6区でSD 11・12・15・16・25 a・b・26・28～30を、2-3区でSD 08・09を、2-4区でSD 21～24を検出した。

2-2区ではSD 14・17・18がIX 6・11・16グリッドに位置する(第16・17図)。SD 14は等高線に対して直交するが、溝跡とするには長さが短い。SD 17・18は等高線に対して平行する。SD 17・18の北側からIX 06グリッドにかけて、SD 14のほかST 03や多数の土坑が分布し、SD 14・17・18と同時期の遺構が存在するものと考えられる。また、SD 17・18が切合うことから、遺構は2時期のものを含むのであろう。時期は不明だが、SD 14の周辺で検出したSK 105・107・142・154から青磁碗(PL 12-1・2)やかわらけおよび銭貨(第24図I-10)が出土したので、SD 14・17・18も13世紀もしくは中世と推測する。ただし、SD 18はSD 17を切るのでSD 17よりは新しい。

2-3区のSD 08はIW 22～24グリッドに位置し、等高線に対して平行する(第17図)。時期は、出土した古瀬戸四耳壺(PL 12-3)の時期により15世紀と考える。SD 09はIW 17・18グリッドに位置し(第17図)、等高線に対して直交するが時期は不明である。

2-4区のSD 21はIR 18グリッドに位置し(第16図)、等高線に対して直交するが、時期は不明である。SD 22～24はIR 19・24グリッドに位置する(第16図)。SD 22・23は一帯の溝跡で等高線に対して平行し、IR 19グリッドで直交方向へ曲がる。また、SD 23の西側60～80cmの位置にSD 24が平行する。時期は、SD 23・24で出土した内耳土器(PL 12-7・8)や銭貨(第24図12・13)の時期により15世紀と考える。

2-2・6区では溝跡がIS 20・25、IT 16・21、IX 05・10、IY 01・06・07・11・12・16グリッドに纏まる傾向がある(第18・19図)。SD 11・25 a・b・26・28は等高線に対して直交し、SD 12・15・16・29・30は平行に近い方向もしくは平行する。SD 25 a・bは2条の溝跡が同じ場所で切合い、その東側の5.5～5.7mの位置にSD 26が平行する。また、SD 25 a・bと直交する方向でSD 29・30が切合う。時期は不明確だがSD 12では銭貨(第24図11)が出土し、SD 25 a・bではかわらけ(PL 12-9～11)と銭貨(第24図14)が出土したので、遺物の時期により中世もしくは13世紀と考える。さらに、SD 30はSD 25 aに切られるので13世紀以前、SD 29はSD 25 a・bを切るので13世紀以降となろう。

(4) 土坑

土坑は168基と数が多いので、個別の詳細を第8表に示した。土坑は1区、2-2区のIS 21グリッド付近とIW 10、IX 06・07・11・12・16・17・21・22グリッド付近の3か所に纏まる。

第4章 奥日影遺跡

第7表 溝跡一覧表

SD	地区	グリッド/検出面	長さ	幅	深さ	断面形	出土遺物	形状等	備考
01	1	IM04・05 第Ⅱ層上面	4.2 m 以上	34~54 cm	10cm	U字状	縄文後土器 破片(混入)	等高線と平行に近い方向へ直線的に延びる	SD02・03と一帯の溝跡。平安以降か
02	1	IM05, IN01・06 第Ⅱ層上面	7 m	40~82 cm	8 cm	U字状	黒曜石剥片 (混入)	等高線と平行に近い方向へ直線的に延びる	SD01・03と一帯の溝跡。平安以降か
03	1	IN06~09 第Ⅱ層上面	25 m 以上	60cm	20cm	U字状	なし	等高線と平行に近い方向へ直線~緩やかな弧状に延びる	SD01・02と一帯の溝跡。SD05を切る。平安以降か
04	1	IN01・02 第Ⅲ層上面	3.3 m	24~52 cm	28cm	U字状	時期不明の土 器破片	等高線と平行に近い方向へ弧状に延びる	SD05と対向する。平安時代か
05	1	IN07 第Ⅲ層上面	2.1 m 以上	60cm	40cm	U字状	なし	SD03と重複する範囲が広く詳細不明	SD04と対向する。SD03に切られる。平安時代か
06	1	IJ13・14・18・23 第Ⅲ層上面	17.5 m 以上	32~76 cm	6~12 cm	U字状	平安時代の土 師器薬破片	等高線と直交方向へ直線的に延び、IJ18グリッドで平行に近い方向へ曲がる。IJ14グリッドで、再び直交方向に曲がり、プランが不明確となる	ST01を切る。平安時代か
07	1	IJ17・18 第Ⅲ層上面	10.5 m	30~40 cm	10~16 cm	U字状	近世の陶磁器 破片	等高線と平行方向へ直線的に延びる	近世以降か
08	2-3	IW22・23・24, IIIC02・03・04 第Ⅳ層上面	16 m 以上	4 m	80~90 cm	U-V 字状	古瀬戸四耳形 破片、横刃形 石器(混入)	等高線と平行方向へ直線的に延びる。東西両側、南側の広い範囲が調査区外にある	15世紀か
09	2-3	IW17・18 第Ⅳ層上面	5.8 m 以上	36cm	20~25 cm	V字状	なし	等高線と直交に近い方向で直線的に延びる	
11	2-2	IY11・16 第Ⅳ層上面	5.5 m	45~80 cm	20cm	U字状	石蔵(混入)	等高線と直交方向へ直線的に延びる。中央付近が蛇行する	
12	2-2	IX10, IY06 第Ⅳ層上面	10.4 m	30~160 cm	5~27 cm	U字状	棉状鉄製品 、銭貨、紙石、 黒曜石剥片 (混入)	等高線と平行方向へ直線的に延び、東側で直交方向に短く曲がる	中世か
14	2-2	IX06 第Ⅳ層上面	1.8 m	14~40 cm	5~8 cm	U字状	両極石器 (混入)	等高線と直交に近い方向へ短く延びる	中世か
15	2-2	IY11・12 第Ⅳ層上面	5.5 m	40~80 cm	6 cm	U字状	なし	等高線と平行に近い方向へ直線的に延びる	
16	2-2	IY07 第Ⅳ層上面	7 m 以上	36~132 cm	10~12 cm	クワイ状	なし	等高線と平行に近い方向へ直線的に延び、途中で等高線と直交方向に曲がる	
17	2-2	IX11・16 第Ⅳ層上面	4.9 m 以上	45~50 cm	7~12 cm	U字状	なし	等高線と平行方向へ直線的に延び、SD18との重複部分が途切れる	SK205・206を切り、SD18に切られる。中世か
18	2-2	IX16・17 第Ⅳ層上面	3.7 m	34~50 cm	5~12 cm	U字状	なし	等高線と平行に近い方向で直線的に延びる	SD17を切る。中世か
21	2-4	IR18・23 第Ⅳ層上面	3.3 m 以上	30~42 cm	20cm	U字状	なし	等高線と直交する方向で直線的に延びる	
22	2-4	IR19 第Ⅳ層上面	2.4 m 以上	60cm	20cm	U字状	黒曜石剥片 (混入)	等高線と直交方向へ直線的に延びる	一帯の溝跡。15世紀か
23	2-4	IR19・24 第Ⅳ層上面	9 m 以上	70~80 cm	20cm	U字状	内耳土器破片	等高線と平行に近い方向で直線的に延びる	

SD	地区	グリッド/検出面	長さ	幅	深さ	断面形	出土遺物	形状等	備考
24	2-4	IR19・24 第IV層上面	10.6 m 以上	26-94 cm	18cm	U字状 タラシ状	銭貨、釘、内 耳土器破片	等高線と平行に近い方向で直 線的に延びる	SD23に平行する。 15世紀か
25a	2-2・6	IS20・25、IT16、 IX05・10 第IV層上面	29.2 m 以上	40-130 cm	22-26 cm	U字状 V字状	かわらけ、銭 貨、石織未装 品・泥岩割片 (混入)	等高線と直交方向へ直線的に 延びる	SD25a・bが切合い、 25aが25bを切る。 25aはSD30を切り、 25a・bはSD29に切 られる。SK254との 新旧関係は不明。13 世紀か
25b			25.2 m 以上	65-70 cm	10-15 cm	U字状			
26	2-2・6	IT16・21、IV01 第IV層上面	14.8 m 以上	32-132 cm	20cm	U字状	打製石斧(混 入)	等高線と直交方向へ直線的に 延びる。2か所で途切れる	SD25a・bと平行す る
28	2-6	IT11・16 第IV層上面	2.5 m	40-80 cm	12cm	U字状	なし	等高線と直交する方向で直線 的に延びる	
29	2-6	IS20、IT16 第IV層上面	7.4 m	40-60 cm	10cm	U字状	なし	等高線と平行する方向で直線 的に延びる	SD25a・bを切る。 13世紀以降か
30	2-6	IT16 第IV層上面	2.6 m 以上	40-60 cm	12cm	U字状	なし	等高線と平行に近い方向で直 線的に延びる	SD25a・bに切られ る。13世紀以前か

1区ではST 01・02、SD 04～07とともに第Ⅲ層上面で土坑を検出した(第13・14図)。ST 02の南東部から西部にかけて、比較的多く認められる。性格は不明だが、掘立柱建物跡の柱穴と同一形状・規模で柱痕を残すものが存在するため、把握しきれなかった掘立柱建物跡の柱穴を含むものと推測する。また、近世以降の可能性が高いSD 07を除くSD 04～06やST 01・02と同時期のものが存在すると考える。土坑の時期は不明だが、同一面のSD 06が平安時代の可能性があることから平安時代となろうか。

2-2区のI S 21グリッド付近では、第IV層上面で土坑を検出した(第16図)。性格は不明だが、掘立柱建物跡の柱穴と同一形状・規模で柱痕を残すものがあることから、把握しきれなかった掘立柱建物跡の柱穴を含むと推測する。時期は、かわらけ(PL 12-13～15)が出土したSK 194・199・221は13世紀と考えるが、そのほかは不明である。土坑の西側には15世紀と推測するSD 22～24が、東側にはやや離れてはいるが13世紀と推測するSD 25 a・bが位置し、検出面でかわらけが出土したことを考慮すれば、中世とすることもできよう。

2-2区のI W 10、I X 06・07・11・12・16・17・21・22グリッド付近では、SD 14・17・18やS T 03とともに第IV層上面で土坑を検出した(第16・17図)。土坑はI X 06グリッドに多く、南側ほど希薄となる。性格は不明だが、把握しきれなかった掘立柱建物跡の柱穴を含むと推測する。時期は、青磁碗(PL 12-1・2)が出土したSK 105・142とかかわらけが出土したSK 154は13世紀で、ほかは不明である。また、ST 03やSD 14・17・18と同時期の土坑が存在し、SD 17とSD 18、SD 17とSK 205・206などの重複から2時期以上の土坑が存在すると考える。なお、I X 06グリッドで検出したSK 107では、銭貨10点が纏まって出土した(第24図参照)。SK 107は、SK 108に切られるので詳細は不明だが、平面形は円形もしくは楕円形で長軸32cm以上、短軸32cm、深さ38cmを測る。断面形は柱穴状を呈し、掘立柱建物跡の柱穴の可能性もある。本遺跡では、ST 03のP 1でも釜1点(第24図15)が出土しており、この2例は柱穴もしくは柱穴状の土坑に金属製品を埋納した事例として注目したい。

(5) 被熱部

S F 01 (第19図)

位置：2-2区。I Y 21グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出。重複関係：なし。形状・規模等：直径15cm、厚さ(被熱範囲)2cmの円形を呈する被熱部周辺に50×30cmの範囲で炭が広がる。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

第4章 奥日影遺跡

第8表 土坑一覧表

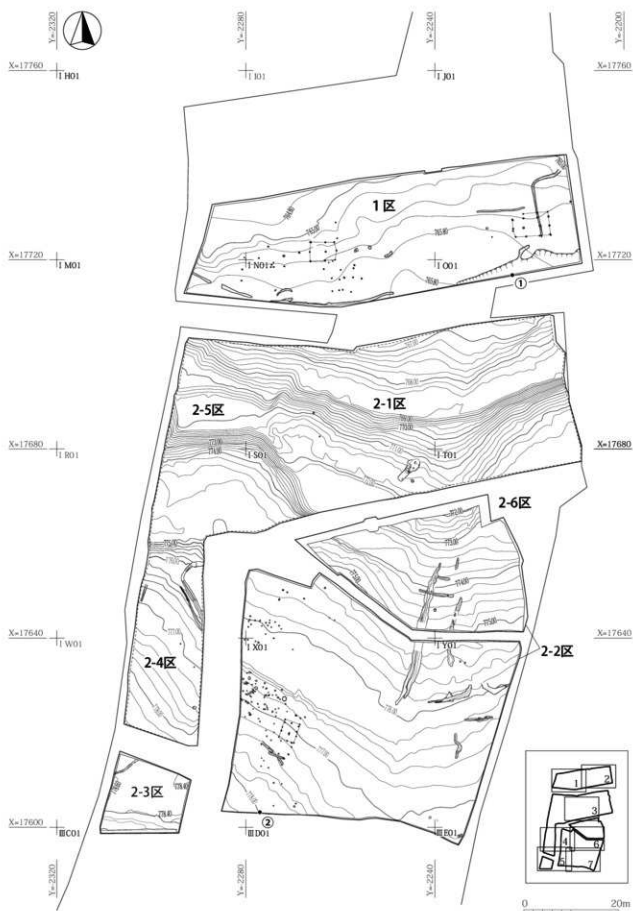
長軸の()は残存値を示す

番号	位置		平面形	規模 (cm)			出土遺物	重複関係	備考
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			
002	1	1 N 01	楕円形	44	27	15			
006	1	1 N 03	円形	24	22	17			
007	1	1 M 05	長方形	28	22	34			
011	1	1 N 03	方形	22	22	19			柱痕有
012	1	1 N 03	円形	23	20	17			
015	1	1 N 03	方形	28	24	23			
017	1	1 H 25	不整形	18	17	26			
018	1	1 I 21	楕円形	28	22	42			
020	1	1 N 01	不整形	24	24	21			
021	1	1 N 01	円形	28	27	14			
022	1	1 N 01	円形	20	19	26			
023	1	1 N 01	楕円形	29	20	18			
024	1	1 I 21	円形	28	28	29			
025	1	1 I 21・22	円形	42	40	30			
026	1	1 N 01・02	長方形	28	22	36			
027	1	1 I 22	方形	32	31	23			
033	1	1 N 03	円形	24	24	19			柱痕有
035	1	1 N 03	円形	16	16	34			
041	1	1 I 23	円形	20	20	12			
042	1	1 I 23	円形	22	20	18			柱根(杭)残存
044	1	1 I 23	不整形	88	67	24			
045	1	1 N 03	不整形	26	22	8			
046	1	1 I 24	楕円形	67	62	9			
048	1	1 M 05	円形	30	26	21			
049	1	1 N 03	楕円形	22	18	24			
050	1	1 N 03	不整形	37	24	25			
051	1	1 N 03	楕円形	28	22	28			
053	1	1 N 03	円形	29	26	24			
054	1	1 N 04	方形	28	26	12			
056	1	1 N 03	円形	16	16	26			
057	1	1 I 24	不整形	190	54	19			溝状を呈する
061	1	1 J 22	長方形	22	18	16			
062	1	1 J 22	長方形	48	40	25			
070	1	1 J 19	楕円形	38	26	14			
072	1	1 N 03	楕円形	27	19	27			
074	1	1 N 03	不整形	30	30	15			
075	2-2	1 X 16	円形	20	20	16			
076	2-2	1 X 16	円形	26	22	15			
077	2-2	1 X 16	円形	17	16	18			
078	2-2	1 X 16	円形	24	21	17			
079	2-2	1 X 16	円形	20	20	26			
080	2-2	1 X 22	楕円形	44	36	14			
081	2-2	1 X 16	円形	30	26	29			
082	2-2	1 X 12	円形	23	20	44			
083	2-2	1 X 22	楕円形	32	24	20			
086	2-2	1 X 11	円形	22	18	23			
095	2-2	1 X 11	円形	20	18	22			
096	2-2	1 X 06	方形	22	22	35			
097	2-2	1 X 11	楕円形	24	16	17			
098	2-2	1 X 06・11	不整形	40	40	22			
099	2-2	1 X 06	楕円形	32	24	20			
100	2-2	1 X 11	円形	20	20	33			
102	2-2	1 X 12	不整形	28	24	22			
103	2-2	1 X 06	円形	20	17	16			
104	2-2	1 X 06	円形	24	21	50			
105	2-2	1 X 06	長方形	38	28	41	青磁 (P L 12-1)		

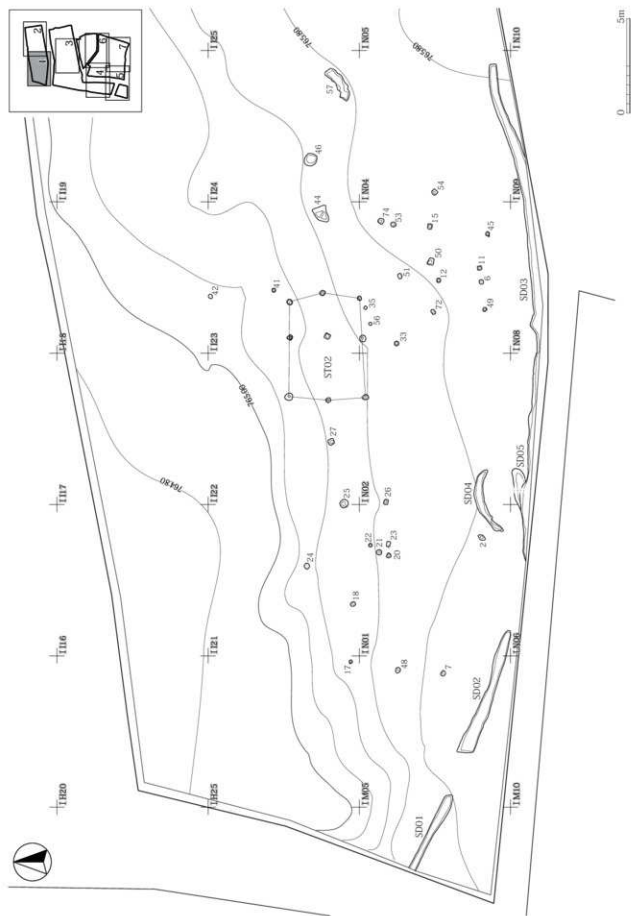
番号	位置		平面形	規模 (cm)			出土遺物	重複関係	備考
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			
106	2-2	I X 16	方形	30	28	37			
107	2-2	I X 06	楕円形?	(32)	32	38	銭貨10点 (第24図、P.L.12)	S K 108 に切られる	
108	2-2	I X 06	円形	22	20	42		S K 107 を切る	
110	2-2	I X 21	楕円形	26	20	18			
111	2-2	I X 17	楕円形	36	26	44			柱直有
112	2-2	I X 11	円形	28	26	26			
113	2-2	I X 07	楕円形	22	18	21			
114	2-2	I X 12	楕円形	34	28	22			
115	2-2	I X 12	円形	26	24	34			
118	2-2	I X 11	不整楕円形	32	22	19			
119	2-2	I X 06	方形	20	20	35			
120	2-2	I X 06	円形	20	18	22			
121	2-2	I X 06	円形	24	21	20			
122	2-2	I X 06	円形	20	20	25			
123	2-2	I X 06	円形	22	20	36			柱直有
126	2-2	I X 11	円形	28	24	40			
127	2-2	III E 01	円形	54	46	25		S K 128 を切る	
128	2-2	III E 01	楕円形	(68)	50	24		S K 127 に切られる	
129	2-2	I X 25	円形	50	44	20			
130	2-2	I W 15	楕円形	20	16	18			
131	2-2	I W 10, I X 06	楕円形	26	20	37			
132	2-2	I W 10	方形	26	22	39			
133	2-2	I X 06	円形	30	26	35			
134	2-2	I X 06	円形	24	24	14			
135	2-2	I X 06	円形	30	26	31			
136	2-2	I X 06	楕円形	38	26	21			柱直有
137	2-2	I W 10, I X 06	楕円形	30	24	40			
138	2-2	I X 06	楕円形	24	18	17			
139	2-2	I W 10	円形	24	22	29			柱直有
140	2-2	I X 06	方形	22	22	24			
141	2-2	I X 06	円形	20	18	19			
142	2-2	I W 10	不明	(46)	38	36	青磁 (P.L.12-2)		調査区外へ続く
143	2-2	I X 06	円形	28	24	26			
144	2-2	I X 06	円形	27	25	23			
145	2-2	I X 06	円形	22	22	24			
146	2-2	I X 06	楕円形	30	20	28			
147	2-2	I X 06	円形	28	26	42			
148	2-2	I W 10	不整円形	28	28	39			
149	2-2	I X 06	楕円形	66	48	25			
150	2-2	I X 06	不整円形	22	20	19			
151	2-2	I X 06	楕円形	16	12	19			
152	2-2	I X 06	楕円形	28	22	40			柱直有
153	2-2	I X 01	楕円形	28	20	33			柱直有
154	2-2	I X 01	長方形	44	36	47	かわらけ		
155	2-2	I X 06	長方形	20	16	39			
156	2-2	I X 06	楕円形	36	28	38			
157	2-2	I X 06	楕円形	38	28	21			
158	2-2	I X 06	長方形	36	30	36			
159	2-2	I X 06	不整円形	20	18	22			
160	2-2	I X 06	長方形	28	22	47			
161	2-2	I X 01	方形	20	20	14			
162	2-2	I X 06・07	楕円形	98	78	13			
164	2-2	I X 06	不整円形	20	20	18			
165	2-2	I X 06	円形	24	24	32			
166	2-2	I X 06	不整円形	40	40	27			
167	2-2	I X 06	不整形	47	36	32			
169	2-2	I W 10, I X 06	円形	44	38	60			

第4章 奥日影遺跡

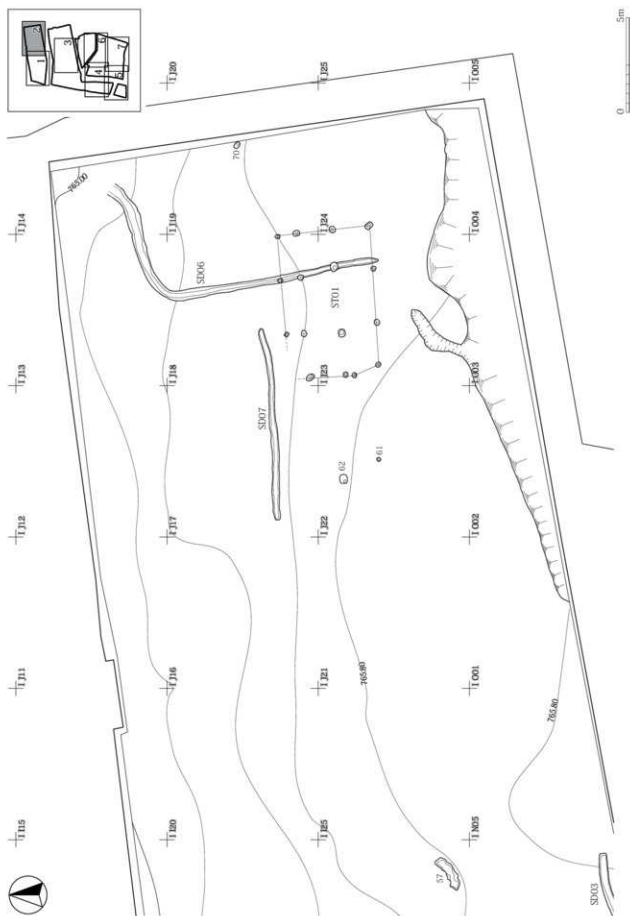
番号	位置		平面形	規模 (cm)			出土遺物	重複関係	備考
	地区	グリッド		長軸	短軸	深さ			
170	2-2	I X 06	方形	32	30	21			
171	2-2	I W 10	不整形	25	17	19			
172	2-2	I W 10, I X 06	楕円形	28	22	30			
173	2-2	I X 06	円形	60	58	20			
174	2-2	I S 21	円形	22	20	20			柱痕有
175	2-2	I X 11	円形	19	18	25			柱痕有
176	2-2	I X 06	楕円形	22	18	28			
177	2-2	I X 07	不整形	30	26	28			
178	2-2	I X 06	不整形	26	22	33			
180	2-2	I S 21	円形	28	26	31			
181	2-2	I S 21	方形	20	20	30			柱痕有
184	2-2	I S 21	円形	26	24	17			
185	2-2	I S 21	円形	26	23	24			
186	2-2	I S 21	円形	23	23	35			
187	2-2	I S 21	楕円形	32	26	33			
188	2-2	I X 06	楕円形	26	21	37			
189	2-2	I W 05	楕円形	32	22	22			
190	2-2	I X 01	円形	28	26	23			
191	2-2	I X 01	楕円形	28	20	15			
192	2-2	I X 01	楕円形	40	26	28			
193	2-2	I S 21	円形	22	20	18			
194	2-2	I S 21	円形	26	22	34	かわらけ (P L 12-13)		
195	2-2	I S 21	方形	26	22	28			
196	2-2	I S 21	円形	30	30	22			
197	2-2	I S 21	楕円形	26	20	38			
198	2-2	I X 11	楕円形	32	22	49			
199	2-2	I S 21	楕円形	37	22	26	かわらけ (P L 12-14)		柱痕有
200	2-2	I S 21	円形	30	30	32			
201	2-2	I S 21	楕円形	34	22	15			
202	2-2	I S 21	円形	22	22	19			
203	2-2	I S 21, I X 01	方形	26	22	17			
205	2-2	I X 16	方形	22	22	19		S D 17 に切られる	
206	2-2	I X 11	円形	25	25	26		S D 17 に切られる	
207	2-2	I X 11	楕円形	24	18	21			
214	2-2	I S 23	円形	20	18	34			
215	2-2	I S 23	円形	18	18	27			
217	2-2	I X 02	楕円形	22	18	19			
218	2-2	I Y 01	楕円形	38	27	29			
219	2-2	I Y 01	円形	26	24	21			
220	2-2	I X 06	円形	18	16	60			
221	2-2	I S 21	楕円形	22	18	27	かわらけ (P L 12-15)		
228	2-1	I N 22	円形	26	26	19			
230	2-1	I N 22	楕円形	42	34	38			
238	2-4	I W 04	円形	24	24	14			
241	2-4	I W 04	楕円形	24	20	13			
242	2-4	I W 09	楕円形	78	56	21			
243	2-2	I S 16・21	円形?	(26)	26	37		S K 250 に切られる	
245	2-2	I S 16・17	円形	30	28	33			
246	2-2	I S 17	円形	30	30	18			
247	2-2	I S 17	方形	32	30	40			柱痕有
248	2-2	I S 18	円形	40	34	49			
250	2-2	I S 16	楕円形	20	16	26		S K 243 を切る	
253	2-2	I S 25, I T 21	楕円形	60	49	37			
254	2-2	I S 20	方形	20	20	16		S D 25 a と重複する が新旧関係は不明	
256	2-2	I T 16	楕円形	23	17	21		S D 29 と重複するが 新旧関係は不明	



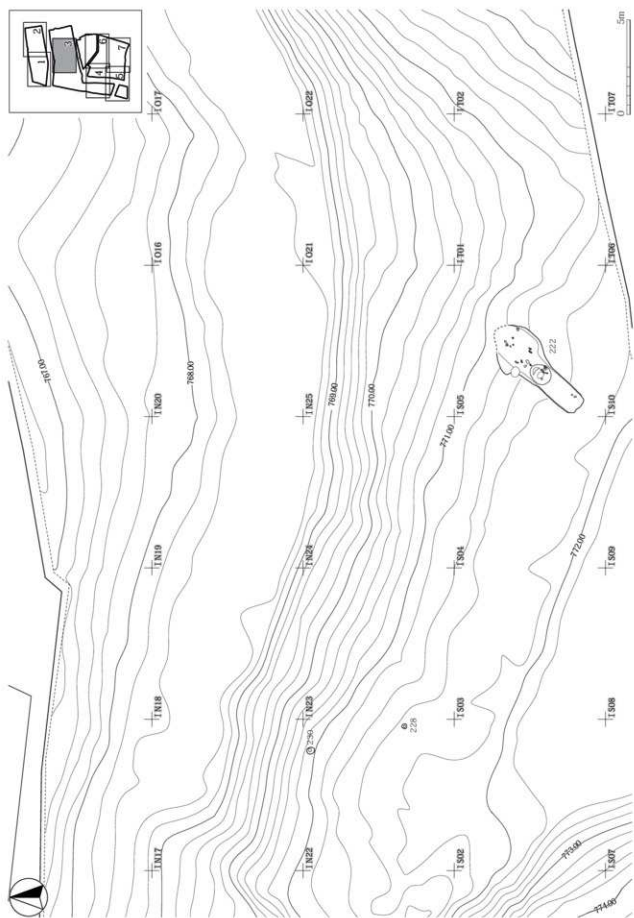
第12図 遺構分布全体図



第13図 遺構分布部分拡大図(1)



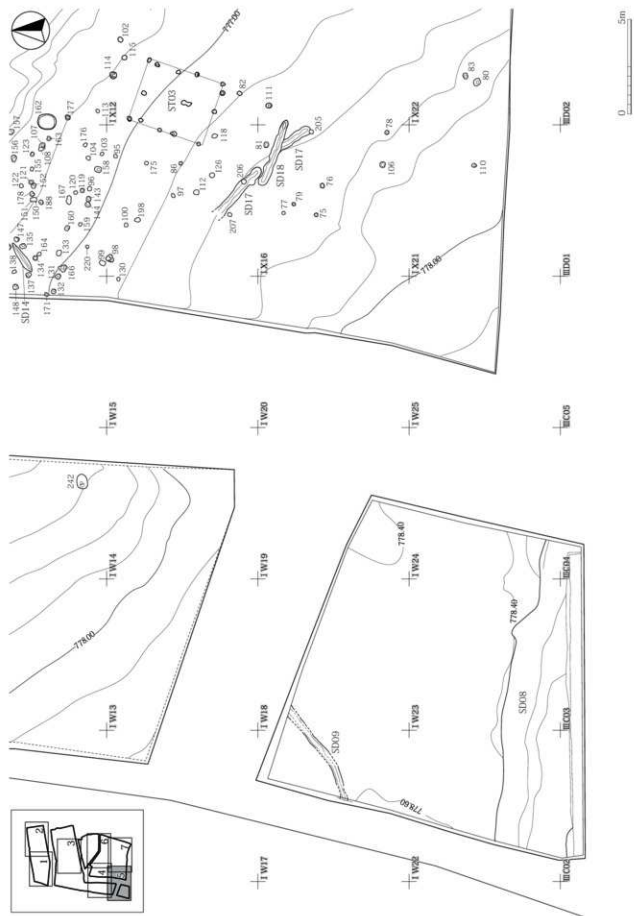
第14図 遺構分布部分拡大図(2)



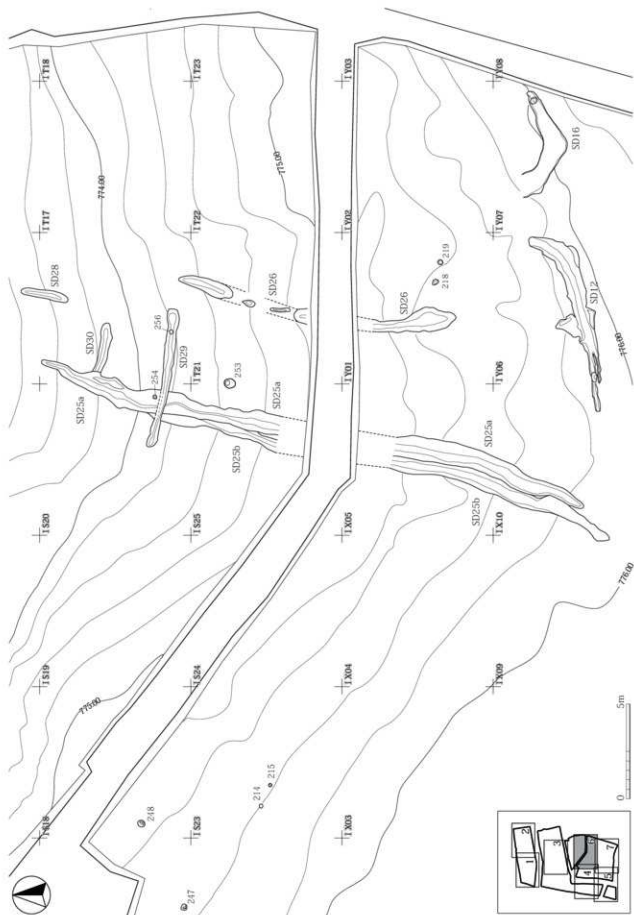
第15図 遺構分布部分拡大図(3)



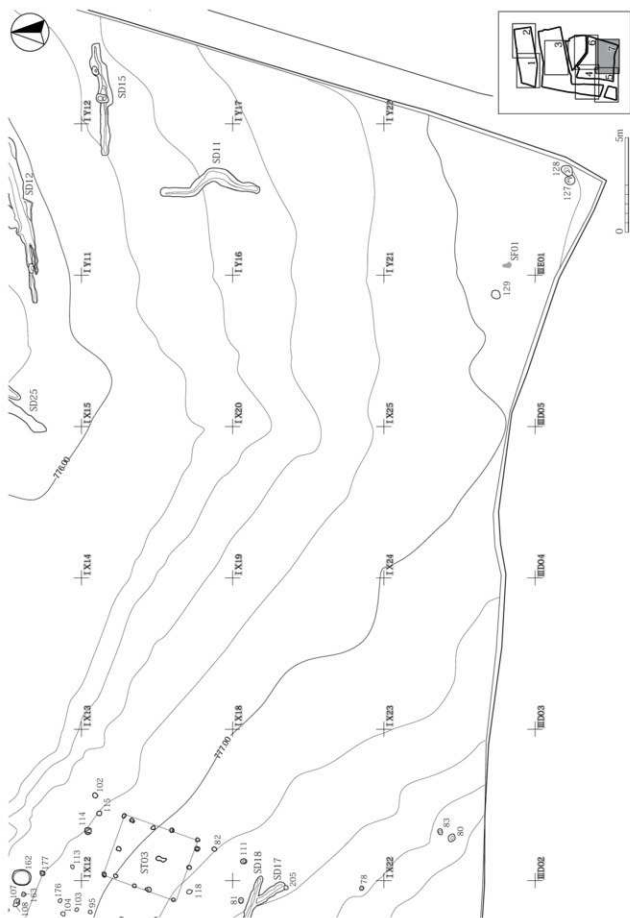
第 16 図 遺構分布部分拡大図（4）



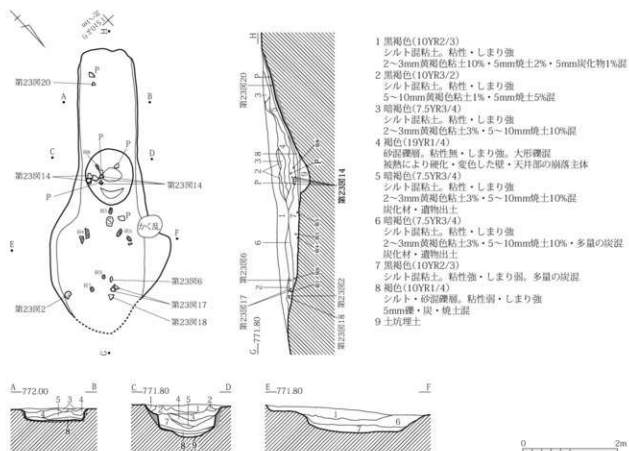
第17図 遺構分布部分拡大図(5)



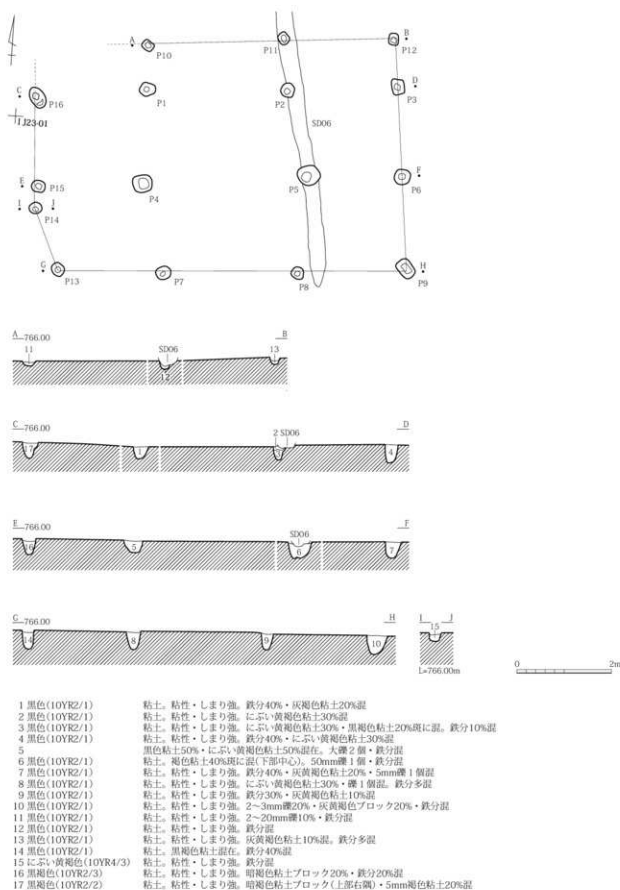
第18図 遺構分布部分拡大図(6)



第19図 遺構分布部分拡大図(7)

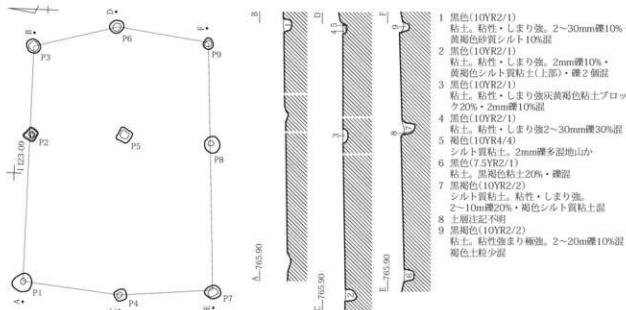


第4章 奥日影遺跡

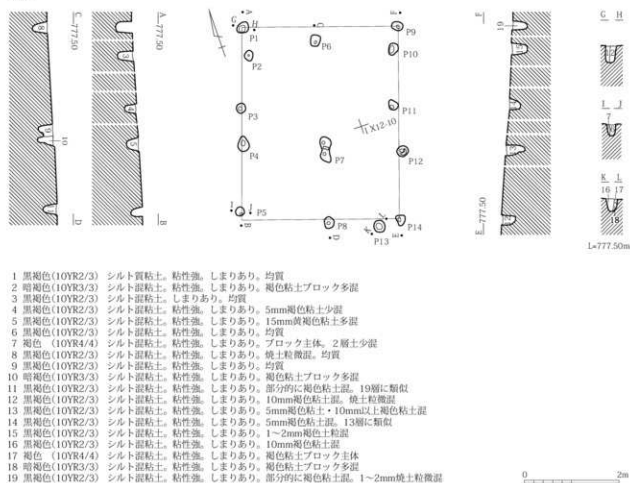


第21図 ST 01 遺構図

ST02



ST03



第22図 ST02・03 遺構図

3 遺物

本遺跡では遺構出土もしくは遺構に関わる遺物として奈良時代の須恵器、中世以降の土器・陶磁器類、金属製品、石製品が出土したほか、遺構としては存在しない縄文時代中期後葉から後期前葉の土器・石器と、弥生時代後期から古墳時代前期の土器が出土した。

(1) 奈良時代の須恵器 (第23図1~23, P.11)

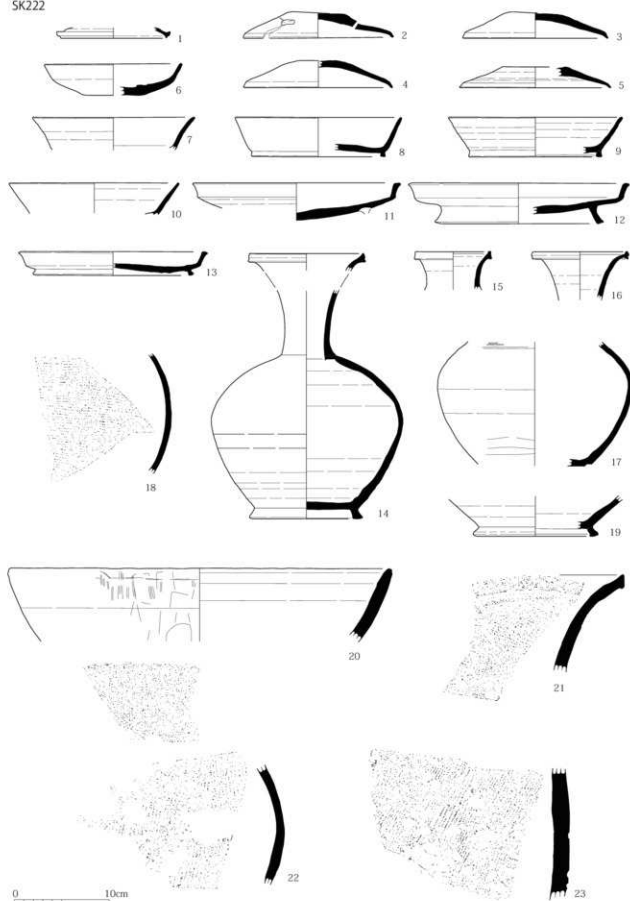
須恵器窯跡のSK 222より出土した遺物である。窯体内に遺棄された製品のため歪み、亀裂のあるもの、表面が弾け跳んだもの、陥灰したもの、窯体の一部が附着したものなど不良品がほとんどである。焼成は良好で硬く灰色を呈するが、黒色の自然釉が掛かるものも多い。胎土には黒曜石砕片を含み、被熱の少ない瓶類内面では黒曜石砕片そのものが観察でき(P.11)、内外面ともに高温とる蓋・杯・盤など小型品では黒曜石が解けて滓分となって噴出している。

1は小口径の半球形を呈するかえりのある蓋で、口縁端部が焼けひずみで反りかえる。2~5は天井面にナデまたは手持ちヘラ削りを施す蓋であるが、端部の屈曲が弱く鈕が付けられた痕跡がない。環状鈕の蓋のように、逆転させて皿として使用することも想定していたと考える。内面の口縁部だけに陥灰しているものもあり、逆位で重ね焼きしていたと考える。6は古墳時代的な半球球を呈する杯であるが、底面は手持ちヘラで削りを施し平坦である。焼成時の内外の温度差で、全体が内面と外面に剝離している。7~10は盤状の坏で、底部を欠く7・10も高台が付されていたと推測する。7は歪みのある体部破片から推定復元した口径であり、法量による器種分化とするには不確実である。底部の残存する8・9は、底面に回転ヘラ削りを施し、底面端に断面台形の高台が付く。11~13は高台付盤で、丸底気味の12は高めの高台が底面端よりかなり内側、平底気味の13には低い高台が底面の端近くに付くことから、高台を欠く11も高めの高台が付されていたと推測する。いずれも口唇部が外側に張り出し、上端に平坦面を成す。11は接合した破片によって還元状態が異なり、室内で割れた後に異なる環境状態にあったか、一部の破片だけ再加熱を受けたものとする。14~17・19は長頸瓶で、口縁部は大きく開き、端部が上下に伸びてT字状になる。頸部は基部外径とほぼ同大の胴開口部に、環状の粘土板を貼りつけて開口部を絞ってから頸部を接合する、2段接合となっている。胴部は丸みを帯びるが、中央よりやや上に最大径をもち、この部分が若干角張り気味となる。底面は回転ヘラ削りを施し平坦で、底面端にハノ字形に開く断面台形の高台が付く。18は横瓶胴部で、外面は平行叩きで、平行線の中に細かい木目が見られる。内面はナデ消されるが、当て具輪郭の可能性のある長さ1cmほどの弧状の沈線が2か所にみられる。20は口縁部の小片であるが、厚手で推定口径が40.0cmと大型の鉢である。内面は横ナデだが、外面は縦にヘラ削りを施す。21~23は甕で、口縁部の21は横ハケ後櫛波状文が施文され、胴部の22・23は外面が平行叩きされるが、内面はナデ消される。須恵器の時期は、8世紀初頭から第2四半期と考える。

(2) 中世の土器・陶磁器類 (P.12)

小破片が多いため、写真図版のみを掲載した。1・2は13世紀の龍泉窯蓮弁文の青磁碗で、1はSK 105、2はSK 142から出土した。3~5は15世紀の古瀬戸である。3は四耳壺の肩部と推測するもので、漬掛けもしくは流掛けにより軸を施す。SD 08から出土した。4は卸皿で口縁上部のみに軸を施す。2-1区から出土した。5は天目茶碗でIS 20グリッドから出土した。6は13世紀後半から14世紀の中津川甕もしくは壺で、2-2区から出土した。7・8は15世紀の内耳土器で7はSD 23、8はSD 24から出土した。9~15は13世紀の非口ロ整形のかわらけで、内外面の口縁部から体部上半は内周方向のナデ調整、外面の体部下半から底部は指頭圧痕、見込み部は直径方向のナデ調整を施す。9~11はSD 25、12は遺構外、13はSK 194、14はSK 199、15はSK 221から出土した。そのほか掲載していないが、2-1区で7・8と同様の内耳土器2点、SK 154と2-2区で9~15と同様のかわらけ3点が出土している。

SK222



第 23 図 奈良時代の須恵器

(3) 近世以降の陶磁器類

実測図・写真ともに掲載していないが、18～19世紀以降の陶磁器類破片（伊万里筒型碗・碗・鉢・皿・瓶類、瀬戸美濃碗・皿・徳利・搦鉢、肥前碗など）が出土した。全て小破片である。

(4) 金属製品・石製品（第24図1～17、第9表、P.L12）

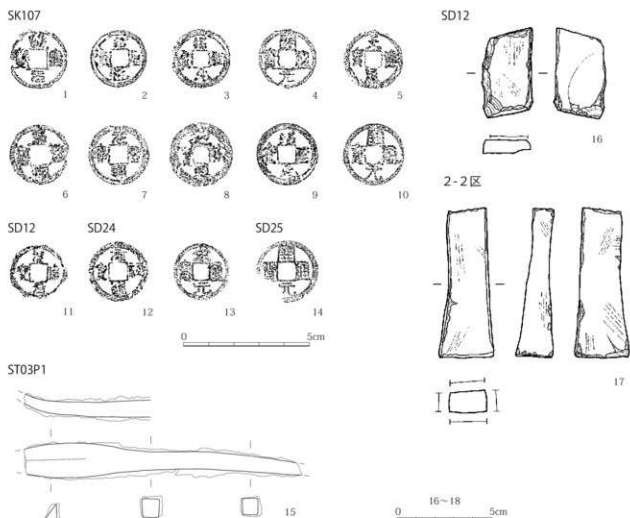
1～14は銭貨で、個別の詳細は第9表のとおりである。15は鉋で、身部の先端部と頸部の端部を欠損する。身部は三角状で反りをもち、頸部は断面形が方形を呈する。長さ14.7cm、身部の最大幅1.8cm、頸部幅0.8cmを測る。掘立柱建物跡S T 03の柱穴（P1）から出土したものである。金属製品は、このほかに用途不明の板状鉄製品、キセル、釘（P.L12①：S D 24出土、②：遺構外出土）、棒状鉄製品（P.L12③：遺構外出土）が出土している。棒状鉄製品は両端部を欠き不明確だが、曲がった釘の可能性もある。

16・17は砥石である。16は断面形が薄板状を呈し、1面に使用痕が残る。石材は凝灰岩で、S D 12から出土した。17は断面形が方形を呈し、表裏面・両側面および下面に使用痕が残る。石材は砂岩と推測しており、2-2区で出土した。

第9表 銭貨一覧表

図版番号	PL	台帳番号	出土位置	取上No 層位等	銭種	書体	王朝名	初鋳年	残存率	外径 上下 (mm)	外径 左右 (mm)	厚さ (mm)	重量 (g)	備考
24-1	12	2-1	S K 107	埋土中	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	ほぼ 完形	(24.0)	(23.4)	1.5	2.51	10枚重なって錯着。上から1番目(10/10)
2	12	2-2	S K 107	埋土中	紹聖元寶	行書	北宋	1094	完形	23.3	22.9	1.6	3.04	10枚重なって錯着。上から2番目(9/10)
3	12	2-3	S K 107	埋土中	紹聖元寶	行書	北宋	1094	完形	23.9	23.7	1.6	3.65	10枚重なって錯着。上から3番目(8/10)
4	12	2-4	S K 107	埋土中	開元通寶	一	唐	621	完形	23.9	23.6	1.5	3.42	10枚重なって錯着。上から4番目(7/10) 表面右側が文字であれば会昌5(845)年鑄錫の「会昌開元(紀地錢)」の可能性有
5	12	2-5	S K 107	埋土中	天禧通寶	真書	北宋	1017	ほぼ 完形	(24.0)	24.0	1.5	3.47	10枚重なって錯着。上から5番目(6/10)
6	12	2-6	S K 107	埋土中	皇宗通寶	篆書	北宋	1038	ほぼ 完形	24.3	(24.4)	1.6	3.15	10枚重なって錯着。上から6番目(5/10)
7	12	2-7	S K 107	埋土中	元豐通寶	篆書	北宋	1078	ほぼ 完形	(23.9)	24.5	1.5	3.69	10枚重なって錯着。上から7番目(4/10)
8	12	2-8	S K 107	埋土中	祥符通寶	一	北宋	1008	完形	25.8	25.3	1.4	3.94	10枚重なって錯着。上から8番目(3/10)
9	12	2-9	S K 107	埋土中	紹聖元寶	行書	北宋	1094	完形	24.9	24.7	1.6	3.86	10枚重なって錯着。上から9番目(2/10)
10	12	2-10	S K 107	埋土中	開元通寶	一	唐	621	完形	24.9	24.7	1.3	2.48	10枚重なって錯着。上から10番目(1/10) 背上月
11		4	S D 12 (I Y 06)	No.1	聖宋元寶	篆書	北宋	1101	9/10	(21.8)	23.4	1.4	1.38	
12		5	S D 24	北側底部 付設	元祐通寶	篆書	北宋	1093	ほぼ 完形	24.1	24.1	1.6	2.77	
13		6	S D 24	扉層中	宋通元寶	一	北宋	960	ほぼ 完形	23.2	(22.8)	1.2	1.92	若干反る
14		7	S D 25	北側底面	開元通寶	一	唐	621	4/5	24.9	24.9	1.3	1.75	

※法量の項における〈 〉は復元値、() は残存値を示す



第24図 金属製品、石製品

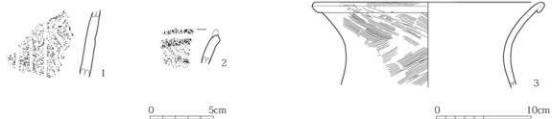
(5) その他の時代の遺物

縄文土器、弥生時代後期から古墳時代前期の土器（第25図1～3、PL12）

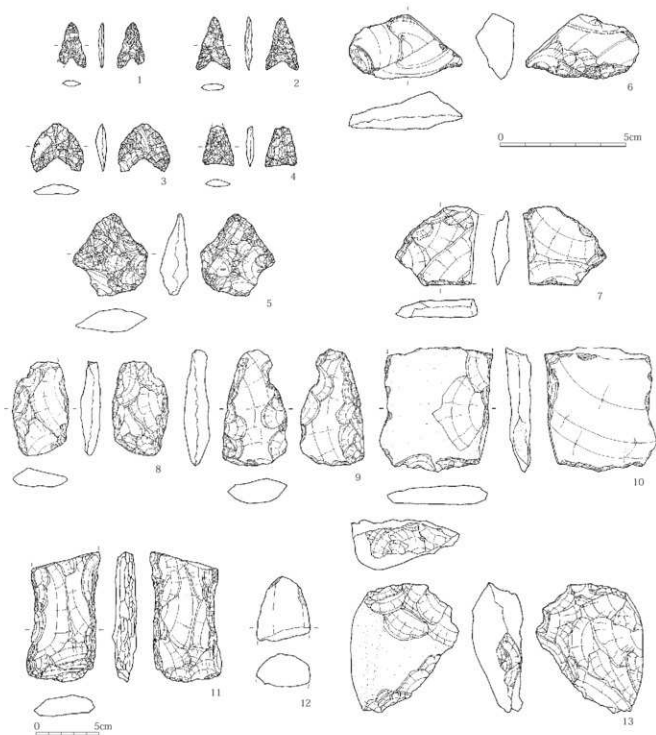
1・2はSD25埋土に混入して出土した縄文土器である。1は胴部で、縦位沈線の脇に斜位・「く」の字状の沈線を描く。中期後葉の罫土式であろうか。2は口縁部で口唇部直下に隆帯を貼付し、上部に横位沈線を描く。後期前葉の堀之内1式と考える。3は遺構外で出土した、弥生時代後期から古墳時代前期の土器である。甕の口縁部から頸部で、折返し口縁の外面に横位方向の櫛描羽状文を描く。

石 器（第26図1～13、PL12）

1～4は凹基無茎鎌で、4は基部の深度が浅い。石材は1～3が黒曜石、4がチャートである。5は石鎌未製品と考えるもので、加工剥離が粗く厚手である。石材はチャートである。6はスクレイパーで、片面からの加工剥離により刃器的な刃部を作出する。石材は黒曜石である。7は横刃形石器で、背側（上部）に片面からの加工剥離を施し、刃部側（下部）には使用痕の可能性が高い微細な剥離が連続して残る。石材は泥岩である。8～11は打製石斧で、形状は9が撥形、それ以外は短冊形を呈する。石材は8が不明確だが泥岩、9～11は黒色安山岩である。12は磨製石斧で、石材は緑色凝灰岩と推測する。13は自然面を打面とした剥片剥離が多く認められる。石核としたいが礫器の可能性もある。石材はホルンフェルスであろう。全て遺構外、もしくは他時期の遺構埋土に混入して出土した。



第25図 縄文土器・弥生後期～古墳前期の土器



第26図 縄文時代の石器

第3節 自然科学分析

奥日影遺跡では自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、残留磁化測定による年代推定、樹種同定、黒曜石産地推定分析を実施しており、以下にその結果を報告する。各分析の詳細については、DVDに収録した。

1 放射性炭素年代測定分析（AMS測定）

須恵器窯跡SK 222より採取した炭化材片について、分析を株式会社加速器分析研究所に委託した。分析試料は燃焼部から採取した2点（第20図：炭№3・8）と、前庭部から採取した1点（第20図：炭№6）で、目的は放射性炭素年代測定分析（AMS測定）により得た年代と窯跡から出土した須恵器の年代を比較し、窯跡の操業年代を推測することにある。

測定の結果、各試料の暦年代範囲における最小値と最大値は炭№3（IAAA-101502）が356calAD-533calAD、炭№6（IAAA-101503）が553calAD-637calAD、炭№8（IAAA-10504）が553calAD-638calADで、炭№3が古く、炭№6・8はほぼ同一の年代であった。しかしながら、出土した須恵器の年代は8世紀初頭から第2四半期と考えており、分析結果と須恵器の年代は整合しない。

2 残留磁化測定による年代推定

須恵器窯跡SK 222の底面に広がる被熱部の熱残留磁化測定を、株式会社パレオ・ラボに委託した。目的は残留磁化測定で推定された年代と、放射性炭素年代測定分析（AMS測定）の年代および窯跡から出土した須恵器の年代を比較し、窯跡の操業年代を推測することにある。

測定の結果、推定された年代はAD600-740年で、7世紀から8世紀第2四半期とすることができる。この年代は、放射性炭素年代測定（AMS測定）で得た年代よりも新しく、8世紀初頭から第2四半期と考える須恵器の年代とは整合する部分がある。

3 樹種同定

須恵器窯跡SK 222より採取した炭化材片について、分析をパリオサーヴェイ株式会社に委託した。分析試料は前庭部から採取した4点（第20図：炭№4～7）と燃焼部から採取した2点（第20図：炭№3・8）で、目的は燃料材と推測する炭化材の樹種を同定することにある。

結果は、6点全てがコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。分析報告では、コナラの木材は重硬で強度が高く薪炭材としては優良な部類に入り、火付きは悪いが持続性があり、須恵器のような還元焰（炎）で焼成する燃料材としては適材とされた。

4 黒曜石産地推定分析

本遺跡から出土した黒曜石について産地を推定するため、エネルギー分散蛍光X線分析法による黒曜石産地推定分析を元沼津工業高等専門学校の望月明彦氏に委託した。分析試料の黒曜石は、出土した56点から46点を抽出した。内訳は原石が37点、石鎌が6点、スクレイパーが2点、両極石器が1点で、未実施の10点は剥片類である。原石としたものは地山に含まれていた黒曜石で、その多くは小形で表面に磨滅が認められる。一方、石器は検出面で出土したものと、ほかの時期の遺構埋土に混入していたものであ

り、時期は特定できない。ただし、遺構外から縄文時代中期後葉～後期前葉の土器が出土しているので(第2節3(5)参照)、そうした時期のものを含む可能性はある。分析試料の詳細は、一覧表をDVDに収録した。

分析結果は、46点中3点が産地不明もしくは分析不可であった。分析可能な43点は蓼科冷山の範囲に32点、74.42%がプロットされ、以下、諏訪屋ヶ台が7点で16.28%、蓼科稲鉢山が2点で4.65%、和土屋橋西と和田鷹山が各1点で2.33%となった。産地別では、蓼科冷山および蓼科稲鉢山の範囲にプロットされたものは全て原石で、諏訪屋ヶ台は7点中6点が石鏃、1点が両極石器、和土屋橋西と和田鷹山の各1点はスクレイパーであった。この結果、原石は遺跡近隣の蓼科エリアに全てプロットされていることから、地山に含まれていた自然石として矛盾はない。一方、石器には蓼科エリアは存在せず、諏訪エリアと和田エリア(WD)にプロットされた黒曜石で製作されたものと判明した。

第4節 小 結

今回の調査では奈良時代の須恵器窯跡と、平安時代・中世の掘立柱建物跡、溝跡、土坑を検出した。以下、時期ごとに遺構を概観することで小結としたい。

奈良時代の須恵器窯跡は2-1区で1基を検出した。時期は8世紀初頭から第2四半期と推測するもので、南佐久地域においては初見である。調査区内ではほかに窯跡が検出できなかったことから、単独操業の可能性もあろう。出土した器種は蓋、坏、高台付坏、高台付盤、長頸瓶、横瓶、鉢、甕で、つまみが付かない蓋など特殊なものも存在する。歪みや亀裂が生じ表面が弾け跳ぶなど、不良品がほとんどで、窯体内へ遺棄されたものの可能性が高い。須恵器は胎土に黒曜石粒を含み、亀裂や破損はその黒曜石粒が被熱し発砲したことによるものである。本窯跡で焼かれた須恵器の供給先は不明だが、黒曜石粒を胎土に含む須恵器の分布を精査すれば、その手掛かりを得ることができよう。さらに、本遺跡周辺は地山に黒曜石を含む地域で、須恵器生産に関わる工房や粘土採掘坑がそうした地域に存在する可能性は高いと考える。

平安時代の可能性がある遺構は、1区でSD06を検出した。SD06に切られるST01も、SD06よりは古いが平安時代の可能性もある。SD06の周辺には、ST01や溝跡および多数の土坑が分布し、SD06と同時代の遺構がそこに存在する可能性は高いが、時期決定の根拠がなく不明確である。

中世の可能性のある遺構は、2-2-4・6区で多数の土坑を検出した。土坑は2-2区の東側を中心に分布する傾向がみられるが、遺構個別では時期を明らかにし得なかったものも多い。また、同一範囲にあるSD14・17・18およびST03、隣接する2-4区で検出したSD22-24、さらにやや離れてはいるが2-3区のSD08、2-2・6区の東側で検出したSD12・25 a b・26・29・30なども中世と考える。時期は13世紀と15世紀の遺物が出土していることに加え、遺構に切り合い関係が認められる点から、2時期以上の遺構が存在するのであろう。

最後にIX06グリッドで検出したSK107と、IX12グリッドで検出したST03に触れる。SK107は形状・規模が柱穴状を呈するもので、埋土から銭貨10点がまとまって出土した。また、ST03のP1では鉢1点が出土した。この2例は意味するところは不明だが、柱穴もしくは柱穴状の土坑に金属製品を埋納した事例と捉えておく。

第5章 小山寺窪遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

小山寺窪遺跡は、南佐久郡佐久穂町の旧佐久町高野町地区に所在する（第27図）。この地域は八ヶ岳起源のローム層が厚く堆積した台地上にあり、小山寺窪遺跡はこうした台地緩斜面上に位置する。これまでの主な調査履歴は、佐久南部広域営農団地農道整備事業の実施に伴い、今回の調査地点の西側において佐久町教育委員会が発掘調査を実施し、平安時代の竪穴建物跡2軒と中世を主体とする五輪塔群を検出した（町教委2002）。周辺部には津金寺があったという伝承が残り、津金寺との関係が検討されている。

周辺遺跡の状況は、小山寺窪遺跡と同じ台地上に佐久西小学校裏遺跡があり、町教委の発掘調査では縄文時代後期の土器捨て場や屋外埋甕、平安時代の竪穴建物跡などが検出された（町教委2001）。また、北沢川の最下位段丘には、国内最大といわれる「北沢の巨石榎」が現地に保存されている。中部横断道に伴う埋文センターの発掘調査では、小山寺窪遺跡の北側に所在する奥日影遺跡で南佐久地域では初見となる奈良時代の須恵器窯跡のほか、中世以降の掘立柱建物跡、溝跡、土坑などを調査した（第4章参照）。

2 調査の概要と経過

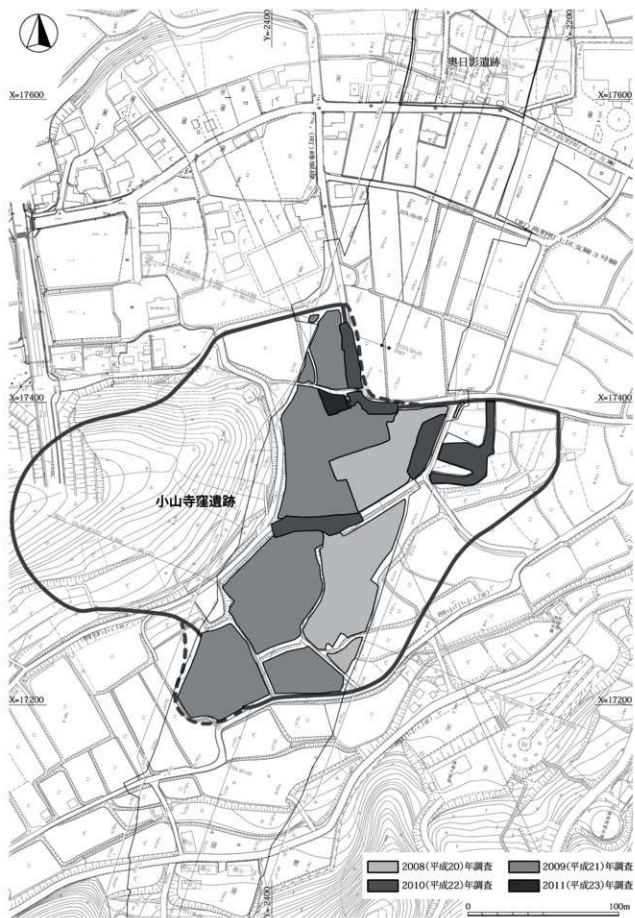
小山寺窪遺跡は当初、中部横断道予定地は埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、隣接地ということでも2007（平成19）年度に町教委が試掘調査を実施した。その結果、遺構が検出されたことにより、中部横断道建設予定地も包蔵地の範囲内とされ、2008～2011年度に本調査を実施するに至った（第27図）。各年度の調査区・面積は、2008年度が1区で面積4,200㎡、2009年度が2・3区で面積13,610㎡、2010年度が1・2区の一部と5・6区で面積4,220㎡、2011年度が2区に残されていた鉄塔部分で面積150㎡となる。各地区では平安時代と中世の遺構を検出したほか、1区の低地部では中世以降の水田面2面を確認した。また、検出面やほかの時期の遺構埋土に混入して、旧石器時代のナイフ形石器や縄文時代の遺物が若干出土した。

3 基本層序

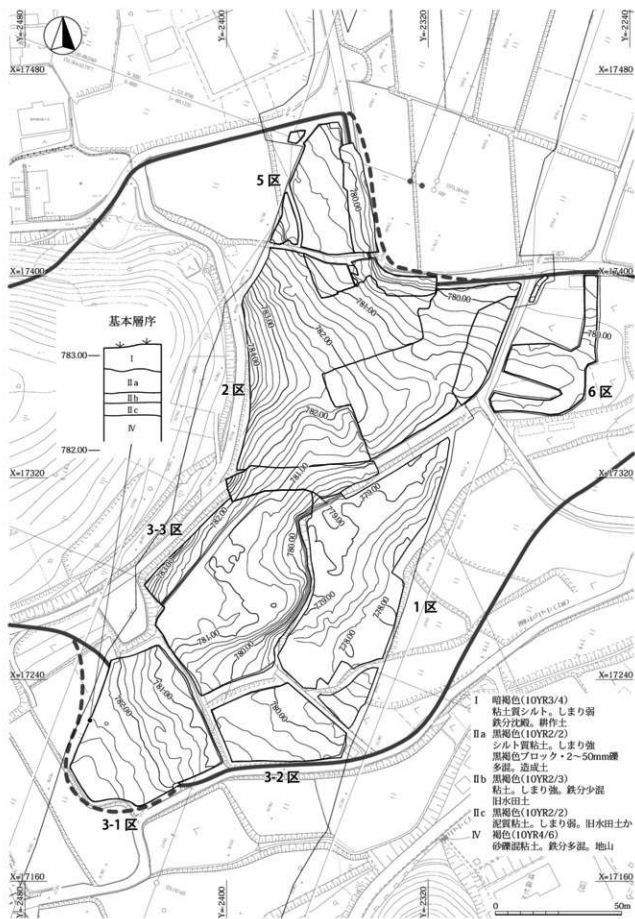
基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別される（第28図）。第Ⅰ層は現耕作土など、調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は造成土および旧水田土で、a～cに細分される。第Ⅲ層は1区の低地部に存在し、中世以降の水田跡2面を検出した。ⅢaおよびⅢb-1～12層に細分される（第57図）。第Ⅳ層は遺跡全体のいわゆる地山となる褐色砂礫混粘土で、遺構の検出面は第Ⅳ層上面である。なお、SK185では土壌分析試料のサンプリングに伴い、第Ⅴ層黒褐色（Hue25Y3/2）砂混シルト質粘土まで掘り抜いた（第55図）。

参考・引用文献

佐久町教育委員会 2002 『小山寺窪遺跡 伝承の寺跡および鎌倉時代～室町時代の墓群の調査』



第27図 遺跡範囲・調査区位置図



第28図 調査区配置図・土層柱状図

第2節 遺構

今回の調査では堅穴建物跡・堅穴状遺構17軒、掘立柱建物跡13棟、杭・欄列1条、溝跡21条、被熱部1基、土坑1059基、水田跡2面を検出した(第29~43図)。

1 堅穴建物跡・堅穴状遺構

SB 01 (第44図、PL 5)

位置：1区。ⅢP 10、ⅢQ 06 グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SB 05を切ると考えるが、かく乱を受け不明確な点が残る。埋土：単層。形状・規模：不整の長方形で北西—南東方向4.2m、北東—南西方向3.2mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。壁は深さ20cmで斜めに立ち上がる。柱穴：円形もしくは楕円形で直径(長軸)20~48cm、深さ18~48cmを測るP 1~10を検出した。南西壁にある深さ40cm以上のP 1・2・8と、北東壁コーナーにあるやや小形のP 3が主柱穴となろうか。周溝・カマド・その他の施設：検出できなかったが、柱穴としたP 1~10の中にその他の施設を含む可能性はある。遺物：刀子1点(第61図1)が出土した。時期：不明だが、SB 05よりは新しい。

SB 02 (第44図、PL 5)

位置：1区。ⅢG 25、ⅢH 21、ⅢL 06、ⅢM 01 グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：6層が堆積する。壁際から床面にかけて5・6・8層が断面三角状に堆積する。その上部に4層赤褐色粘土質シルト(焼土ブロック)が堆積し、4・5層および上部の1・2層に多くの炭化材を含むことから、埋設過程にある窪地(5層上部)で火が焚かれたものと推測する。1層で多くの遺物が出土し、火が焚かれた後の窪地へ廃棄された可能性が高い。1層で採取した炭Na 4、2層で採取した炭Na 5、4層で採取した炭Na 6の樹種同定を実施した結果、全てコナラ属コナラ亜属コナラ節であった(第4節参照)。形状・規模：方形で北東—南西方向4.3m、北西—南東方向3.8mを測る。床・壁：床全体に貼床を施す。壁は深さ40~50cmで斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：コーナー付近を除く北西壁と、南西壁から南壁コーナー付近で幅8~12cm、深さ8cmの周溝を検出した。カマド：北東壁中央からやや東側へ寄った位置に、石組みカマドの袖石・支脚の取り残りと煙道の残骸を検出した。カマド右側では、袖石の一部と推測する礫が出土した。その他の施設：性格不明だが、カマド右側の東壁コーナー付近で長軸76cm、短軸64cm、深さ15cmを測る楕円形の土坑P 1を検出した。遺物：埋土1層からの出土が多く、須恵器杯・高台付碗・片口鉢、黒色土器杯・皿、土師器甕、三足土器(第58図1~24)が北西壁際を主体に出土した。そのほか、刀子と砥石(第62図1)が出土している。時期：不明確だが、1層で出土した遺物の時期が9世紀前葉なのでそれ以前と推測する。炭Na 4・5・6を試料とする放射性炭素年代測定(AMS測定)の結果では、それぞれ8世紀前半~9世紀末葉、7世紀後半~8世紀後葉、7世紀後半~9世紀初頭の年代を得た(第4節参照)。

SB 05 (第44図、PL 5)

位置：1区。ⅢQ 06 グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SB 01に切られると考えるが、かく乱を受け不明確な点が残る。埋土：単層。形状・規模：台形で北東—南西方向2.4m以上、北西—南東方向2.6mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ8~10cmで斜めに立ち上がる。柱穴：円形もしくは楕円形で直径(長軸)16~36cm、深さ10~48cmのP 1~10を検出したが不明確である。柱痕をもつP 7や、比較的深いP 1~3が候補となろうか。周

溝：検出できなかった。カマド：検出できなかった。その他の施設：不明だが、P 1～10にその他の施設に関わる土坑を含む可能性はある。遺物：なし。時期：不明だが、S B 01よりは古い。

S B 07 (第45図, P L 5)

位置：2区。Ⅲ F 23・24グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：3層が堆積する。壁際に断面三角形の3層が堆積し、その上部を1・2層が埋積する。3層は地山のブロックを多量に含み、人為的な埋戻し土の可能性はある。形状・規模：方形で北東—南西方向4.2m、北西—南東方向3.8mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ40cmで斜めに立ち上がる。柱穴：検出できなかった。周溝：壁際全体に幅5～15cm、深さ3～10cmを測る周溝を検出した。カマド：北西壁中央よりやや北側へ寄った位置に、石組みカマドを検出した。支脚と左右両側の袖石が残存していた。その他の施設：性格不明だが、カマド右側から北壁コーナーにかけて長軸96cm、短軸64cm、深さ25cmで楕円形を呈するP 1と、直径40cm、深さ64cmで円形を呈するP 2を検出した。遺物：カマド内部とP 1・2から須恵器甕、黒色土器杯・壺・高台付埴・鉢、土師器杯・皿・甕が出土した(第58図25～37)。カマドでは黒色土器を支脚に伏せていた(第58図25)。時期：出土した遺物の時期をもって、9世紀中葉と考える。

S B 08 (第45図)

位置：2区。Ⅲ F 25グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。地山のブロックを多量に含むことから、人為的な埋戻しの可能性はある。形状・規模：隅丸方形で南北方向は推定2.2m、東西方向1.8mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ5～8cmで斜めに立ち上がる。南壁は削平され残存しない。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

S B 09 (第32図)

位置：2区。Ⅲ B 06・07グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：S T 06に切られる。埋土：単層。形状・規模：西壁の一部から南壁コーナー付近のみが残存する。壁の残存部がS T 06のP 2・3列とP 3・4列に重なるので、S T 06に伴う掘込みの可能性もある。床・壁：床の詳細は不明だが、貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ2～6cmで斜めに立ち上がる。柱穴：長軸36cm、深さ28cmを測る楕円形のP 1を検出したが、P 1は重複するS T 06の柱穴の可能性もある。周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：なし。時期：不明だが、S T 06よりは古い。

S B 10 (第46図, P L 5)

位置：3-3区。Ⅱ O 19・20グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：方形で、北東—南西方向、北西—南東方向ともに4.0mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ10cmで斜めに立ち上がる。柱穴：不明だが円形で直径35cm、深さ24cmを測るP 1を柱穴と考えたい。周溝：なし。カマド：北東壁中央よりやや東側で、袖部を粘土質シルトで構築するカマドを検出した。内部から、天井部を構築していた可能性のある礫が出土した。その他の施設：性格不明だが、北壁コーナー付近で検出した直径56cm、深さ15cmを測る円形のP 2、南壁コーナー付近で検出した長軸112cm、短軸48cm、深さ24cmを測る楕円形のP 4、カマドの東側で検出した直径84cm、深さ16cmを測るP 5をその他の施設に関わる土坑と推測する。P 4周辺からP 4内部にかけて白色粘土塊が出土し、P 4では白色粘土塊の上部に偏平礫が置かれていた。遺物：須恵器杯・甕、黒色土器杯・壺・甕、土師器甕・甕・円筒形土器が出土した(第59図38～59)。特に、カマド内部とカマドの両側、竪穴建物跡の中央部が多い。また、鋸もしくは釘が出土した。時期：出土した遺物の時期をもって、9世紀前葉と考える。

SB 12 (第45図, P L 5)

位置：3-3区。Ⅲ T 13・18・19グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SK 1903~1921に切られる。SK 1093~1921は、調査段階ではSB 12の柱穴とされたが、不明確なため整理段階でSKに登録した。ただし、この中にSB 12の柱穴が存在する可能性はある。埋土：2層が堆積する。2層が床面から壁にかけて堆積し、上部を1層が埋積する。形状・規模：南側が削平され不明確だが、残存部からすれば方形か。東西方向6.6m、南北方向が残存部で3.4mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。壁は28cmで斜めに立ち上がる。柱穴：上記のとおり、SKとしたものにSB 12の柱穴を含む可能性はある。周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：黒色土器環と須恵器甕および中世陶磁器(須恵質播鉢、常滑甕、中津川甕、白磁皿、P L 15)のほか、砥石3点(第62図2~4)が出土した。時期：出土した遺物の新しい時期をもって、13世紀後半~14世紀と考える。

SB 17 (第46図)

位置：3-3区。Ⅲ K 23グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：削平され不明確だが方形と考える。北西~南東方向3.0m、北東~南西方向の残存部で2.4mを測る。床・壁：床は不明確で凹凸が残る。壁は深さ10cm程度で斜めに立ち上がる。柱穴・周溝・カマド：検出できなかった。その他の施設：性格不明だが方形で長・短軸48cm、深さ32cmを測るP 1を検出した。また、直径40cmの被熱部を検出したが火処であろうか。遺物：黒色土器環・壺が出土した(第59図60・61)。時期：出土した遺物の時期をもって、9世紀代と考える。

SB 18 (第41図)

位置：3-3区。Ⅱ T 15グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SK 1177~1180・1182に切られると考えるが不明確である。埋土：単層。形状・規模：形状は不明、規模は残存部で北東~南西方向3.2m以上、北西~南東方向1.2m以上を測る。床・壁：1層下部を床面としたが明確ではない。床面に炭の集中範囲が認められた。壁は深さ15cmで斜めに立ち上がる。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：土師器甕の小破片が出土した。時期：出土した遺物の時期をもって、平安時代と考える。

SB 20 (第47図, P L 6)

位置：5区。I Q 21、I V 01グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SB 22を切り、SD 14 aに切られる。SB 21・SD 14 bとの重複関係は不明である。埋土：単層。形状・規模：方形で南北方向4.5m以上、東西方向4.5mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ20cmで斜めに立ち上がる。南壁はSD 14 aに切られて残存していない。柱穴：不明確だが、直径(長軸)16~50cm、深さ8~40cmを測るP 1~10を検出した。周溝・カマド・その他の施設：柱穴としたP 1~10の中に、その他の施設に関わる土坑を含む可能性はある。遺物：土師器環と灰軸陶器および中世土器・陶磁器(かわかけ、青磁碗、山茶碗片口鉢、P L 15)のほか、砥石1点(第62図5)が出土した。時期：出土した遺物の新しい時期をもって、13世紀後半~14世紀と考える。

SB 21 (第47図, P L 6)

位置：5区。I V 01グリッド。検出：基本層序第Ⅳ層上面で検出した。重複関係：SD 14 bに切られる。近接するSB 20との関係は不明である。埋土：2層が堆積する。床面に8層(第47図)が堆積し、その上部を7層が埋積する。形状・規模：長方形で東西方向6.0m、南北方向2.0mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ15~25cmで斜めに立ち上がる。柱穴・周溝・カマド：検出できなかった。その他の施設：性格不明だが円形で直径28cm、深さ12cm程度のP 1を検出した。遺物：土師器甕と須恵器甕および中世陶磁器(中津川甕、P L 15)が出土した。時期：不明確

だが出土した遺物の新しい時期をもって、13世紀後半～14世紀と考える。

S B 22 (第47図、P L 6)

位置：5区。I Q 21・22、I V 01・02グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S B 20、S D 13・14 aに切られる。埋土：4層が堆積する。5・6層(第47図)が床面から壁際に薄く堆積し、上部を3・4層が埋積する。形状・規模：不整形円で直径4.0mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ60～70cmで楕円状を呈する。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：土師器坏・甕、黒色土器碗、須恵器甕、中世土器・陶磁器(かわらけ、青磁碗、P L 15)が出土した。時期：不明確だが13世紀後半～14世紀のS B 20、S D 13・14 aに切られる点と、遺物の新しい時期を考慮し、13世紀後半～14世紀またはそれ以前と考える。

S B 23 (第48図、P L 5)

位置：5区。I V 01・06グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：不整形形で南北方向3.0m、東西方向2.0mを測る。床・壁：掘方をそのまま床面とする。平坦ではなく凹凸が認められる。壁は深さ10cm程度で斜めに立ち上がる。柱穴：円形・楕円形を呈し直径(長軸)20～42cm、深さ8～28cmを測るP 1～7を検出した。P 1・2・4・7が壁際に、P 2～4列とP 1～7列の中心線の上にP 5・6がある。深さは東壁際のP 1が24cm、P 4が28cmだが、それに対応する西壁際のP 2・7は8cm程度と浅い。周溝・カマド：なし。その他の施設：性格不明だが、北東壁コーナーから直角に曲がる長さ3.8m、幅16～24cm、深さ10cmの溝跡を検出した。遺物：中世陶磁器(青磁碗、第59図62)が出土した。時期：不明確だが遺物の時期から、13世紀後半～14世紀と考える。

S B 24 (第48図)

位置：5区。I V 07グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：不明確だが方形か。規模は残存部で東西方向2.0m以上、南北方向1.5m以上を測る。床・壁：貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ10cm程度で斜めに立ち上がる。柱穴：円形で直径22～34cm、深さ8～28cmを測るP 1～4を検出したが、S B 24に伴うものかは明確ではない。周溝・カマド・その他の施設：検出できなかったが、P 1～4にその他の施設に関わるものを含む可能性はある。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

S B 26 (第48図、P L 6)

位置：5区。I P 20、I Q 16グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S K 1644・1893に切られる。埋土：3層が堆積する。3層が床面に堆積し、その上部を1・2層が埋積する。形状・規模：円形で直径3.5mを測る。床・壁：掘方をそのまま床面とするが、平坦ではなく凹凸が残る。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ20～38cmで楕円状を呈する。柱穴・周溝・カマド・その他の施設：検出できなかった。遺物：中世陶磁器(青磁碗・中津川甕)が出土した。時期：不明確だが出土した遺物の時期をもって、13世紀後半から14世紀と考える。

S B 28 (第49図、P L 6)

位置：3～3区。III F 22、III K 02グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S D 22に切られる。埋土：単層。形状・規模：方形で北西～南東方向4.0m以上、北東～南西方向4.0mを測る。床・壁：掘方を埋戻し(3層)、整えて床面とする。壁は深さ15cm程度で斜めに立上る。柱穴：円形で直径60cm、深さ14cmを測るP 3と、北西壁外にある円形で直径28cm、深さ28cmのP 1、円形で直径36cm、深さ18cmのP 2を柱穴と推測する。周溝：南西壁際で検出した。カマド：北西壁の中央付近で、袖部を粘土で構築するカマドを検出した。カマド内部とカマド右側で、天井部の構築材と考える礫が出土した。その他の施設：性格は不明だが、カマド右側で楕円形を呈し長軸1.2m、短軸60cm、深さ20cmを測るP

4を検出した。遺物：カマド内部を主体に黒色土器環・埴、土師器環・埴・甕が出土した（第60図65～71）。時期：出土遺物の時期をもって、9世紀中葉と考える。

2 掘立柱建物跡、杭・柵列

ST 02 (第50図、P L 6)

位置：2区。ⅢA 18・23・24グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層～3層堆積で柱痕が残る。形状・規模：長方形を呈し、等高線と平行に近い南北方向に長軸をもつ。桁行7.7m、梁行3.5mを測る個柱建物で、柱間数は桁行4間、梁行1間である。ただし、梁行方向にあるP5・6がやや内側へずれるので、桁行3間の可能性もある。柱穴の形状は円形で直径24～40cm、深さ20～51cmを測る。柱間の距離は桁行方向で1.6～1.8m、梁行方向で3.2～3.4mだがP4・5間は1.4m、P6・7間は1.2m、P5・6間は2.5mである。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、9世紀代と推測するSD 08と桁行方向が平行するので9世紀代となろうか。また、ST 03～05の桁行方向がSD 08と平行し、ST 02と等間隔で並列する点から、ST 03～05と同時期の可能性を考えたい。

ST 03・SA 02 (第50図、P L 6)

位置：2区。ⅢA 19・20グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 753と重複するが、新旧関係は不明である。また、P5～7列と平行するSA 02をST 03の付属施設と推測する。埋土：ST 03、SA 02ともに単層もしくは2層堆積で、柱痕が残る。形状・規模：ST 03は平面形が長方形を呈し、等高線と平行に近い南北方向に長軸をもつ。桁行4.8m、梁行3.6mを測る個柱建物で、P4に対応する柱穴を検出していないが、建物の構造上、柱間数は梁行・桁行2間と推測する。柱穴の形状は円形で直径28～40cm、深さ25～48cmを測る。柱間の距離は桁行方向のP2・3間とP5・6間が2.5mで、P1・2間は1.6m、P6・7間は1.4mとやや狭い。梁行方向はP3・4間が1.4m、P4・5間が1.5mである。SA 02は円形を呈し直径24～40cm、深さ10～24cmを測る3基の柱穴が直線的に並び、ST 03のP5～7列とは80cmの距離を置いて平行する。遺物：P6で砥石1点が出土した（第62図8）。時期：時期決定の根拠がなく不明確だが、9世紀代と推測するSD 08とST 03の桁行方向が平行し、SA 02がSD 08に面していることから、9世紀代となろうか。また、ST 02・04・05の桁行方向がSD 08と平行し、ST 03と等間隔で並列する点から、ST 02・04・05と同時期の可能性を考えたい。

ST 04 (第51図、P L 6)

位置：2区。ⅢB 11・16グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 816と重複するが新旧関係は不明である。埋土：単層。形状・規模：長方形を呈し、等高線と平行に近い南北方向に長軸をもつ。桁行5.5m、梁行2.5mを測る個柱建物で、柱間数は桁行3間、梁行1間である。P5～7列の延長上で柱穴を検出していないが、建物の構造上存在したものとする。柱穴の形状は円形で直径20～32cm、深さ17～31cmを測る。柱間の距離は桁行方向で1.4～1.9m、梁行方向で1.8～2.2mを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明確だが、9世紀代と推測するSD 08と桁行方向が平行する点から、9世紀代となろうか。また、ST 02・03・05の桁行方向がSD 08と平行し、ST 04と等間隔で並列する点から、ST 02・03・05と同時期の可能性を考えたい。

ST 05 (第51図、P L 6)

位置：2区。ⅢB 06・07・11・12グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層もしくは2層で柱痕が残る。形状・規模：長方形を呈し、等高線と平行に近い南北方向に長軸をもつ。桁行3.8m、梁行3.3mを測る個柱建物で、柱間数は桁行・梁行ともに2間である。柱穴の形状は円形で直径24～28cm、深さ15～37cmを測る。柱間の距離は桁行方向のP1・2間とP6・7間が1.4m、

P 2・3間とP 5・6間が2.2m、梁行方向はP 1・8間、P 3・4間、P 4・5間が1.5m、P 7・8間が1.6mとほぼ等しい。規模は若干小さいが、ST 03と構造が類似する。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、9世紀代と推測するSD 08と桁行方向が平行する点から9世紀代となろうか。また、ST 02～04の桁行方向がSD 08と平行し、ST 05と等間隔で並列する点から、ST 02～04と同時期の可能性を考えたい。

ST 06 (第52図、P L 7)

位置：2区。ⅢB 01・02・06・07グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB 09を切ると考える。しかし、SB 09の残存部プランがST 06のP 2～4と重なるため、SB 09はST 06に伴う掘り込みの可能性もある。埋土：単層もしくは2層で、P 1～3・5・6・8・9には柱痕が残る。形状・規模：長方形を呈し、等高線と直交に近い南北方向に長軸をもつ。桁行4.2m、梁行3.8mを測る総柱建物で、柱間数は桁行・梁行ともに2間と考えるが、P 5～6列の中央がかく乱の影響から、柱穴が検出できなかった。柱穴の形状は円形で直径20～36cm、深さ16～36cmを測る。柱間の距離は桁行方向が1.6～2.0m、梁行方向が1.3～2.0mを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、SB 09を切るのであればSB 09よりは新しい。

ST 07 (第52図、P L 7)

位置：2区。ⅢG 16・21グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 703と重複するが、新旧関係は不明。埋土：単層。形状・規模：方形を呈し、等高線と平行に近い東西方向に長軸をもつ。桁行2.7m、梁行2.6mを測る欄柱建物で、柱間数は桁行・梁行ともに1間である。柱穴の形状は円形で直径30cm前後、深さ11～20cmを測る。柱間の距離は桁行方向のP 1・2間が2.1m、P 3・4間が2.4m、梁行方向のP 1・3間が1.7m、P 2・4間が1.9mを測る。本遺跡では、柱間1間×1間の建物跡はST 07のみである。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

ST 08 (第52図、P L 7)

位置：3-1区。ⅡY 21・22グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：長方形を呈し、等高線と直交に近い北東-南西方向に長軸をもつ。桁行4.4m、梁行4.0mを測る総柱建物で、柱間数は桁行3間、梁行2間である。柱穴形状は円形もしくは楕円形で直径(長軸)16～44cm、深さ8～24cmを測る。柱間の距離は桁行0.9～1.8m、梁行1.5～1.8mで、桁行はP 4・6間、P 5・8間がほかよりも狭い。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、ST 09と桁行方向が同一であることから同時期の可能性がある。

ST 09 (第53図)

位置：3-1区。ⅣD 04・05グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 882・889・893・901・902と重複するが、新旧関係は不明である。埋土：単層。形状・規模：長方形を呈し、等高線と直交に近い北東-南西方向に長軸をもつ。桁行6.6m、梁行4.0mを測る総柱建物で柱間数は桁行4間、梁行2間である。ただし、P 3・11とP 10・12間の間隔が狭く桁行3間、梁行2間で庇などの施設が付くとみることでもきよう。P 2-9列の中間やP 4-7列の延長上に柱穴を検出していないが、建物の構造上存在したものと考える。柱穴の形状は円形もしくは楕円形で直径(長軸)24～40cm、深さ15～35cmを測る。柱間の距離はP 3・11間、P 10・12間を除き桁行1.6～1.8m、P 3・11間が0.4m、P 10・12間が0.3mで、梁行は1.4～1.5m、P 11・12間が3.3mを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、ST 08と桁行方向が同一であることから同時期の可能性がある。

ST 10 (第53図、P L 7)

位置：3-1区。ⅡX 25、ⅡY 21、ⅣD 05、ⅣE 01グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。

重複関係：SK 945・SK 946と重複するが、新旧関係は不明である。埋土：単層もしくは2層が堆積する。形状・規模：長方形を呈し、等高線と平行に近い北西—南東方向に長軸をもつ。桁行4.4m、梁行4.0mを測る個柱建物で、柱間数は桁行2間、梁行1間である。柱穴の形状は円形もしくは楕円形で直径（長軸）26～36cm、深さ14～32cmを測る。柱間の距離は桁行1.8～2.0m、梁行3.6～3.8mを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

ST 11 (第53図)

位置：2区。ⅢB 18・19グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：長方形を呈し、等高線の方向から若干西側へずれる北西—南東方向に長軸をもつ。桁行5.5m、梁行3.4mを測る総柱と推測する建物跡で、柱間数は桁行2間、梁行2間である。P 7-8列上に柱穴を検出していないが、建物の構造上存在したと考える。梁行方向のP 1-3列では、P 2の位置が突出する。柱穴の形状は円形もしくは楕円形で直径（長軸）20～40cm、深さ8～24cmを測る。柱間の距離は桁行2.4cm、梁行0.5～0.7mを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

SB 14 (第54図、P L 7)

位置：3-3区。ⅡO 23、ⅡT 03グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 1402に切られSB 15を切るかと推測するが、P 12・23がSB 15の柱穴とすればSB 15とは重複関係がない。埋土：柱穴は単層、周溝は不明である。形状・規模：削平が著しく不明確だが、L字形の溝跡と柱穴P 1～23で構成すると考える。SBを付したが、掘方の有無は不明である。桁行方向がP 2-22列・P 4-19列、梁行方向がP 2-4列・P 22-19とすればSB 14は長方形を呈し、等高線と直交する北東—南西方向に長軸をもち、桁行3.6m、梁行2.5mを測る。しかし、P 5・23をSB 14の柱穴とした場合、その長さは5.4mで、桁行方向よりも長い。溝跡は長さ3.4m、幅16～36cm、深さ10cmで、P 1-4列やP 5-23列と平行する。床面とすべきか不明だが、溝跡の内側は堅緻である。火処はない。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、SB 15を切れば13世紀後半以降と推測する。SB 15とは隣接し、構造が類似するので重複関係にあっても近い時期となろうか。また、SK 1402よりは古い。

SB 15 (第54図、P L 7)

位置：3-3区。ⅡO 23・24グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SB 14に切られSK 1406を切るかと考えるが、SB 14のP 12・23がSB 15に伴うものであれば、SB 14とは重複関係がない。埋土：柱穴は単層もしくは3層、溝跡は単層。形状・規模：削平が著しく不明確だが、L字形の溝跡と柱穴P 1～12で構成すると考える。SB 14と構造が類似するものの、柱の位置がとらなない点異なる。また、SBを付したが、掘方の有無は不明である。溝跡は長さ7.0m、幅20～64cm、深さ10cm以下で、等高線と平行する北東—南西方向の幅が広い。床面とすべきか不明だが、溝跡の内側は堅緻である。柱穴は溝跡の内側および溝跡と重複する位置にあるものの、列や組合せは不明である。火処はない。遺物：P 9付近で、東濃産の片口鉢と推測する小破片が出土した。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、出土した遺物の時期を考慮し13世紀後半と推測する。SB 14とは隣接し、構造が類似するので重複関係にあっても近い時期となろうか。また、SK 1406よりは新しい。

SB 16 (第55図)

位置：3-3区。ⅡO 19・24グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：SK 1340と重複する可能性は高いが不明確である。埋土：不明。形状・規模：削平が著しく不明確だが、柱穴P 1～13と被熱部で構成すると考える。堅穴建物跡の可能性を考えSBを付したが、掘方の有無は不明である。ただし、火処の位置など、通常の堅穴建物跡とは異なる部分も認められる。床は残痕がP 1・5の外側に広がり、その範囲からみて平面形が方形であった可能性もある。P 1・7・11・12の中央に直径50

cmの被熱部があり、カマドではない火処と推測する。柱穴は円形もしくは楕円形で直径(長軸)28~60cm、深さ6~40cmを測る。P1・4・6・8は20~40cmと深い。規模は残存部で北西-南東方向が4.1m以上、北東-南西方向が3.9m以上を測る。遺物:黒色土器環、土師器環・甕の小破片が出土した。時期:時期決定の根拠がなく不明だが、出土した遺物の時期をもって9世紀代と考えたい。

3 溝跡

溝跡個別の詳細は第10表に示したので、ここでは主な溝跡の概要を説明する(第29~41・56図)。溝跡21条のうち、SD 01~03・05・06は1区水田跡に伴い、それ以外は2・3・3・5・6区で検出した。SD 02・03は水田跡1に伴い(第56図)、SD 02は畦畔に沿う。SD 01・05・06は水田跡2の畦畔に沿うが重複があり、SD 01がSD 05・06を切る。時期は、13世紀後半~14世紀もしくは15世紀以降と推測する。このほかの溝跡は2区と5区に多い。SD 07~09は長さ70m以上の大形溝で、9世紀代と推測するが、SD 09がSD 07を切ることで若干の時期幅をもつ。6区にも9世紀代と推測するSD 24があり、SD 07からみれば直交方向に延びる。また、5区の東側には13世紀後半~14世紀もしくは15世紀と推測する溝跡が集中し、等高線に対して平行に近い方向で延びるSD 13・15・16・18と、直交するSD 14 a bが認められる。この内、SD 13・15は長さ100m以上の大形溝である。重複関係があり、SD 13がSD 14 a b・15・18を切るが、これ等の溝跡から出土した遺物は13世紀後半~14世紀のものと15世紀のものが混在し、明確な時期区分はできない。SD 07・09とSD 13・15は、ⅢB 03グリッド付近でSD 07→SD 09→SD 15→SD 13(新)の順で重複し、それより南側は4条が同じ場所に掘り込まれる。溝跡周辺は遺構が少なく場所の性格も不明だが、こうした大形溝の機能を検討することが課題である。

第10表 溝跡一覧表

SD	地区	位置	長さ	幅	深さ	断面形	出土遺物	形状等	備考
01	1	Ⅲ Q 04	4 m 以上	72cm	20cm	U字状	平安:須恵器甕(第60図74)。中世:青磁碗(PL15-16・17)	水田跡2のSC04に沿う直線的な溝跡	遺物から、溝跡の時期を13世紀後半~14世紀もしくは15世紀と推測する。SD05・06を切る。
02	1	Ⅲ Q 03・08・09・13・14	16 m 以上	1.4~3.0 m	22cm	U字状	なし	水田跡1のSC02に沿う直線的な溝跡で、壁がやや蛇行する	SC02に付属し、SC02と同時期と推測する
03	1	Ⅲ Q 07・08・13・18	21.6 m 以上	2.0~5.0 m	32cm	U字状	平安:土師器甕	SD02の西側にある直線的な溝跡。途切れ部がある。小溝がSD02と連結する。SD02と方向がやや異なる。	SC01・02、SD02と同時期と考える。遺物は混入したものであろう
05	1	Ⅲ Q 03・04	11.6 m 以上	28~35 cm	不明	不明	なし	水田2のSC04に沿う溝跡。SD06と平行する	SD01に切られるので、SD01よりは古い
06	1	Ⅲ Q 03・04	8 m 以上	20~28 cm	不明	不明	なし	SC04に沿い、SD05と平行する溝跡。上部に礫を置く	SD01に切られるので、SD01よりは古い
07	2・5	I U 04・05・09・10・15、 I 11・16・17・22、Ⅲ B 02・03・08・09・14・15・19・20・25、 Ⅲ C 21	100 m 以上	最大 2 m	最大 90cm	箱型状	平安:土師器環・埴・甕・鉢・羽釜、黒色土器環・埴、須恵器環・埴・甕・瓶(第60図75~82・84)。中世:内耳土器、古瀬戸天目茶碗、中津川甕もしくは壺(PL15-18・19)	等高線に対して斜め~平行する直線的な溝跡	遺物の主体は平安時代で、溝跡の時期を9世紀前半と推測する。中世の遺物は重複するSD13・15からの混入か。埋土上層からウマの下顎歯列4点(2点は左側の歯)が出土。SD09・13・15、SK1805~1807・1842に切られる

第5章 小山寺遺跡

SD	地区	位置	長さ	幅	深さ	断面形	出土遺物	形状等	備考
08	2	I U18・23、 Ⅲ A03・04・ 08・09・14・ 15・19・20・ 25、Ⅲ F05・ 10・15・24	93 m 以上	最大 1.8 m	最大 1.2 m	薬研 堀状	縄文：土器（混入）。 平安：黒色土器環、 土師器壺・須恵 器蓋、灰釉陶器環	I U18～Ⅲ A25グリ ッドまでは等高線と 平行する。Ⅲ F05グ リッド付近で曲がり、 等高線に対して直交 する。途中で切れる がⅢ F24グリッドに 続く	遺物はほぼ平安時代な ので、溝跡の時期を9世紀 代と推測する。SD09と は平面、断面で切合うプ ランが認められず、底面 に段差もない点から同時 期と考えられる。SD08の方 向と長軸方向が一致する ST02～05も同時期か
09	2	I U18～20・ 24・25、I V 21～23、Ⅲ B 02・03・08・ 14・19・20・ 25	77 m 以上	1.6 m	50cm	薬研 堀状	平安：土師器壺・羽 釜、中世：青磁碗 (PL15～20)	等高線に対して斜め ～平行に近い方向へ 弧状に延びる溝跡	遺物は平安時代・中世 ともに小破片で少量が 出土。SD07を切り、 SD13・15、SK1137・ 1138に切られる。SD08 に接続するので同時期か
10	2	Ⅲ B13	4.6 m 以上	46cm	32cm	U字状	なし	等高線に対して斜め～ 平行する直線的な溝跡	
11	3-3	Ⅲ K03・08	4 m	40cm	不明	不明	平安：土師器壺	等高線に対して直交 する直線的な溝跡	遺物は小破片のものが1点 出土したのみだが、溝跡 の時期は平安時代か
13	2・5	I P15・20、 I Q11・16・ 21・22、I V 02・07・12・ 17・22、Ⅲ B 02・03・08・ 09・14・15・ 19・20・25、 Ⅲ C16・21、 Ⅲ H01・02・ 06・07	123 m 以上	最大 3.6 m	1.2 m	薬研 堀状	平安：土師器壺。中 世：内耳土器、青磁 碗、常滑片口鉢Ⅱ類 (PL15～21)	調査区外からI Q16 グリッドまでは等高 線に対して斜め方向 に延びる。I Q16グ リッド付近で曲がり、 Ⅲ B02グリッドまで は等高線に対して平 行方向に延びる。Ⅲ B02グリッドで再び 曲がり、等高線に対 して斜め方向に延びる	遺物は少量だが中世が主 体で、溝跡の時期を13 世紀後半～14世紀も しくは15世紀と推測す る。SD07・09・14 a・b・15・ 18を切り、SK1816・1820 に切られる
14a	5	I U05、I V 01・02	20 m	1.3 m	不明	不明	平安：須恵器壺。中 世：内耳土器、青磁 碗	等高線に対して直交 する直線的な溝跡 (a)で、I V01グ リッドにおいて分岐 し(b)、I V02グ リッドで等高線と平 行する方向へ曲がる	遺物は少量だが中世が主 体で、溝跡の時期を13 世紀後半～14世紀も しくは15世紀と推測す る。SD20・22を切り、SD13 に切られるが、出土した 遺物の時期が同じなので 同時期あるいは近い時期 の切り合いと判断する
14b	5	I V01・02	14 m 以上	最大 2 m	不明	不明	中世：青磁碗 (PL15 ～22)		
15	5	I Q16・17・ 22、I V02・ 07・12・13・ 17・18、Ⅲ B 02・03・08・ 09・14・15・ 19・20・25、 Ⅲ C16・21、 Ⅲ H01・02・ 06・07	115 m 以上	1.6 m	最大 90cm	薬研 堀状	縄文：土器。平安： 須恵器壺、土師器 壺。中世：内耳土 器、山茶碗・中津 川・須恵質片口鉢、 中津川壺・青磁碗 (PL15～23・33)、 銭貨20点(第61図8 ～21)	I V23グリッドま では等高線に対して 平行する方向に延び、 I V23グリッドやや 曲がり、等高線に対 してやや斜め方向に 延びる	遺物の主体は中世で、溝 跡の時期を13世紀後半 ～14世紀、もしくは15 世紀と推測する。SD07・ 09・14 bを切りSD13に 切られる
16	5	I Q16・17・ 22	7 m	1 m	10cm	U字状	なし	等高線に対して平行 する直線～緩やかな 弧状を呈する	SD18と一帯の可能性が 高い
18	5	I P15・20、 I Q11・16	11 m 以上	70cm	30cm	U字状	平安：土師器環	等高線に対して平行 ～やや斜め方向に延 び、弧状を呈する	SD16と一帯の可能性が 高い。遺物は小破片の もの1点で溝跡の時期を推 測する根拠にはなら ない。SD13に切られる
19	5	I V16	3.8 m 以上	1.4 m	20cm	段掘状	なし	等高線に対して直交 する直線的な溝跡	

SD	地区	位置	長さ	幅	深さ	断面形	出土遺物	形状等	備考
20	5	I P 19	42 m 以上	70cm	不明	不明	なし	等高線に対して直交する直線的な溝跡	
21	5	I P 19	24 m 以上	1 m 以上	不明	不明	なし	等高線に対して平行する直線的な溝跡	
22	2	Ⅲ F 21～23、 Ⅲ K 03・04	22 m 以上	最大 1 m	最大 15cm	U字状	平安：須恵器蓋、黒色土器環、土師器環・甕	等高線に対して直交する直線的な溝跡	遺物は平安時代であることから溝跡の時期を9世紀以降と推測する。SB28を切る
24	6	Ⅲ C 20・24・ 25、Ⅲ D 13・ 14・16	40 m 以上	1 m	30cm	U字状 V字状	平安：須恵器甕	等高線に対して直交に近い方向で延びる直線的な溝跡	少量だが遺物の時期をもつて、本溝跡の時期を平安時代と推測する

4 被熱部

S F 01 (第39図)

位置：1区。Ⅲ L 10 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：S K 279と重複する可能性はあるが詳細不明。形状・規模等：楕円形状で長軸42cm、短軸32cm、厚さ2～3cmの規模で広がる。S F 01以外に被熱部は存在しない。S F 01周辺には土坑が分布するが、関連しそうなものが認められなかったことから、単独の被熱部とした。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

5 土坑

土坑は数が多いので、以下のものを抽出して報告する。

S B 27 (第55図、P L 7)

位置：5区。I P 20 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：6層堆積。形状・規模：円形で直径2.8m、深さ1.8mを測る。断面形はU字状を呈する。遺物：埋土1層から、20～30cm大の礫に混じって、五輪塔水輪1点(P L 17)および中津川の甕底部2点(第59図63・64)が出土した。時期：不明確だが出土した遺物の時期をもつて、13世紀後半～14世紀と考える。

S K 185 (第55図)

位置：1区。I Q 07 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：5層堆積。形状・規模：円形で直径2.0m、深さ1.52cmを測る。断面形はU字状を呈する。遺物：なし。時期等：時期決定の根拠がなく不明だが、13世紀後半～14世紀もしくは15世紀前後と推測する水田跡1・2の近隣に位置することからそれと同時期であろうか。埋土4・5層と地山の第IV・V層で採取した土壌5点(№1～5)の珪藻分析などを実施した結果、S K 185の底面が掘り込まれている第V層において、沼沢湿地付着生種を含む流水不定生種の珪藻化石が多く検出され、第V層は沼沢域や湿地のような水成環境であったと推定された(第4節参照)。S K 185はこうした地山に掘り込まれた土坑で、形状・規模や位置を考慮すると、井戸跡の可能性を考えたい。

S K 565・568・569・570 (第55図)

位置：1区。Ⅲ L 05 グリッド。検出：基本層序第IV層上面で検出。重複関係：4基の土坑が重複する。S K 565はS K 570を切り、S K 568はS K 569を切る。また、S K 568はS K 570を切ると推測するが不明確である。埋土：S K 565・568は2層堆積、ほかは単層で、全て焼土粒と炭化物・材を含み、火が焚かれた土坑と推測する。形状・規模：S K 565は平面が楕円形、断面がクライ形を呈し長軸84cm、短軸52cm、深さ16cmを測る。S K 568は平面が楕円形、断面がクライ形を呈し長軸104cm、短軸74cm以上、

深さ22cmを測る。SK 569は平面が不正円形、断面がクライ形を呈し長軸80cm、短軸76cm、深さ20cmを測る。SK 570は平面が楕円形、断面がクライ形を呈し長軸118cm以上、短軸66cm以上、深さ8cmを測る。**遺物**：4基の土坑で黒色土器が出土した（第60図87～91）。SK 565・569で出土した黒色土器環・皿は完形に近い。**時期等**：SK 565・569は出土した土器の時期から、9世紀前葉と考える。SK 565に切られるSK 570はそれ以前、SK 569を切るSK 568はそれ以降となろう。しかし、SK 568・570でも黒色土器が出土し、4基の土坑埋土の性質が非常に類似する点を考慮すれば、4基は関連性の高い土坑で、重複関係は認められるものの、大きな時期差はないと推測しておきたい。なお、SK 565の埋土で採取した炭化材片1点について樹種同定を実施した結果、コナラ属コナラ亜属コナラ節と判明した（第4節参照）。コナラ節は薪炭材・燃料材としては優良な木材とされていることから、炭化材片はSK 565で火が焚かれた時の燃料材であった可能性が高い。また、同一試料で実施した放射性炭素年代測定（AMS測定）では、7世紀後葉～9世紀前葉の年代を得た。出土した土器の時期と整合的である（第4節参照）。

6 水田跡

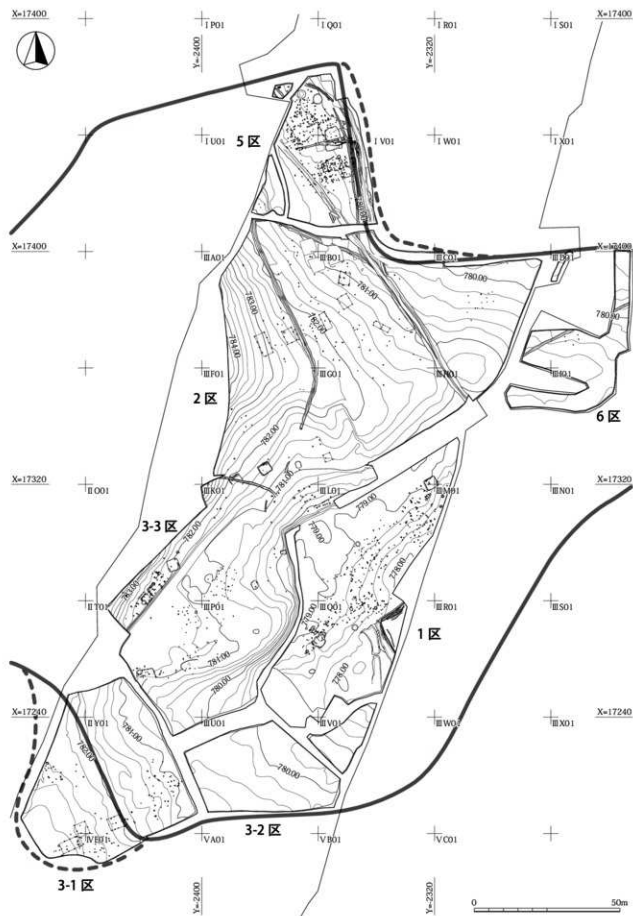
I区の低地部において水田跡1・2を検出した。

水田跡1 SC 01・02、SD 02・03（第56・57図、P L 7）

位置：I区。ⅢQ 03・04・07～09・13・14・18グリッド。**検出**：基本層序第Ⅲa層上面で検出した。**構造等**：畦畔SC 02と、それに直交するSC 01で区画する範囲を水田跡1とした。SC 01を明確に確認した範囲は調査区壁A-B断面およびその付近のみで、SC 02までの平面プランは不明確な点が多い。SC 01の長さは推定で10m以上、A-B断面で計測した幅は76cm、SC 02は長さ12.6m以上、幅20～70cmを測る。花粉分析では、水田跡1の床土：Ⅲb-1層（試料ANo.1）において多くのイネ科が検出され、イネ属が高率であることから稲作地の可能性が高いと推定された（第4節参照）。SC 02には幅1.4～3.0mのSD 02が沿い、その西側には隣接して幅20～5.0mのSD 03があり、小溝が両者を連結していた。SD 03は途切れ部をもち、SD 02とは方向がやや異なる。SD 02よりも西側の範囲は、畦畔などの遺構が検出できず、水田跡1の広がりとは不明である。ただし、花粉分析では稲作地であった可能性が指摘され、水田跡1が西側へと広がる可能性もある。**遺物・時期**：水田跡1の畦畔および床土下部において検出したSD 01では、青磁碗の破片（PL 15-16・17）が出土した。水田跡1はそれよりも新しいと考え、時期を13世紀後半～14世紀以降もしくは15世紀以降と推測したい。なお、SD 03では平安時代の土師器甕の小破片が出土したが、SD 03はSD 02と同一面で検出したことに加え、SD 02と小溝で連結されることからSD 02と同時期と判断し、遺物は流れ込みと考えたい。

水田跡2 SC 04、SD 01・05・06（第56・57図）

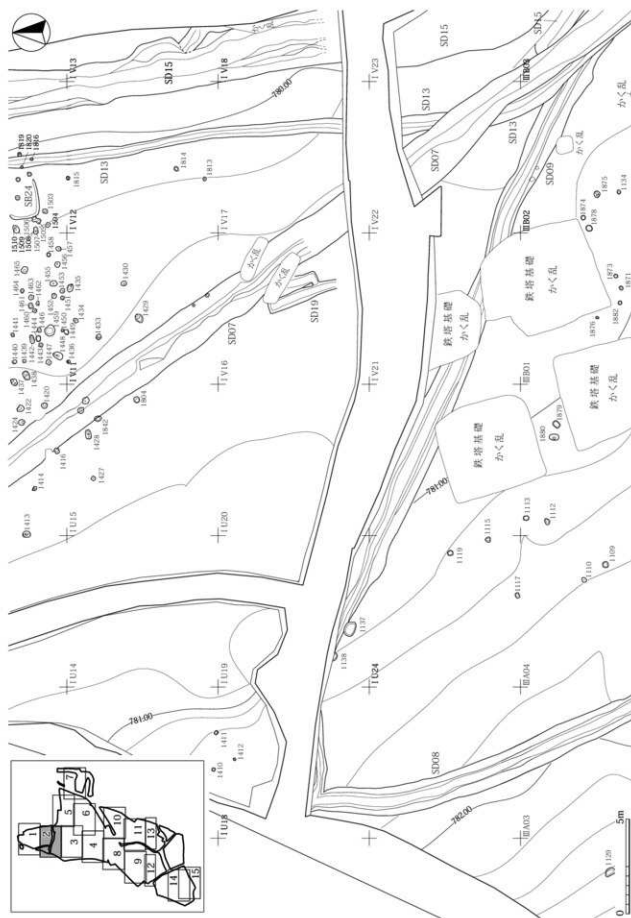
位置：I区。ⅢQ 03・04・08・09・14グリッド。**検出**：水田跡1の畦畔SC 01および床土に該当するⅢb-1層の下部でSC 04、SD 01・05・06を検出した。**構造等**：北西-南東方向およびそれに直交する方向で畦畔SC 04を検出し、SC 04が区画する範囲を水田跡2とした。SC 04の平面プランは不明確な部分が多く、北西-南東方向で長さ6.7m、直交する方向で長さ4.9mを確認したのみである。SC 04は水田跡1のSC 01・02よりも内側に位置し、区画する範囲もやや狭い。また、北西-南東方向に直交するSC 04の外側には平行してSD 01・05・06が位置し、SD 06は一部に板状の礫が置かれていた。これ等の溝跡には重複があり、SD 01がSD 05・06を切る。水田作土・床土は明確でないが、花粉分析では第Ⅲb-3・4層（試料ANo.2・3）でイネ属が高率で検出されている（第4節参照）。**遺物・時期**：SC 04に沿うSD 01で青磁碗の破片（PL 15-16・17）が出土したことから、13世紀後半～14世紀もしくは15世紀と推測したい。SD 01と重複関係にあるSD 05・06も、大きな時期差はないと考えたい。



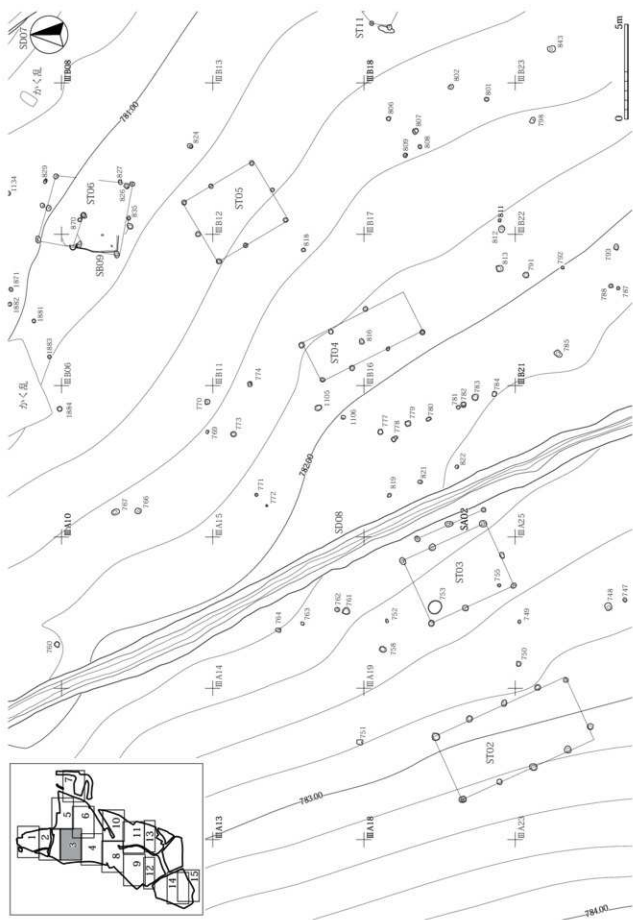
第29図 遺構分布全体図



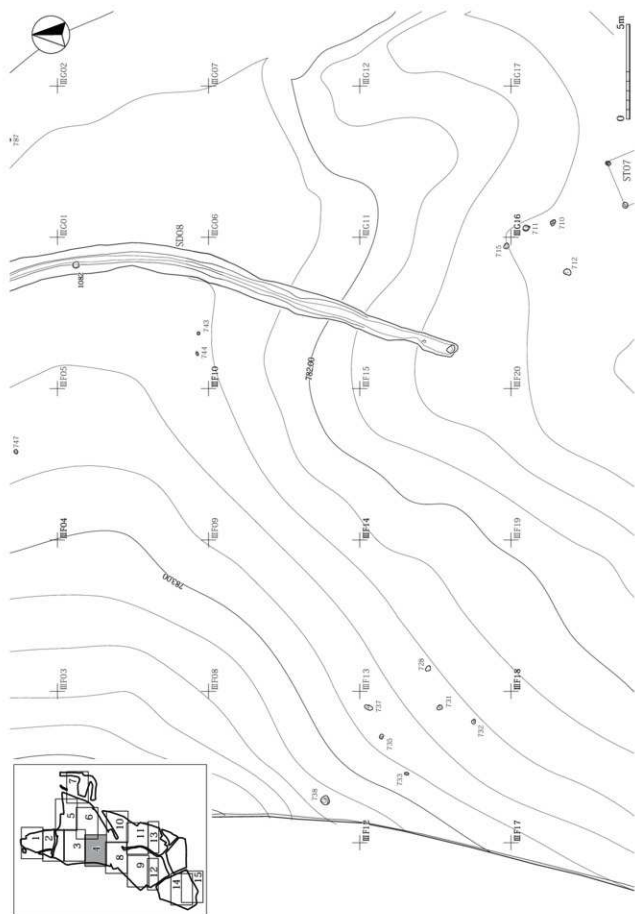
第30図 遺構分布部分拡大図(1)



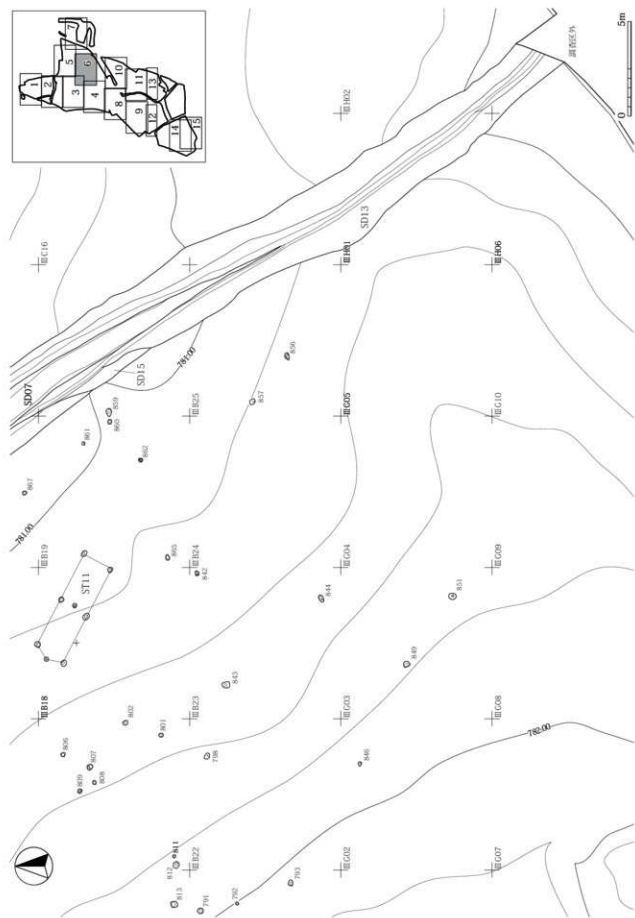
第31図 遺構分布部分拡大図(2)



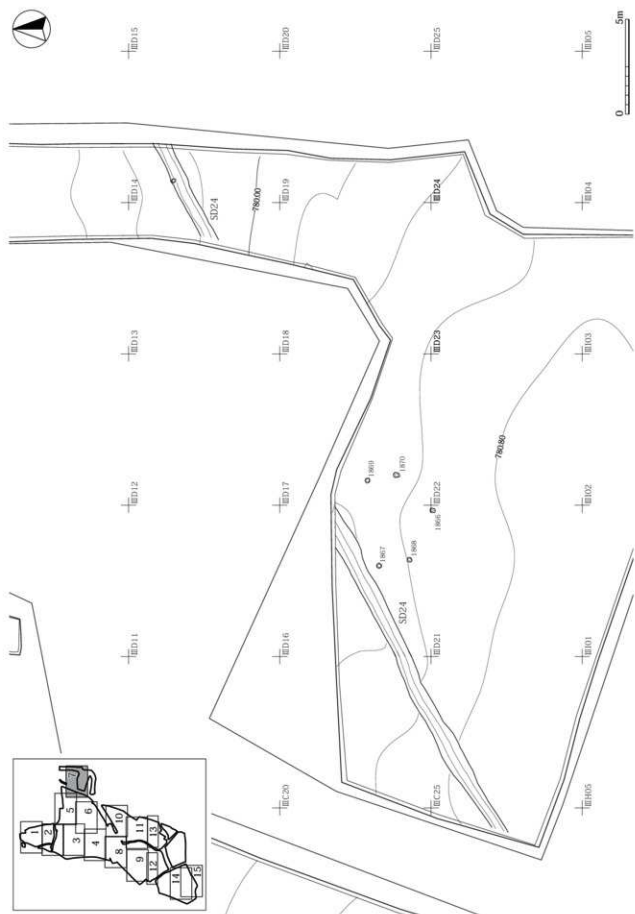
第32図 遺構分布部分拡大図(3)



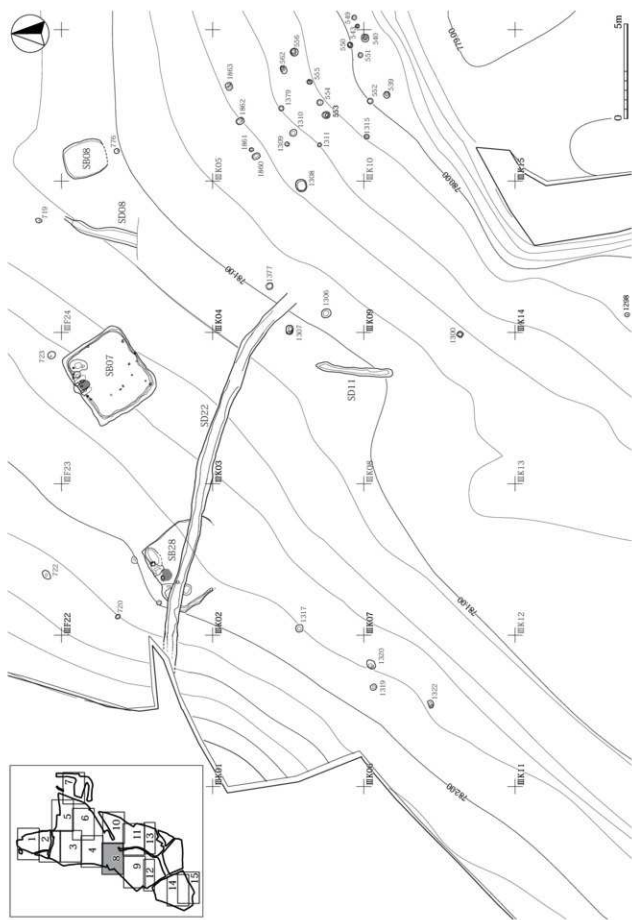
第33図 遺構分布部分拡大図(4)



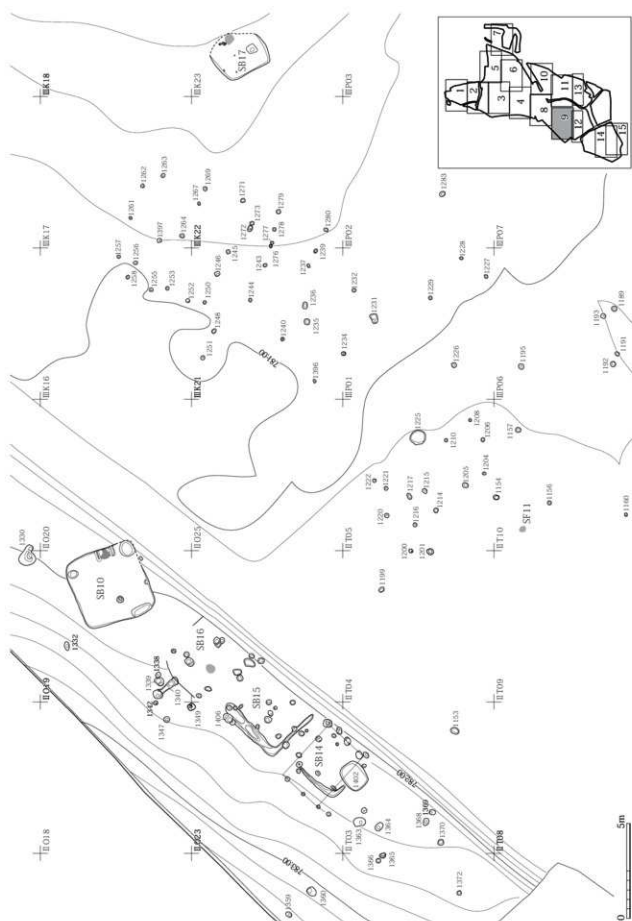
第35圖 遺構分布部分批大図(6)



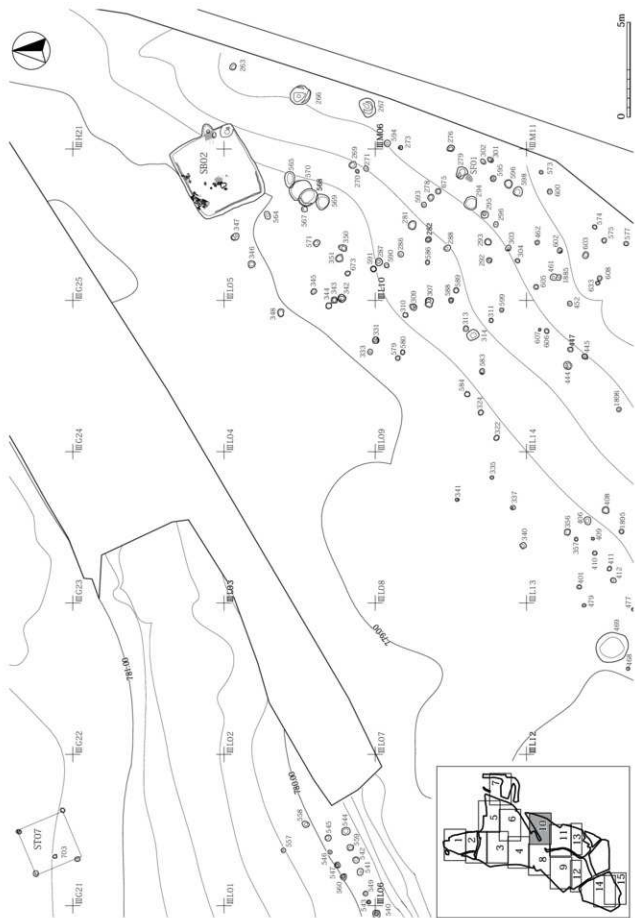
第36図 遺構分布部分拡大図（7）



第37図 遺構分布部分拡大図(8)



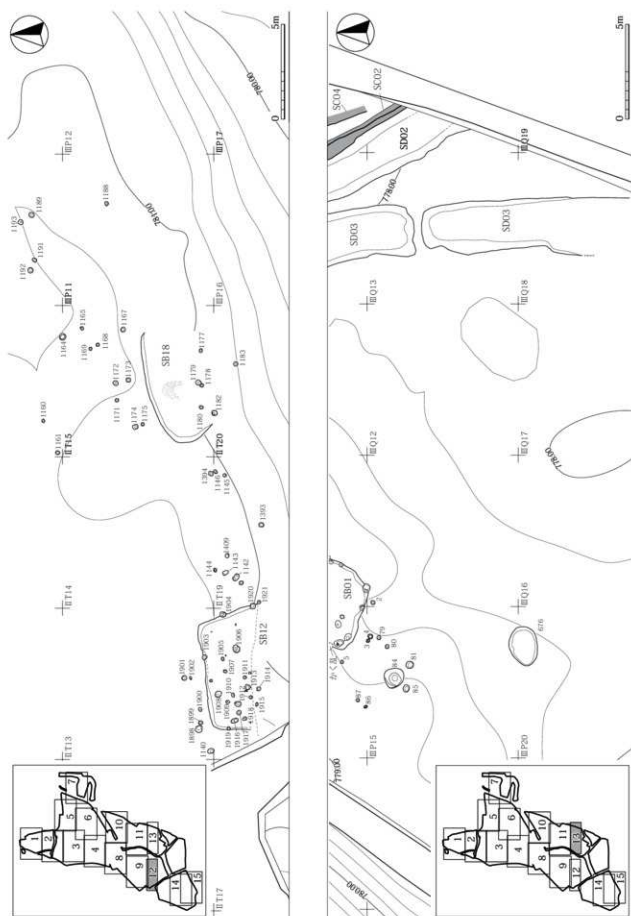
第38図 遺構分布部分拡大図(9)



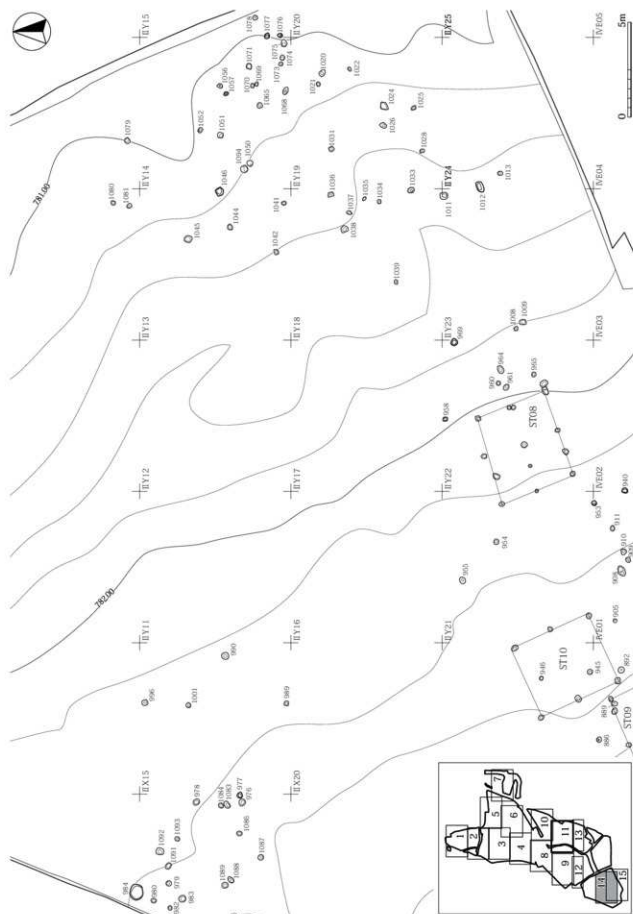
第39図 遺構分布部分拡大図(10)



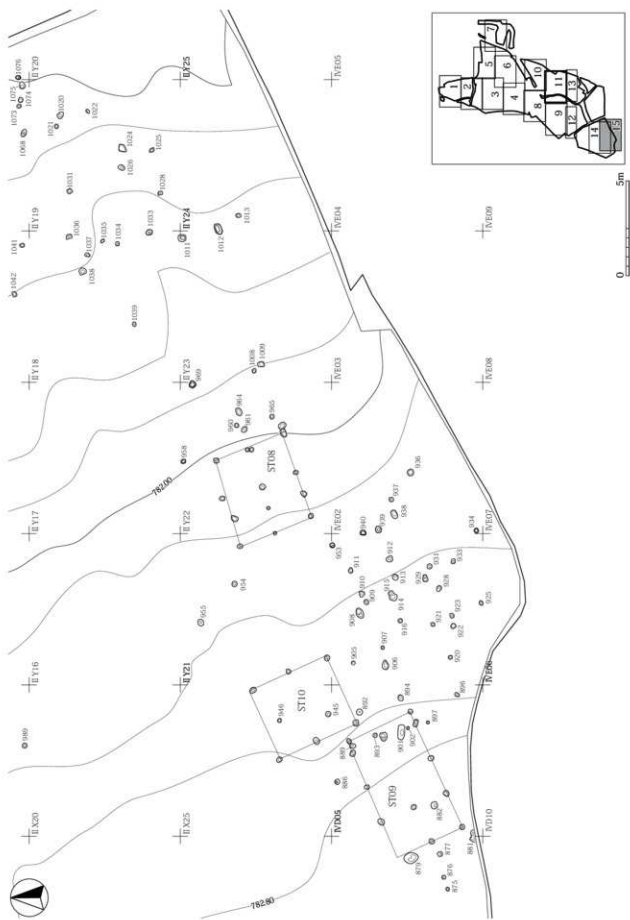
第40図 遺構分布部分拡大図(11)



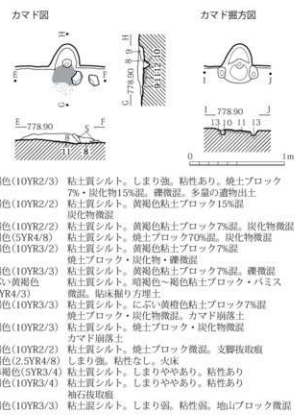
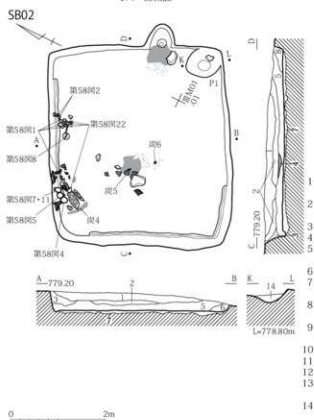
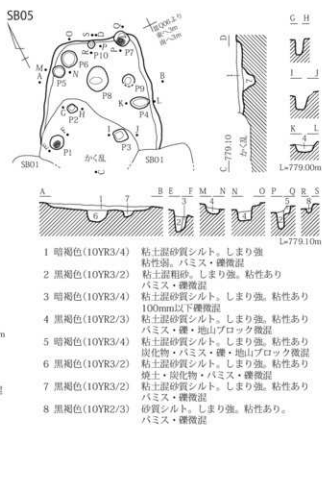
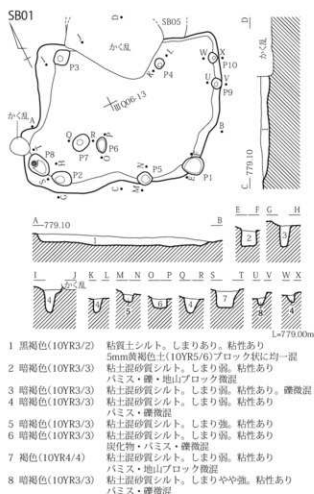
第41圖 遺構分布部分拡大図(12)(13)



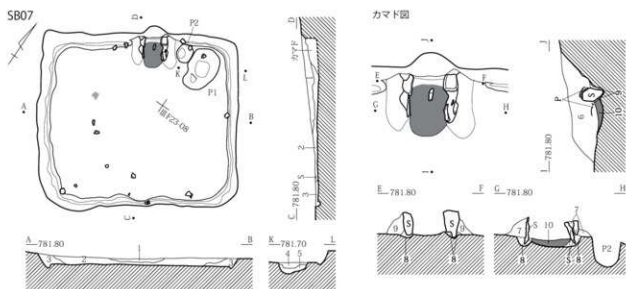
第42図 遺構分布部分拡大図 (14)



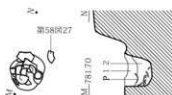
第 43 図 遺構分布部分拡大図 (15)



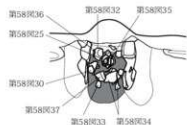
第44図 SB01・02・05 遺構図



Pit2遺物出土状況図



Kamado遺物出土状況図



Kamado掘方図



- 1 黒褐色(10YR2/3) 砂質シルト。焼土粒・2mm以下炭化物・礫・褐色粒・地山ブロック少量
- 2 黒褐色(10YR2/2) 粘土質シルト。礫・褐色粒多量。粗砂混
- 3 黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト。礫・地山ブロック多量
- 4 黒褐色(10YR2/3) 粘土質シルト。焼土粒・炭化物少量。地山粒多量
- 5 黒褐色(10YR2/2) 粘土質シルト。褐色粘土粒・炭化物少量。地山粒多量
- 6 黒褐色(10YR2/2) 粘土質シルト。しまり弱。粘性ややあり。暗褐色粘土ブロック微混。焼土粒少量
- 7 暗褐色(10YR3/4) 粘土質シルト。しまり強。礫多量
- 8 暗褐色(10YR3/3) 粘土質シルト。しまり強。礫少量。焼石裏込土
- 9 褐色(10YR4/4) 粘土質シルト。しまりあり。礫微混。文脚裏込土
- 10 暗赤褐色(5YR3/6) 焼土



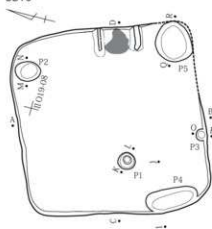
- 1 黒褐色(10YR2/2) 砂質シルト。しまりあり。粘性弱。礫少量。褐色地山ブロック多量

- 1 黒褐色(10YR2/3) 粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。20mm以下地山(赤い・黄褐色)粘土混。炭・礫混。鉄分ブロック状に混
- 2 黒褐色(10YR2/2) 粘土質。しまりあり。粘性強

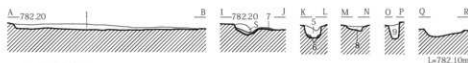
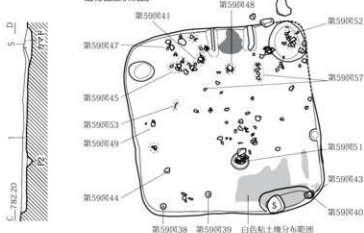
第45図 SB07・08・12 遺構図

第5章 小山寺遺跡

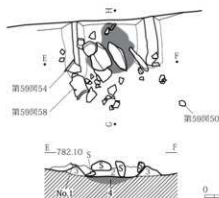
S810



遺物出土状況図

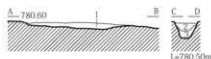
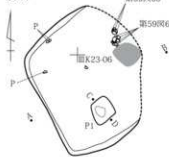


カマド遺物出土状況図



- 1 黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト。しまり弱。粘性あり
焼土・炭少混。地山ブロック混
- 2 暗赤褐色(10YR3/6) 粘土質シルト。しまり弱。粘性強
焼土ブロック多混
- 3 暗褐色(10YR3/4) 粘土質シルト。しまりあり。粘性あり
黒褐色粘土ブロック混
- 4 赤褐色(10YR4/6) 粘土質シルト。しまりあり。粘性あり。火床
- 5 不明 地山ロームブロック少混
- 6 にぶい黄褐色 粘土質シルト
- 7 にぶい黄褐色 粘土質シルト。白色粘土塊混
(10YR5/4)
- 8 黒褐色(10YR2/3) 粘土質シルト。しまり弱。粘性強
10mm地山ブロック混
- 9 黒褐色(10YR3/2) 粘土質シルト。しまり弱。粘性あり

S817

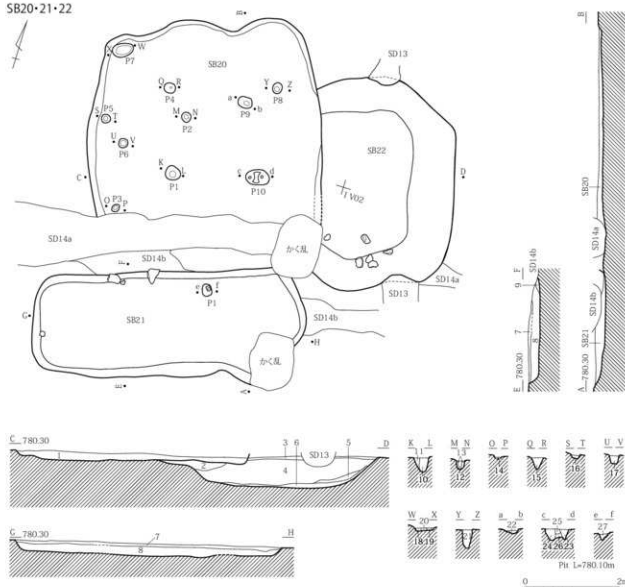


- 1 黒褐色(10YR2/3)
シルト質粘土。しまりあり。粘性強。焼土・炭少混
- 2 黒褐色(10YR2/2)
シルト質粘土。しまりあり。粘性強。地山粘土少混
- 3 黒褐色(2.5YR3/2)
砂混シルト質粘土。しまり強。粘性あり

0 2m

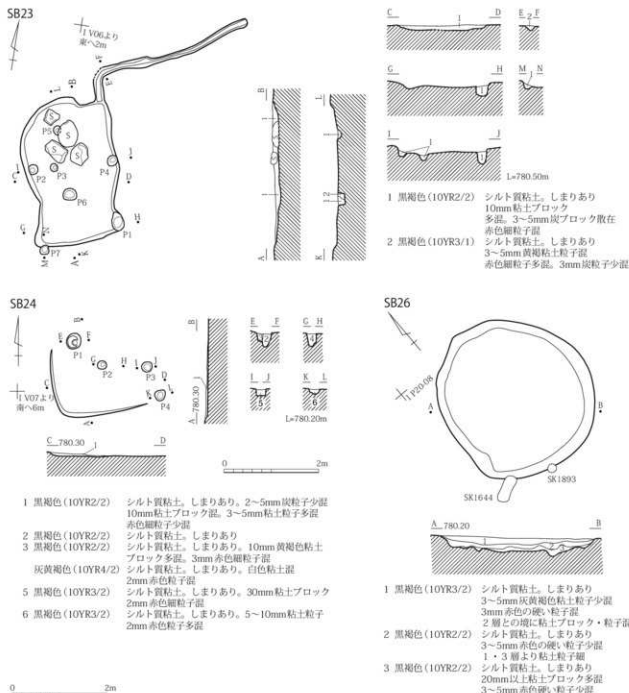
第46図 SB10・17 遺構図

SB20・21・22



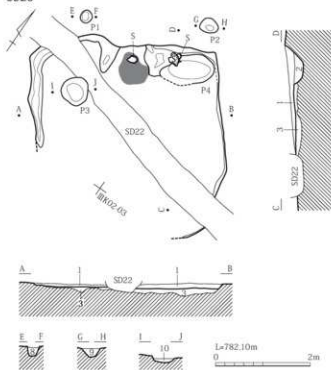
- | | |
|---|---|
| 1 黒褐色(10YR3/1) シルト質粘土。しまりあり。5~10mm黄褐色粘土
粒子・3~5mm赤色粒子・炭粒子少混 | 14 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。白色粒、炭粒子多混 |
| 2 黒褐色(10YR3/1) シルト質粘土。しまりあり。黄褐色土ブロック
多混。10mm黄褐色硬い粒子少混 | 15 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。5~10mm白色粘土
粒子少混 |
| 3 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土 | 16 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。10mm粘土粒子多混 |
| 4 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまり強 | 17 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。 |
| 5 極暗赤褐色 砂質シルト。しまり弱。赤色細粒子多混
(7.5R2/2) | 18 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。5mm粘土粒子混 |
| 6 黒褐色(10YR3/1) シルト混粘土 | 19 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。18層より粘質
白色粘土粒子・赤色粒少混 |
| 7 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土。しまりあり。5mm炭粒子・
3~5mm炭粒子少混 | 20 にぶい黄褐色
(10YR5/3) |
| 8 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土。しまりあり。3~10mm粘土粒子・
3~5mm炭粒子少混 | 21 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土。しまりあり。均質。3~5mm白色
粘土粒子・黄褐色土ブロック混 |
| 9 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土。しまりあり。赤色粒子少混 | 22 暗褐色(10YR3/3) シルト質粘土。しまりあり。黄褐色・白色粘土粒子
・2~3mm赤色粒子多混 |
| 10 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。10mm粘土粒子多混
粘土のまわりに黄褐色粒子(黄褐色10YR5/8)付着
赤色細粒子混 | 23 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。2mm赤色粘土粒子少混 |
| 11 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。粘性あり。1層より粘土粒子多混 | 24 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり
25層より白色粘土粒子多混 |
| 12 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。3~5mm粘土粒子混
炭細粒子少混 | 25 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。26層より赤色粘土粒子多混 |
| 13 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。粒子混
炭粒子12層より多混 | 26 黒色(10YR2/1)
黄褐色・赤色粘土(明褐色1.5YR5/8)ブロック多混 |
| | 27 黒色(10YR2/1)
シルト質粘土。粘性・しまりあり。黄褐色粘土・
赤色粘土・5mm白粘土粒子多混 |

第47図 SB20・21・22 遺構図



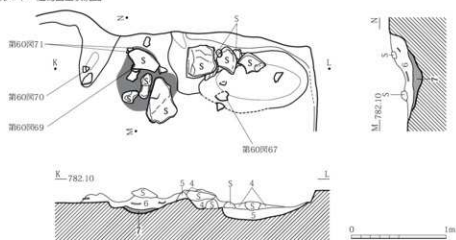
第48図 SB23・24・26 遺構図

SB28



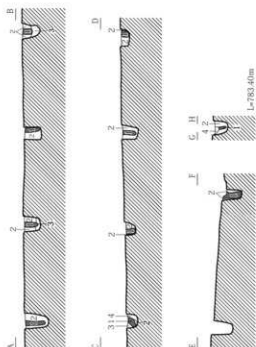
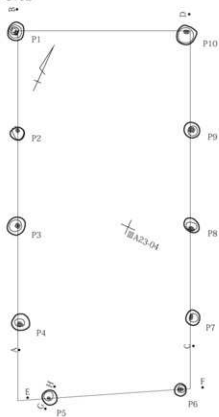
- 1 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。5mm暗褐色土塊層
5mm以下褐色土塊微層。5mm以下部、赤色粒子微層
- 2 黒褐色(10YR3/2) シルト質粘土。10cm以下白色粘土粒層
赤色粒子少量
- 3 に近い黄褐色(10YR4/3) シルト質粘土。しまり強。10cm濃い赤色粒子層
- 4 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。10cm黄褐色粘土粒層
2~5mm粘土粒層。カマド構築石材多量。カマド解体土
- 5 に近い黄褐色(10YR6/4) シルト質粘土。カマド構築土残存部
- 6 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。5層より粘土微層
焼土粒子多量。炭粒子微層。カマド解体土
- 7 赤褐色(5YR4/8) 灰床
- 8 黒褐色(10YR2/3) シルト質粘土。しまりあり。3mm粘土層。焼土粒多量
鏝・灰・赤色粒子層
- 9 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまりあり。3mm粘土粒層
焼土粒微層。均質
- 10 黒褐色(10YR2/2) シルト質粘土。しまり強。白色粘土微層。焼土粒多量

カマド 遺物出土状況図



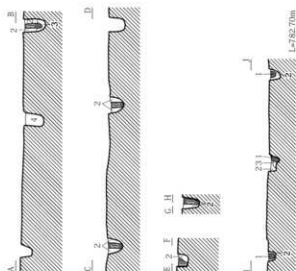
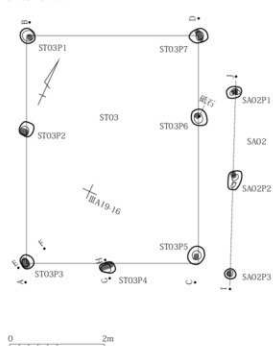
第49図 SB28 遺構図

ST02



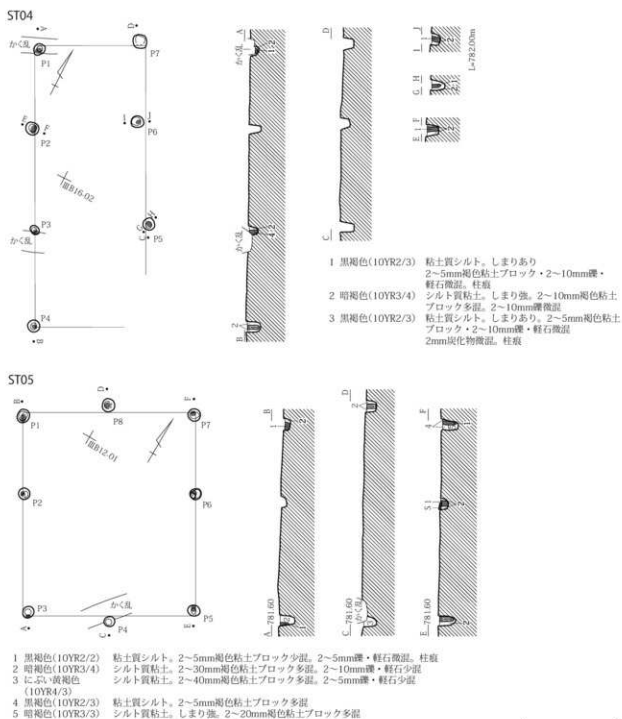
- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘土混シルト。しまりやや弱
2~15mm粘土ブロック・2~5mm礫微石。柱痕
- 2 暗褐色(10YR3/3) シルト質粘土。しまり強。粘土ブロック多量
- 3 暗褐色(10YR3/4) シルト質粘土。しまり強。粘土ブロック多量
2層よりシルト質少
- 4 黒褐色(10YR2/2) 粘土混シルト。しまり弱。抜き取り後埋設土

ST03-SA02



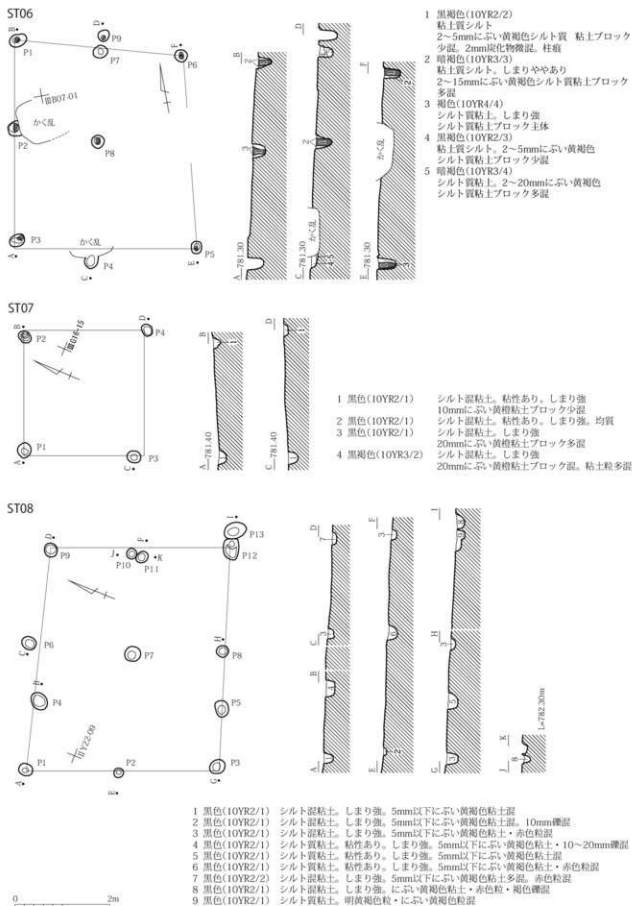
- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘土混シルト。2~10mm褐色粘土ブロック少量。柱痕
- 2 暗褐色(10YR3/4) 粘土混シルト。しまり強。2~20mm褐色粘土ブロック多量
- 3 黒褐色(10YR2/2) 粘土質シルト。しまりあり。2~5mm褐色粘土ブロック微石
- 4 黒褐色(10YR2/3) 粘土混シルト。しまり弱。2~10mm褐色粘土ブロック少量

第50図 ST02・03, SA02 遺構図

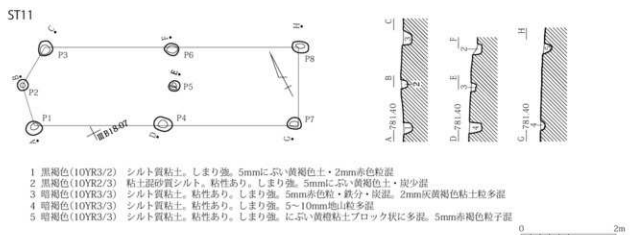
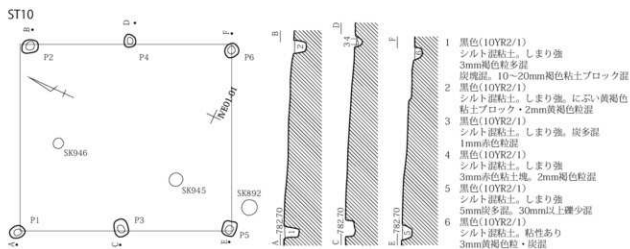
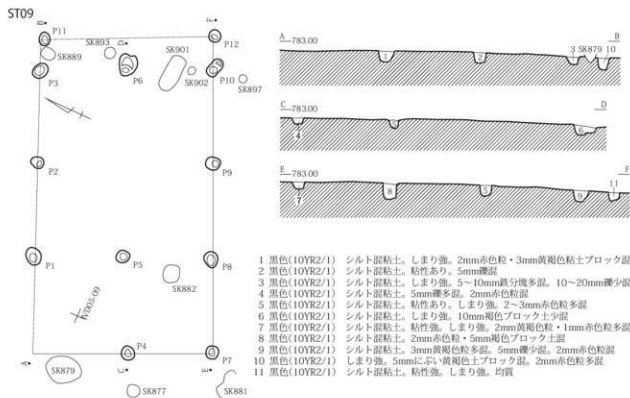


第51図 ST04・05 遺構図

第5章 小山寺遺跡

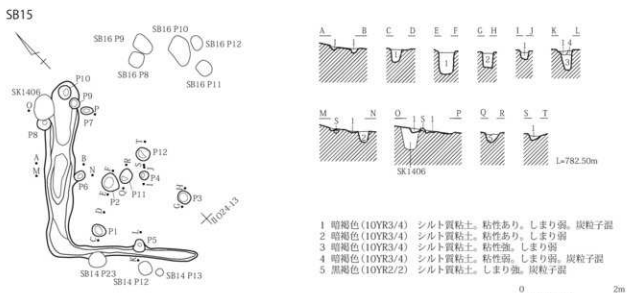
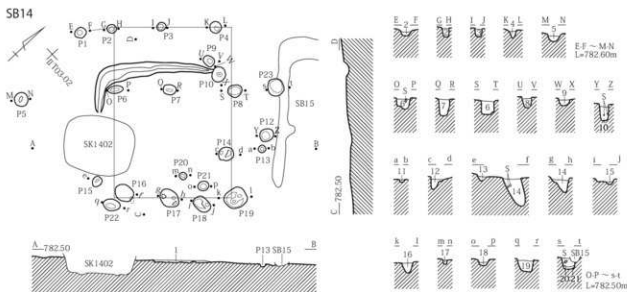


第52図 ST06・07・08 遺構図

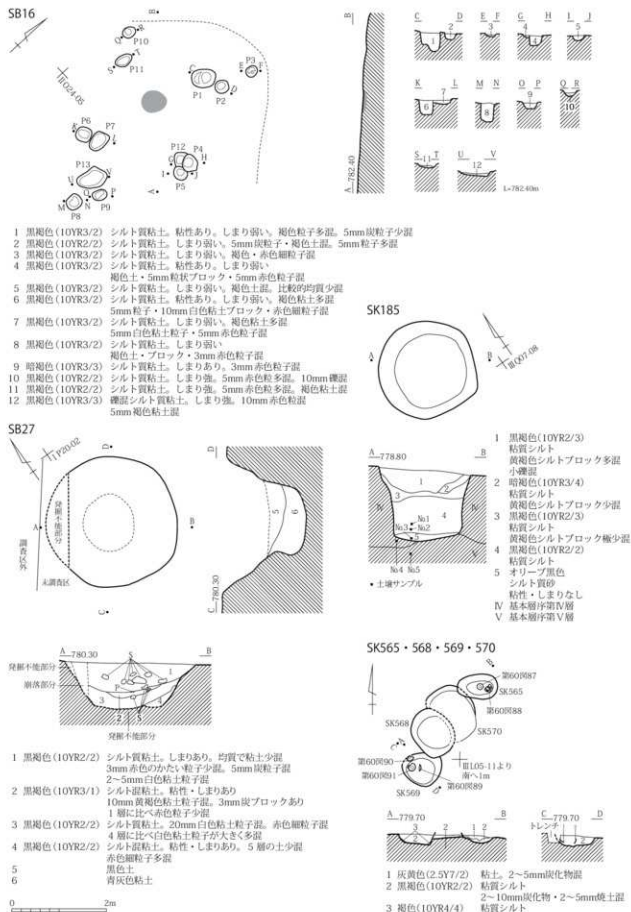


第53図 ST 09・10・11 遺構図

第5章 小山寺遺跡

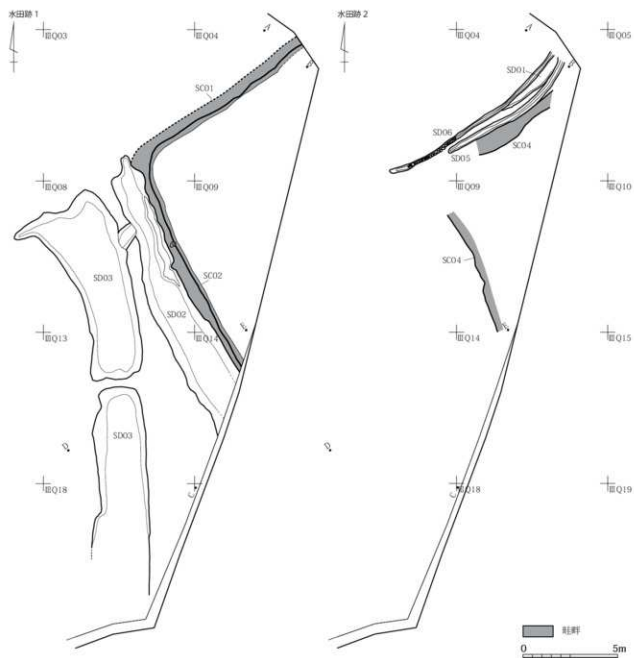


第54図 SB14・15 遺構図



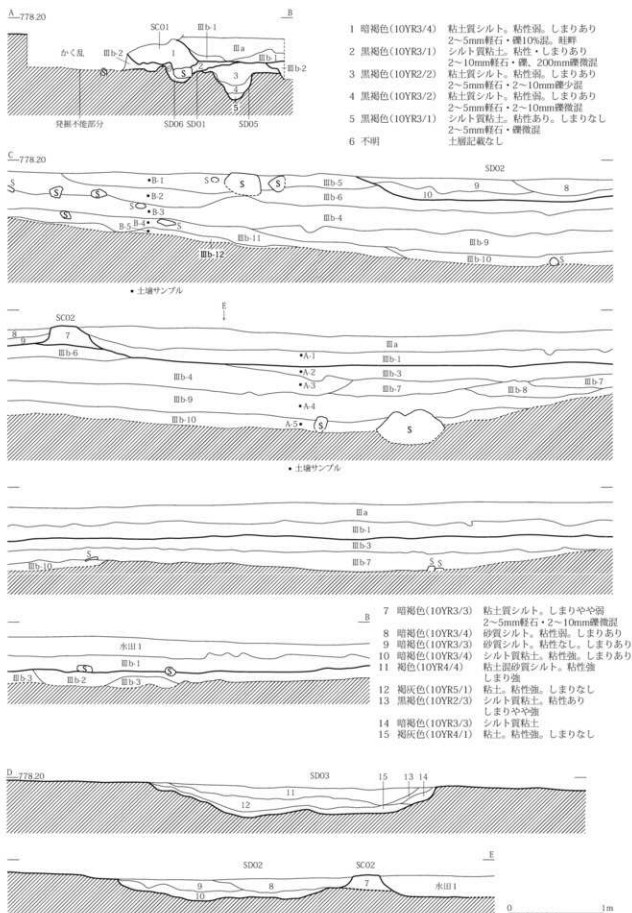
第55図 SB16・27、SK185・565・568・569・570 遺構図

第5章 小山寺遺跡跡



- | | | |
|---------|---------------|--|
| IIIa | 暗褐色(10YR3/4) | 粘土部砂質シルト。粘性弱。しまりややあり。水田作土 |
| IIIb-1 | 褐色(10YR4/1) | シルト質粘土。極暗赤色(5YR2/3)鉄分2%沈殿。2~5mm・100mm礫微沈殿。水田粘土 |
| IIIb-2 | 褐灰色(10YR4/1) | 粘土質シルト。2~5mm礫微沈殿 |
| IIIb-3 | 褐灰色(10YR4/1) | 粘土質シルト。2mm軽石・炭化物微沈殿 |
| IIIb-4 | 黒色(10YR2/1) | 粘土質シルト。2~3mm軽石少量。2~5mm炭化物・礫微沈殿。2~5mm地山ブロック微沈殿 |
| IIIb-5 | 黒褐色(10YR3/1) | 粘土質シルト。2~5mm軽石・2~10mm礫・300~500大形礫微沈殿。鉄分・マンガン粒微沈殿 |
| IIIb-6 | 黒褐色(10YR3/2) | 粘土質シルト。2~5mm軽石・2~10mm礫微沈殿。鉄分・マンガン粒微沈殿 |
| IIIb-7 | 黒色(10YR2/1) | シルト質粘土。2mm軽石・礫・炭化物微沈殿 |
| IIIb-8 | 黒色(10YR2/1) | 粘土質シルト。2~5mm軽石少量。2~5mm礫・炭化物微沈殿。2~10mm地山ブロック微沈殿 |
| IIIb-9 | 黒色(10YR2/1) | シルト質粘土。2~10mm軽石・礫。褐色粒微沈殿。2~5mm炭化物微沈殿 |
| IIIb-10 | 黒褐色(10YR3/1) | シルト質粘土。150mm・500mm礫微沈殿 |
| IIIb-11 | 黒色(10YR2/1) | シルト質粘土。2~5mm軽石・礫。20~50mm礫微沈殿 |
| IIIb-12 | 灰黄褐色(10YR4/2) | 粘土質シルト。2~5mm礫微沈殿 |
| IV | 基本層(序層IV層) | |

第56図 水田跡 平面図



第57図 水田跡 断面図

第3節 遺物

1 平安時代の土器

(1) 遺構出土

SB 02 (第58図1~24, P.13)

供膳具は須恵器と黒色土器がほぼ半々であり、煮炊具は土師器甕である。そのほか極小の甕、須恵器片口鉢や土師器の鉢、三足土器のものと考えられる脚部など、特殊な器形のものがある。1~3、5・6は須恵器坏で、全て底面が回転糸切りのままで、体部~底部内面を回転ナデする。1は器壁が歪み、接合すると隙間ができ、底部を含む破片が橙色の酸化焙焼成なのに対して、ほかの体部破片が灰色を呈する還元焙焼成である。焼成時に割れた後、異なる空気環境で焼かれたようである。4の須恵器高台付碗は底面が回転ナデで、切り離し方法は不明だが底部に一文字の亀裂が走る。7~15の黒色土器皿・坏・碗は、底面を回転糸切りするものと体部下端を含めて手持ちヘラ削りするものがある。内面の黒色処理は厚く、ミガキの様子を観察しづらい。器高の差で皿・坏・碗に分化している。17・18の土師器ミニチュア壺は極小だが、回転ナデ調整され、底部に回転糸切り痕が見られる。18は内面が炭化物で黒くなり、何らかの有機物が容れられていたと考える。土師器甕には、回転ナデ調整の19、ハケ調整の20、ヘラ削りされる21がある。22の須恵器片口鉢は残存率が高いが、歪みが著しく元通りに接合できない。破片により還元状態も異なり、窯内での焼成時に割れた後、異なる空気環境下で被熱したと考える。23の土師器鉢は、内外面回転ナデ調整の後、口唇内面をヘラ削りする。24は三足土器の脚部で、L字状の脚部を七角形にヘラ削りし、つま先部と底部もヘラ削りする。鉢形などの容器の底面に付されていたと考えるが、23とは胎土が異なり、SB 07から出土した黒色土器鉢34に胎土は似ているものの、34のものかどうかは不明である。今回の調査では、この脚部が付く可能性のある大型のものはほかには出土していない。

SB 07 (第58図25~37, P.13)

供膳具は黒色土器と土師器があり、煮炊具は土師器甕である。黒色土器は、25~27の坏、28の碗、29の高台付碗がある。無高台の坏・碗は、底面は回転糸切り、体部は回転ナデ調整の後、内面をミガキ調整して黒色処理する。吸着した炭素が厚く残り、ミガキは観察しづらい。土師器の残存率も高く、未使用の可能性もある。29の高台付碗は、高台貼り付け時に底面の糸切り痕がナデ消されている。30の土師器皿、31~33の土師器坏も黒色土器と同様の調整で、底面は回転糸切り、体部は回転ナデ後、内面がミガキされる。31・32の坏は、内面に煤痕と油染みのような赤味があり灯明具と推測する。34の土師器鉢も回転ナデ調整の後、内面を放射状にミガいて黒色処理される。35は高台が削り出しの須恵器甕で焼きが甘く、酸化気味である。36は回転ナデ調整される球胴の小型甕、37はコノ字口縁で、頸部下が横、胴部が縦にヘラ削りされる武蔵型の甕である。

SB 10 (第59図38~59, P.14)

供膳具は38~50の黒色土器が主体で、51の須恵器坏も残る。煮炊具は52~54・56の土師器甕で、57・58の無底の瓶が伴う。貯蔵具は、59の小型の須恵器甕があり、そのほかに用途不明の55の円筒形土器がある。38~45の黒色土器坏と46~48の同碗は、底面が回転糸切り、体部が回転ナデ、内面がミガキ後黒色処理されるが、SB 07と同様に残存率の高いものがあり、吸着した炭素が黒光りするほど残りがよいなど、未使用の可能性のあるものがある。さらに38・39・43は口縁部から数cmで止まり、破断に至らないひび割れがあり、焼成時のものであることを窺わせる。49の黒色土器高台付碗は底面に高台を貼

りつけ後、高台の内側がナデ消され、底部内面には直径25mmの円形の中央5mmの部分だけが盛り上がったはっきりしたドーナツ状のくぼみが見られる。50の黒色土器高台付碗は、高台の内側の底面に放射状の短い平行条線が見られヘラ削り痕に似るが、ヘラ削り痕とするには条線が幅広である。51の須恵器杯は焼きが甘くやや軟質で、体部外面の一部に極細のひび割れが見られる。土師器甕は、52・56が回転台整形、53がコノ字口縁で頸部下が横ヘラ削りされる武蔵型甕、54がくの字口縁で胴部が縦ヘラ削りのやや古手の甕である。55の土師器円筒形土器は厚手で、内面の巻き上げ痕が顕著に残る点から煮炊具とも貯蔵具とも考えにくく、古墳時代終末期を中心に見られる円筒形土器とも直線的な外形や外面のヘラ削り調整が異なり、用途は不明である。57・58の無底飯は希少な器種であるが、本建物跡では57の土師器のもの58の黒色土器のもの2種類がある。57の土師器飯は胴部外面が横ナデされ上部に突帯が巡り、胴部内面下部に幅28mm、高さ9mm、厚さ2mmの粘土塊が貼りつけられた上部に幅12mm、高さ14mm、深さ3mmの小孔があって、糞子を置くための橋を渡すようになっている。58の黒色土器飯は、胴部外面が横ナデ後縦にハケ目調整されて上部に突帯はなく、内面下部には橋を十文字に渡すための突起が4か所に付く。59の須恵器甕は、胴部～底部内面が回転ナデ調整され、底面は右回転系切りである。

S B 17 (第59図60・61)

60の黒色土器杯と61の碗はかが出土している。60の黒色土器杯は内外面ともにクロクロ目が強く、内面は凹部を残したまま、ヘラミガキと放射状ミガキが施される。61の黒色土器碗は、口縁部内面から底部内面の中心まで繋がる放射状ミガキが施される。

S B 28 (第60図65～73、P.14)

供膳具は65～68・70・71の黒色土器が主体で69の土師器があり、黒色土器は口径と器高の差で65～68の杯と70・71の碗に分かれる。煮炊具は72・73の土師器甕がある。本建物跡の黒色土器杯も遺存率の高いものが多く、内面吸着させた炭素がよく残って光沢をもつものがある。また、66は口縁部から体部下半で止まる細いひび割れがあり、焼け損じとみられる。土師器甕は、胴部外面をヘラ削りする72と回転ナデ調整する73がある。

S D 01 (第60図74)

74の須恵器飯底部が出土している。74は胴部を回転ナデ調整の後、底部を回転系切りし、高台を張り付けている。高台の底面には直線的な圧痕があり、糞子痕とみられる。

S D 07 (第60図75～84、P.14)

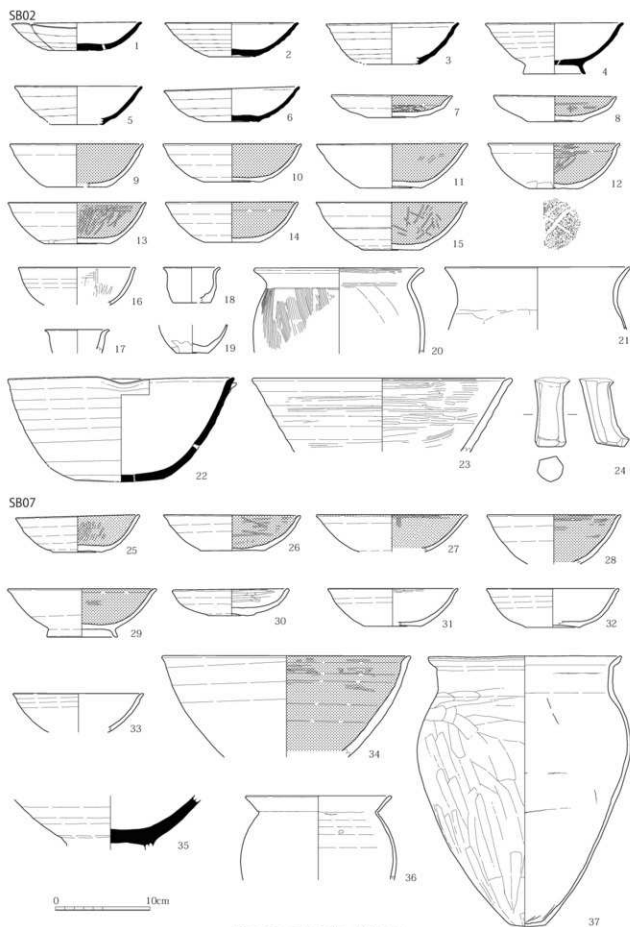
75・76の須恵器杯、77の黒色土器皿、78の黒色土器の高台付皿、79・80の杯、81の碗、82の灰軸陶器碗、84の土師器小型壺などがある。須恵器杯は底面が回転系切りのままで、部分的に焼きが甘く、白っぽい。75は体部が歪んで口縁部が楕円形になる。82の灰軸陶器碗は、高台が三日月状を呈するヶヶ丘1号窯式のものである。84の土師器小型壺は回転ナデ調整され、体部内面に黒褐色の付着物が見られる。時期は9世紀代のものである。なお、83は中世陶磁器である(107頁参照)。

S K 564・565・569・676・1419 (第60図86～93、P.14)

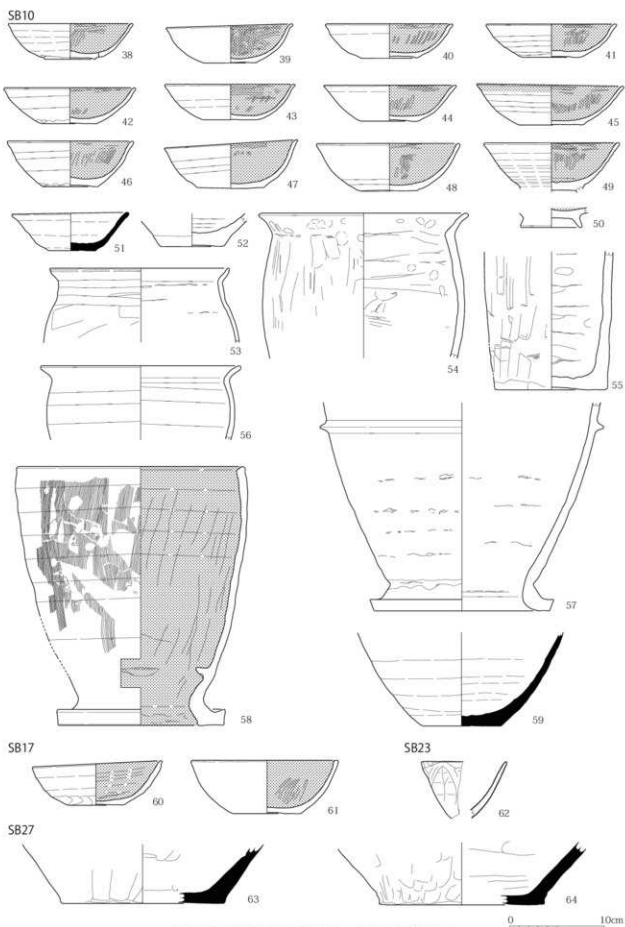
86の土師器飯は、S B 10の57と同一個体である。87～91の黒色土器杯・皿は、底面が回転系切り、体部外面が回転ナデ、内面がミガキ後黒色処理される。92の須恵器壺は暗灰色の色調や滓分の噴き出す胎土から、奥日影窯のものに類似する。93は土師器壺底部である。86はS K 564、87・88はS K 565、89～91はS K 569、92はS K 676、93はS K 1419から出土した。

(2) 遺構外出土(第60図94～101)

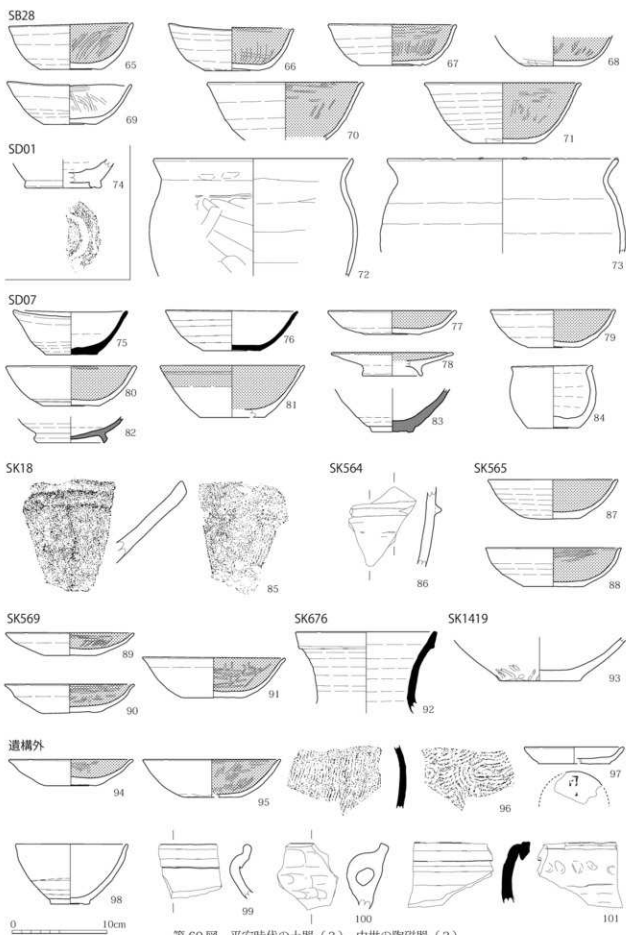
94の黒色土器皿は底面が磨滅して切り離し方法が不明であるが、95の黒色土器杯は底面と体部外面下端をヘラ削りする。96の須恵器甕は外面が平行叩き、内面が同心円状の当て具である。



第58図 平安時代の土器(1)



第59図 平安時代の土器(2)、中世の陶磁器(1)



第60図 平安時代の土器(3)、中世の陶磁器(2)

2 中世の土器・陶磁器

(1) 遺構出土

SB 12 (PL 15-1~7)

1は県内産と推測する須恵質の擂鉢で、口縁端部が短く立上る。内面は全体が磨減する。2は常滑の甕、3~6は中津川の甕で、3は内面に指頭圧痕が残る。7は白磁の皿で、口縁端部の軸を掻き取る。いわゆる口禿げの皿である。このほか、小破片のため掲載しなかったが、龍泉窯の青磁碗が出土している。時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SB 20 (PL 15-8・9)

8はロクロ整形のかわらけで、内外面の体部下半にナデ調整を施し、底面には糸切り痕が残る。9は山茶碗の片口鉢で回転ナデの後、体部下半を削る。東濃産と推測する。このほか、小破片のため掲載しなかったが、龍泉窯蓮弁文の青磁碗が出土している。時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SB 21 (PL 15-10)

10は中津川の甕で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SB 22 (PL 15-11~14)

11~14は龍泉窯の青磁碗で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SB 23 (第59図62, PL 15-15)

15(第59図62)は龍泉窯蓮弁文の青磁碗で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SB 27 (第59図63・64)

63・64は中津川の甕の底部で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SD 01 (PL 15-16・17)

16は龍泉窯の青磁輪花皿で、口縁部内面に画花文を施す。時期は15世紀末~16世紀と考える。17は龍泉窯蓮弁文の青磁碗で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SD 07 (第60図83, PL 15-18・19)

9世紀代の土器に混じって出土したものである。18(第60図83)は古瀬戸後期I~II様式の本目茶碗で、底部はケズリ出しによる高台が付く。時期は14世紀後半~15世紀初頭と考える。19は中津川の甕もしくは壺で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SD 09 (PL 15-20)

20は龍泉窯の青磁碗で、口縁部内面に画花文を施す。時期は13世紀代と考える。

SD 13 (PL 15-21)

21は常滑の片口鉢Ⅱ類と推測する。内面は磨減し、破断面には漆と推測する黒褐色の物質が付着する。このほか、掲載していないが龍泉窯蓮弁文の青磁碗が出土した。時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SD 14 b (PL 15-22)

22は龍泉窯蓮弁文の青磁碗で、時期は13世紀後半~14世紀と考える。

SD 15 (PL 15-23~33)

23は山茶碗系の、24~26は中津川の、27は須恵質の片口鉢で、27にはすり目が認められる。23・27は内面の磨減が顕著である。28は中津川の壺、29~31は内耳土器、32・33は龍泉窯蓮弁文の青磁碗である。時期は23~28、32・33が13世紀後半~14世紀、29~31が15世紀と考える。

SK 18 (第60図85, PL 15-34)

34は土師質の片口鉢で、内面にすり目が認められる。在地系で、時期は15世紀後半と考える。

SK 1046 (PL 15-35)

35は古瀬戸の折口深皿で、破断面に漆と推測する黒褐色の物質が付着する。時期は13世紀末～14世紀前半と考える。

(2) 遺構外出土 (第60図97～101, P. L. 16～36～64)

13～14世紀の36～56・第60図97と15世紀代の57～64が出土した。36・37と第60図97はロクロ整形のかわらけで、97には煤が付着する。38～40は古瀬戸で38は前期様式の鉦皿、39は四耳壺もしくは瓶子、40は前期様式の瓶子である。41は山茶碗の小皿で尾張系と推測する。42・43は中津川で山茶碗の片口鉢である。44～46は常滑で44・45は片口鉢、46(第60図101)は甕である。44は内面の磨減が顕著である。47～52は中津川で47は甕、48・49は壺、50～52は甕もしくは壺である。53は青白磁の合子で体部上半に花の文様が付く。54～56は龍泉窯の青磁碗で54・56は蓮弁文を、55は蘭花文を施す。57(第60図100)は内耳土器で、口縁端部直下に耳部が付く。58(第60図98)・59は古瀬戸後期Ⅳ様式の天目茶碗で、58は底部に削り出しの高台が付く。60は古瀬戸後期様式の平碗で、破断面に漆と推測する黒褐色の物質が付着する。61(第60図99)～63は常滑の甕である。64は瓦質の片口鉢で山梨産の可能性がある。

3 金属製品

第61図1はSB 02から出土した刀子で、切先と茎尻が欠損する。背岡と刃間は撫角に切込む。残存部の全長は20.2cm、刃部の最大幅は1.2cmを測る。時期は伴出した土器から、9世紀前半と推測する。2～21は銭貨で、第11表に詳細を示した。

第11表 銭貨一覧表

※法量の項における〈 〉は復元値、() は残存値を示す

図版番号	台帳番号	出土位置	取上No/層位等	銭種	書体	王朝名	初鋳年	残存率	外径上下(mm)	外径左右(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	備考
61-2	3	S K 1402	No.1	皇宋通寶	真書	北宋	1038	ほぼ 完形	(23.3)	24.2	1.3	1.74	
3	17	II O 23	検出	元祐通寶	行書	北宋	1086	ほぼ 完形	24.3	23.9	1.8	2.72	
4	18	II O 22	検出	淳化元寶	草書	北宋	990	ほぼ 完形	(22.0)	(21.1)	1.2	1.64	
5	20	II T 19	検出	治平元寶	真書	北宋	1064	ほぼ 完形	23.1	(22.9)	1.4	1.83	
6	22	II Y 10	Ⅲ層上面	紹聖元寶	篆書	北宋	1094	完形	24.0	24.0	1.5	3.53	
7	36	II Y 10	Ⅲ層上面	景德元寶	真書	北宋	1004	完形	24.4	24.4	1.2	3.78	
8	39-1	S D 15	No.1	洪武通寶	一	明	1368	完形	23.5	23.3	1.4	2.43	7枚重なって跡着 (3単位に分離) 4枚跡着
9	39-2	S D 15	No.1	永樂通寶	一	明	1408	ほぼ 完形	(24.9)	25.2	1.1	1.96	7枚重なって跡着 (3単位に分離) 4枚跡着
10	39-5	S D 15	No.1	景祐元寶	篆書	北宋	1034	ほぼ 完形	(25.2)	(25.0)	0.9	1.63	7枚重なって跡着 (3単位に分離) 2枚跡着
11	39-6	S D 15	No.1	□□元寶	篆書	一	一	ほぼ 完形	(22.6)	(22.8)	1.6	2.43	7枚重なって跡着 (3単位に分離) 2枚跡着 腐食して銭名不明
12	40	S D 15	No.2	至道元寶	行書	北宋	995	ほぼ 完形	24.8	24.7	0.9	2.19	
13	41-1	S D 15	No.4	永樂通寶	一	明	1408	ほぼ 完形	(24.6)	(24.1)	1.4	2.30	2枚重なって跡着(背面合わせ)
14	41-2	S D 15	No.4	永樂通寶	一	明	1408	ほぼ 完形	24.4	(24.3)	1.4	1.39	2枚重なって跡着(背面合わせ)
15	43	S D 15	No.5	熙寧元寶	篆書	北宋	1068	ほぼ 完形	23.8	23.7	1.1	1.97	
16	44	S D 15 I V 13	No.7	皇宋通寶	篆書	北宋	1038	ほぼ 完形	(24.9)	(24.9)	0.9	1.85	
17	46	S D 15 I V 13	No.9	永樂通寶	一	明	1408	ほぼ 完形	24.7	24.7	1.3	2.95	
18	47	S D 15 I V 13	No.11	大中通寶	一	明	1361	完形	23.4	23.4	1.3	2.29	
19	48	S D 15 I V 13	No.12	元豊通寶	篆書	北宋	1078	ほぼ 完形	24.4	24.1	1.2	1.71	
20	50-1	S D 15 I V 12	下層	永樂通寶	一	明	1408	ほぼ 完形	(24.2)	24.5	1.3	2.25	7枚重なって跡着。若干反る
21	50-2	S D 15 I V 12	下層	開元通寶	一	唐	621	完形	24.2	24.2	1.2	2.69	7枚重なって跡着。背下月

4 木製品

S K 1074 から人形4点、薄片状の木製品2点が出土した(口絵、第61図、P L 17)。樹種同定を実施していないため、樹種は不明である。第61図1・3・4は斜目材、2は柵目材を加工した人形で、被りものと推測する表現の有無から2種類に分類できる。1・2は2か所を折り、被りものと推測する部分と顔部・頸部・胴部を表現する。被りもの上部は山形状を呈し、裏面は被りものから頭部にかけて斜めに削る。顔部は平坦で、目・鼻・口等は表現されていない。3・4は1か所を折り、顔部・頸部・胴部を表現する。裏面の頭部表現は1・2と同様で斜めに削るが、頭上部がやや右下がりの弧状を呈し、顔部を斜めに深く削り込んで表現する点が1・2とは異なる。また、1・2に対して3・4は若干小形である。人形は、被りもの表現があるもの・ないものが各2点なので、例えば前者が男性、後者が女性で一対となり、それが2セット存在すると考えることもできよう¹⁾。

5・6は柵目の薄片状木製品で、5は両端部が残るものと推測するが、6は下端部が欠損する。この2点は長さや幅が異なることから、別個体の可能性がある。

なお、1～6の出土状況は図面・写真記録ともに存在せず、不明である。

第12表 木製品観察表

()は残存値を示す

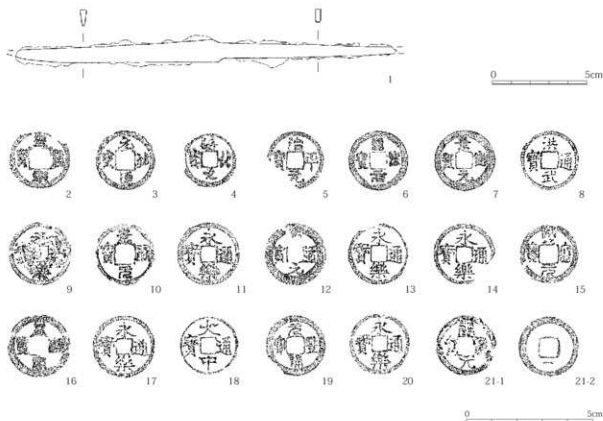
図版番号	P L 番号	管理番号	器種	出土位置	木取り	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	備 考
61-1	口絵、P L 17	1-4	人形	S K 1074	斜目	16.3	2.0	1.9	被りもの・顔部・頸部・胴部を表現
2	口絵、P L 17	1-6	人形	S K 1074	柵目	15.4	2.1	1.7	被りもの・顔部・頸部・胴部を表現
3	口絵、P L 17	1-7	人形	S K 1074	斜目	14.1	1.6	2.2	顔部・頸部・胴部を表現
4	口絵、P L 17	1-5	人形	S K 1074	斜目	14.7	2.3	2.2	顔部・頸部・胴部を表現
5	口絵、P L 17	1-8	薄片状木製品	S K 1074	柵目	3.2	1.5	0.25	
6	口絵、P L 17	1-9	薄片状木製品	S K 1074	柵目	(9.5)	1.1	0.4	

5 石製品

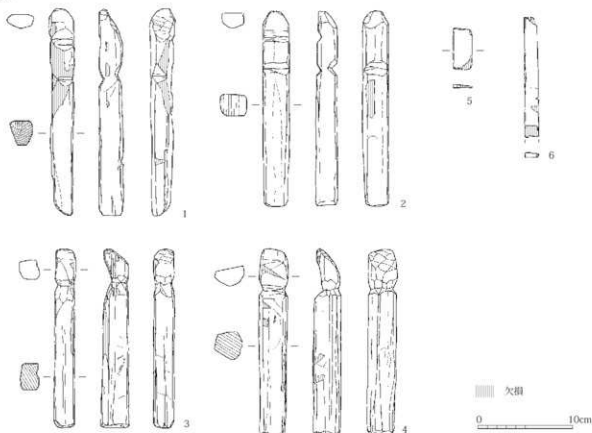
竪穴建物跡、掘立柱建物跡、溝跡から砥石が合計7点のほか、遺構外から砥石、硯の小破片10点余が出土している。第62図1はS B 02で出土した安山岩製の置き砥石で上面が破断し、表裏面が擦り減って凹面となっているほか、幅1mm程の線状痕が見られる。2～4はS B 12で出土した。2は凝灰岩製の短冊形の持ち砥石で、上部の破断面を除く5面が平面となっているが、裏面には部分的使用による凹凸、両側面には使用または成形時の細い線状痕がみられる。3は石英斑岩製の持ち砥石で上面と下面破断面を除く4面が使用され、表面と右側面はわずかに凹面となるが、左側面と裏面は使用が少なく成形時の凹凸が残る。4は石英斑岩製の置き砥石で、表面はよく使用されて凹面となるが、右側面と底面は成形時の凹凸の上に僅かに擦痕が見られるだけで、左側面と下面は成形時のままである。5はS B 20で出土した砂岩製の持ち砥石で、上下の破断面を除く4面が使用されてわずかに凹面となる。6はS D 07で出土した砂岩製の置き砥石で、表裏面以外が破断面となり、表面はすこすり減って凹面となるが、裏面は原稜面の一部が平滑になっているだけである。8はS T 03のP 3で出土した凝灰岩製の短冊形の持ち砥石で、表裏両面と下面は平坦だが、両側面は表面との角を面取りするように使用され、丸みを帯びる。7は遺構外で出土した泥岩製の硯小破片で、表面に成形時の擦痕と線状痕、使用時のかすかな凹線、裏面に「天神」と「納」の旁とみられる「内」の字の刻書がみられる。このほか、五輪塔の水輪1点がS B 27から出土している(P L 17)。中津川の薨底部が伴出した点から、時期は13世紀後半～14世紀と推測する。

1 人形について、東京都立大学特任教授の山田昌久氏より、布着せ人形の可能性が高いとご教授いただいた。

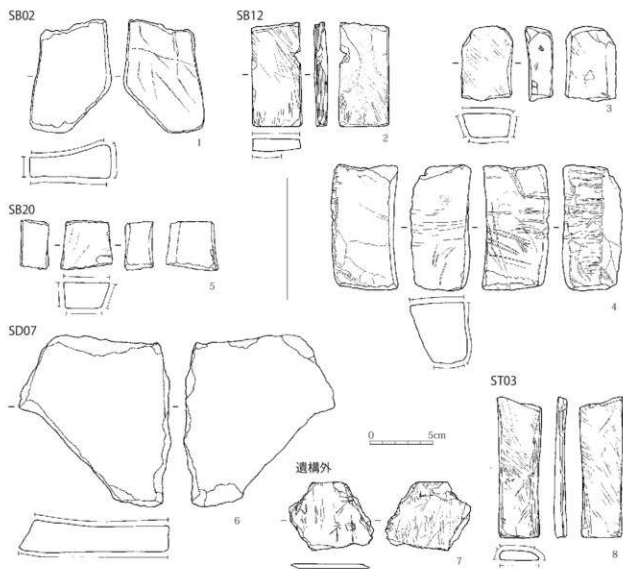
金屬製品



木製品



第61図 金屬製品、木製品



6 その他の時代の遺物

遺構の時期としては存在しないが縄文土器、旧石器時代～縄文時代の石器が出土した。

(1) 縄文土器 (第63図1～3, PL 17)

縄文後期初頭から前葉にかけての土器が出土した。1・2は口縁部である。1は、強く押圧した1条の横位隆帯を貼付す。称名寺式後半から堀之内1式併行の土器と推測する。2は口唇部が短く直立する器形を呈し、沈線で文様を描く。堀之内1式であろう。3はやや膨らみをもつ胴部に、沈線で文様を描く。堀之内1式であろう。

(2) 石器 (第64・65図1～23, PL 17)

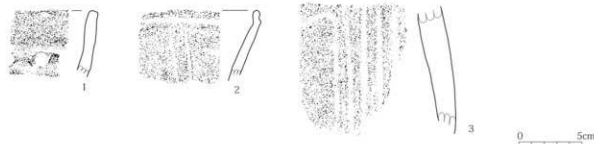
1は旧石器時代の両縁調整を施す細身のナイフ形石器で、石材は黒曜石である。

2・3は旧石器時代終末期の石器と考える。2は槍先形尖頭器で両側縁から剥離が入る。石材は黒曜石である。3はスクレイパーで縦長剥片を素材とし、表面の1側縁部から下部にかけて掻器的な急角度の刃部を作出する。表面には自然面が広く残る。石材は黒曜石である。

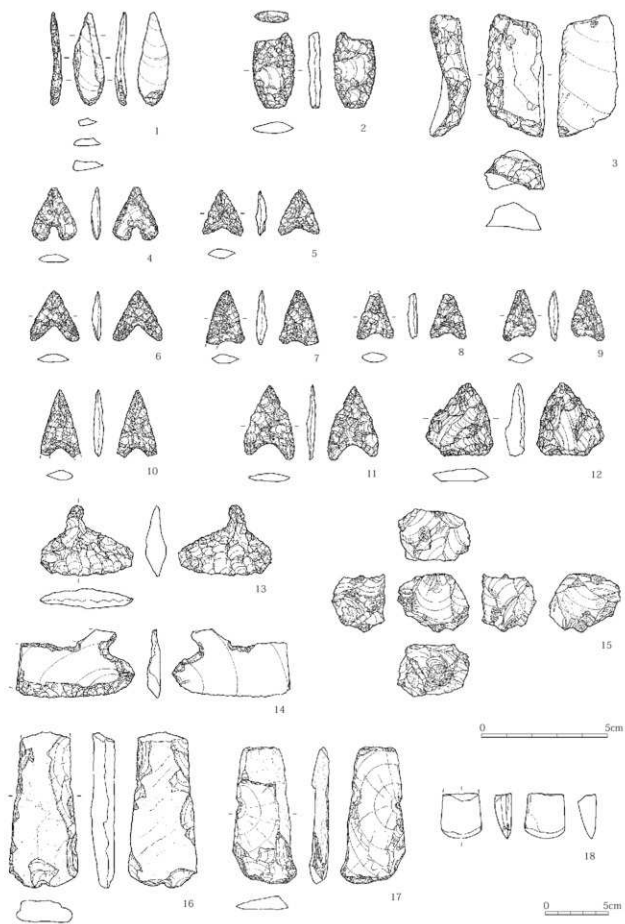
4以下は縄文時代の石器と考える。時期は不明だが、後期初頭から前葉の土器が出土しているので、その時期のものを含む可能性は高い。

4～11は凹基無茎鏃で、基部を挟む深度と側縁部の形状に違いがある。4は楯形鏃で基部がU字形を呈する。土器は出土していないが、早期押型文期の可能性があろう。石材は10がチャートで、それ以外は黒曜石である。12は石鏃未製品と考えるもので、製品よりも加工剥離が粗く厚手で、先端部や基部の作りが完全ではない。石材は黒曜石である。13・14は横形の石匙で、13は両面からの、14は片面からの加工剥離により形状を整え、刃部を作出する。つまみ部は、両者ともに両面からの加工剥離を施す。石材は13がチャート、14が珪質頁岩である。15・23は石核で、15は方向が異なる複数の剥片剥離面をもつ。石材は黒曜石である。23は不明確だが長楕円形状の礫を素材とし、両側縁部からの剥片剥離が多く認められる。石材は細粒砂岩である。16・17は短冊形の打製石斧で、16は表裏両面に自然面を残す点から礫を素材とし、17は横長剥片を素材とする。17は表面に自然面を、裏面に素材剥片の剥離面を広く残す。基部や先端部には加工剥離が認められる一方で、縁辺部への加工剥離はあまり認められず、自然面の範囲が広い。石材は16がデイサイト、17が泥岩である。18は小形の磨製石斧である。断面形状は扁平で、全体に研磨調整を施す。石材は緑色凝灰岩であろう。19～21は凹石で敲打痕や磨面を併せもつ。19は両面に凹痕、上端に敲打痕をもつ。20は両面に凹痕、両側縁部に敲打痕、裏面に磨面をもつ。21は片面に浅い凹痕、裏面に磨面をもつ。石材は19が安山岩、20が石英斑岩、21が閃緑斑岩である。22は扁平礫を素材とする石錘で、両端部を打ち欠く。石材は安山岩である。

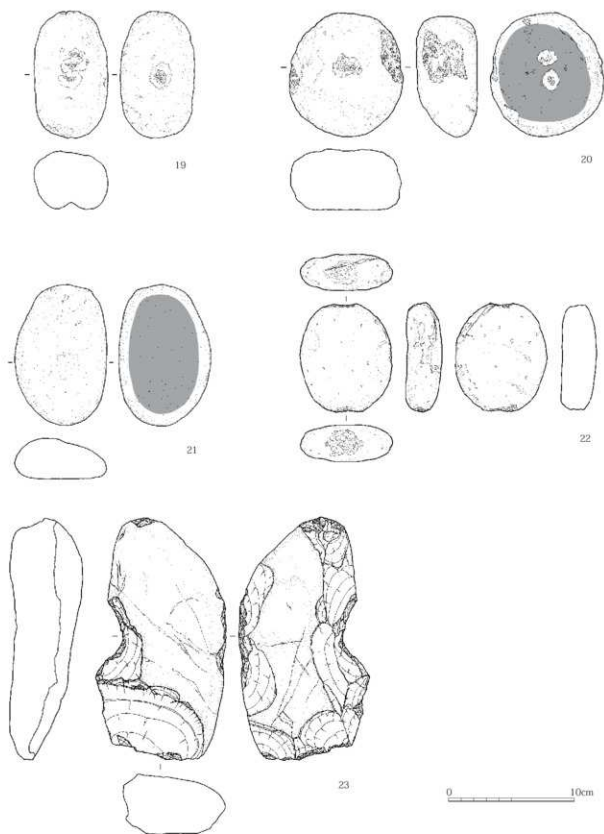
なお、黒曜石については、産地推定分析を実施している(第4節参照)。



第63図 縄文土器



第64図 旧石器時代・縄文時代の石器(1)



第65図 縄文時代の石器(2)

第4節 自然科学分析

小山寺窟遺跡では自然科学分析として、放射性炭素年代測定（AMS測定）、樹種同定分析、珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析、黒曜石産地推定分析を実施しており、以下、分析結果の概略を報告する。分析の詳細については、DVD収録の分析報告書を参照されたい。

1 放射性炭素年代測定分析（AMS測定）

S B 02・S K 565の埋土で採取した炭化材について、分析を株式会社加速器分析研究所に委託した。分析試料はS B 02の1層から採取した1点（第44図炭No4）、2層から採取した1点（第44図炭No5）、4層から採取した1点（第44図炭No6）とS K 565から採取した1点で、目的は放射性炭素年代測定分析（AMS分析）により得た年代と出土した土器の年代を比較し、遺構の時期決定を行うための手掛かりを得ることにある。

測定の結果、各試料の暦年代範囲における最小値と最大値はS B 02の炭No4が724calAD-890calAD、炭No5が674calAD-779calAD、No6が675calAD-802calADで、それぞれ8世紀前半～9世紀末葉、7世紀後半～8世紀後葉、7世紀後半～9世紀初葉であった。出土した土器の時期は9世紀前葉なので、炭No4・6は整合的、炭No5は整合しない結果と言える。また、S K 565の1点は672calAD-810calADで、7世紀後葉～9世紀前葉となる。出土した土器の時期は9世紀前葉であり、整合的な結果と言える。

2 樹種同定

S B 02・S K 565の埋土で採取した炭化材について、分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。分析試料は放射性炭素年代測定（AMS分析）と同じ、S B 02の1層から採取した1点（第44図炭No4）、2層から採取した1点（第44図炭No5）、4層から採取した1点（第44図炭No6）とS K 565から採取した1点で、目的は出土した炭化材の樹種を同定することにある。

分析の結果、S B 02・S K 565の試料全てがコナラ属コナラ亜属コナラ節に同定された。コナラは二次林等を構成する落葉高木で、木材は重硬で強度が高く、火付きは悪いが持続性があり、薪炭材・燃料材として適材とされた。S B 02は埋没過程にある窪地で火が焚かれた堅穴建物跡、S K 565は火が焚かれた土坑であり、薪炭材・燃料材としてコナラ属コナラ亜属コナラ節が選択されたと理解したい。

3 珪藻分析・花粉分析・植物珪酸体分析

1区の水田跡1・2の畦畔で区画された内部で採取した土壌No1～5（A地点：Ⅲb-1・3・4・9・10層、第57図）とS D 02の西側で採取した土壌No1～5（B地点：Ⅲb-4～6・11・12層、第57図）、S K 185とその地山で採取した土壌No1～5（4層やや下部・最下部・5層、地山に相当する基本層序第Ⅳ・Ⅴ層、第55図）について、分析をバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。目的は、遺跡の古環境や土地利用を検討する手掛かりを得ることにある。

水田跡1・2と近隣では、A地点の土壌No1～3とB地点の土壌No1・2で珪藻化石が検出され、沼沢湿地付着生種群を多く含む流水不定性種が多産したことから沼沢地のような湿潤な環境が推定された。花粉分析では、A地点の土壌No1～3とB地点の土壌No1・2にイネ科が多産し、栽培種のイネ属が上層ほど高率になることからA地点のⅢb-1層、B地点のⅢb-5層は稲作地の可能性が高いと推定された。

A地点のⅢb-1層は水田跡1の床土に該当し、湿润で稲作地の可能性が高いとする分析結果は総合的に評価できる。また、分析結果では稲作地とは明言されていないが、Ⅲb-2・3層でイネ属の花粉が高率で検出されていることから、Ⅲb-2・3層にSC04やSD01・05・06で構成する水田跡2の水田面があったと推測したい。一方、B地点も稲作地の可能性が高いと推定されているが、畦畔などの遺構は検出していない。イネ属以外の栽培種としては、A地点の土壌No1・2、B地点の土壌No1~4でソバ属が検出され、周辺域においてそば栽培などの土地利用があったと推定された。遺跡の土地利用を検討するうえで、注目すべき結果と言えよう。

SK185では、地山に該当する基本層序第V層で採取した土壌No5（第55図）で珪藻化石を検出し、沼沢湿地付着生種群を含む流水不定性種が多産する特徴から、沼沢域～湿地のような水域環境が推定された。また、花粉分析では量は少ないが、土壌No1でイネ科植物の花粉が検出され、SK185周辺に生育したイネ科植物を反映したものと推定された。この結果から、SK185はそうした水域環境であった場所に掘り込まれ、水田が営まれた時期あるいはそれと近い時期に機能した井戸跡の可能性があらう。

4 黒曜石産地推定分析

石器の黒曜石産地を推定するため、エネルギー分散蛍光X線分析法による黒曜石産地推定分析を元沼津工業高等専門学校望月明彦氏に委託した。分析試料は26点で、内訳は旧石器時代のナイフ形石器・槍先形尖頭器・スクレイパーが各1点、縄文時代の石鏃およびその未製品が18点、両極石器が3点、石核が

第13表 黒曜石産地推定分析試料

分析番号	登録ID	地区名	出土位置	器種	図版番号	PL番号	推定産地
1	4	①区	SB02 北東	両極石器			和田鷹山群
2	33	②区	SD07 ⅢC01	石鏃	64-9	17	蓼科冷山西群
3	38	②区	SD08 ⅢA09上層	石鏃	64-5	17	和田土屋橋西群
4	54	⑤区	SD15 IV07下層	石鏃	64-6	17	和田鷹山群
5	65	③-3区	NR02 ⅢK22 黒色土	石鏃	64-7	17	和田鷹山群
6	71	②区	ⅢA07 検出面	石鏃	64-4	17	諏訪星ヶ台群
7	77	②区	ⅢB22 検出面	石核	64-15		和田鷹山群
8	95	③-2区	ⅢU06	石鏃	64-11	17	和田鷹山群
9	96	③-2区	ⅢU12 IIb層 下部面	石鏃	64-8	17	和田鷹山群
10	98	③-3区	ⅡO20 検出面	スクレイパー	64-3	17	和田鷹山群
11	100	③-3区	ⅢK19 黒色土面	ナイフ形石器	64-1	17	和田鷹山群
12	103	③区		槍先形尖頭器	64-2	17	和田小深沢群
13	109	⑥区	検出面	石鏃未製品	64-12	17	和田鷹山群
14	15	③-3区		石鏃			諏訪星ヶ台群
15	18	⑤区	SB20	石鏃			和田鷹山群
16	40	②区	SD08 ⅢA09	石鏃			諏訪星ヶ台群
17	50	②区	SD13	石鏃			諏訪星ヶ台群
18	58	①区	SK0207	石鏃			和田芙蓉ライト群
19	59	①区	SK0320	両極石器			和田小深沢群
20	68	①区		石鏃			和田鷹山群
21	70	②区	IU19 表土面	石鏃			諏訪星ヶ台群
22	80	②区	ⅢB24 検出面	石核			和田鷹山群
23	86	②区	ⅢG21 かく乱	石鏃			諏訪星ヶ台群
24	102	③区		石鏃			諏訪星ヶ台群
25	105	⑤区		石鏃			諏訪星ヶ台群
26	110	⑥区		両極石器			和田鷹山群

2点である(第13表)。縄文時代の石器は検出面で出土したものとほかの時期の遺構に混入していたものであり、時期を特定できない。ただし、遺構外では縄文時代後期初頭～前葉の土器が出土しており、その時期のものを含む可能性は高い。

分析結果の全体的な傾向は和田鷹山の範囲に13点、50%がプロットされ、以下、諏訪星ヶ台が8点で30.77%、和田小深沢が2点で7.69%、和田芙蓉ライト・和田土屋橋西・蓼科冷山が各1点で3.85%となった。時代別では旧石器時代のナイフ形石器とスクレイパーが和田鷹山、槍先形尖頭器が和田小深沢で、全て和田(WD)エリアにプロットされた。縄文時代の石器は23点中、和田鷹山が最も多く11点で47.82%、諏訪星ヶ台が8点で34.78%と続き、以下、和田小深沢・和田芙蓉ライト・和田土屋橋西・蓼科冷山が各1点で0.04%となった。この結果、縄文時代の石器は和田(WD)エリアの黒曜石で製作されたものが最も多く、諏訪エリアの黒曜石で製作されたものが一定量存在し、蓼科エリアの黒曜石で製作されたものも微量含まれていることが判明した。旧石器時代の石器が和田(WD)エリアに限定された結果とは対照的である。

第5節 小 結

今回の調査では、平安時代と中世の遺構を検出した。土坑など、個別の時期推定が困難な遺構も多く存在するが、時期ごとに代表的な遺構を概観することで小結とした。

平安時代の遺構は1区、2区、3-3区、5区、6区において竪穴建物跡、溝跡、土坑などを検出した。また、時期推定ができなかった掘立柱建物跡や多くの土坑の中に当該期のものを含むと考える。竪穴建物跡は、SB 02・07・10・17・18・28の6軒が1区と隣接する3-3区に位置する。1区に形成された谷状地形の縁辺部に点在し、重複関係はない。時期はSB 02・10が9世紀前葉、SB 07・28が9世紀中葉で、SB 17・18は不明確だが9世紀代と推測する。さらに、性格は不明だが掘立柱建物跡に含めて報告した、柱穴と被熱部で構成するSB 16についても9世紀代と推測する。カマドはSB 18については不明だが、SB 02・10・17は北東方向、SB 07・28は北西方向の壁に構築され、9世紀前葉～中葉にかけてカマドの位置が移動している。これに従えば、SB 17も9世紀前葉とすることができるかもしれない。土坑は、SK 565・568・569・570がSB 02の南側に位置する。この4基は火が焚かれた土坑で重複するが、関連性の高い土坑である。3-3区の西側は、佐久町教育委員会が発掘調査を実施した地点に隣接し、その地点でも9世紀代の竪穴建物跡2軒が検出されていることから(町教委 2002)、1区と3-3区および3-3区の西側にかけては、9世紀代の竪穴建物跡と土坑が、少なくとも2時期以上にわたり点在していたとみることができよう。溝跡は、1区と3-3区からやや離れた北側の2・5・6区において、SD 07・08・09・24などを検出した。時期は、中世の遺物も混じるが、主体は9世紀代のものであることから9世紀代と判断した。SD 07・08は、等高線に対して平行する北西-南東方向に伸びる溝跡で、SD 09がSD 07・08を接続する。SD 07・09は2区と6区の境界付近に伸び、長さ70mを超える大型の溝跡である。SD 24は等高線に対して直交に近い方向へ伸び、SD 07からみると直交方向にある。SD 08を挟んで東側と西側には、掘立柱建物跡のST 02・03・04・05が2棟ずつ、ほぼ等間隔で並列して建つ。掘立柱建物跡個別の時期は不明だが、長軸方向がSD 07・08と一致し、ST 03に付属するSA 02がSD 08に面しているなど溝跡との関連性が窺え、溝跡と同時期に存在した可能性もあると考える。仮

に同時期とすれば、小山寺遺跡で営まれた9世紀代の集落跡は、堅穴建物跡が点在する場所と、溝跡および掘立柱建物跡が並列して建つ場所が分かれていたとすることができよう。

なお、発掘時点では、廃屋後に火が焚かれた堅穴建物跡SB 02と土坑SK 565・568・569・570について、黒色土器の内面を黒色処理した遺構の可能性を考えたが、今回の整理作業では十分な検討ができず課題として残った。

中世の遺構は1区、3-3区、5区で堅穴状遺構、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡などを検出した。また、平安時代と同様に、時期推定ができなかった掘立柱建物跡や多くの土坑の中に当該期ものを含むと考えられる。水田跡以外の遺構は、3-3区と5区の2か所に纏まる傾向がみられる。3-3区では堅穴状遺構のSB 12と、掘立柱建物跡の中で報告したL字状の溝跡および柱穴で構成する建物跡のSB 14・15を検出した。時期はSB 12が13世紀後半～14世紀、SB 14・15は重複関係があり、13世紀後半と推測するSB 15をSB 14が切ることから、SB 14は13世紀後半以降と推測する。ただし、SB 14・15は構造が非常に類似し、両者の中間に位置する柱穴(SB 14のP 12・23)の評価によっては重複せず、隣接して建つ同時期の建物跡と推測することも可能である。5区では堅穴状遺構のSB 20・21・22・23・26と大型土坑のSB 27、溝跡のSD 13・14 a b・15などを検出した。調査区の東側境界付近にSD 15が、等高線に対して平行～やや斜め方向に延び、その内側(西側)に堅穴状遺構や大型土坑、溝跡などが分布する。遺構密度が比較的高く、堅穴状遺構や溝跡には重複関係が認められる。時期は、堅穴状遺構と大型土坑が13世紀後半～14世紀で、溝跡は13世紀後半～14世紀の遺物を主体に15世紀の遺物も出土していることから13世紀後半～14世紀または15世紀と推測する。このほか、同じ範囲には多数の土坑が分布し、13世紀後半～14世紀と15世紀の土坑が混在するものと考えられる。なお、SD 13・15は長さが100mを超える大型の溝跡で、2区と5区の境界付近で9世紀代の溝跡SD 07・09と重複し、そのまま6区との境界方向へ延びる。9世紀代と中世において同じ場所に掘り込まれた溝跡だが、性格は不明で今後の課題である。一方、水田跡は1区の低地部で2面を検出した。時期は不明確だが、13世紀後半～14世紀もしくは15世紀と推測された。1区の東側は低地部が続く可能性が高く、水田域もさらに広がる可能性は高い。なお、水田域の花粉分析では栽培種としてイネ属とともにソバ属が検出され(第4節参照)、分析報告では水田域の周辺でそば栽培などの土地利用があったと推定された。発掘調査ではそうした痕跡を検出していないが、遺跡の土地利用を検討するうえで注目しておきたい結果である。そのほか、3-1区には時期を推定できない掘立柱建物跡のST 08・09・10と多数の土坑が分布する。隣接する3-3区では前述のとおり9世紀代と13世紀後半～14世紀の遺構を検出しており、3-1区の遺構もどちらかの時期に帰属する可能性があらう。

ところで、3-3区の西側に隣接する佐久町教育委員会の調査地点では、中世の建物跡や墓域群が検出され、鎌倉時代後半期～江戸時代に至る各時期の五輪塔が多数出土したなどの状況から、当地にあったと伝わる津金寺との関係が検討されている(町教委 2002)。今回、埋文センターが調査した地点には墓域と推定できるような場所はなく、五輪塔もSB 27で水輪1点が出土したにすぎず、佐久町教育委員会の調査地点とは内容が明らかに異なる。さらに、仏教関連遺物や寺院に直結するような遺構が存在しない点を考慮すると、当地に津金寺が存在していたとしてもその場所は今回の調査区ではなく、周辺部に残る未調査の場所ということにならう。

参考・引用文献

佐久町教育委員会 2002 『小山寺遺跡 伝承の寺跡および鎌倉時代～室町時代の墓群の調査』

第6章 上野月夜原遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

上野月夜原遺跡は南佐久郡佐久穂町の旧八千穂村畑地区に所在し、調査区の標高は868～870mを測る。この地域は八ヶ岳起源のローム層が厚く堆積した台地で、千曲川に直交するいくつもの小河川が台地を浸食し、上野月夜原遺跡もそうした台地縁辺の崖上に位置する(第66図)。

近隣遺跡の状況は、本遺跡の西側には埋文センターが調査した馬込遺跡があり、縄文時代の陥し穴5基や平安時代と中世の遺物を検出した(埋文センター2005)。本遺跡の南側には封地遺跡があり、旧八千穂村教育委員会の調査では、縄文時代後・晩期の堅穴建物跡、土坑、黒曜石集積などが検出されたほか、早期から晩期の遺物が出土した(八千穂村教育委員会2005)。また、本遺跡の東側には、縄文時代の遺物散布地として登録されている反り峯遺跡や、中世城館跡の下畑城跡と下畑下の城跡がある。

2 調査の概要と経過

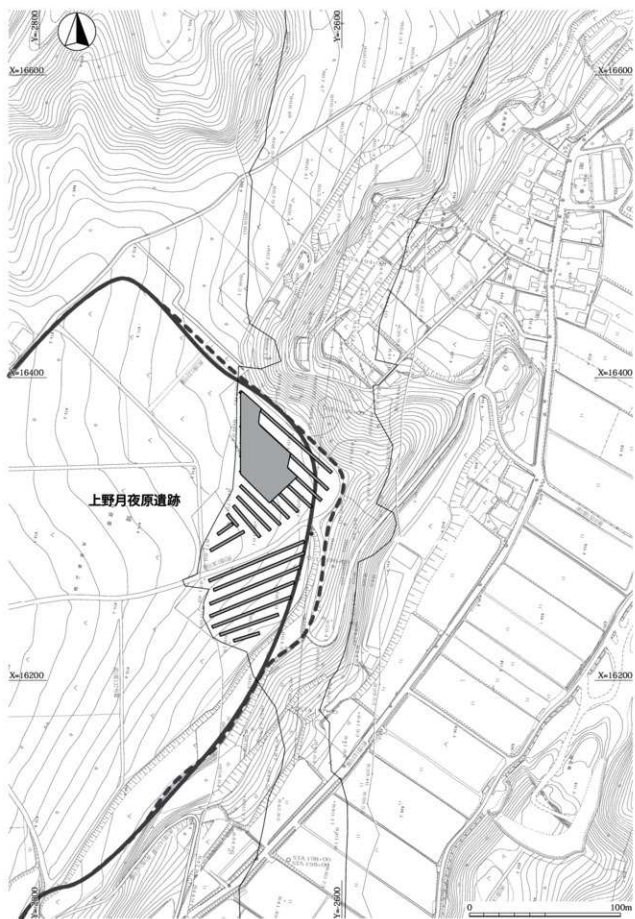
本遺跡は事前の調査歴がなく、遺構密度などを確認するため、2008(平成20)年度に19本のトレンチを掘削した(第67図)。その結果、遺跡北側の緩斜面には遺物包含層が残存し(1区1～4トレンチ)、その部分周辺を面的に拡張したところ土坑2基を検出した(4・5トレンチ)。それ以外の地点は削平が著しく、地山が露出していた場所もあり、遺構・遺物ともになかったことから面的調査は行わなかった。

3 基本層序

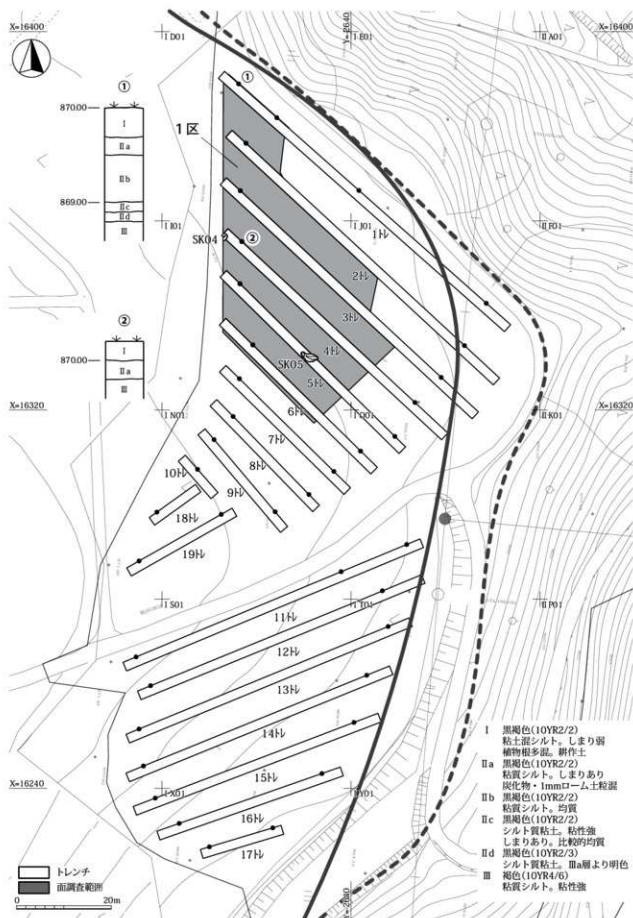
基本層序は第Ⅰ～Ⅲ層に大別できる(第67図)。第Ⅰ層は、腐植土を含む調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層黒褐色土は、①ではa～dに細分され遺物を包含する。第Ⅲ層は遺跡全体の基盤を成す褐色土で、遺構は第Ⅲ層上面で検出した。なお、第Ⅰ～Ⅲ層の堆積が認められるのは1～4トレンチまでであり、5～19トレンチは削平の影響を受け、第Ⅰ層直下が第Ⅲ層であった。

参考・引用文献

- 埋文センター 2005「馬込遺跡」
 八千穂村誌刊行会 2003「八千穂村誌」第四巻 歴史編
 八千穂村教育委員会 2005「封地遺跡発掘報告書」



第 66 图 遺跡範圍・調査区位置图



第 67 図 トレンチ・調査区配置図、土層柱状図

第2節 遺構と遺物

1 遺構

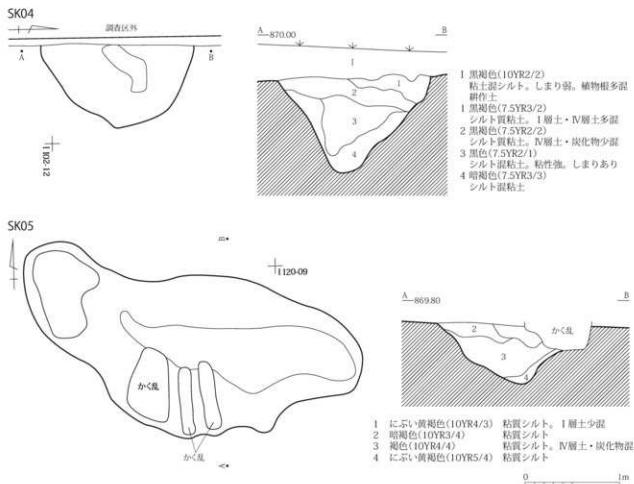
本遺跡で検出した遺構は、以下の土坑2基のみである（第67・68図）。

S K 04（第68図）

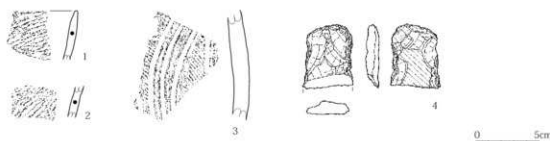
位置：4トレンチ。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。形状・規模：平面形は円形もしくは楕円形と考えるが、西側が調査区外へ延びるため不明確である。断面形はV字形を呈する。規模は残存部で長軸140cm以上、短軸132cm以上、深さ100cmを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

S K 05（第68図）

位置：5トレンチ。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。形状・規模：平面形は不整形、断面形はV字形を呈する。規模は長軸374cm、短軸174cm、深さ60cmを測る。遺物：縄文時代早期から前期前半と推測する、繊維を微量に含む土器の小破片が出土した（第69図1）。時期：時期決定の根拠がなく不明だが、出土した遺物を考慮すれば縄文時代早期から前期前半であろうか。



第68図 S K 04・05 遺構図



第69図 縄文土器・石器

2 遺物

本遺跡では、縄文時代早期～前期・後期の土器と古代の土師器・須恵器、中世の内耳土器、近世以降の陶磁器類などが出土したが、小破片のため図示できるものはほとんどない。石器は、打製石斧のほかは黒曜石・チャートなどの剥片類が少量出土したのみである。また、図示していないが、金属製品として時期不明の火打金1点と鉄釘が出土した。

第69図1・2は同一個体の口縁部と胴部で、無節縄文を施文する。内面は剥離のため不明確だが、ナデ調整であろう。胎土に微量の繊維を含み、縄文時代早期～前期前半の土器と考える。1はSK 05から、2は5トレンチから出土した。3は胴部で沈線により文様を描き、単節縄文を施文する。縄文時代後期前葉の堀之内I式である。3トレンチから出土した。4は打製石斧の基部で、石材は泥岩と推測する。17トレンチから出土した。

第3節 小 結

今回の調査は、かく乱を受けた範囲が広く、遺構・遺物も極めて少量の検出にとどまるなど、遺跡の性格を解明するような成果は得られなかった。しかし、かく乱の影響を考慮しても、遺構数や遺物量からすれば本遺跡に大規模な集落が存在したとは考えにくく、土坑が極めて稀に散在する様相から集落の縁辺、もしくは集落からはやや離れた場所で、居住とは異なる土地利用を考えざるを得ない。

遺構の時期は、SK 05やトレンチから出土した遺物を考慮すれば、縄文時代早期から前期前半もしくは後期前葉となるのが不明確である。さらに、古代以降の遺物がわずかに出土していることから、本遺跡が位置する同一台地上に古代以降の遺跡が存在する可能性もある。

第7章 満り久保遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

満り久保遺跡は八ヶ岳北麓から東側に伸びる丘陵の末端部で、東に千曲川、南に大石川を望む標高850～900mの河岸段丘上に位置する(第70図)。この地域一帯は、千曲川が形成した礫層を基盤とする河岸段丘が発達し、上部には八ヶ岳の噴出物(上部佐久ローム層)が堆積する。遺跡内の地形は、南側の尾根稜線部とそこから北側になる谷部に区分でき、境界を町道畑35号線が東西に走る。

周辺遺跡の状況は、本遺跡の北側に畑寺久保遺跡と細久保遺跡が、東側に満り久保東遺跡と千ヶ日向団地上遺跡がある。満り久保東遺跡は旧石器時代の遺物散布地、それ以外は縄文時代の遺物散布地とされているが、詳細は不明である。また、本遺跡の南側には馬越下遺跡があり、中部横断道建設に伴う埋文センターの調査では、平安時代の竪穴建物跡3軒などを検出した(第8章参照)。

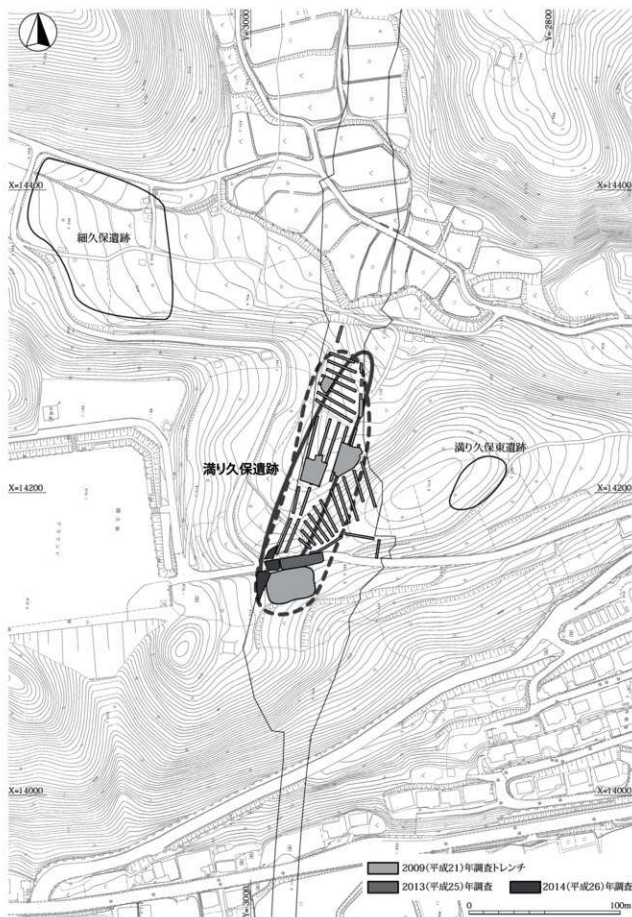
2 調査の概要と経過

満り久保遺跡では、2009(平成21)・2013・2014年度の3か年にわたり本調査を実施した。調査範囲は尾根稜線部の1区、谷部の2区、その境界を走る町道畑35号線部分の3区および1～3区の西側に隣接する1b・2b・3b区で(第71図)、調査面積は合計6,250m²である。

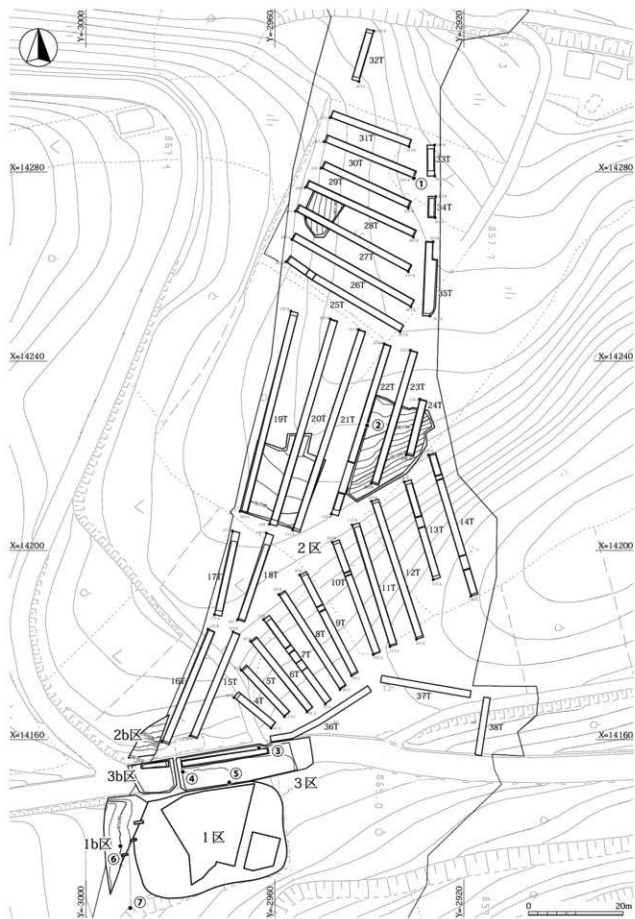
2009年度の調査は1・2区で実施した。1区では、本調査に先立つトレンチ掘削で黒曜石が多く出土したことから、任意の8mグリッドを設定し、さらに2mの小グリッドに分割して人力で掘下げた。その結果、槍先形尖頭器、細石刃・細石核などの石器2,962点が出土した。しかし、遺物は第1層表土・耕作土から出土したものがほとんどで、本来の遺物包含層が耕作で攪拌されたことにより、第1層に混入したものと考えた。また、第1層には、少数だが縄文時代以降の遺物も混在する。一方、2区では19～21トレンチ拡張部で、時期不明の溝跡1条(SD01)を検出したほか、22～24トレンチ拡張部およびその周辺で、槍先形尖頭器9点を含む61点の石器が、縄文時代・古代の遺物と混在して出土した。

2013年度の調査は、1区に隣接する3区で実施した。調査区に任意方向(道路に対して平行・直交)の2mグリッドを設定し、グリッド単位で掘り下げた。その結果、第1層表土・耕作土より、槍先形尖頭器や細石刃・細石核などを含む86点の石器が、縄文土器や中世以降の遺物と混在して出土した。また、第Ⅲ層上面では、縄文時代の可能性がある土坑3基(SK01～03)を検出した。

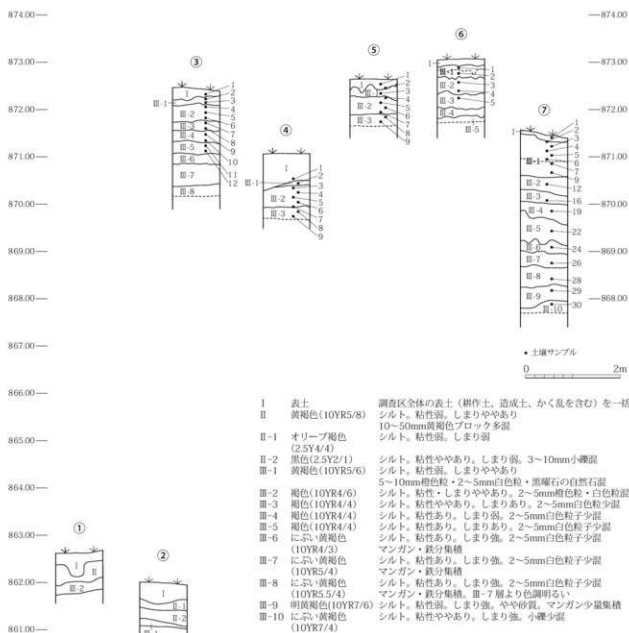
2014年度の調査は、1～3区の西側に隣接する1b・2b・3b区で実施した。1b区では、槍先形尖頭器と石核を含む22点の石器が、第1層表土・耕作土において、縄文時代や中世以降の遺物と混在して出土した。3b区では、第1層表土・耕作土で剥片1点が出土したのみであった。1b区・3b区ともに石器の出土点数は少なく、2b区では遺物が出土しなかったことから、当該年度の調査範囲は遺物分布の主要範囲からは外れていると考えた。



第70図 遺跡範囲・調査区位置図



第71図 トレンチ・調査区配置図



第72図 土層柱状図

3 基本層序

第71図に基本層序を記録した位置、第72図に基本層序を示した。第I層は、耕作土・造成土・かく乱等を含む調査範囲全体の表土を一括する。遺物の大半が本層から出土しており、本来の遺物包含層が耕作等で攪拌されたものとする。第II層は2区のものに認められ、22~24トレンチ拡張部の②地点ではII-1・2層に細分した。第III層は遺跡全体に認められる黄褐色シルト(ローム層)で、第III-1層以下は細分される。1区の⑦地点では最大第III-1~10層に細分した。

なお、土壌サンプルを1区⑦地点、1b区⑥地点、3区③~⑤地点で採取し、その内、1区⑦地点の第I・III-1~10層より採取した17点(No.1~7・9・12・16・19・22・24・26・28~30)、1b区⑥地点の第III-1~3層より採取した5点(No.1~5)、3区③地点の第I・III-1~5層より採取した12点(No.1~12)、3区④地点の第I・III-1~3層より採取した9点(No.1~9)、3区⑤地点の第I・III-1~3層より採取した9点(No.1~9)、合計52点について、火山灰分析を実施した(第4節参照)。

第2節 旧石器時代の遺物

1 出土状況

旧石器時代の遺物は1区・1b区・2区・3区で出土したが、その多くは1区で出土したものである。

1区では遺物の大半が第1層表土・耕作土から出土しており、わずかに12点が第Ⅲ-1層（ローム層）から出土した。第Ⅲ-1層から出土したものは、黒曜石の原石2点、剥片6点、砕片3点と安山岩の剥片1点である。出土遺物には、縄文時代の遺物を含んでおり、旧石器時代の剥片類を抽出することは難しいが、縄文時代の土器や石器は少なく、剥片・砕片の大半は旧石器時代の遺物と推定した。本来は複数のブロックを形成していたと推測するが、原位置の詳細はわからない。

2区では22~24トレンチ拡張部とその周辺で、槍先形尖頭器9点を含む61点の石器が縄文時代・古代の遺物と混在して出土した。第Ⅰ~Ⅱ層の出土で、第Ⅲ-1層出土のものはない。

3区では、槍先形尖頭器と細石刃・細石核など7点を含む86点の石器が、縄文時代以降の遺物と混在して出土した。全て第Ⅰ層表土・耕作土から出土したもので、第Ⅲ-1層出土のものは存在しない。3区は1区の隣接地であり、本来はブロックを形成していたと推測するが、原位置の詳細は不明である。

このほか、1b区では槍先形尖頭器と石核を含む22点の石器が縄文時代以降の遺物と混在して出土し、3b区では剥片1点のみが出土した。全て、第Ⅰ層表土・耕作土から出土したものである。

なお、調査段階では各地区の遺物分布図を作製しているが、第Ⅰ層表土・耕作土出土のものがほとんどで、遺物の原位置が不明確であることから、本報告では遺物分布図の掲載を割愛した。

2 遺物

上記のとおり、旧石器時代の遺物は、第Ⅰ層表土・耕作土から縄文時代以降の遺物と混在して出土したものが多く、ここでは、旧石器時代から縄文時代草創期の石器と判断したものを提示する。また、黒曜石の石器は蛍光X線分析による産地推定を実施した。分析結果は第4節に記載する。

各地区で出土した石器群の合計は槍先形尖頭器77点、ナイフ形石器3点、削器・掻器10点（その内1点は石錐の可能性有）、石刃10点、石核20点、細石刃12点、細石核4点である。剥片・砕片が3,000点以上出土しているが、縄文時代の剥片が含まれており、旧石器時代の剥片・砕片を抽出することは難しい。1区の剥片には槍先形尖頭器製作に関わるポイントフレイク（尖頭器調整剥片）が41点出土したことから、旧石器時代の石器製作が行われた場所であり、石器ブロックが存在していたと推定できる。

第73~75図1~42（P.L18）は槍先形尖頭器、第81図78~85（P.L20）はポイントフレイクで、全て黒曜石である。1~19・21~26は両面加工、20・30~35は片面加工の槍先形尖頭器で、27~29・36~42は粗い周辺加工が施され、不整形であることから、槍先形尖頭器の未製品と判断した。7は半月形石器もしくは半月型尖頭器で、縄文時代草創期にも認められるものである。槍先形尖頭器石器群の黒曜石産地は、和田鷹山群（3）、諏訪ヶ台群（4・6・30）、産地不明NK群（2・8・18・34）、蓼科冷山群（前記以外）の4か所だが、蓼科冷山群が主体である。また、図示したポイントフレイクはいずれも蓼科冷山群産であり、本遺跡での槍先形尖頭器製作は、蓼科冷山群産の黒曜石を用いていたと想定できる。

第76図43~45（P.L19）は黒曜石製ナイフ形石器で、蓼科冷山群産の黒曜石と推定された。

第76・77図46~51（P.L19）は削器類で、47は挟入削器である。第77図52~55（P.L19）は掻器類で、53は旧石器時代末から縄文時代草創期にみられる掻削器であろう。石材は46がチャート、47がホルンフ

エルス、54が珪質頁岩、ほかは黒曜石で諏訪屋ヶ台群（48・53）、高原山甘湯沢群（49）、和田鷹山群（52）、蓼科冷山群（前記以外）の産地が推定された。

第78図56～58（P.L19）は石刃で56が珪質頁岩、57が黒曜石（蓼科冷山群）、58がチャートである。

第78図59～65（P.L19）は細石刃、第78・79図66～69（P.L19）は細石核、第79図70は細石核の打面再生剥片である。68は細石刃剥離作業面を打面として剥片を剥離する。70はガジリより打点が失われている。これらはいずれも黒曜石で、産地は蓼科冷山群（59・60・62～64・68～70）、諏訪屋ヶ台（61・66）の2か所であるが、蓼科冷山群が主体となる。なお、65・67は産地分析をしていない。

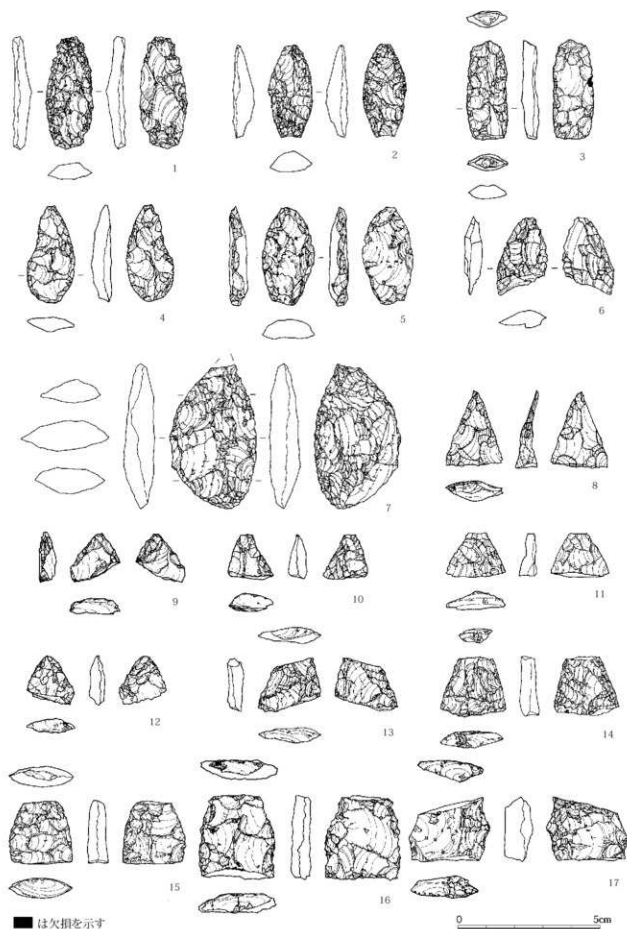
第80・81図71～77（P.L20）は黒曜石製石核で、産地はすべて蓼科冷山群である。図示した石核の中には、縄文時代のものを含む可能性があるが、旧石器時代においても、蓼科冷山群の原石を持ち込んで石器製作を行っていたことが想定される。

第14表 石器観察表

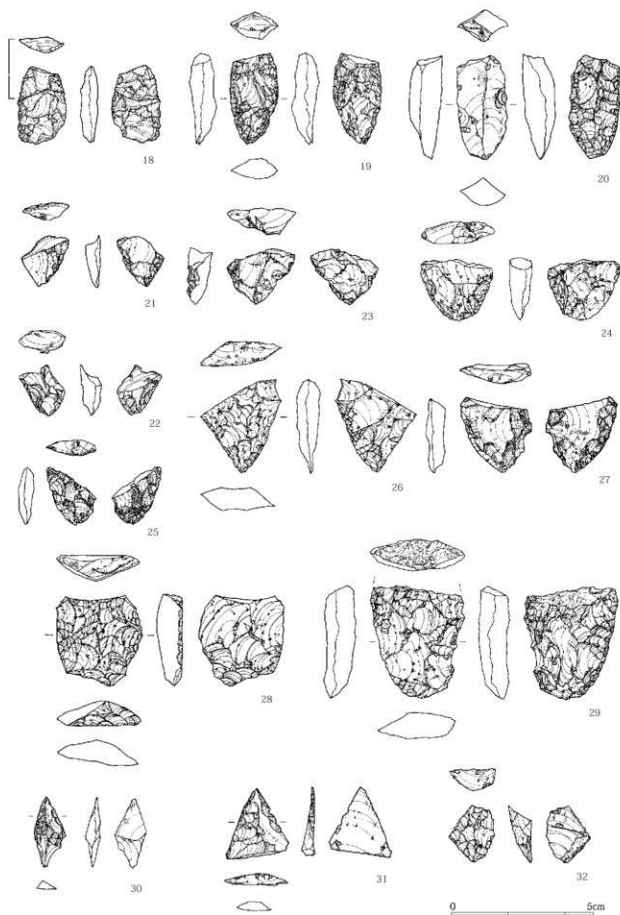
図No	整理No	調査区	層位	遺物No	器種	材質	産地	長mm	幅mm	厚mm	重量g	備考
1	2037	1区	耕作土	2037	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	39	16	6	3.62	
2	2021	1区	耕作土	2021	槍先形尖頭器	黒曜石	不明N K群	33	15	8	3.12	
3	1697	1区	耕作土	1697	槍先形尖頭器	黒曜石	和田鷹山群	34	14	5	3.18	
4	37	1区	耕作土	37	槍先形尖頭器	黒曜石	諏訪屋ヶ台群	34	16	7	2.57	
5	2236	1区	耕作土	2236	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	35	18	7	4.71	
6	2026	1区	耕作土	2026	槍先形尖頭器	黒曜石	諏訪屋ヶ台群	27	17	6	2.27	
7	2015	1区	耕作土	2015	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	50	30	10	15.21	
8	444	1区	耕作土	444	槍先形尖頭器	黒曜石	不明N K群	27	19	8	2.3	
9	783	1区	耕作土	783	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	12	18	6	1.13	
10	213	1区	耕作土	213	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	15	15	7	1.09	
11	782	1区	耕作土	782	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	15	20	6	1.48	
12	2104	1区	耕作土	2104	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	17	17	5	1	
13	643	1区	耕作土	643	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	17	22	6	2.16	
14	1105	1区	耕作土	1105	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	20	23	6	3.15	
15	1431	1区	耕作土	1431	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	22	22	9	3.95	
16	2337	1区	耕作土	2337	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	29	26	7	6.42	
17	1383	1区	耕作土	1383	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	22	27	10	6.07	
18	1077	1区	耕作土	1077	槍先形尖頭器	黒曜石	不明N K群	20	17	6	1.93	
19	5033	2区拡張		8	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	32	17	8	4.04	
20	1082	1区	耕作土	1082	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	36	18	10	5.69	
21	1602	1区	耕作土	1602	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	17	17	6	0.91	
22	5070	2区拡張		42	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	18	15	7	1.26	
23	1111	1区	耕作土	1111	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	22	19	8	2.82	
24	3280	1区	耕作土	3280	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	21	25	8	3.09	
25	2249	1区	耕作土	2249	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	20	20	6	1.24	
26	459	1区	耕作土	459	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	33	28	9	5.36	
27	5028	2区拡張		4	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	28	22	6	3.79	
28	828	1区	耕作土	828	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	32	30	8	8.01	
29	2247	1区	耕作土	2247	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	40	32	11	13.58	
30	1911	1区	耕作土	1911	槍先形尖頭器	黒曜石	諏訪屋ヶ台群	29	11	5	0.84	
31	393	1区	耕作土	393	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	25	21	4	1.63	
32	2233	1区	耕作土	2233	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	21	15	7	1.46	
33	2273	1区	耕作土	2273	槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	23	21	6	2.78	
34	2624	1区	耕作土	2624	槍先形尖頭器	黒曜石	不明N K群	26	20	8	3.24	
35	369	1区	耕作土	369	槍先形尖頭器	黒曜石	未実施	22	26	7	0.13	
36	5112	2区表探	耕作土		槍先形尖頭器	黒曜石	蓼科冷山群	36	21	10	6.78	

第7章 満り久保遺跡

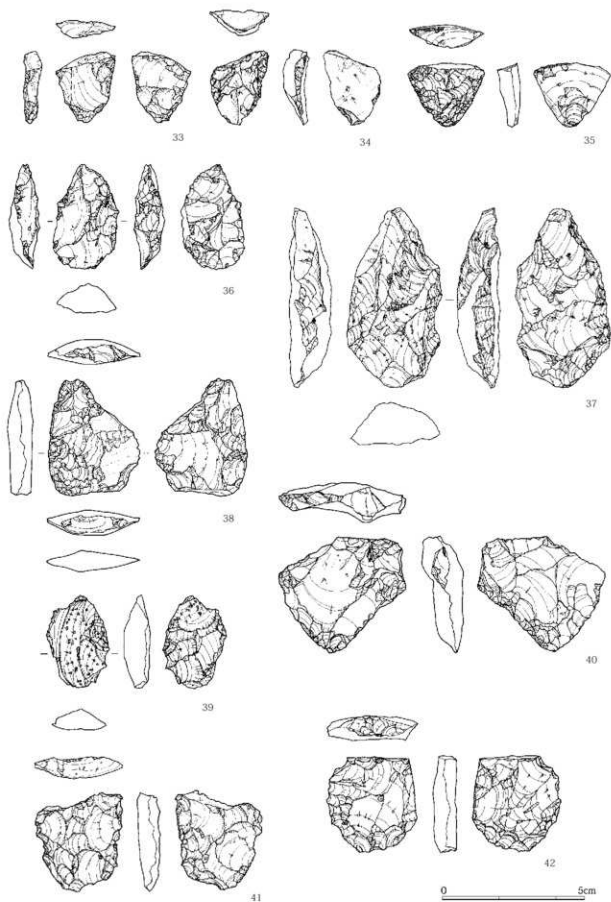
図No.	整理No.	調査区	層位	遺物No.	器種	材質	産地	長mm	幅mm	厚mm	重量g	備考
37	1995	1区	耕作土	1995	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	63	30	15	28.81	
38	1300	1区	耕作土	1300	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	41	31	10	11.65	
39	1974	1区	耕作土	1974	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	17	23	4	1.22	
40	3320	1区	塵土	3320	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	38	43	14	18.67	
41	410	1区	耕作土	410	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	34	31	8	8.06	
42	1052	1区	耕作土	1052	槍先形尖頭器	黒曜石	藝科冷山群	34	31	9	11.05	
43	175	1区	耕作土	175	ナイフ形石器	黒曜石	藝科冷山群	32	15	10	3.47	
44	2226	1区	耕作土	2226	ナイフ形石器	黒曜石	藝科冷山群	32	17	8	3.22	
45	2158	1区	耕作土	2158	ナイフ形石器	黒曜石	藝科冷山群	33	20	6	3.56	
46	1010	1区	耕作土	1010	削器	チャート		53	42	10	19.99	
47	2222	1区	耕作土	2222	抉入削器	ホルンフェルス		53	72	17	76.2	
48	2993	1区	耕作土	2993	削器	黒曜石	諏訪星ヶ台群	25	25	7	3.45	
49	811	1区	耕作土	811	削器	黒曜石	高原山甘湯沢群	35	25	9	7.95	
50	1089	1区	耕作土	1089	削器	黒曜石	藝科冷山群	36	27	9	10.33	
51	1338	1区	耕作土	1338	削器	黒曜石	藝科冷山群	29	34	9	9.66	
52	66	1区	耕作土	66	搔器	黒曜石	和田鷹山群	21	18	7	2.65	
53	1842	1区	耕作土	1842	搔削器	黒曜石	諏訪星ヶ台群	40	28	15	14.9	
54	2277	1区	耕作土	2277	搔器	珪質頁岩		46	25	11	11.6	
55	3033	1区	耕作土	3033	搔器	黒曜石	藝科冷山群	29	23	6	4.7	
56	1480	1区	耕作土	1480	石刃	珪質頁岩		30	25	7	5.71	
57	381	1区	耕作土	381	石刃	黒曜石	藝科冷山群	47	19	9	7.26	
58	1041	1区	耕作土	1041	石刃	チャート		60	19	7	8.11	
59	519	1区	耕作土	519	細石刃	黒曜石	藝科冷山群	17	7	2	0.18	
60	170	1区	耕作土	170	細石刃	黒曜石	藝科冷山群	11	9	2	0.26	
61	800	1区	耕作土	800	細石刃	黒曜石	諏訪星ヶ台群	17	9	2	0.37	
62	889	1区	耕作土	889	細石刃	黒曜石	藝科冷山群	12	5	2	0.13	
63	2313	1区	耕作土	2313	細石刃	黒曜石	藝科冷山群	14	9	2	0.23	
64	1708	1区	耕作土	1708	細石刃	黒曜石	藝科冷山群	10	6	1	0.11	
65		3区	耕作土	4226	細石刃	黒曜石	未実施	33	7	2	0.11	67と統合
66	2343	1区	耕作土	2343	細石核	黒曜石	諏訪星ヶ台群	37	22	26	21.21	
67		3区	耕作土	4057	細石核	黒曜石	未実施	47	26	22	31.42	65と統合
68	1527	1区	耕作土	1527	細石核	黒曜石	藝科冷山群	26	46	21	19.91	
69	1952	1区	耕作土	1952	細石核	黒曜石	藝科冷山群	27	14	32	6.83	
70	2170	1区	耕作土	2170	打面再生剥片	黒曜石	藝科冷山群	22	28	11	5.88	
71	1915	1区	耕作土	1915	石核	黒曜石	藝科冷山群	30	54	15	16.81	
72	2086	1区	耕作土	2086	石核	黒曜石	藝科冷山群	32	61	19	33.68	
73	685	1区	耕作土	685	石核	黒曜石	藝科冷山群	35	25	26	31.86	
74	980	1区	耕作土	980	石核	黒曜石	藝科冷山群	47	23	21	22.02	
75	1794	1区	耕作土	1794	石核	黒曜石	藝科冷山群	32	43	19	17.53	
76	911	1区	耕作土	911	石核	黒曜石	藝科冷山群	39	31	19	25.24	
77	1352	1区	耕作土	1352	石核	黒曜石	藝科冷山群	38	31	38	31.28	
78	329	1区	耕作土	329	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	19	12	2	0.45	
79	1267	1区	耕作土	1267	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	15	16	4	0.92	
80	2165	1区	耕作土	2165	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	16	21	5	1.07	
81	505	1区	耕作土	505	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	16	14	2	0.59	
82	2420	1区	耕作土	2420	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	11	17	3	0.44	
83	1875	1区	耕作土	1875	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	15	12	2	0.43	
84	1284	1区	耕作土	1284	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	21	23	5	2.01	
85	246	1区	耕作土	246	ポイントフレイク	黒曜石	藝科冷山群	17	35	12	4.47	



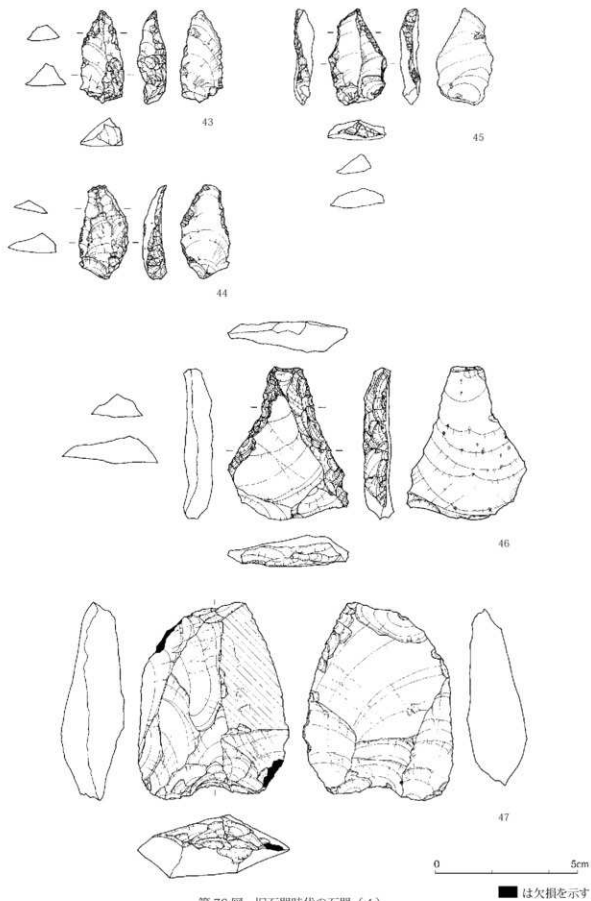
第73図 旧石器時代の石器（1）



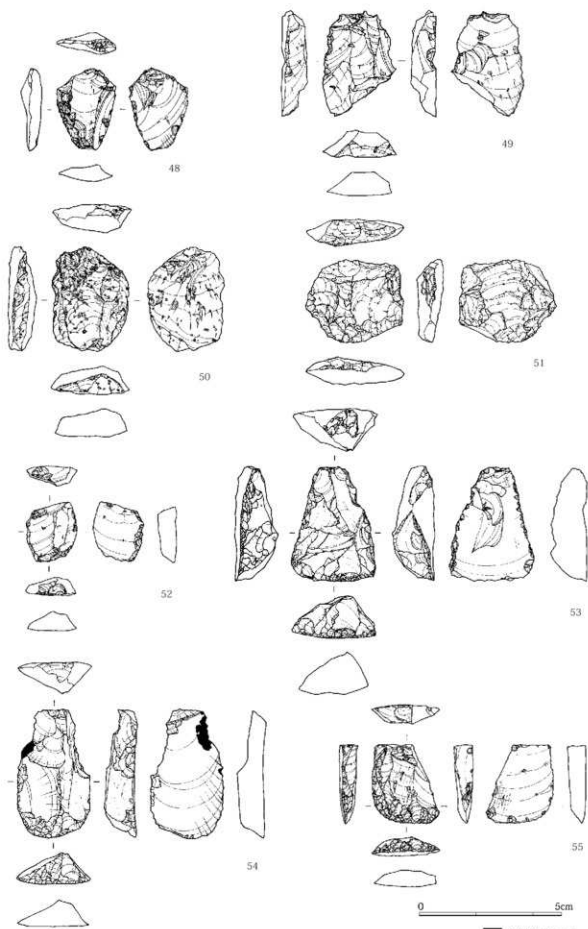
第74図 旧石器時代の石器(2)



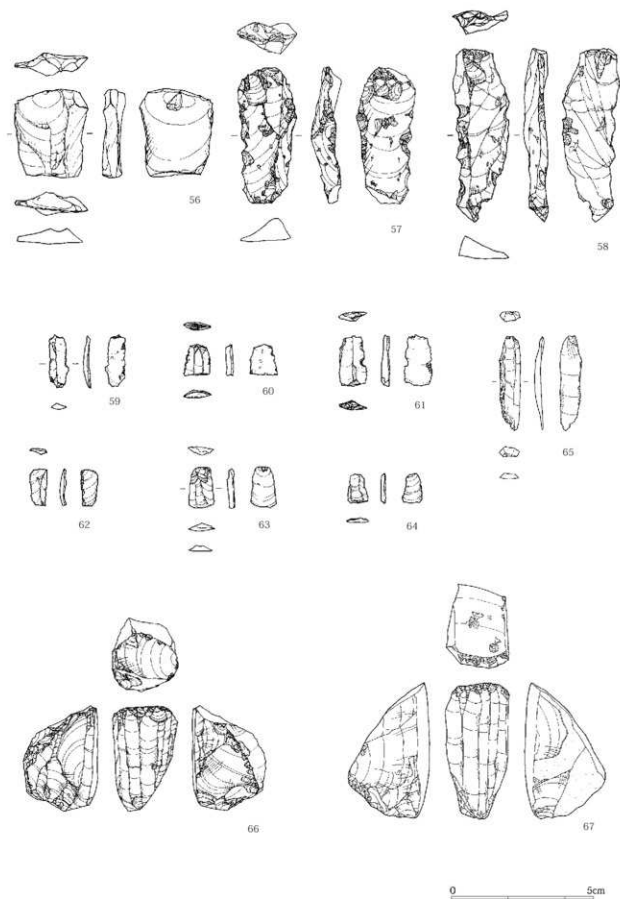
第75図 旧石器時代の石器（3）



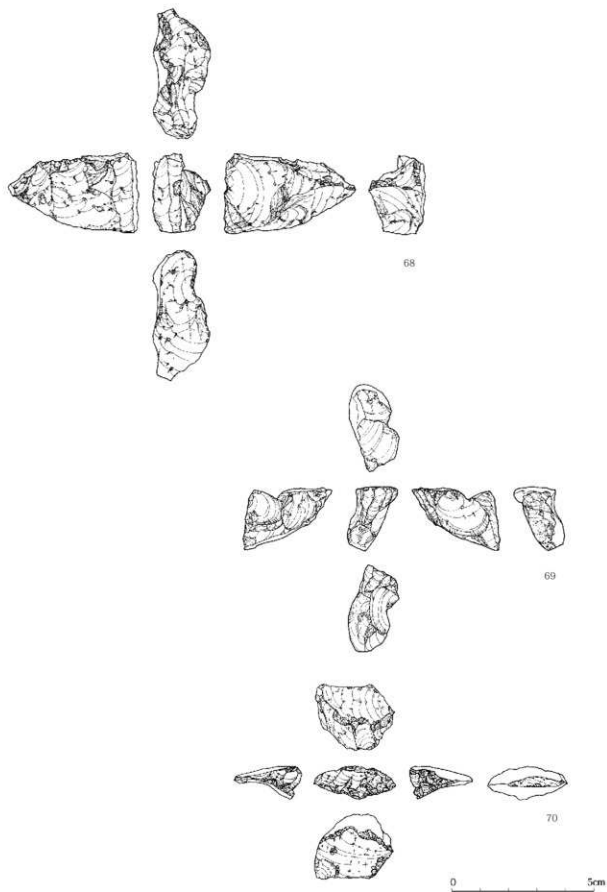
第76図 旧石器時代の石器(4)



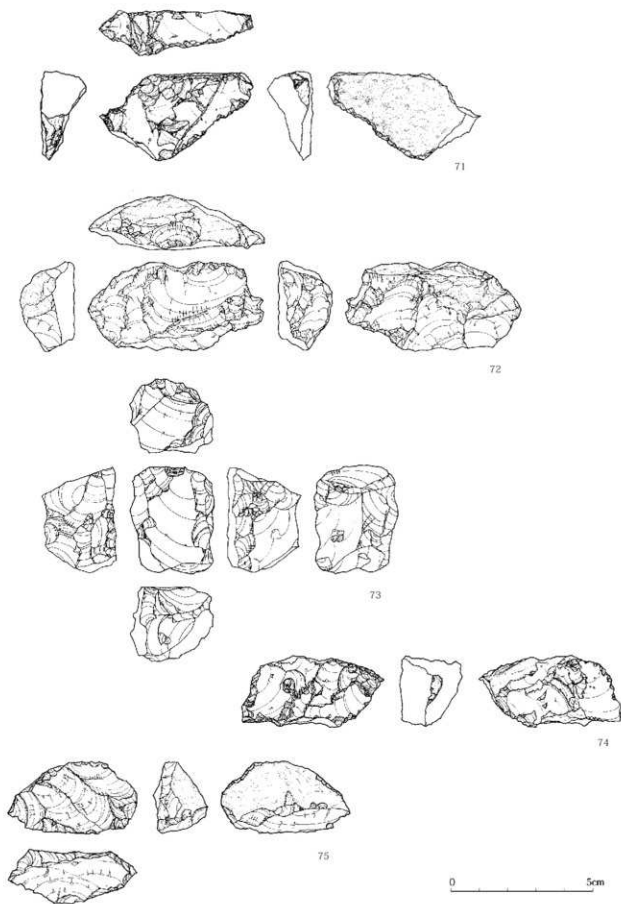
第77図 旧石器時代の石器(5)



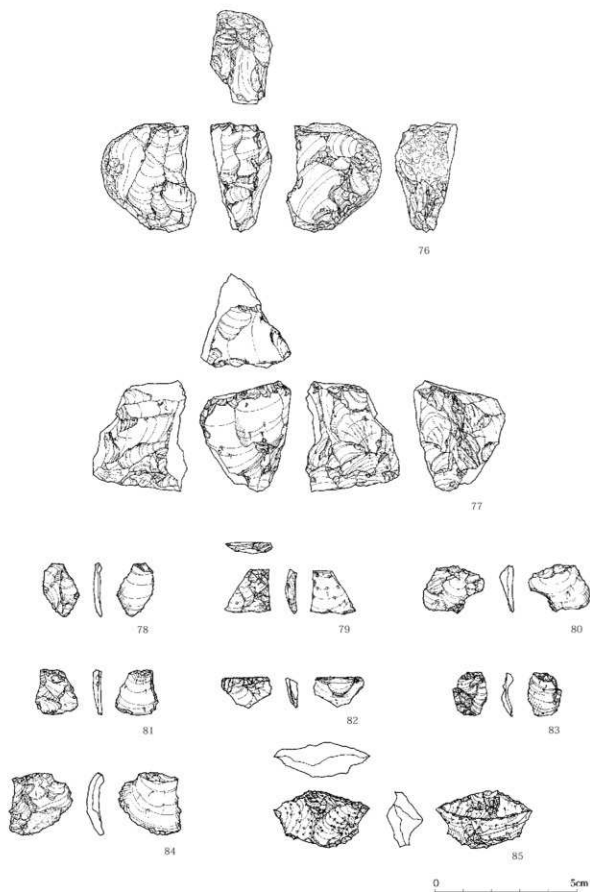
第78図 旧石器時代の石器(6)



第79図 旧石器時代の石器（7）



第80図 旧石器時代の石器(8)



第81図 旧石器時代の石器(9)

第3節 その他の時代の遺構と遺物

1 遺構

旧石器時代以外の遺構として溝跡1条、土坑3基を検出した。

(1) 溝跡

SD 01 (第82図)

位置：2区。ⅠU 15・20、ⅠV 11 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。形状・規模：等高線に対して直交する方向に延びる直線的な溝跡で、断面はU字状を呈する。規模は長さ7.1 m、幅30 cm、深さ10 cmを測る。遺物：なし。時期：時期決定の根拠がなく不明である。

(2) 土坑

SK 01 (第82図)

位置：3区。ⅢF 05 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：2層が堆積する。形状・規模：平面は円形、断面は段掘り状を呈し、規模は直径84 cm、深さ12 cmを測る。遺物：なし。時期：不明だが、縄文時代後期と推測するSK 03に隣接し同一面で検出した点、SK 01の南側で縄文時代中期後半の土器(第83図4)が出土した点などから、縄文時代中期後半もしくは後期の可能性がある。

SK 02 (第82図)

位置：3区。ⅢF 05 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：不明。形状・規模：平面は円形、断面はタライ形を呈し、規模は直径92 cm、深さ20 cmを測る。遺物：なし。時期：不明だが、縄文時代後期と推測するSK 03に隣接し同一面で検出した点、SK 02の東側に位置するSK 01の周辺で縄文時代中期後半の土器(第83図4)が出土した点などから、縄文時代中期後半もしくは後期の可能性はある。

SK 03 (第82図)

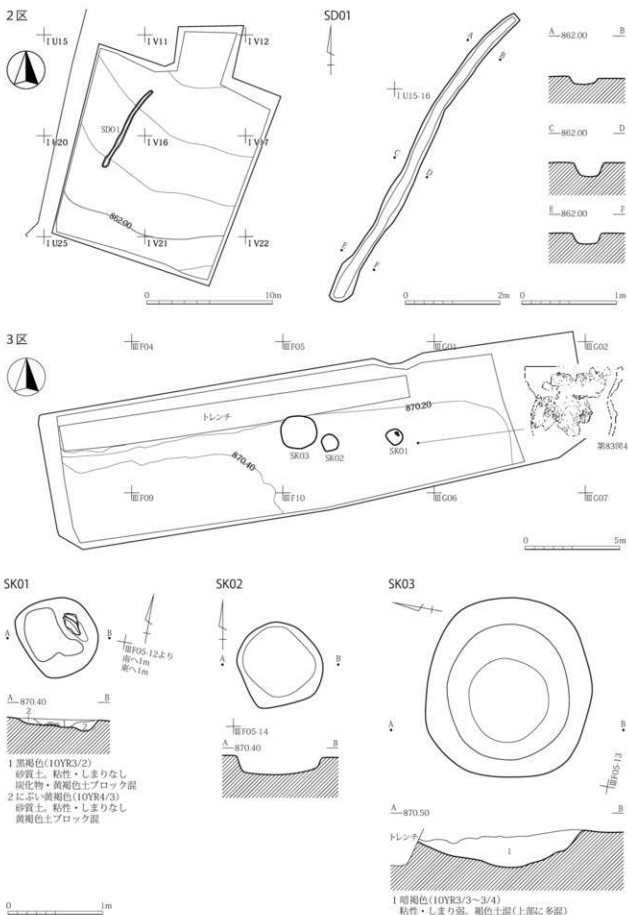
位置：3区。ⅢF 05 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出。重複関係：なし。埋土：単層。形状・規模：平面は楕円形、断面はすり鉢状を呈し、規模は直軸1.9 m、短軸1.7 m、深さ32 cmを測る。遺物：縄文時代後期土器の小破片(第83図1～3)と打製石斧、黒曜石・チャート破片が出土した。時期：不明確だが、出土した土器の時期から縄文時代後期と考える。

2 遺物

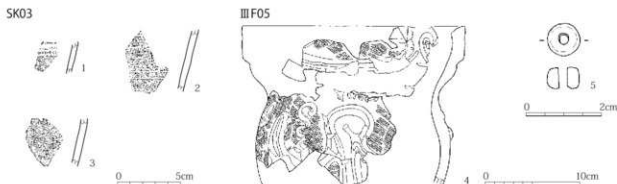
縄文時代中期後半～後期の土器、土師器、中世以降の陶磁器類と石鏃、打製石斧などの石器、時期不明の白玉が出土した。この内、SK 03および3区の遺構外で出土した縄文土器と白玉を報告する。

第83図1～3は、SK 03から出土した縄文時代後期の土器である。1は石神型もしくは加曽利B1式併行で、3条の横位沈線を描く。2は石神型で、横位沈線の間に連鎖状の沈線を描く。3は無文部の破片であり、外面にミガキを施す。

4・5はⅢF 05グリッドで出土した。4は縄文時代中期後半の土器で、口縁部を渦巻き状の文様と楕円区画で構成する。楕円区画の内部には、単節縄文を施文する。頸部は無文となり、胴部との境付近に刺突を施す。胴部は縦位方向の単節縄文を地文とし、沈線および隆帯で構成する主文様の間に、蛇行沈線を描く。5は白玉で直径8.3 mm、孔径0.8 mm、厚さ6.0 mmを測る。石材は不明である。



第82図 2区・3区 遺構全体図、SD01、SK01・02・03 遺構図



第83図 縄文土器、白玉

第4節 自然科学分析

満り久保遺跡では自然科学分析として、黒曜石産地推定分析と火山灰分析を実施しており、以下にその結果を報告する。各分析の詳細については、DVDに収録した。

1 黒曜石産地推定分析

出土した黒曜石について産地を推定するため、エネルギー分散蛍光X線分析法による黒曜石産地推定分析を、元沼津工業高等専門学校望月明彦氏に委託した。

分析試料は1区出土の黒曜石1,910点と、2区で表面採集した槍先形尖頭器1点である。3区出土の黒曜石（細石刃と細石核を含む）の分析は実施していない。

器種別の産地推定結果を第15表に示した。10か所の産地が示され、90%が一番近い距離にある蓼科冷山群である。このほか、諏訪星ヶ台群の黒曜石が槍先形尖頭器と細石刃・細石核に少数用いられている。

第15表 黒曜石産地推定結果

産地	判別図判別群	石鏃	ナイフ形石器	槍先形尖頭器	ポイントフレイク	細石刃	細石核	石刃	搔器	削器	二次加工がある剥片	剥片	砕片	石核	原石	合計
諏訪星ヶ台群	SWHD	5		4	1	2	1		1	1		31				46
和田高松沢群	WOTM											1				1
和田鷹山群	WDTY	2		1				1	1			5				10
和田土屋橋西群	WDTN											2				2
和田土屋橋南群	WDTM											1				1
和田土屋橋北群	WDTK											1				1
蓼科冷山群	TSTY	3	54	37	5	2	2	1	1	5	1593	3	13	4		1723
蓼科樺鉢山群	TSSB											1			22	23
不明NK群	NK			5								3				8
高原山甘湯沢群	THAY								1			4				5
推定・測定不可										1	11				79	91

縄文時代の石鏃には、諏訪星ヶ台群と和田鷹山群が用いられナイフ形石器、槍先形尖頭器、細石器に多く用いられる蓼科冷山群はみられない。このことから、剥片・砕片の多くは旧石器時代のもものと推定することは、おおむね妥当であると思われる。

2 火山灰分析

1～3区で採取した土壌について、火山灰分析をパリオ・サーヴェイ株式会社に委託した。分析試料は、1区⑦地点で採取した17点(№1～7・9・12・16・19・22・24・26・28～30)、1b区⑥地点で採取した5点(№1～5)、3区③地点で採取した12点(№1～12)、3区④地点で採取した9点(№1～9)、3区⑤地点で採取した9点(№1～9)である(第72回参照)。なお、基本層序の統一を図るため、整理作業において採取時点(分析報告)の層名を以下のように変更した。

- 1区⑦地点：1層→第I層、2・2a層→第Ⅲ-1層、3層→第Ⅲ-2層、3a層→第Ⅲ-3層、
4層→第Ⅲ-4層、4a層→第Ⅲ-5層、5層→第Ⅲ-6層、5層→第Ⅲ-7層、
5a層→第Ⅲ-8層、6層→第Ⅲ-9層、6a層→第Ⅲ-10層
- 1b区⑥地点：Ⅲa・b層→第Ⅲ-1層、Ⅳ層→第Ⅲ-2層、Ⅴ層→Ⅲ-3層
- 3区③～⑤地点：Ⅰ・Ⅱ層→第I層。以下は同じ

分析の結果、始良丹沢火山灰(AT)由来の火山ガラスと八ヶ岳新期第Ⅳ軽石(YPm-Ⅳ)が検出された。また、AT由来の火山ガラスが検出された1区第I層と1b区第Ⅲ-1上層および3区第Ⅰ～Ⅲ-1上層が、YPm-Ⅳが検出された1区第Ⅰ・Ⅲ-1上層と1b区第Ⅲ-1下層および3区第Ⅲ-1層最上層が、それぞれ対比された。1区第I層や3区第I層は表土・耕作土であることに加え、出土した槍先形尖頭器と細石刃・細石核の年代観が、AT由来の火山ガラス・八ヶ岳新期第Ⅳ軽石よりも新しいことから、これらの石器群を包蔵する本来の層準は、耕作により攪拌された部分にあったと推測する。

第5節 小 結

今回の調査では、第I層表土・耕作土出土のものが大半だが、旧石器時代の槍先形尖頭器と細石刃・細石核が出土した。本来は1・3区を中心に、複数のブロックを形成していたものと推測する。槍先形尖頭器には、本遺跡と原産地に近い蓼科冷山群の黒曜石が多く使われている。未製品と判断したものや、ポイントフレイクにも蓼科冷山群の黒曜石が認められるので、この場で蓼科冷山群の黒曜石を原石とする槍先形尖頭器の製作が行われていたことを示している。細石核は削片系のもので、類例は南牧村中つ原第1遺跡G地点や第5遺跡B地点などで出土している(堤・八ヶ岳旧石器グループ2015)。なお、7の半月形石器もしくは半月型尖頭器と53の掻削器は、縄文時代草創期にも存在する石器で、今回は草創期の土器を抽出できなかったが、遺跡の下限が縄文時代草創期に下る可能性はある。本遺跡の南側を流れる大石川の源流部には、冷山などの黒曜石原産地が控え、本遺跡は大石川と千曲川の合流点に位置することから、黒曜石原産地と消費地を結ぶ、黒曜石流通ルートの中継地点としての側面をもっていただと推測する。

参考・引用文献

堤 隆・八ヶ岳旧石器グループ2015【矢出川】

第8章 馬越下遺跡

第1節 遺跡の概観と調査の概要

1 遺跡の概観

馬越下遺跡は、八ヶ岳北麓から東側に伸びる尾根の末端部で、甲武信岳を源流とする千曲川と麦草時に源をもつ大石川の合流点から、南西方向へ約1kmの段丘上に位置する(第84図)。遺跡内の地形は、西側の尾根部と東側の谷部、その間の緩やかな斜面部からなり、中部横断道用地は斜面部から谷部にあたる。

周辺遺跡の状況は、本遺跡の東側に中原遺跡が、南側には古屋敷遺跡と向窪遺跡が所在し、縄文時代の遺物包蔵地とされているが、調査履歴がなく詳細は不明である(2003 八千穂村誌刊行会)。一方、本遺跡の北側に旧石器時代の満り久保遺跡があり、中部横断道に伴う埋文センターの調査では、槍先形尖頭器を代表とする時期と、細石刃・細石核を中心とする時期の石器群を検出した(第7章参照)。

2 調査の概要と経過

馬越下遺跡は、2008(平成20)年度の中部横断道に伴う県教委の試掘調査により初めて所在が確認され、登録された遺跡であり、その結果を受けて2010・2012年度に発掘調査を実施した(第84図)。

2010年度の調査区は尾根上の小さな谷間にあり、谷部と緩やかな斜面部に分かれる。斜面部の北側では平安時代の竪穴建物跡や土坑、焼土跡を検出したほか、縄文時代後期の土器と石器が少量出土した。一方、谷部では、遺構・遺物ともに検出できなかった。

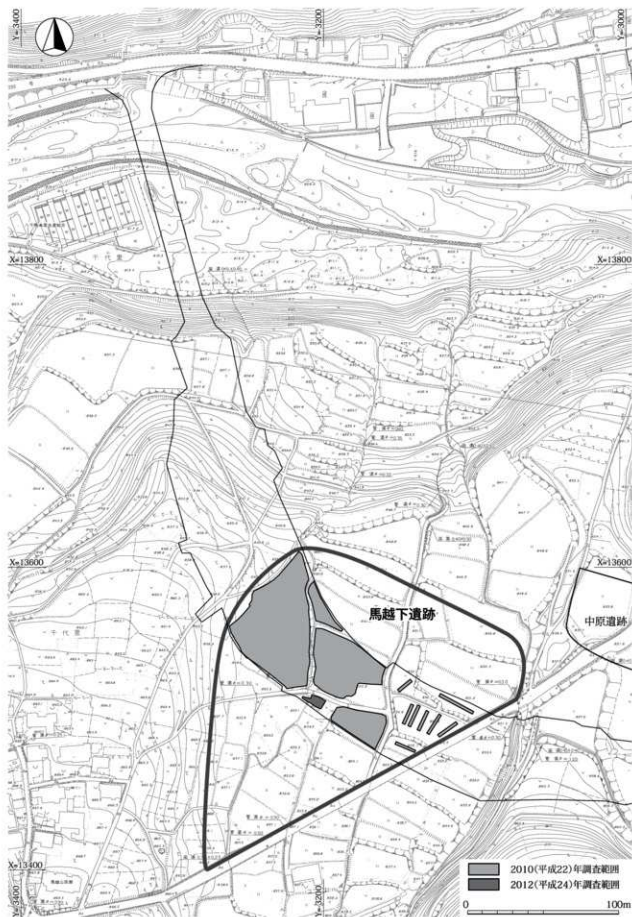
2012年度は、2010年度調査区の南側に隣接する谷部の地点で発掘調査を実施した。結果は中世の陶磁器類1点が出土したのみで、ほかに遺構・遺物は検出されなかったことから、2010年度に検出した平安時代の集落範囲からは外れていると考え、調査を終了した。

3 基本層序

基本層序は第Ⅰ～Ⅳ層に大別できる(第85・86図)。第Ⅰ層は耕作土、造成土、かく乱を含む調査区全体の表土を一括する。第Ⅱ層は、谷部にあたる調査区東側に堆積する黒褐色～黒色土である。Ⅱa層とⅡb層に細分した。Ⅱa層は、最低部の5区北部のみに存在する。第Ⅲ層はⅡb層からⅣ層への漸移層である。高位部にあたる3区は表土直下がⅢ層となる。低位部は、6区ではⅡb層・Ⅳ層と区分したが、5区では区分していない。第Ⅳ層は遺跡全体の基盤を成す黄褐色土である。遺構検出面は第Ⅲ層上面だが、3区の一部では第Ⅰ層直下で第Ⅳ層が露出するため(第86図①)、第Ⅳ層上面で検出した。

参考・引用文献

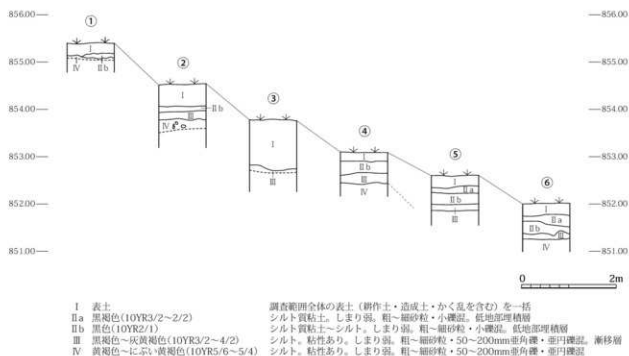
- 長野県南佐久郡誌刊行会 1998 『南佐久郡誌 考古編』
八千穂村誌刊行会 2003 『八千穂村誌』 第四巻 歴史編



第84図 遺跡範囲・調査区位置図



第85図 トレンチ・調査区配置図



第86図 土層柱状図

第2節 遺構

今回の調査では竪穴建物跡3軒、土坑15基、被熱部5基を検出した(第87~89図)。

1 竪穴建物跡

SB 3004 (第90図、P.L 10)

位置：Ⅲ E 16・17・21・22グリッド。検出：試掘トレンチで柱穴を検出し、トレンチ壁面で床面と壁の立ち上がりを確認したので竪穴建物跡と判断した。試掘トレンチがSB 3004の中央を掘抜いてしまい、残りのプランを基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：SK 3001と切合うが新旧関係は不明。埋土：2層が堆積する。壁際から床面に2層黒色粘質シルトが堆積し、その上部を1層黒褐色粘質シルトが埋積する。形状・規模：やや不整の長方形を呈する。南北方向は残存部で5.6m、東西方向は残存部で4.0mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。壁は深さ20cmで、斜め~垂直に立ち上がる。柱穴：円形で直径30~40cm、深さ15cmを測るP1~4を柱穴と考える。周溝・カマド・付属施設：検出できなかった。遺物：黒色土器環の破片などが出土した。時期：遺物量が少なく不明確だが、土器の時期から9世紀後半と推測する。

SB 4001 (第90図、P.L 10)

位置：Ⅲ E 08・13グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：2層が堆積する。2層の焼土・炭化物ブロックを多く含む黒褐色土が床面から壁際に堆積し、その上部を1層黒褐色土が埋積する。床面から2層に炭化材が残存し、焼失住居と考える。形状・規模：長方形を呈する。南北方向4.8m、東西方向4.1mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。北壁付近と南壁付近の一部を除

く広い範囲に硬化面が認められた。壁は深さが30～40cmで斜めに立ち上がる。柱穴：不明確だが長軸35cm、短軸22cm、深さ20cmを測る楕円形のP2を柱穴と考える。周溝：検出できなかった。カマド：東壁中央からやや南側へ寄った位置で、石組みカマド1基とそれに伴う煙道の残痕を検出した。左右の袖石は残存するが、天井石は失われていた。その他の施設：性格不明だが、カマドの右側で長軸74cm、短軸65cm、深さ37cmを測る隅丸方形のP1を検出した。埋土上部（9～11層）に炭化物と焼土を多く含むが、S B 4001を焼失住居と推測するので、炭化物と焼土はS B 4001の焼失時に堆積した可能性が高い。遺物：カマドとその付近から黒色土器・土師器環、土師器甕などが出土した（第93図1・2・4・7～13）。また、カマドの前面から刀子1点、西壁際から鎌1点（第95図1）が出土した。時期：出土した土器の時期から、9世紀後半と推測する。炭化材2点（炭Na1・2）の放射性炭素年代測定（AMS測定）の結果では、8世紀前半～9世紀末葉と、7世紀後半～8世紀後半の年代を得た（第4節参照）。

S B 4003（第91図、P L 10）

位置：Ⅲ D 20、Ⅲ E 16 グリッド。検出：基本層序第Ⅲ層上面で検出した。重複関係：なし。埋土：7層が堆積する。壁際に6層にぶい黄褐色シルトと7層黒褐色シルトが堆積し、5層暗褐色砂質シルトが床面の一部を埋める。その上部に4～1層の黒褐色・暗褐色シルトが堆積する。形状・規模：長方形を呈する。南北方向4.3m、東西方向3.8mを測る。床・壁：掘方を整え床面とする。貼床や硬化面は確認できなかった。壁は深さ50～55cmで、斜めに立ち上がる。柱穴：不明確だが直径40cm、深さ17cmを測る円形のP3を柱穴と考える。周溝：検出できなかった。カマド：北壁中央で、カマド1基と煙道の残痕を検出した。石組みカマドだが支脚と袖石は失われ、袖部を構築する黒褐色粘質シルトが残存するのみであった。袖部の内側では袖石の抜取り痕を検出した。カマド前面では、構築材と推測する礫が出土した。その他の施設：性格不明のP1・2を検出した。P1は断面形がトライ形を呈し長軸72cm、短軸60cm、深さ15cmを測る楕円形の土坑で、南西壁コーナー際に位置する。P2は断面形がU字状を呈し直径80cm、深さ30cmを測る不整形の土坑で、中央に位置する。遺物：黒色土器環・塊、土師器・鉢・甕などが出土した（第93図16～28）。時期：出土した土器の時期から、9世紀後半と推測する。

2 土坑

土坑個別の詳細は第16表に示した。表中の平面形状は開口部の長・短軸長の比により、断面形状は底部と壁の状態から、それぞれ以下のように分類した。

- 平面形状 ・ 円形・方形：長軸長/短軸長 = 1.2 未満のもの
 ・ 楕円形・長方形：長軸長/短軸長 = 1.2 以上のもの
- 断面形状 ・ 逆台形状：底部が平坦で壁が斜めに立ち上がるもの
 ・ タイ状：底部が平坦で壁が垂直ないし垂直近く立ち上がるもの
 ・ U字状：底部が丸みを帯び、壁が垂直もしくは斜めに立ち上がるもの
 ・ 掘鉢状：小さく丸い底部から壁が斜めに立ち上がるもの

土坑はS B 3004・4003、S F 4001・4002と同一範囲に分布するS K 3001・4002～4007、土坑のみが分布するS K 3002～3008、単独のS K 4001が存在する。時期は、須恵器甕や黒色土器環および土師器環・碗・甕などが出土したS K 3002・4001～4003については、堅穴建物跡と同じ9世紀後半と考える。そのほかの土坑は不明だが堅穴建物跡と同じⅢ層上面で検出し、時期が推測できる遺構に9世紀後半以外のものが存在しないことに加え、遺物が出土した土坑の位置などからみて、9世紀後半と推測しておきたい。

第16表 土坑一覧表

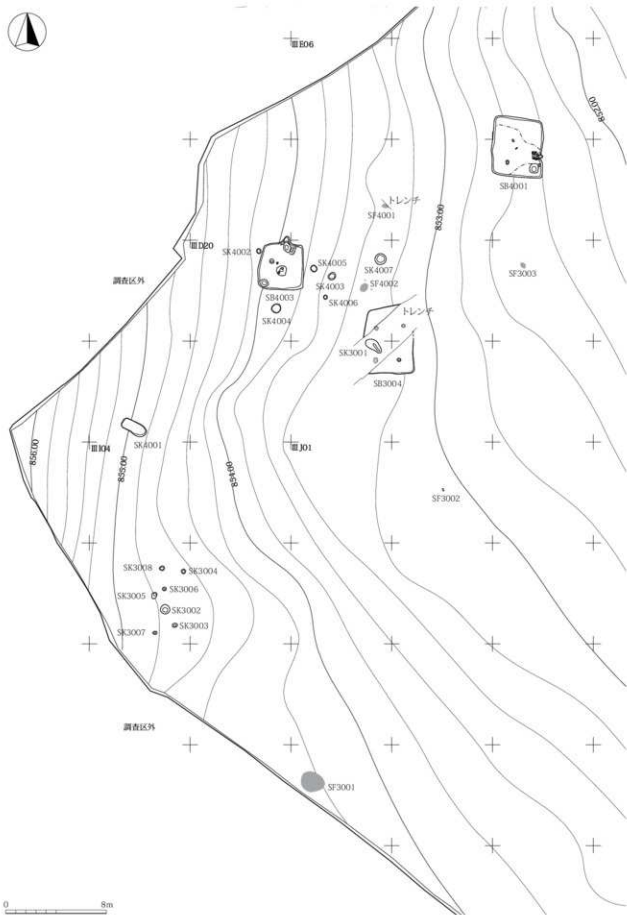
図版番号	PL 番号	S K	グリッド	平面形状	断面形状	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	出土遺物	備考
92		3001	Ⅲ E 16・21	楕円形	逆台形状	150	78	63		S B 3004と重複するが新旧は不明
92		3002	Ⅲ I 09	円形	U字状	74	72	24	土師器碗 (第93図29)	
92		3003	Ⅲ I 09	楕円形	U字状	44	34	28		
92		3004	Ⅲ I 09	方形	U字状	37	36	25		
92		3005	Ⅲ I 09	楕円形	楕鉢状	56	42	36		
92		3006	Ⅲ I 09	円形	楕鉢状	34	30	26		
92		3007	Ⅲ I 09	楕円形	U字状	36	28	17		
92		3008	Ⅲ I 09	楕円形	U字状	43	38	31		
92	10	4001	Ⅲ D 24	長円形	逆台形状	212	98	32	黒色土器環、土師器羹・ 羹 (第93図30)	黒色土器環に黒書「万」?有
92	10	4002	Ⅲ D 20	円形	U字状	86	76	38	灰輪陶器皿 (第93図31)	皿見込み部が摩耗
92	10	4003	Ⅲ E 16	楕円形	U字状	65	54	20	須恵器羹、土師器環・羹 (第94図32~34)	土師器羹は甲斐型か?
92		4004	Ⅲ D 20	円形	クワイ状	78	74	22		
92		4005	Ⅲ E 16	円形	U字状	56	50	18		
92		4006	Ⅲ E 16	円形	U字状	36	36	23		
92		4007	Ⅲ E 16	円形	逆台形状	90	90	44		

3 被熱部

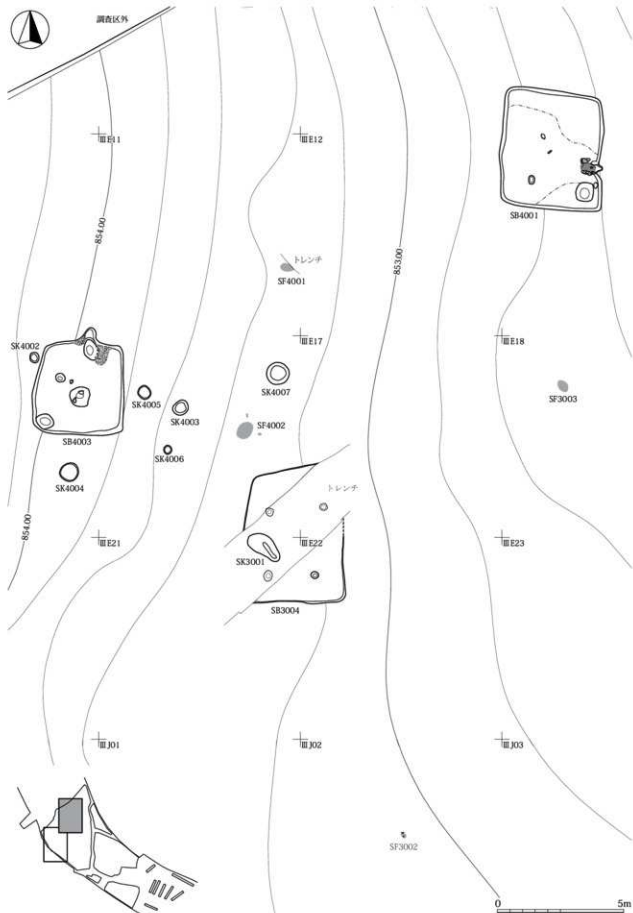
被熱部個別の詳細は、第17表に示したとおりである。S F 4002は周辺部に土坑が分布するが、被熱部との関連性が認められないことから、被熱部単独の遺構と判断した。被熱部はS B 3004・4003、S K 3001・4002~4007と同一範囲に分布するS F 4001・4002、単独のS F 3001~3003が存在する。時期は須恵器環、黒色土器環、土師器環・羹などが出土したS F 3001・4001・4002については、堅穴建物跡と同じ9世紀後半と考える。S F 3002・3003は不明だが、堅穴建物跡と同じ第Ⅲ層上面で検出した点、時期が推測できる遺構に9世紀後半以外のものが存在しないなどの点から、9世紀後半の可能性が高いと推測する。

第17表 被熱部一覧表

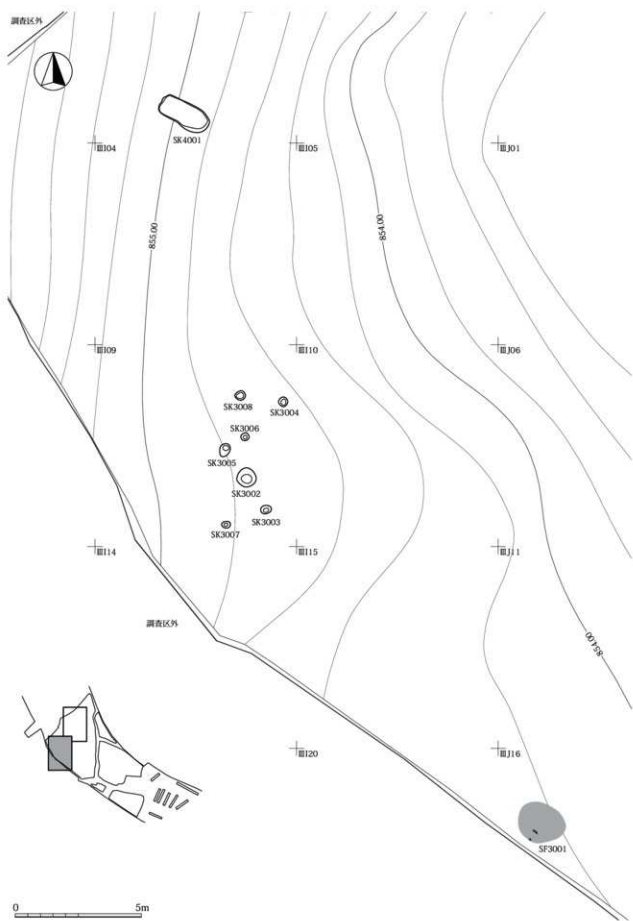
図版番号	PL 番号	S F	グリッド	平面形状	長軸/短軸	長軸 cm	短軸 cm	深さ cm	出土遺物	備考
91		3001	Ⅲ J 16	楕円形	1.21	194	160	—	黒色土器環、土師器環・ 羹 (薄手)	
91		3002	Ⅲ J 02	楕円形	1.38	50	36	—		
91		3003	Ⅲ E 18	楕円形	1.42	54	38	—		
91		4001	Ⅲ E 11	楕円形	1.75	56	32	—	黒色土器環、土師器 羹 (薄手)・羹 (ロクロ)、 須恵器環	
91		4002	Ⅲ E 16	楕円形	1.27	74	58	—	土師器環、羹	最大の焼土のみ計測



第 87 図 遺構分布全体図

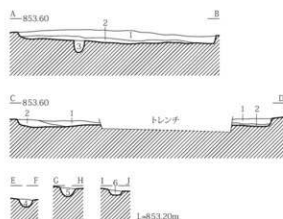
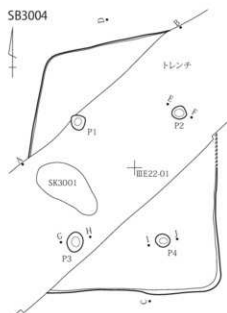


第88図 遺構分布部分拡大図(1)



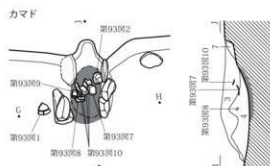
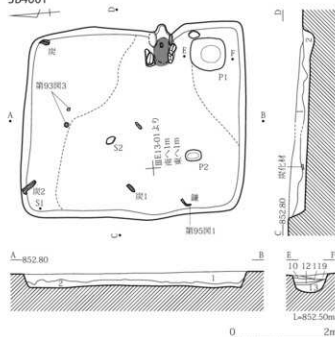
第89図 遺構分布部分拡大図(2)

SB3004

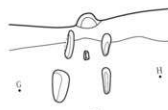


- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘質シルト。褐色シルト混砂ブロック混
- 2 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルト。粘性やや強。細粒砂多混。暗色
- 3 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルト。黒褐色砂質粘質シルトブロック多混
- Pr1埋土
- 4 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルト。砂質シルトブロック混。Pr2埋土
- 5 黒色(10YR1.7/1) 粘質シルト。細粒砂多混。小塊礫混。Pr3埋土
- 6 暗褐色(10YR3/3) シルト。細粒砂多混。Pr4埋土

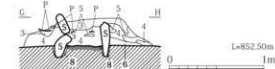
SB4001



カマド

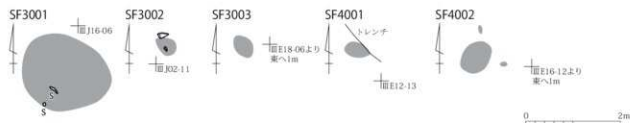
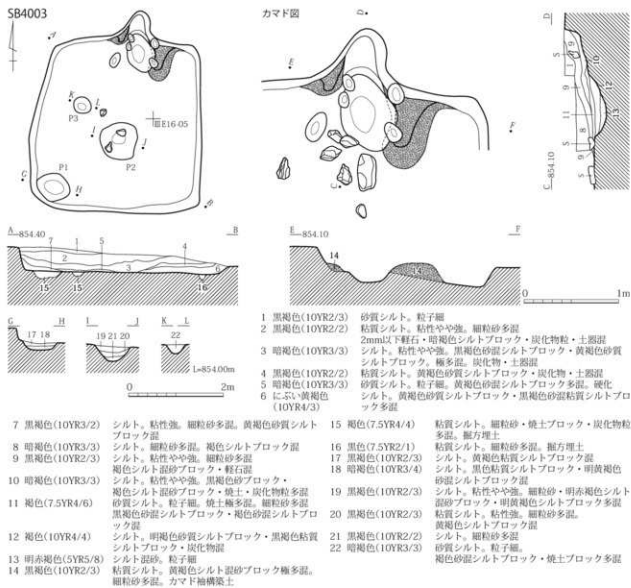


カマド袖石採取處

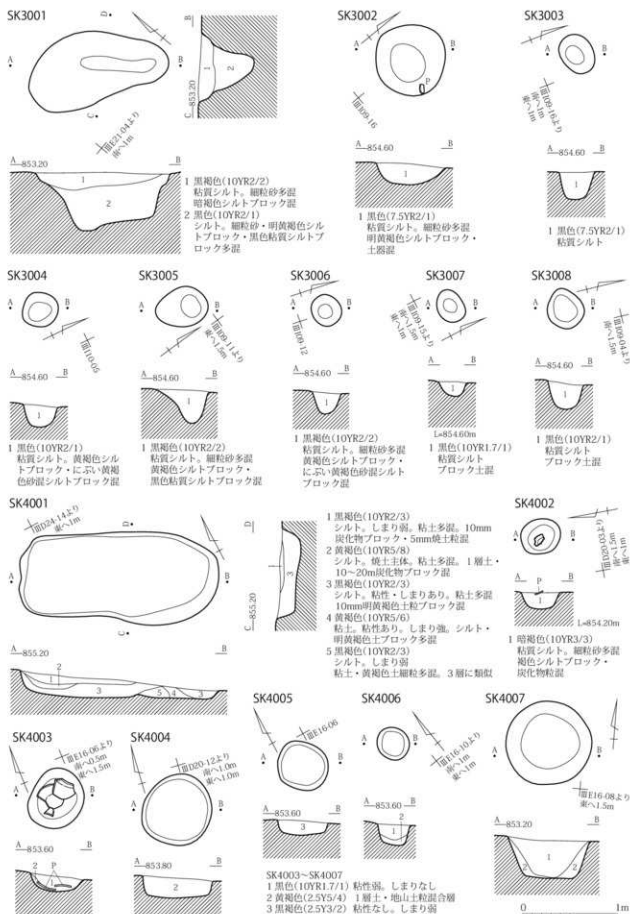


- 1 黒褐色(10YR2/2) 粘性弱。しまりややあり
1~3mm炭化物粒・黄褐色土粒少混
- 2 黒褐色(10YR2/2) 粘性弱。しまりややあり
粘土ブロック・炭化物ブロック多混
礫混に黄褐色土ブロックあり
- 3 黒褐色(10YR3/1) 粘性ややあり。しまり弱。焼土粒微混
- 4 灰黄褐色(10YR4/2) 粘性ややあり。しまり弱
1~5mm焼土粒・1~5mm炭化物粒混
- 5 黄褐色(10YR5/6) 粘性・しまり弱。焼土主体。カマド崩落土か
- 6 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 粘性あり。しまり弱。灰混
- 7 黒褐色(10YR2/2) 3層土主体。5層土ブロック多混。カマド礎遺埋土
- 8 カマド袖石埋方埋土
- 9 黒褐色(10YR3/1) 3層土主体。炭化物やや多混
- 10 黄褐色(10YR5/6) 3層土主体。炭化物多混
- 11 黒褐色(10YR3/1) 焼土主体
- 12 灰黄褐色(10YR4/2) 13層土主体。1~5mm黄褐色土粒混
- 13 灰黄褐色(10YR4/2) 粘性ややあり。しまりなし。粒子細。土層片混

第90図 SB3004・4001 遺構図



第91図 SB 4003、SF 3001～3003・4001・4002 遺構図



第92図 SK 3001~3008・4001~4007 遺構図

第3節 遺物

1 平安時代の遺物

(1) 土器

SB 4001 (第93図1~15, P.L.20)

1・2・4・7~13はカマドおよび周辺、3は床面付近から出土した。1~9は黒色土器である。1~8は坏、9は皿で、外面は回転ナデ、内面は口唇部直下に横方向の、以下、放射状のミガキを施す。底部は回転糸切りで、4・8は底部周縁にナデを施す。7は体部外面に墨書があり「井」の字に読める。10は土師器坏で器形がやや重む。内外面に回転ナデを施し、内面には黒斑が残る。底部は回転糸切りである。11~15は土師器の甕である。11~13は器壁が薄く、口縁部にナデを、体部上半に横方向のケズリを、底部には縦方向のケズリを施す。11は口唇部直下の外面に、1条の沈線が巡る。14は、全体を回転ナデにより整形する。15は甕の体部破片で、外面は縦方向の、内面は横方向のハケを施す。

SB 4003 (第93図16~28, P.L.20)

16~22は黒色土器で、17~19は坏、22は埴、16・20・21は坏もしくは埴である。外面は回転ナデで、内面は口唇部直下に横方向の、以下、放射状のミガキを施す。16・18・19は、横方向のミガキが体部下半におよぶ。17は内面の体部下半が摩耗する。底部はいずれも回転糸切りである。18・22は体部外面に墨書があり、18は判読不明だが、22は「左」の字に読める。23~28は土師器の甕である。23は底部で器壁が薄い。外面に横方向のケズリを施す。24~26は口縁部もしくは頸部の破片で、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が短く外反する。外面はナデ調整で、内面は口縁部に横方向のハケ後、ヨコナデを施し、頸部以下はナデ調整となる。24は口唇部に沈線状の凹みが巡る。27・28は体部で、外面は縦方向の、内面は横方向のハケを施す。24~27は胎土中の雲母が目立つ。24~28(特に雲母が目立つ24~27)は、器形やハケ調整の特徴から甲斐型甕と推測する。

SK 3002 (第93図29, P.L.20)

29は土師器の埴である。外面は回転ナデで、内面は口唇部直下に横方向の、以下、放射状のミガキを施す。底部は回転糸切りである。

SK 4001 (第93図30)

30は黒色土器の坏である。外面は回転ナデで、内面は口唇部直下に横方向の、以下、放射状のミガキを施す。放射状のミガキは細かな単位が複合し、全体的に花卉状を呈する。体部外面には墨書があり、不明確だが「万」の字に読める。底部は回転糸切りである。

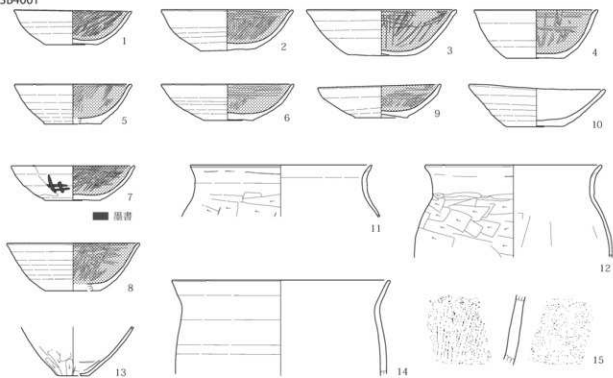
SK 4002 (第93図31, P.L.20)

31は灰軸陶器の皿で、施軸はハケ塗りによる。見込み部は全体的に摩耗し、周縁部には重焼き痕(高台端)が残る。

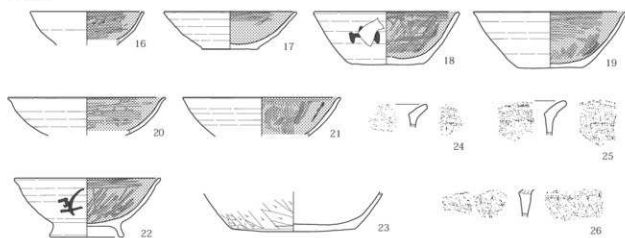
SK 4003 (第94図32~34)

32・33は須恵器の甕で、32は頸部付近、33は底部の破片である。32は自然軸が付着し不明確だが、外面は疑格子タタキと推測する。内面は当て具痕をナデ消す。33は外面が疑格子タタキで、内面は当て具痕をナデ消す。底面の内部は指オサエが明瞭に残り、底面の外部は砂礫やその抜痕、不整な凹凸などがあり平滑ではない。34は土師器の甕で、外面に縦方向の、内面に横方向のハケを施す。胎土中の雲母が目立つことから、甲斐型甕と推測する。

SB4001



SB4003



SK3002



SK4002



SK4001



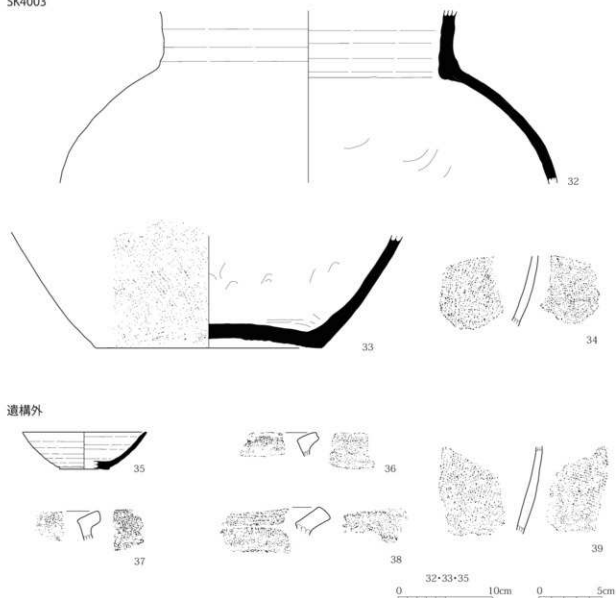
■ 灰釉被覆

15, 24-26, 27, 28
0 5cm

0 10cm

第93図 平安時代の土器(1)

SK4003



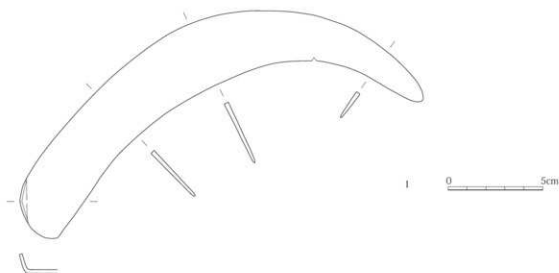
第94図 平安時代の土器(2)

遺構外 (第94図35~39, P.L.20)

35は須恵器の坏で、内外面に回転ナデを施す。底部は回転糸切りである。36~39は土師器の甕である。36~38は口縁部から頸部にかけての破片で、頸部が「く」の字に屈曲し、口縁部が短く外反する。36は外面がヨコナデで、内面は口縁部に横方向のハケ、頸部には横方向のハケ後、ヨコナデを施す。また、口唇部に沈線状の凹みが廻る。37は内外面にヨコナデを施す。38は外面がヨコナデで、口唇部から口縁部内面にかけては横方向のハケ後、ヨコナデを施し、頸部は横方向のハケが残る。39は体部の破片で、外面は縦方向の、内面は横方向のハケを施す。また、胎土に雲母を含む。36~38は、器形やハケ調整の特徴から甲斐型甕の可能性がある。

(2) 金属器 (第95図, P.L.20)

金属製品はSB 4001から鎌1点と刀子破片2点(1点は残存状態が悪く不明確)、遺構外の1区から銭貨1点(寛永通宝)が出土し、残存状態が良好な鎌を掲載した。1はSB 4001出土の鎌で、基部から刃部に向けほぼ同一幅で移行し、尖端付近で幅を減ずる。基部(着柄部)は、端部上端から棟側にかけて折り返しており、鈍角で柄と装着する。時期は、SB 4001から出土した土器より9世紀代と考える。



第95図 金属製品

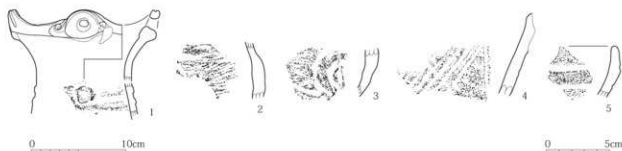
2 その他の時代の遺物

(1) 縄文土器 (第96図1~5)

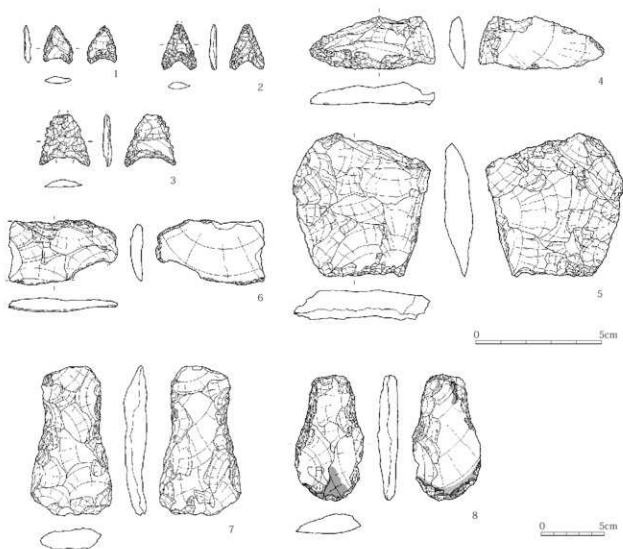
後期前～後葉の土器が出土した。1は4単位の波状口縁で、環状把手が付く。内外面ともに把手の両側には凹形刺突があり、外面の凹形刺突は単沈線でつなぐ。頸部以下は無文で、横位方向のナデ調整もしくはミガキを施すが、胴部中央付近は環状の貼付文と幅広の横位沈線で加飾する。茂沢類型であろう。2～4は後期前葉と推測する。2・3は胴部で、同一体の可能性が高い。単沈線で文様を描き、無節縄文を施文する。4は口縁部付近の破片で、外面は広く剝離するが、単節縄文の地文上に縦位・斜位などの沈線を組み合わせて文様を構成する。5は後期後葉と考える口縁部で、2条の横位沈線と単節縄文で文様を構成する。器面内外のミガキが顕著である。

(2) 石器 (第97図1~8)

1～3は石鏃である。1・2は凹基無茎鏃で、1は素材剥片の剝離面を表裏に広く残し、縁辺部や基部に細かな加工剝離を施し形状を整える。3は基部を欠損するが凹基有茎鏃で、個縁部が鋸歯縁を呈する。石材は全て黒曜石である。4は石匙で、片面からの加工剝離で刃部を作出する。石材はチャートである。5はスクレイパーで、やや大型の両極剥片を素材とし、両面からの加工剝離で削器的な角度の刃部を作出する。石材はチャートである。6は横刃形石器で、横長剥片を素材とし、打点側の片面に多くの加工剝離を施す。また、打点と逆側の縁辺部には、使用痕の可能性が高い微細な剝離が連続して残る。石材は泥岩と推測する。7・8は打製石斧で、撥形を呈する。8は両面の刃部に、使用痕の可能性が高い摩耗痕が顕著に残る。石材は泥岩と推測する。なお、石器観察表をDVDに収録した。



第96図 縄文土器



第97図 縄文時代の石器

(3) その他の遺物

そのほか、小破片のため図示していないが、遺構外から中世に所属する古瀬戸壺の胴部破片と連弁文をもつ青磁碗の体部破片、見込み部に菊花刻文をもつ近世以降の施軸陶器皿の底部破片が出土した。

第4節 自然科学分析

馬越下遺跡では、炭化物2点について株式会社加速器分析研究所に委託し、放射性炭素年代測定(AMS測定)を実施した。以下、結果を報告するが、詳細はDVDに収録した。

分析試料は、堅穴建物跡S B 4001床面出土の建築材と推測する炭化物片2点で、目的は堅穴建物跡の時期に関わる資料を得ることにある。測定結果は第18表のとおりで、暦年代範囲の最小値と最大値は、試料1が714calAD-892calAD、試料2が665calAD-779calADであった。S B 4001は、出土した土器から9世紀後半と考えており、そのため試料1は整合的、試料2は不整合な結果と言える。

第18表 分析試料と測定年代

No	測定番号	種類	採取位置	暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
1	IAAA 103206	炭化物	S B 4001 床上No.1	1207 \pm 27	778calAD-870calAD (68.2%)	714calAD-745calAD (7.5%) 767calAD-892calAD (87.9%)
2	IAAA 103207	炭化物	S B 4001 床上No.2	1276 \pm 27	685calAD-722calAD (38.0%) 741calAD-770calAD (30.2%)	665calAD-779calAD (95.4%)

第5節 小 結

2008年度の試掘調査で初めて所在が確認された馬越下遺跡が、今回の本調査により平安時代の集落跡であることが明らかとなった。以下、遺構・遺物を概観することで小結としたい。

検出した遺構は竪穴建物跡3軒、土坑15基、被熱部5基である。竪穴建物跡3軒は出土した土器の時期から9世紀後半に所属するもので、それぞれが12m以上離れて位置することから、同時に存在した可能性も指摘できる。形状は長方形を呈し、等高線と同一の南北方向に長軸があり、S B 3004は不明だが、S B 4001は東壁に、S B 4003は北壁にカマドが構築されていた。土坑と被熱部は、ほかの時期のものを含む可能性はあるが、S B 3004・4001とともに分布するもの、ほかの遺構が存在しないⅢI 09グリッドへ纏まるもの（土坑）、単独で分布するものが存在する。土坑と被熱部の性格は不明だが、S B 3004・4003の周辺には、遺物が出土した土坑と被熱部が比較的纏まる傾向が認められる。また、ⅢD 24グリッドにおいて単独で検出したS K 4001は、ほかの土坑にはない長方形プランを呈するもので、墨書土器などが出土した。平面形状などから墓跡の可能性を考えたが、その根拠を得ることはできなかった。

今回調査した集落跡は、東側が谷部を形成し、谷部には遺構が存在しない点から、谷部縁辺に営まれた9世紀後半の小規模集落とみることできる。しかし、西側の調査区外には平坦地が残り、そこで当該期の遺構が検出される可能性もあることから、周辺部における今後の調査には注目していきたい。

遺物では、甲斐型甕もしくは甲斐型甕に類似する土器について若干触れる。甲斐型甕としたものは、頸部が「く」の字状に屈曲して口縁部が短く外反するもので、体部外面に縦方向の、内面には横方向のハケ調整を施し、胎土中の雲母が目立つといった特徴をもつ。馬越下遺跡ではS B 4003、S K 4003および遺構外などで出土している（P.L.20）。このほか、体部の調整は同様だが雲母が目立たないものなど、甲斐型甕に含めることを躊躇した破片が存在する。富沢一明氏によれば、甲斐型土器は佐久地域では古代官道・街道沿いに分布し川上村、小海町、佐久市、小諸市所在の合計15遺跡で確認されており（富沢2008）、馬越下遺跡で出土した甲斐型甕もそうした類例の1つとして追加できた点は成果と言えよう。同時に、甲斐型甕が出土したことにより、馬越下遺跡で営まれた集落跡の場所は、古代官道・街道沿いもしくはその周辺部であったこと示唆している。

参考・引用文献

富沢一明2008「反田遺跡出土の甲斐型土器について」『小山崎遺跡群 反田遺跡』佐久市教育委員会

第9章 総括

本報告では南佐久郡佐久穂町内の、千曲川左岸に位置する5遺跡の発掘調査記録を収録した。遺跡の時期は旧石器時代から中近世にわたるが、特に旧石器時代、古代、中世に成果が多かった。

旧石器時代

満り久保遺跡では、槍先形尖頭器と細石刃・細石核が出土した。表土・耕作土出土が大半であるが、本来は複数のブロックと推測する。槍先形尖頭器には、蓼科冷山群の黒曜石が多く使われ、未製品やポイントフレイクにも同産地の黒曜石があるので、これを原石とする槍先形尖頭器が製作されていたと考える。細石核は削片系のものである。南側を流れる大石川の源流部には黒曜石原産地が控え、遺跡が大石川と千曲川の合流点に位置するため、原産地と消費地を結ぶ黒曜石流通ルートの中継地点の役割を推測する。小山寺窪遺跡では、旧石器時代終末期の黒曜石製ナイフ形石器、槍先形尖頭器、スクレイパーが出土した。

古代

奥日影遺跡では、奈良時代の須恵器窯跡1基を検出した。時期は8世紀初頭から第2四半期と推測し、南佐久地域においては初見である。出土した器種は蓋、坏、高台付坏、高台付盤、長頸瓶、横瓶、鉢、甕である。歪みや亀裂、表面の弾けなど、不良品がほとんどで、窯体内へ遺棄された可能性が高い。須恵器は胎土に黒曜石粒を含むため、同種胎土の須恵器分布を追求すれば、本窯跡産須恵器の供給先の解明が可能であろう。小山寺窪遺跡では、平安時代の遺構は竪穴建物跡6軒があり、時期は9世紀前葉と中葉である。他に大規模な溝跡や、長軸方向が一致する掘立柱建物跡、杭列などがあり、仮に同時期とすれば、9世紀代の集落跡は竪穴建物跡が点在する場所と、溝跡および掘立柱建物跡が並列して建つ場所が分かれていたことになる。馬越下遺跡では平安時代9世紀後半の竪穴建物跡3軒を検出した。遺物では甲斐型甕、もしくは甲斐型甕に類似する土器が注目される。甲斐型土器は佐久地域では古代官道・街道沿いに分布し、これまで川上村、小海町、佐久市、小諸市所在の合計15遺跡で確認され、類例の1つを追加できた。

中近世

奥日陰遺跡で中世の可能性のある多数の土坑を検出した。時期は13世紀と15世紀の遺物が出土していることに加え、遺構に切り合い関係が認められるため、2時期以上の遺構が存在するのである。小山寺窪遺跡では竪穴状遺構、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡などを検出した。竪穴状遺構とし字状の溝跡および柱穴で構成する建物跡、竪穴状遺構と大型土坑、溝跡で構成する遺構群などを検出した。遺構密度が比較的高く、竪穴状遺構や溝跡には重複関係が認められる。時期は、竪穴状遺構と大型土坑が13世紀後半～14世紀で、溝跡は13世紀後半～14世紀の遺物を主体に15世紀の遺物も見られることから、13世紀後半～14世紀または15世紀と推測する。このほか、同じ範囲には多数の土坑が分布し、13世紀後半～14世紀と15世紀の土坑が混在するものとする。長さが100mを超える大型の溝跡は、9世紀代と中世において同じ場所に掘り込まれている。水田跡は低地部で2面を検出し、13世紀後半～14世紀もしくは15世紀と推測された。

以上のとおり、今回の調査によって、地域の歴史を物語る埋もれた資料を記録保存できたが、残された課題も多い。今後の地域の歴史研究に、この調査成果が活用されることを願うものである。

執筆するにあたり、発掘調査に御理解、御協力いただいた関係者の皆さま、発掘作業から報告書作成までに貴重な御教示をいただいた多くの皆さまに、この場を借りて深く感謝申し上げます。



1区 ST01 完掘 (東側から)



1区 ST02 完掘 (東側から)



1区 SD03 完掘 (南東側から)



1区 SD06 完掘 (北西側から)



2-1区 SK222 全景1 (南西側から)



2-1区 SK222 燃焼部奥側遺物出土 (北側から)



2-1区 SK222 全景2 (北東側から)



2-2区 ST03 完掘 (南側から)

PL2 奥日影遺跡



2-2区 SD11 完掘 (北側から)



2-3区 SD08 完掘 (東側から)



2-3区 SD08 断面 (東側から)



2-4区 SD23・24 完掘 (東側から)



2-2・6区 SD25a・b 完掘 (北側から)



2-4区 SD22-24 完掘 (北西側から)



奥日影遺跡・小山寺窪遺跡 遠景（北側上空から）



小山寺窪遺跡 遠景（北側上空から）

PL4 小山寺窪遺跡



小山寺窪遺跡 5区 全景（北東側上空から）



小山寺窪遺跡 1・3-3区 全景（南側上空から）



S B01・05 完掘 (北側から)



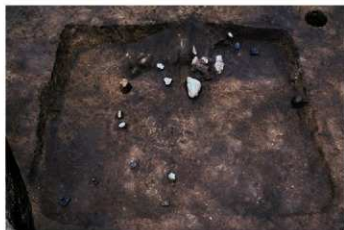
S B10 完掘 (南西側から)



S B02 遺物出土状況・全体 (西側から)



S B02 遺物出土状況・部分 (北側から)



S B07 遺物出土状況・全体 (西側から)



S B07 カマダ完掘 (西側から)



S B12 完掘 (北東側から)



S B23 完掘 (西側から)

PL6 小山寺窪遺跡



S B20・21・22 完掘 (東側から)



S B22 完掘 (南側から)



S B26 完掘 (南東側から)



S B28 完掘 (南東側から)



S T02 完掘 (南側から)



S T03・S A02 完掘 (南側から)



S T04 完掘 (南側から)



S T05 完掘 (南側から)



ST06 完掘 (南西側から)



ST07 完掘 (南側から)



ST08 完掘 (南西側から)



ST10 完掘 (北側から)



SB14 完掘 (北西側から)



SB15 完掘 (南西側から)



SB27 完掘 (南東側から)



水田跡1 全景 (南側から)

PL8 満り久保遺跡



1区 全景（北東側上空から）



1区 調査区全景（下が北）



1区 遺物出土状況（西側から）



3区 F-3グリッド 遺物出土状況（北西側から）



1区 石器出土状況（1）



1区 石器出土状況（2）



馬越下遺跡 遠景（北東側上空から）

PL10 馬越下遺跡



S B 3004 完掘 (西側から)



S B 4001 完掘 (西側から)



S B 4001 カマド (西側から)



S B 4003 完掘 (南側から)



S B 4003 カマド (南側から)



S K 4001 完掘 (南東側から)



S K 4002 遺物出土状況 (西側から)

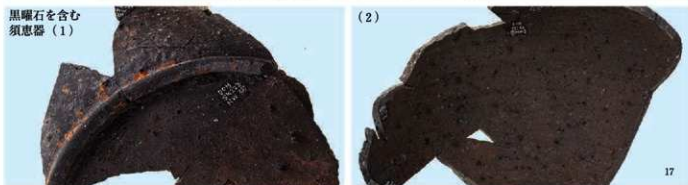


S K 4003 遺物出土状況

SK222



黒曜石を含む
須恵器 (1)



SK222 出土須恵器

PL12 奥日影遺跡

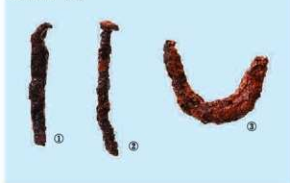
中世の土器・陶磁器



銭貨



金属製品 (1)



金属製品 (2)



弥生～古墳時代前期の土器



石器 (1)



石器 (2)



弥生～古墳時代前期の土器、中世土器・陶磁器、金属製品、石器

SB02



SB07



古代土器 (1)

PL14 小山寺窟遺跡

SB10



SB28



SK565

SD07



SK569

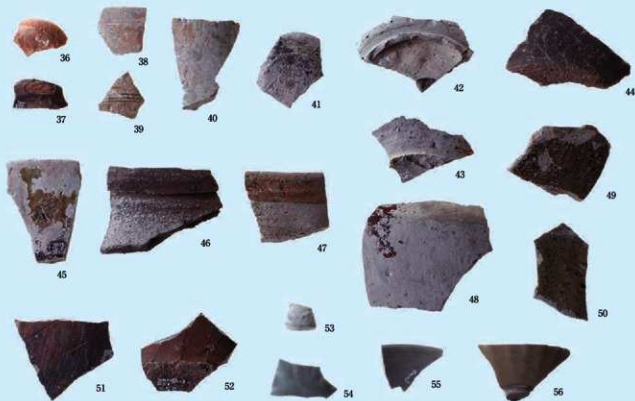
古代土器 (2)



中世土器・陶磁器 (1)

PL16 小山寺窟遺跡

遺構外 1

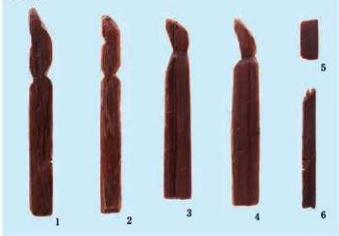


遺構外 2



36 : Ⅰ 区 37 : Ⅲ T22 38 : Ⅲ P01 39 : Ⅲ 区 40 : Ⅱ Y02 41 : Ⅲ Q08 42 : Ⅲ Q11 43 : Ⅲ P21
 44 : Ⅱ T15 45 : Ⅲ T10 46 : Ⅱ Y11 47 : Ⅱ Y06 48 : Ⅱ T22 49 : Ⅵ 区 50 : Ⅲ Q05 51 : Ⅲ U18
 52 : Ⅱ S01 53 : Ⅱ T18 54 : Ⅲ Q18 55 : Ⅲ 区 56 : Ⅲ Q11 57 : Ⅰ U18 58 : Ⅲ U07 59 : Ⅱ O05
 60 : Ⅱ Y02 61 : Ⅱ T18 62 : Ⅱ T20 63 : Ⅱ T18 64 : Ⅱ Y03

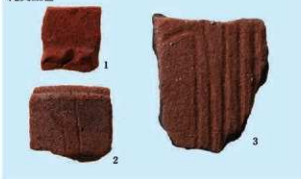
木製品



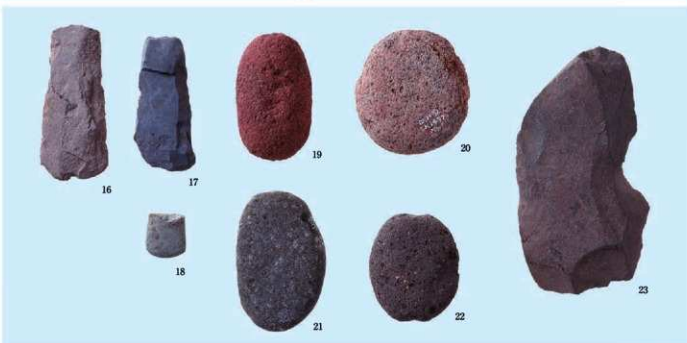
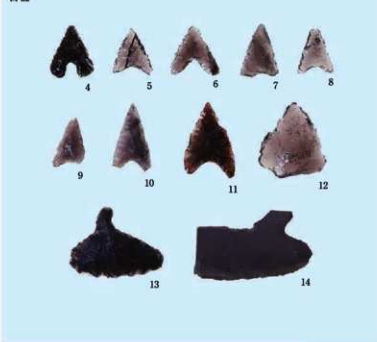
石製品 (水輪)



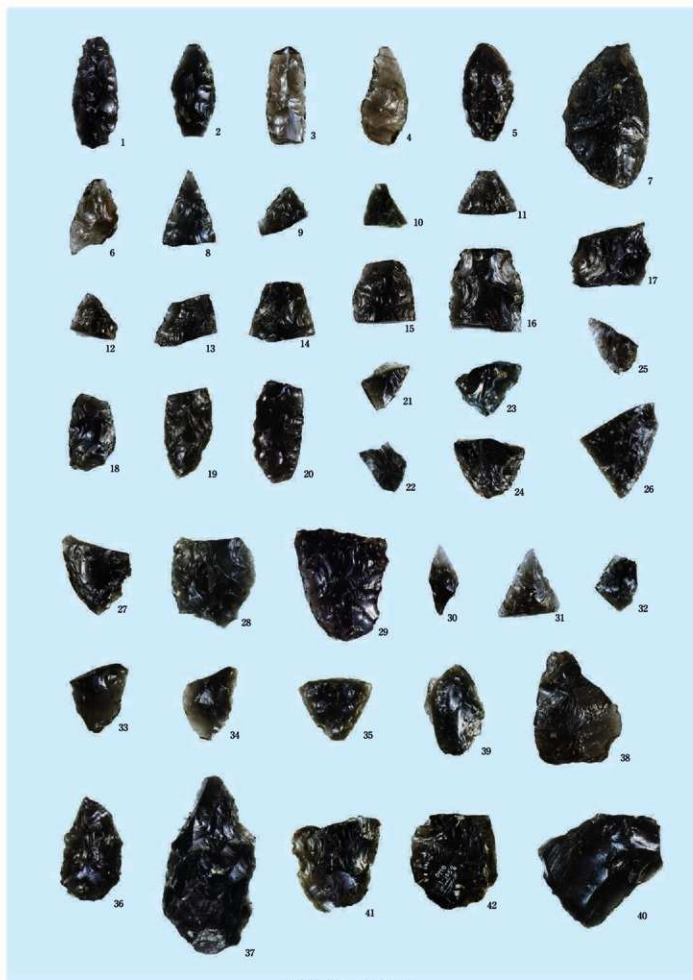
縄文土器



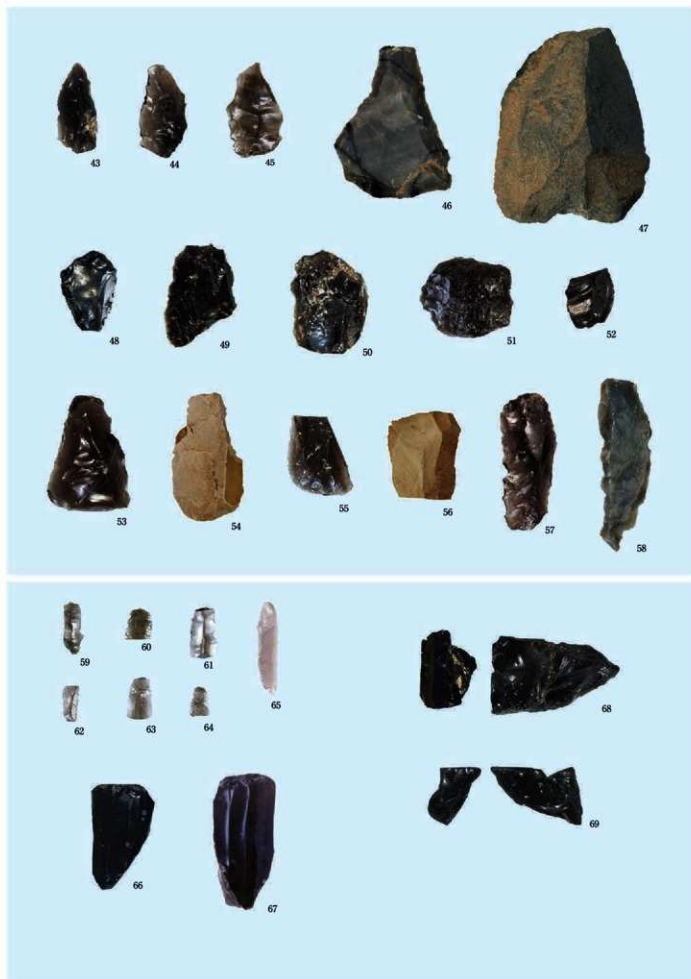
石器



木製品、石製品、縄文土器、石器



旧石器時代の石器（1）



旧石器時代の石器（2）

PL20 満り久保遺跡 馬越下遺跡

満り久保遺跡



馬越下遺跡

SB4001



甲斐型壳



SB4003



金属製品



SK4002



旧石器時代の石器(3)、縄文土器、古代土器、金属製品

報告書抄録

ふりがな	おくひかけいせき こやまでらくはいせき うえのつきよほらいせき まりくほいせき まごえしたいせき							
書名	奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 上野月夜原遺跡 満り久保遺跡 馬越下遺跡							
副書名	中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10 一佐久穂町内一							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	125							
著者名	平林 彰、鶴田弘実、上田 真、鶴田典昭、賛田 明							
編集機関	一般財団法人 長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4 TEL.026-293-5926							
発行年月日	2020年3月19日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 (世界測地系)	東経 (世界測地系)	発掘期間	発掘面積 ㎡	発掘原因
		市町村	遺跡番号					
奥日影遺跡	長野県南佐久郡 佐久穂町高野町	20309	A60	36°09'45"	138°28'19"	2008.06.23～2008.08.11 2010.04.05～2010.11.25 2015.04.10～2015.05.25	2,200 9,420 260	中部横断自動車道建設に伴う記録保存調査
小山寺窪遺跡	長野県南佐久郡 佐久穂町高野町		A30	36°09'33"	138°28'15"	2008.09.16～2008.12.17 2009.04.06～2009.12.08 2010.05.10～2010.12.02 2011.04.05～2011.04.28	4,200 13,610 4,220 150	
上野月夜原遺跡	長野県南佐久郡 佐久穂町畑・上野		B5	36°09'00"	138°28'03"	2008.05.22～2008.06.30	10,900	
満り久保遺跡	長野県南佐久郡 佐久穂町畑		B54	36°07'52"	138°27'50"	2009.09.01～2009.12.10 2013.04.18～2013.06.10 2014.04.14～2014.05.27	5,847 300 103	
馬越下遺跡	長野県南佐久郡 佐久穂町千代里		B56	36°07'30"	138°27'42"	2010.04.05～2010.08.04 2012.04.09～2012.04.27	8,830 230	
所在遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項		
奥日影遺跡	集落跡 生産域	奈良 平安～中世	須恵器室跡1、 獨立柱建物跡3、 溝跡25、土坑168		室跡から出土した胎土に黒曜石を含む須恵器、中世土器・陶磁器、 鏝、砥石	南佐久地域では初見となる8世紀前半の須恵器室跡		
小山寺窪遺跡	集落跡 生産域	平安～中世	竪穴建物跡・竪穴状遺構17、獨立柱建物跡13、杭・欄列1、溝跡21、被熱部1、土坑1059、木田跡2		旧石器時代のナイフ形石器・槍先形尖頭器・スクレイパー、須恵器、黒色土器、土師器、三足土器、土師器ミニチュア壺、無底瓶、中世土器・陶磁器、人形木製品、銭貨、刀子、砥石、硯	津金寺伝承地の隣接地		
上野月夜原遺跡	遺構散布地	縄文?	土坑2		縄文土器、打製石斧			
満り久保遺跡	遺物散布地	旧石器	遺物集中		槍先形尖頭器、細石刃・細石核	槍先形尖頭器の製作遺跡		
馬越下遺跡	集落跡	平安	竪穴建物跡3、土坑15、被熱部5		須恵器、黒色土器、土師器、墨書土器、灰輪陶器、甲斐型壺	9世紀代の集落跡		

令和2（2020）年3月19日 発行

長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 125

**奥日影遺跡 小山寺窪遺跡 上野月夜原遺跡
満り久保遺跡 馬越下遺跡**

中部横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 10
—佐久穂町内—

発行者 国土交通省 関東地方整備局
（一財）長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganoaibun.or.jp
印刷者 信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494